

謝玉泉
謝玉泉

謝玉泉立知進高等学校野球部OB会

川越高校
野球部百年史

目 次

はじめに - 100周年記念誌に寄せて -

発刊にあたって	川越高等学校野球部百周年事業実行委員長 田 中 貞 夫	1
「お祝いのことば」	公益財団法人 日本高等学校野球連盟 会長 八 田 英 二	2
創部100周年を祝して	一般財団法人 埼玉県高等学校野球連盟 会長 吉 澤 紀 生	3
埼玉県高校野球界への貢献	一般財団法人 埼玉県高等学校野球連盟 専務理事 小 山 友 清	4
高校野球の歩みとともに	朝日新聞さいたま総局長 時 枝 秀 樹	5
川越高校野球部創部百周年に寄せて	毎日新聞さいたま支局 支局長 松 下 英 志	6
川越高校野球部100年史刊行に寄せて「心の甲子園を目指して」	埼玉新聞社代表取締役社長 小 川 秀 樹	7
川越高校野球部創部100周年＆「百年史」発刊を祝して	浦和高等学校野球部OB会 会長 荒 川 俊 裕	8
川越高等学校野球部創部100周年を祝して	熊谷高等学校野球部OB会 会長 岡 田 俊 雄	9
ご祝辞	埼玉県高校野球OB連盟 会長 野 澤 孝 道	10
野球部の創部百周年によせて	川越高等学校 前校長 青 木 勇 藤	11
川越高校野球部創部百周年を祝して	川越高等学校 校長 飯 田 敦	12
百年の歴史に敬意	川越高等学校同窓会 会長 菊 池 建 太	13
百年史刊行に寄せて	川越高等学校野球部元監督 鈴 木 和 彦	14
川越高校野球部百年史 発刊を祝して	川越高等学校野球部元監督 横 田 雅 之	15
100周年記念誌に寄せて	川越高等学校野球部元監督 船 橋 博 俊	16
臨時監督雑感	川越高等学校野球部元監督 角 田 英 雄	17
本来あるべき姿	川越高等学校野球部元監督 吉 野 善 行	18
創部100周年記念にあたって	川越高等学校野球部前監督 岡 田 実	19
感謝	川越高等学校野球部百年史編集実行委員長 斉 藤 栄	20
第1部 一草創から現在まで一		21
一野球部のあゆみ一		22
一創世の時代～平成期一		28
大正期（創部～旧中学25回）		28
昭和期（戦前）（旧中学26回～旧中学43回）		44
昭和期（戦後）（旧中学45・46回～高校41回）		82
平成期（高校42回～高校71回）		166

第2部 一写真で見る100年—	227
第3部 思い出 ～100年の歴史から～	263
野球部創立当時の追憶	旧制20回卒 本 橋 九 蔵 264
野球部誕生の頃	旧制20回卒 小 山 辰 吉 265
関東大会の思い出	旧制20回卒 増 田 信 平 266
思い出の記	旧制21回卒 田 中 啓 治 266
50年の追憶	旧制22回卒 新 井 浩 268
追想 北関東大会善斗の余勢を駆って県下に覇を唱えるの記	旧制27回卒 平 岡 忠次郎 268
川中野球部の思い出	旧制34回卒 大 塚 敬 三 269
戦後の苦しかった野球部	旧制45・46回卒 山 川 健 夫 270
追想 飯田亮先生記念碑建設の思い出	旧制21回卒 吉 崎 寅之助 271
甲子園の思い出 ー選抜大会ー	旧制30回卒 橋 本 定 271
甲子園の思い出	高校12回卒 内 沼 稔 273
甲子園での練習場探し	旧制33回卒 小 峯 敏 夫 274
甲子園出場蔭の人	高校12回卒 宮 根 七 郎 275
県下に初制覇・大久保文衛投手を語る	旧制27回卒 平 岡 忠次郎 276
わが野球人生と名投手熊谷幸夫	旧制30回卒 橋 本 定 277
名投手 家村投手の思い出	旧制34回卒 大 塚 敬 三 279
島野投手の研鑽努力のピッチング	高校7回卒 鈴 木 勇 280
努力の名投手・吉田富保君	高校12回卒 内 沼 稔 281
温厚・努力の人 俊足、強打の岸田勝太郎先輩	旧制29回卒 山 本 三 郎 282
「錬磨と不如人和」を説く名中堅手 平岡忠次郎先輩	旧制29回卒 山 本 三 郎 283
初心忘るべからず 俊敏、強肩、好守、好打の山本遊撃手	旧制25回卒 島 田 久 三 284
野球人生の優等生綿貫惣司先輩	旧制32回卒 横 関 夏 夫 286
家村さんのバット	旧制35回卒 岸 野 利 雄 287
母校野球部史上最大の悲劇	旧制32回卒 横 関 夏 夫 289
伊丹安廣先生と「ひとつばたご」ー飯田先生記念碑に「なんじゃもんじゃ」植樹	元川越高校野球部顧問 森 光 真 幸 291
飯田・伊丹両先生を偲ぶ	旧制32回卒 増 島 良 平 292
賄方奮戦記	高校3回卒 菅 間 昭 293

消えたバット	高校3回卒 菅 間 昭	294
小杉先生と川高野球部	高校7回卒 嵩 野 昌 甫	297
華かなりし、かつての応援団	旧制27回卒 金 子 良 雄	301
華やかなりしかつての応援団（後編）	旧制27回卒 金 子 良 雄	304
野球部の沿革	川越高校80年誌から	305
草創時代の野球部	旧制19回卒 岩 崎 清 録	312
草創時代の野球部あとがき	旧制19回卒 岩 崎 清 録	313
家村相太郎監督を偲んで ～OB会報等から～		316
宮根七郎先生を偲んで ～OB会報から～		320
川越高等学校の甲子園物語（渋谷 健先生）～OB会報から～		328
創立100周年の伝統校が親善試合（春日部高校との対抗戦）		337
飯田 亮先生記念碑建立80年祭		338
世代超え 100年つなぐ		340
川高マスターズチームの足跡（2007～2017）		342
野球部OB会報から		353
小さな大投手 大沢堯君	高校18回卒（昭和41年） 伊 藤 弘	353
高校野球のころ	旧制42回卒（昭和19年） 栗 原 秀 夫	354
褒めるが勝ち？	高校7回卒（昭和30年） 嵩 野 昌 甫	355
ストップウォッチと4秒のリズム	高校12回卒（昭和35年） 杉 田 文 男	357
中等学校野球から高校野球へ 一川越中学校から川越高校への歩み一	高校3回卒（昭和26年） 川 合 敬 三	359
座談会「昔、遊びは野球だった。そして、甲子園で勝った。」		362
埼玉縣立川越中学校學友會 會報（第22号,第23号,第25号）		367
年表 —100年の足跡—		377
川高野球部OB会規約		390
川高野球部OB会慶弔規定		391
川越高等学校野球部百周年事業・百年史編纂実行委員会名簿		392
編集後記		393



発刊にあたって

川越高等学校野球部百周年事業実行委員長

田 中 貞 夫

平成元年に「川越高校野球部七十年史」が発刊されてから、早いもので30年が経ちました。

今年、母校野球部が創部百周年の節目を迎えるにあたり、OB会として記念すべき百年史を計画、斉藤OB会長を中心に、多くのOB会員諸氏並びに関係者各位のご協力とご尽力により、ここに栄えある「川越高校野球部百年史」が完成致しました。数多くの県高野連加盟校の中にあって、野球部の歴史が100年を有する高校はごく僅かだと思います。長年の母校野球部の活躍とともに、私自身もOB会の活動に携わりながらこの時を迎えられたことを心から嬉しく思い、OB会員全員で喜びたいと思います。

七十年史を改めて読み返しますと、大正8年の創部から昭和の時代までの貴重な出来事、また各年代の戦績等が事細かに編纂されております。当時の山本三郎OB会長はもとより、横関夏夫編纂実行委員長、そして資料を取り纏めたOB諸氏には大変なご苦勞があったものと推測いたします。今回の百年史はその七十年史と併せて、平成になってからの30年間の公式戦結果及び各代の現役時代の思い出等を綴った内容となっています。

平成元年には県大会参加校が160校を超え、また私立高校の台頭により県内高校野球のレベルは著しくアップしました。そして浦和学院が

平成25年の春の選抜大会で昭和43年の大宮工業以来の優勝を果たし、記憶に新しい昨年夏の選手権大会では、花咲徳栄高校が埼玉県勢としての念願であった初の全国制覇の榮譽に輝きました。

公立・進学校としての母校野球部にあっては、残念ではありますが、久しく上位進出まなならずといった状況にあります。今年の夏の選手権大会は、丁度、第100回の記念大会でした。我が野球部も百周年という大きな節目を飛躍台として、これからの現役選手たちには是非“捲土重来”、常に上位で戦いが出来る古豪「川越高校野球部」の復活を叶えて頂きたいと奮闘努力を期待します。

OB会の活動は、この近年の「マスターズ甲子園」（別掲）出場を機に、若手及び中間層のOBを中心としてOB会に対する関心が高まりつつあることを大変喜ばしく思います。母校野球部の伝統・歴史とともに、OB会も会員相互の親睦、現役チームへの支援等をこれからも継続して行ってもらいたいと思います。

終わりに、今回の百年史の編纂にご尽力頂いたOB会役員諸氏、そしてあたたかい励ましのお言葉等を頂戴した関係者の方々に心より御礼申し上げ、発刊にあたっての挨拶といたします。
(高7回卒 元OB会会長 平成15～18年度)



『お祝いのことば』

公益財団法人 日本高等学校野球連盟 会長

八 田 英 二

このたび埼玉県立川越高等学校野球部が創部百周年を迎えられましたことを心からお慶び申し上げます。

改めて申すまでもありませんが、埼玉県の高校野球界は、全国的に見ましても有数の激戦区です。加盟各校が切磋琢磨し、県内外を問わず数多くの名勝負を繰り返してきた結果が過去2度の選抜大会優勝と昨年夏の選手権大会での花咲徳栄高校の初の全国制覇につながったのではないのでしょうか。

貴校野球部は1931年（昭和6年）の第8回選抜高等学校野球大会に埼玉県勢として初出場を果たし、1959年（昭和34年）の第41回全国高等学校野球選手権大会にも初出場されており、まさに埼玉県の高校野球の礎となった野球部であると思います。

これは貴校の教職員をはじめ、多くの野球部関係者やOBの皆様方が長年にわたって、大変なご苦勞を積み重ねられた努力の賜物であろうと改めて敬意を表す次第です。

貴校野球部は、常に文武両道の実践を心がけており、埼玉県内や関東地区だけにとどまらず、全国の加盟校の模範となる存在となっています。このように注目されている野球部であるからこそ、これからも常に高い意識を持った模範的な野球部であって欲しいと心より望んでいます。そのためには、野球部の選手諸君はもとより、学校関係者や野球部関係者の皆様が一丸となって、次なる目標に向けて日々精進されていくことが重要ではないかと思われます。

100年という伝統と積み重ねて来られた実績の重みは、時として重圧になることもあろうかと思われませんが、迷わず前に進み続けていただきたいと切に期待しております。

最後になりましたが、今後も多くの高校野球ファンを魅了する素晴らしい川越高等学校野球部であり続けますよう心からお願いして、お祝いの言葉といたします。



創部 100 周年を祝して

一般財団法人 埼玉県高等学校野球連盟 会長

吉 澤 紀 生

県立川越高校野球部が創立100周年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

私は高校時代に川高野球部と何回か練習試合をしましたが、進学校でしかも甲子園経験のある埼玉高校野球界きっての名門校でしたので、とても緊張したことを今でもはっきりと覚えています。その時の監督は故宮根七郎先生でしたが、御縁があって後年、1982年に県立鶴ヶ島高校野球部の立ち上げに御一緒させていただきました。偉大な監督に直接教えを受けた川高野球部の精神は、今でも私の高校野球指導者としての指針であり続けています。

歴史と伝統を誇る川高野球部がこれまで100年もの間、ずっと大切にしてきた「文武両道」という高校野球の精神、言わば原点を、これか

らも野球を志す子どもたちのために広く伝えていってほしいと願っています。そして、現在も川高野球部出身の多くの方々が、各高校で監督やコーチ、あるいは高野連役員として、健全な青少年の育成に御尽力されています。今後とも本県高校野球の発展のために御協力いただきますようお願い申し上げます。

奇しくも今年は夏の全国高校野球選手権大会も100回記念大会となります。甲子園と同じく100年という歴史を刻んできた名門・川高野球部に敬意を表するとともに、県を代表する進学校でもある貴校が再び甲子園に出場し、「文武両道」を目指す高校野球の本来の姿を体現することを願ってやみません。このたびは誠におめでとうございます。



埼玉県高校野球界への貢献

一般財団法人 埼玉県高等学校野球連盟 専務理事

小山友清

埼玉県立川越高等学校硬式野球部、創部100周年、誠におめでとうございます。平成30年は、選抜高等学校野球大会が第90回、全国高等学校野球選手権大会が第100回という記念大会の年であり、埼玉県高等学校野球連盟も創立70周年を迎えた年でもあります。このような中、1世紀にもわたる川越高校野球部の歴史はまさに白眉といえましょう。

川越高校野球部は特に黎明期、発展期には埼玉県のオピニオンリーダーとして輝かしい成績をおさめました。大正11年に第8回全国中等学校野球関東大会に初参加しました。その後3年間出場しなかった時期があるものの、大正15年からは埼玉・群馬・栃木で構成される北関東大会の常連となりました。そして、昭和6年、前年秋季の諸大会の戦績が認められ、第8回全国選抜中等学校野球大会に出場しました。これが埼玉県勢初の甲子園出場でした。中京商業に敗れたものの、埼玉県内の他中学校の目標になったことは間違いないと考えられます。戦前に続き戦後も安定した結果を残し、昭和34年、第41回全国高等学校野球選手権大会初出場を勝ち取りました。この時、選抜ではなし得なかった甲子園での勝利を手にしました。このように埼玉県の高校野球界をリードしてきた川越高校野球部の功績は大きいものがあります。

また、埼玉県高等学校野球連盟にとりましても、昭和26年、山口利通氏が第3代の理事長となり、渋谷健氏が第12代の会長として昭和61年から平成2年まで埼玉県高野連に多大なる貢献をなさいました。渋谷氏は日本高等学校野球連盟の副会長としても務めていただきました。私が埼玉県高野連の役員に就任した時の会長で、温厚な人柄、挨拶に味がある方でした。その後も、菊池建太副会長、第25代の青木勇藤会長と高野連にご尽力いただくと共に大変お世話になりました。また、現監事の斉藤栄氏は、「真夏の球宴」の発行、「彩の国野球フェスティバル」（野球教室）の運営で貢献され、高校野球OB連盟（マスターズ甲子園）でもご活躍されています。船橋博俊氏は、競技部長、副理事長（平成24年度からは常務理事）と大黒柱的役員として尽力されました。この方々以外にも、審判部長として尽力された野口静男氏、南部地区の責任理事として活躍された鈴木和彦氏、また関東地区高等学校野球連盟事務局理事を担当している藁谷公次氏など埼玉県高野連は川越高校出身の役員なくして語れないと考えます。

埼玉県内の高校野球勢力地図は、平成に入り大きく塗り替えられました。しかし、文武両道を真に追求する川越高校野球部の活躍をこれからも期待しております。



高校野球の歩みとともに

朝日新聞さいたま総局長

時 枝 秀 樹

創部100周年、おめでとうございます。

夏の全国高校野球選手権大会は今年、第100回を数えました。その大きな節目の年に100周年を迎えた川越高校野球部の歩みは、高校野球史そのものと重なります。

旧制中学に野球部が次々誕生した20世紀初頭に創部し、昭和6年の選抜大会で埼玉の学校として初めて甲子園に出場。「KAWACHU」のユニホームは野球少年の憧れとなり、一時は東京六大学や草創期のプロ野球に選手を輩出する野球校として名を馳せました。

戦争にも翻弄されました。川中が県予選で準優勝し、南関東大会出場をつかんだ昭和16年夏、甲子園での全国大会は中止されます。戦況悪化とともに部員たちは「敵性競技」「非国民」の声に脅かされるようになり、翌17年に廃部。復活したのは終戦後の20年秋でした。部員たちは空腹を抱え、用具の調達に苦労しながら、野球ができる喜びを取り戻します。

昭和34年にはついに夏の甲子園に出場、初勝利もつかめます。悲願達成に川越の街は沸き、観戦していた学生野球の父・飛田穂洲は、川高野球部の礎を築いた故飯田亮教諭の功績を朝日新聞紙上でたたえました。

その後の半世紀で高校野球は変わりました。学校数の急増や受験競争、私学の台頭で、公立の進学校が地方大会を勝ち進むのは難しくなりました。県立の奮闘が続いた埼玉でも、夏の甲子園出場は平成10年の滑川（現滑川総合）が最後。以後20年は私学が県代表を独占し、その一つの花咲徳栄は昨年、全国制覇をも成し遂げました。

川高も20年以上4回戦の壁を超えられずにいます。しかし野球部員の情熱は、昔より薄れたとも強豪校に劣るとも思いません。今も部員たちは、うまくなりたい、負けたくない日々練習に打ち込み、そんな姿に卒業生や川越市民も変わらず声援を送っていると感じます。川高が初雁球場で夏の大会を戦う時、応援団旗はためくスタンドに今も人があふれるのはその表れでしょう。川高野球部は、いつの時代も川越の夏のシンボルなのです。

高校野球の歩みとともに、川高野球部が次の100年も健在であることを心から祈念します。



川越高校野球部創部 百周年に寄せて

毎日新聞さいたま支局 支局長

松 下 英 志

36年前の大学1年時、クラスに川越高出身者がいて、彼は酔うたび母校の校歌を口ずさんだため「入間の水の末ながし〜♪」のフレーズは今でも耳から離れません。何かのご縁を感じますが、野球部と毎日新聞のご縁は87年前、春夏通じて県勢初の甲子園出場となった1931（昭和6）年のセンバツです。

主催した大阪毎日新聞（現毎日新聞）の記事によると、同年の第8回全国選抜中等学校野球大会の選考委員会は全国63の推薦校から予定数の16校を選び、川越高の前身の川越中は当初選外でした。しかし「今年のチームは全く実力均等せる状態」と増加の意見が出され、4日後に選考委員会を再開。絞り込んだ7校から3校を選んで出場は19校、会期も1日延ばすことに。委員投票の結果、川越中は明石中の13票に次ぐ11票を得て初出場を決めました。

「縣から初めて檜舞台へ 選ばれた川越中学 関東の諸豪とくつわを列べて意気天を衝く」。当時の東京日日新聞（同）埼玉版はそんな見出しで伝えています。「臥薪嘗胆の十余年」との別稿もあり「野球部創立は古く明治時代だがそ

の後禁止の憂目に逢ひ幾年か中断してゐた」などの歴史も記されています。

翌日以降は「『いも』の川越を『野球』の川越に」「熊中浦中からも激励」「飛行機を買切って応援団組織」などの見出しが躍り、企画も連載。甲子園への出発当日は「大花火がドンドン打ち揚げられ空には東日機が激励の五色のビラ数万枚を全市に撒布」と派手に演出され、大会初日の入場式では野本定主将が選手宣誓をしました。

初戦で残念ながら準優勝の中京商に0-11で敗れましたが、慰労会など後日談も掲載。時あたかも女性参政権法案が衆議院を通過しながら貴族院で廃案となり、東京駅で襲撃された浜口雄幸首相が内閣総辞職する頃でした。以後、59年夏の大会で初勝利したものの、半世紀以上にわたり甲子園からは遠ざかっています。百周年を振り返ることで再び夢舞台につながり、弊紙で大きく報じられることを楽しみにしております。



川越高校野球部 100 年史刊行に 寄せて「心の甲子園を目指して」

埼玉新聞社代表取締役社長

小 川 秀 樹

創部百周年、誠にありがとうございます。県内の伝統ある県立高校にはそれぞれ野球部がありますが、100年の歴史を正確に記録できた高校は少なく、大変貴重な歩みです。そしてまた新たな一步を進められましたことは、埼玉県の高校野球史の大きな足跡になると思います。部員の精神的な支柱である飯田亮先生という稀有な象徴をいただき守り続け、卒業後は同窓、同部の結束を結ばれて、各界でご活躍されている野球部OBの皆様方をたいへん、うらやましく思います。

私は県立上尾高校出身で3年時に夏の甲子園出場を果たしました。私は野球部ではなく、さえない新聞部員でしたが。

昭和54年夏、超高校級選手だった牛島、香川を擁する大阪代表、浪商高校と一回戦で当たりました。上尾のエースはアンダースローの仁村徹です。牛島との投げ合いで緊迫した試合となり延長の末、最後の夏が終わりました。今でも球史に残る名勝負だと思っています。

当時は熊谷商業、川越工業、川越商業など県立高校が圧倒的に強く、友人や友人の友人たちの活躍が新聞紙面で踊るのを見て、興奮していたことを思い出します。川越高校の皆様も彼らと同じように甲子園という同じ目標に向かって走っている自分とその仲間の活躍が、苦しい練習のエネルギーになっていたのだと思います。

埼玉の高校野球界は私立の時代に入って、ずいぶん長くなりました。最近は白岡高校など一部の公立高校が勝ち上がってくることはありますが、強豪校との実力差は歴然としています。ただ、その差がいかに大きくとも、真摯に全力を出し切る球児の姿に県民は感動するからこそ、県予選の人気は今も高いのだと思います。

後輩たちの活躍もさることながら、フィールドを代えた「人生の甲子園」は、今も私たちの胸の中にあります。若き時代を思い、今の心の甲子園はどこにあるか、100年の歩みを振り返りながら、これからも歩んでまいりましょう。埼玉新聞社は皆様とともに歩んでまいります。



川越高校野球部創部 100 周年 & 「百年史」 発刊を祝して

浦和高等学校野球部OB会 会長

荒 川 俊 裕

埼玉県立川越高等学校野球部が創部百周年を迎えられましたこと、御同慶の至りに存じます。同時に、「百年史」の発刊を心よりお慶び申し上げます。

我が浦高（旧浦中）野球部が甲子園に出場した昭和10年に先立つこと4年、川高野球部（旧川中）は、埼玉県勢初の甲子園出場（昭和6年／第8回全国選抜中学校野球大会）を果たされました。当時、埼玉県や北関東大会で常勝川中には、毎回のように入中が苦杯を嘗めさせられていたことが、当校野球部史にも刻まれています。全国高等学校野球選手権が第100回を迎える今年、同じく百周年を迎える川高野球部は、正に高校野球の歴史と共にあり、埼玉県の高校（旧中学）野球黎明期から発展期にかけて、その中心的存在でありました。昭和34年（第41回）夏の甲子園にも出場され、今一歩で手が届かないことが多かった当校には、大変羨ましい限りであり、敬意を表する次第です。

時代は流れ、平成の今、埼玉県高校野球OB連盟でも川高は中心的存在。マスターズ甲子園

／埼玉大会では、素晴らしいチームワーク、卓越した技術と強さを見せつけ、三度甲子園に出場し、同大会をテーマにした映画「アゲイン」（2014年）でも、モデル校（と聞き及んでおります）に取り上げられるなど、その存在感は圧倒的です。昨年、漸く1勝（夏の甲子園を制した花咲徳栄高のOBチームが相手）した当校OBチームにとっては、羨望の対象であり、目指したいチームだと常々感じております。

現役に目を転じますと、2017年3月まで長年ご指導頂きました林岳彦先生に続き、同じく川高野球部OBである藁谷公次先生（高46回）・鹿島雄介先生（高55回）に、夫々野球部監督・部長を務めて頂いている我が浦高野球部は、その伝統を注入頂き、2017年秋季県大会において、当校として62年振りの3回戦進出（ベスト16）を果たし、OB一同、感謝感激しております。

このように伝統ある川高野球部と同OB会の、この先100年の更なるご発展と、関係各位のご活躍・ご健勝を心より祈念申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。



川越高等学校野球部創部 100周年を祝して

熊谷高等学校野球部OB会 会長

岡 田 俊 雄

川越高校野球部が創部100周年を迎えられたことに、心よりお祝い申し上げます。また、ここに記念誌「百年史」が発刊されますこと、関係各位のご努力に敬意を表します。

わが熊谷高校野球部も創部100周年を3年前（平成27年）に迎え、その歴史の重さを再認識したところです。川越高校と熊谷高校は共に埼玉県の県立第三尋常中学校、第二尋常中学校として明治32年、明治28年に設立され、同じような境遇でスタートしました。現在の高校の環境も似たようなものと認識しております。野球部も創部時期がほとんど変わらず、同じような歴史を辿ってきたように思えます。

戦前の埼玉県の野球は他県のレベルまで届かず、全国大会への出場は中々叶えませんでした。昭和6年に埼玉県より初めて全国選抜中等学校野球大会に貴野球部が参加しました。戦後、わが野球部は昭和24年、南関東大会を制し、埼玉県から初めて全国高等学校野球選手権大会に出場し、昭和26年には同大会で準優勝しました。この記録は昨年、花咲徳栄高校が優勝するまでの埼玉県の記録であり（春日部共栄高校が平成

5年準優勝）、昭和57年の3回目の甲子園出場に繋がりました。貴野球部も昭和34年に好投手吉田選手を擁し埼玉県大会、西関東大会を制し夏の甲子園初出場を果たしました。両校ともその後は健闘むなしく長い間夢の実現には至っておりません。川越高校野球部の創部100周年は全国高等学校野球選手権大会区切りの第100回開催の年であります。わが野球部の創部は第1回大会開催の時であり、奇妙な縁を感じざるを得ません。私立高校が闊歩する中、公立進学校が旋風を巻き起こし、再度夢の実現を期待し、お互いに後輩のバックアップを続けて行きましょう。

貴野球部OB会では、マスターズ甲子園埼玉大会に当初より積極的に参加し、既に3度聖地を踏みました。OB会のエネルギーに尊敬の念を禁じえません。わがOB会は遅ればせながら昨年より参加させていただきました。こちらでも雌雄を決する戦いができればと期待しております。

昭和35年より10年間、両校による交換会が行われ、運動部、文化部が交流し、切磋琢磨した時代が懐かしく思い出されます。



ご 祝 辞

埼玉県高校野球OB連盟 会長

野 澤 孝 道

このたびは、埼玉県立川越高等学校野球部創立100周年、誠におめでとうございます。

改めて埼玉県高校野球OB連盟加盟の31校と共に、お祝いを申し上げます。

貴OBチームには、当連盟草創期より多大な貢献を頂いております。特に斉藤栄OB会長には、現在、埼玉県高校野球OB連盟の副会長としての任務、高野連との関係性・審判部へのご対応と、連盟の為に多大な御尽力を頂いており、改めて感謝を申し上げる次第であります。そして貝塚健理事におきましては、第3代・5代実行委員長として大会の礎を築いて頂きました。色々な出来事があった往時を懐かしく感じます。

さて貴校の歴史を改めて拝察しますと、埼玉県の高校創立100年を超えるランキングで、不動岡高校の139年を筆頭に、浦和、熊谷、所沢高校に次いで5番目の119年という長い歴史と伝統ある名門高校であります。

また、政治、経済、芸術、スポーツとあらゆる分野に於いて著名人がおり、2015年のノーベル物理学賞受賞者、梶田隆章東京大学宇宙線研究所所長は余りにも有名な話であります。部活動に於いても、「ウォーターボーイズ」で映画やドラマ化され脚光を浴びた男子シンクロナイ

ズドスイミングの水泳部をはじめ、各部が活躍されております。

なかでも、このたび創部100周年を迎え、最も歴史のある野球部は、1931年、87年前の昭和6年春と、59年前の昭和34年夏に甲子園に出場し、夏には1勝をしております。特に1931年の第8回選抜中学校野球大会（現在の選抜高等学校野球大会）出場は、春夏を通じて最初の埼玉県高校の甲子園出場校としての輝かしい球歴を持った、県内きっての名門校であり、その実力は埼玉県高校野球OB連盟でも突出しております。

マスターズ甲子園では3回の甲子園出場、出場時には母校の応援部OBや吹奏楽部OBが駆け付けてくれるという、マスターズ甲子園の中でもモデル校となるような貴校の関係性を拝見し、名実ともにOB連盟のリーダー校としてとても誇らしく感じております。

是非これからも豊かな経験を生かし、OB連盟の発展の為に、なお一層のご助力を期待するものであります。

結びに、創部100周年の集大成として、歴史に残る「百年史」の刊行となることをご期待し、祝辞とさせていただきます。



野球部の創部百周年によせて

川越高等学校 前校長

青 木 勇 藤

埼玉県立川越高等学校野球部が創部百周年を迎えられ、「百年史」を刊行されることに心からお祝いを申し上げます。

本校野球部が、大正時代から昭和、平成と年月を経る中、川越中学校・川越高等学校の生徒の精神的な支柱となって伝統を築くとともに、県や地域において野球という競技、文化を創り支えられてきたことに敬意を表します。高校球児の究極の目標たる甲子園には、川越中学校として昭和6年に、川越高校として昭和34年に出場する栄誉に輝き、我々川高生、卒業生の大きな誇りとするところです。

私が校長として赴任した平成27年春には、ヒトツバタゴの白い花が見事に咲く中、飯田亮先生の顕彰碑80周年を記念し厳粛なセレモニーが行われ、平成28年には、川高OBチームがマスターズ甲子園に出場し初勝利を飾りました。平成29年には、現役チームが夏の大会で4回戦進出という勇姿を見せ、学校の士気を大いに高めてくれました。

さて、私自身が川高在校中（昭和48～50年）に強く記憶に残ることの一つを挙げたいと思います。それは、当時の野球部監督をされていた宮根七郎先生のことです。1年と3年で保健体

育を担当されましたが、体育の授業はとにかく「きつい」の一言でした。走るのは勿論のこと、少しでも気を抜くと激励の怒声が飛び、緊張を緩めることができず、生徒は皆必死の形相、体育の授業が終わると疲れ切ってしまうといった有様でした。授業の中では、野球の練習を取り入れたプログラムもありました。あるとき、外野手の切り返し（ターンバック）を何回か行った後、ホイッスルを吹いていた宮根先生が突然、私を名指して「青木、今、野球部の外野手が手薄なんだが、入部する気はないか。」と笑顔で声を掛けられ、私はすぐに返答できなかったことを覚えています。その二十数年後、校長となられた宮根先生とお会いする機会がありましたが、そのときの穏やかな話しぶりが当時の厳しい雰囲気と全く対照的で、大きな驚きと何かしら安堵を覚えたことも忘れられません。敢えて、余談として記しました。

結びに、野球部創部百年を機に、これからも川越高校野球部がその伝統の上に新たな歴史を刻んでいくとともに、生徒が切磋琢磨し、人間力を鍛錬すること、そして野球部OB会の一層のご発展と母校への変わらぬご支援を心から祈念しお祝いの言葉といたします。



川越高校野球部創部 百周年を祝して

川越高等学校 校長

飯 田 敦

埼玉県立川越高等学校野球部創部百周年、まことにめでとうございます。まずもって斉藤栄本校野球部OB会会長様をはじめとする本校野球部OB会の皆様に、日頃より本校野球部に対しまして、物心ともに手厚いご支援ご指導をいただいておりますことに心より感謝申し上げます。

本拙稿を書かせていただくに当たり、私なりに本校の創立百周年記念誌や八十周年記念誌等を繙かせていただきました。百年も前から綿々と受け継がれている歴史と伝統の重さにただただ感動するばかりでありました。

本校創立八十周年記念誌によりますと、「最初の対外試合は大正八年（1919年）、所沢陸軍飛行場チームを迎えて、試合経過の記録はないが・・・」との記述があります。この年ー初めて学校の部活動として対外試合を行った大正八年（1919年）ーから数えてちょうど百周年が本年に当たるということなのだ、と理解いたしました。その後、昭和六年（1931年）に春の甲子

園初出場、昭和三十四年（1959年）に夏の甲子園出場。初戦鎮西高校に三対一で快勝しました。その後も幾多の輝かしい足跡を残し、今日に至っています。

いつの時代も本校野球部員は、現役時代は文武両道の体現者として校内の生徒をリードし、卒業後も、川高野球部で培った心身の頑強さと根性でもって、社会人としても各界で活躍をされております。

現在は、本校野球部第百期生である三年生部員を中心に、総勢四十八名（五月時点）の部員で歴史と伝統を受け継ぎ、三度目の甲子園目指して日々がんばっております。

野球部創部百周年にあたり、あらためて歴代の生徒、監督、関係者の皆様に心より感謝を申し上げますとともに、川高野球部に集った健児が、真のリーダーとして、社会に世界に勇躍してはばたくことを切望し、あわせて川越高等学校野球部の益々のご発展を祈念して、お祝いのご挨拶とさせていただきます。



百年の歴史に敬意

川越高等学校同窓会 会長

菊池 建 太

埼玉県立川越高等学校野球部創部100周年おめでとうございます。母校は2019年に120周年を迎えますので、野球部の創部はほぼ創立20年目にスタートしたことになります。また、今夏の全国高等学校野球選手権大会が100回の記念大会を迎えますので、川越高校野球部の歴史はまさに日本の高校野球の歴史とともに歩まれてきました。当時のユニホームは今もそれほど変わらないモダンな感じがいたします。100年間、歴代の監督・部長のもと多くの球児が汗と泥にまみれ厳しい練習を積み重ね、心身を鍛え強いチームワークのもと頂点を目指してきました。その間、甲子園での全国大会に2度出場する輝かしい歴史を刻んでおります。昭和30年代当初小学校高学年の私は野球に夢中で初雁球場に川越高校の練習試合を見に来たことがあります。その後、昭和34年夏の甲子園での川越高校の活躍は中学生の私にはあこがれの高校になりました。

た。昭和37年高校に入学しましたが、当時の野球部は傍から見ても大型選手が多く3度目の甲子園出場を期待されていたものと思います。剛腕平田投手が1年生から活躍して、練習試合にも多くの市民が観戦していました。

高校卒業後37年ぶりに母校の校長としてお世話になった2002年から2006年の5年間、夏の選手権大会の応援は特別な印象を持っております。特に初雁球場での試合となると大先輩から卒業したばかりの大学生まで母校の応援に駆けつけてくれます。中には昔の学生帽を被って応援に来てくれる方や毎年初戦で会う年配者仲間もいるようです。今や日本の高校野球は夏の年中行事になっております。しかし、高校野球はいつの時代も、責任感、連帯感を培う場であり、教育的使命はさらに大きいものがあります。今後の県立川越高校野球部のますますの発展を祈念してお祝いの言葉とさせていただきます。



百年史刊行に寄せて

川越高等学校野球部元監督

鈴木 和彦

川高野球部の歴史を記録した文献と言えば、高校時代に、山本三郎先輩の御尽力により、「川高倶楽部」という名称の会報を手にしていたことが思い出されます。その後、川高野球部はさらに歴史を積み重ね、七十年史、そして今回の百年史刊行となりました。斉藤栄OB会長をはじめ、実行委員の皆様に対し、敬意と感謝の意を表させていただきます。

私の選手時代（昭和46年～49年）には、実直な宮根監督から「基本と努力の大切さ」の教えを受け、多くの貴重な経験をさせていただきました。高校3年時の夏は、第55回記念大会の開催年であったため、甲子園出場校が増え、各都道府県1校となりました。また、木製バット最後の大会という節目の年でもありました。

監督時代（昭和57年～平成5年）には、多く

の先輩監督の方々から御指導を受け、特に家村先輩には「正々堂々、フェアプレー」の精神を説いていただきました。プロ野球選手、甲子園監督等の豊富な御経験を通じた家村先輩のお話は、選手達を包み込むような温かさを感じました。また、昭和60年には、飯田先生記念碑建立50年祭が挙行され、当時の新聞にも掲載されました。「公立王国埼玉」の時代から「私学の台頭」への流れが始まったのも、この頃と記憶しています。

結びに、100年という歴史の中で、選手、監督として関わった14年間は、とても感慨深い年月であります。これからもグラウンドには、監督、選手達の叱咤激励の声や、球音が響き渡ることでしょう。いつまでも心の中に宿る、飯田先生に礼!!



川越高校野球部百年史 発刊を祝して

川越高等学校野球部元監督

横 田 雅 之

野球部創部百周年、並びに百年史発刊、心よりお祝い申し上げます。

昭和52年川越高校野球部に入部し、故宮根監督の元、甲子園を目指し日々練習に明け暮れていました。特に記憶に残っているのは、53年秋季大会。地区予選でその年の夏に準優勝した立教新座高校に勝利し、県大会に出場し、ベスト8まで進んだことです。そこにたどりつけたのは、監督さんの指導や部員の努力のみならず、たくさんのOBの方々のご指導、ご支援があったからだと感じました。その時、母校の野球部の指導にあたりたいと考え、川越高校野球部の監督になり、母校を甲子園に導くことが私の人生の「夢」となりました。

昭和60年に教員となり、他校の野球部の監督に就任しましたが、当時の川越高校野球部監督でいらっしゃった鈴木先生に毎年のように練習試合をお願いし、川越高校の野球部を手本に指導をしてきました。平成5年に川越高校野球部監督となり、そこからの8年間は私にとってかけがえのない時間となりました。14年ぶりに母校に戻り、生徒と野球をする中で、まず感じたことは、「脈々と継がれてきた伝統」でした。飯田先生への礼で練習が始まり、飯田先生への礼で練習が終わります。14年前に私が行っていたことがその時も行われていました。文武両道

を貫き、一所懸命に練習する生徒の姿も変わっていませんでした。たくさんのOBがグラウンドに足を運んでくださり、私と生徒を指導していただきました。関西遠征では故家村さんにご尽力をいただき毎年奈良県へ遠征することができました。本当に充実した8年間でした。悔しくは結果を出せなかったことです。

川越高校を去ったあともOB会長の斉藤先生率いる川越高校マスターズが甲子園出場を果たし、マスターズの次の監督であり私の同期である波田野君からマスターズへの出場を勧められました。マスターズの練習や試合を通じ、参加している卒業生の現況報告を伺うと「川越高校でよかった」と実感させられました。その後2度マスターズ甲子園本戦へ出場を果たし、2度目には息子とともに出場し、見事最終回の逆転で勝利を収め、甲子園まで応援に来ていただいた応援団による「凱歌」を一緒に歌うことができました。

私の人生を充実したものにいただき、喜びを共有できたのも川越高校野球部ならではのことで感じております。

最後に百年史発刊に際し、作成にご尽力された関係の皆さまに敬意と感謝を表するとともに、川越高校野球部の益々のご活躍、ご発展をお祈り申し上げます。



100周年記念誌に寄せて

川越高等学校野球部元監督

船橋博俊

川越中学・高校野球部創部100周年、誠におめでとうございます。

平成13年4月、横田先生の後任として川越高校に赴任すると同時に野球部監督にも就任した。他校での監督経験を川高で活かすことと、「川高らしさ」を定着させることを考えていた。端的に言えば、前者は教え込む指導から自ら考え実行させる指導への変化であり、後者は他校からは嫌がられる存在になることが最大の狙いであった。そのためにすべての部員に平等にはならなかったが、選手との対話の機会を多く設けた。

試合成績としては、大目標はあくまでも甲子園であるが、最低でも春・秋の県大会出場、夏は4回戦以上を目標とした。これは就任時のOB会でもマニフェストとしてお話しした。しかし、平成14年の夏前より理科棟の改築が始まりセカンドの背後に仮設校舎が建設され練習環境が最悪となった。OB会からの補助金を利用して頂き、頻繁に初雁球場を借り、交代でバッティングセンターに行かせ、また他校のグラウン

ドを借りる等しながらできる範囲での練習をした。結果としてそれ以降、ほとんどの大会で2勝以上を挙げ就任当初の目標を達成しつつあった。環境の悪さが直接の敗因にはならないと強く感じた。

手ごたえを感じ始めた3年目終盤に私は病に倒れ、学校には戻れたもののグラウンドにはとうとう戻れなくなってしまった。OB会の方々に多大なご迷惑をおかけし、後任に角田英雄監督が就任された。角田さんには大変なご無理をお願いし誠に申し訳なく、この場を借りて御礼申し上げます。

私が直接指導したのはわずか3年間で、期待にそえるような結果を残せたかは疑問である。その後学校内では進学実績の向上を目指し様々な取組みがなされ野球部を含め部活動指導が難しい状況である。練習時間も制限され勝ち上がることも困難な状況にあるが、是非とも現役諸君には「川高らしさ」を追求しつつ努力を重ねてもらいたいと願っている。



臨時監督雑感

川越高等学校野球部元監督

角 田 英 雄

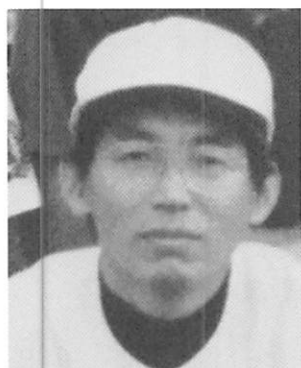
川高野球部監督の体調不良に伴う突然の引退問題が引き金になって関係者をあわてさせたようです。後釜は学校当局から選考されるのが一般的な常識であると認識しておりましたが、止むを得ない事情があつて外部者に矢が向けられたのだと思います。幸か不幸か私に当たってしまいました。高齢を理由に断ることも出来ましたが、母校野球部への恩返しという理屈をつけて自分を納得させることにしました。私に関連する経費は全て川高野球部OB会の会計からご負担いただけることになったのも、大変に心強く幸運なことでありました。早速母校を訪ね選手達と対面することになりました。年の差半世紀もある選手達を前に先輩として恥ずかしくないあいさつが出来たのかどうか、未だに悔いを残したままです。今回の急な監督交代が動揺と混乱を招いたのでは元も子も無くしてしまいます。この点で臨時監督の立場は大変に微妙なものがありました。選手達との接触も多少遠慮がちで消極的になってしまったことは否めません。選手達がどのように感じたか知る由もありませんが、全て後の祭りとなってしまいました。

日常の練習中にはけっこう面白い会話やエピソード

も生まれました。準備体操といえばラジオ体操を連想してしまう私にとって、今時のストレッチ体操は少し複雑すぎたようです。選手達とのスムーズなコミュニケーションを図るには、現代野球用語？辞典の勉強から出直す必要も痛感しました。私のノック下手は特に定評ものでありました。見兼ねた父兄の方が巧みなバット捌きで選手達を前後左右に動かしてくれたのも思い出に残る一幕です。

こうして一年足らずの臨時監督はあっという間に終わりを告げてしまいました。自分の時間を犠牲にされて年寄りの私をカバーしてくれた杉田先輩、大学生になられた若き先輩諸兄にも応援をいただき心から感謝をしております。

最後に現役選手諸君にひとつ提言をしたいと思います。本書を執筆するにあたり川越高校野球部七十年史を読み返したところ、これが貴重な教科書であることを確信しました。諸君もこの百年史を一読すれば川高野球部の輝かしい伝統に触れ、誇りと勇気と自信が湧いてくるはずです。“甦れ川高野球部”とエールを送りながら雑感を結びます。



本来あるべき姿

川越高等学校野球部元監督

吉 野 善 行

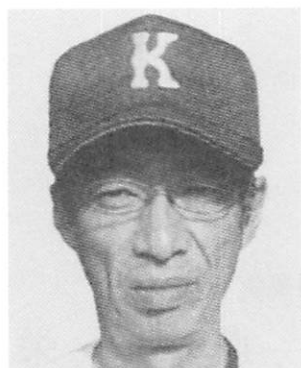
創部百周年おめでとうございます。

伝統ある川越高校野球部100年の6年間、監督をさせていただき光栄に思っております。

私は、川越高校赴任前、選手として中・高・大学10年間、高校野球部監督・部長として20年間野球に携わってきました。川越高校赴任当日、この30年間の野球経験で味わったことのない衝撃を受けました。船橋部長に案内されてグラウンド出た瞬間、野球部生徒一人一人の限界を超える声が耳に入ってきました。春大会を目前に、村田主将を中心にミーティングを重ねた結果、「チーム一丸となって身も心も練習に打ち込んでいこう」となったのだと思われます。監督が毎日練習を見られない状況の中で、自分たちで決めた『強い意志』を見ました。スポーツを楽しむ？『本来あるべき姿』を見ました。

1年目は、そういう頼もしい生徒に囲まれながら野球を楽しむことができました。2年目以降は、私のつたない指導が働いて、『本来あるべき姿』が徐々になくなって、やらされる練習になってしまったような気がします。生徒の素晴らしい芽を、私が摘んでしまった。還暦を迎えた今、川越高校野球部の指導を間違ったと感じています。

川越高校野球部員よ。野球を楽しんで下さい。しかし、楽しむためには、苦しい練習が必須です。苦しい練習を楽しみながら、乗り越えて下さい。苦しんでる生徒には、笑顔でサポートして下さい。君達なら出来ます。頑張ってください。



創部 100 周年記念にあたって

川越高等学校野球部前監督

岡 田 実

創部100周年おめでとうございます。私は平成21年から2年間部長を、23年から7年間監督を務めました。伝統ある川越高校での指導に責任感とやりがいを感じていました。礼儀・全力・元気・誇り・感謝・頭脳等をキーワードにミーティングを行い、小さなことにも徹底して取り組む意識の高さを持つよう指導しました。時には走塁・投手の配球・打者の考え方・ポジショニング等を座学で行い、試合では3点以内の失点、4点以上の得点を目指し、投手を中心とした守備力を基盤に機動力を使った攻撃ができるように鍛えてきました。

監督就任後の春に京都遠征を行いました。保護者からの反対意見もありましたが、直後の春季地区予選で坂戸西・武蔵越生に勝ち県大会出場を決めた時には安堵し、川越高校での指導に

自信も持てるようになりました。27年からは3年連続で春季県大会に出場し漸く目指すチームに近づいてきた感触が持てるようになり、監督として最後の夏の大会では思い通りの野球で4回戦まで進むことができました。本音を言えばもっと勝ちたかった、もっと勝てたはずだと思っています。

OBの皆様には大変お世話になりました。経済的なご支援のほかブルベンの屋根の作成、マスターズの方々による後輩の指導等、中でも「自分の好きなように野球をやれ」とのあるOBの方からの言葉は大きな励みになりました。ありがとうございました。

今後は、紫村監督の率いるチームの今後の活躍を期待し、遠方より応援していきます。



感謝

川越高等学校野球部百年史編纂実行委員長

齊 藤 栄

平成30年、埼玉県立川越高等学校野球部は創部百周年を迎えました。明治32年に県西部に第三中学校として創立し、翌33年には校友会に野球部費が計上されていました。しかし、初めて対外試合を行った大正8（1918）年を創部の年としています。

そして、大正11年、夏の甲子園予選（関東大会）に初出場しました。

平成25年4月の野球部OB会の役員会で百周年が議題に上がり、準備を役員全員で対応していくことが決まりました。その年から100周年記念事業積立を始めました。

平成28年10月、百年史作成実行委員会を立ち上げ編集作業が本格化しました。

この記念史刊行に際し、日本高等学校野球連盟会長の八田英二氏を始めとする多くの方々からご寄稿いただき本誌巻頭を飾ることが出来ました。皆様のご見識の高さと情熱の深さに敬意を表し、ご厚情に深謝申し上げますと共に、今後なお一層のご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。

百年史の作成に対して多くの時間を割くこと

が出来ず、制作費の関係もあり七十年史の足元にも及ばない出来となりました。手記、随筆等も既に発表されたものを掲載させていただきました。

野球部OB会は会員の親睦を図り、母校野球部の育成・発展を目的に活動しており、現在約660名の会員を擁しています。特にOBで組織するマスターズチームによる現役の指導は欠かせないものとなっています。

「七十年史」は平成の初めの年に、そして「百年史」は平成の終わりの年の発刊となりました。

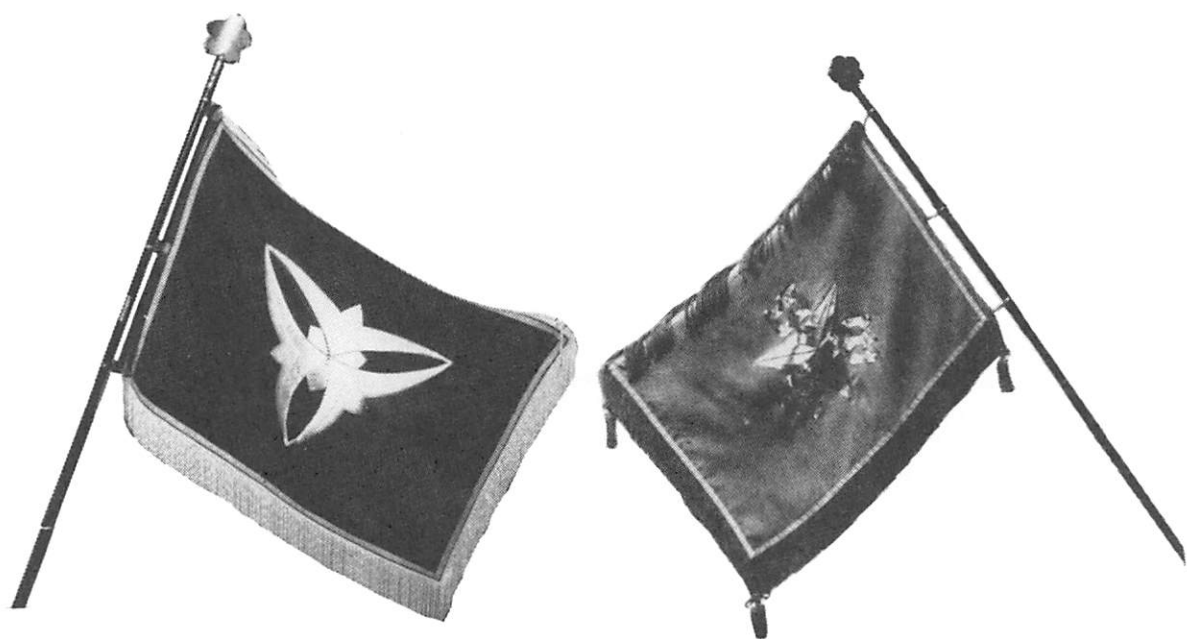
現役諸君の健闘を期待しています。君たち自身のためにも、そして、OBのためにも。

末筆ながら、本誌誕生に関係された皆様のご尽力、ご努力に厚くお礼申し上げます。特に梶田憲一さん（高46回）のご苦勞が無くては、この記念誌は日の目を見ませんでした。本当にお疲れ様でした。

皆様のご協力、本当にありがとうございました。

第1部

草創から現在まで



野球部のあゆみ

《明治・大正・昭和(終戦)》

県西部に第三中学として誕生したのが川越中学で、明治32年創立、翌33年5月の会則のなかに、既に野球部の名が存在していたから、創設年代は本校の数ある部のなかでも、その成立の古さを誇ってよからう。草創年代の野球部は選手、用具類、指導者、技術及び予算などからいって、勿論今日に比すべくもなく、端的にいえば有名無実に近いものであったかもしれない。

特に当時の第三代前原仙次郎校長は、学生の柔剣道を愛好し奨励して、野球を好まざること甚だしく、野球を敬遠する言辞を屢々敢えてし、本校野球部の大恩人飯田亮先生が後年折に触れ述べられた言葉に徴してもうなづける。

大正元年から5年の間が不明であるが、これも校友会としては他部に比べ最高の予算を計上しているので、有名にして無実とは断じ難く、何等かの形で活動は継続していたのではあるまいか。

大正5年から10年頃までが部の草創期となっており、問題は明治の十数年で、この期間の記録が埋まれば川中野球史は更に充実したものになる。従って野球部の実績は、大正8年秋所沢航空隊野球倶楽部を、本校庭に迎えての一戦が緒戦であったこととして知る。

漸く、花開いたのが大正15年第12回全国中等学校野球大会北関東

大会(栃木・群馬・埼玉)で初出場にもかかわらず驚異的な一大躍進で、一回戦不戦勝、二回戦で優勝候補随一の栃木中学を大久保投手の健闘と攻守とが相俟って、7対4で破り、第三回戦地元宇都宮中学に5対1で敗れたものの、その健闘振りは翌日の新聞紙上で、球界の元老飛田穂洲先生から激賞された。

群馬の高崎商業、前橋中学、桐生中学、栃木の宇都宮中学に互に遜色ない実力を持つに至った。

〔この年のメンバー〕

- | | |
|---------|-------|
| ② 北 野 | ④ 島 田 |
| ⑤ 中 里 | ⑨ 石 川 |
| ① 大久保 | ⑧ 平 岡 |
| ⑥ 岸 田 | 補欠 |
| ③ 田中(孝) | 田中(信) |
| ⑦ 安 田 | 山 本 |

《江森英夫名マネジャー》

頭脳明析、大正15年以来10年間、選手と共に熱砂の中、寒風吹きすさむ中を選手と共に、或はボール拾いに選手と苦楽を共にして来た江森さんは浦高から東大に進まれても、川中グラウンドに足を運ばれ後輩の指導に当られ、特に学習には力を入れられ選手も大助かり、感謝に耐えません。

天逝された由、惜しみて止みません。

爾後、県下で覇者となり特に昭和5年の37勝5敗1分の抜群の戦績に依り、翌6年春第8回全国選

抜中等大会に出場、緒戦で中京商業に11-0で大敗したものの川越中学の健闘は讃えられた。

当時は埼玉はいうに及ばず、関東地区の野球はまだ全国レベルには達していなかった。“井の中の蛙”の現実を体得した川中は、更に一層の練習に励むことになった。

選拔出場決定の時は、大毎の飛行機が飛来、出場決定と選手氏名をのせた号外が川越市内にばらまかれ、興奮した市民の熱気はいやが上にも盛り上った。この後第二期黄金時代を迎え、県大会ではことごとく川中の優勝が昭和9年まで続いた。

〔昭和6年メンバー〕

- | | |
|-------|-------|
| ⑤ 奥 富 | ⑥ 粕 谷 |
| ④ 野 本 | 6 横 関 |
| ⑨ 斉 藤 | ⑦ 森 山 |
| ② 綿 貫 | ③ 伊 藤 |
| ① 熊 谷 | ⑧ 久米原 |

〔昭和9年メンバー〕

- | | |
|-------|-------|
| ⑤ 岸 野 | ② 大 塚 |
| ⑦ 小 峰 | ③ 木 村 |
| ⑧ 斉 藤 | ⑥ 増 島 |
| ① 朴 | ⑨ 高 橋 |
| ④ 平 岡 | |

《伊丹安広氏のコーチ》

日清生命の上司が飯田先生と親しく、その口ききで川中のコーチをされたという。

当時、黄金時代の六大学リーグ戦の花形、早大捕手伊丹氏のコーチだから市民の熱気はすさまじく、

僅か足掛け3年ではありましたが、早大野球の真髄は安部一飛田一伊丹と受け継がれ、その指導は技術面より寧ろ精神面の方が多かった。川中野球部の黄金時代は、飯田先生、伊丹氏によって築かれたといっても決して過言ではなかった。

飯田 亮先生病に倒れ、遂に永眠さる。昭和10年5月4日、53才先生は国文学にも造詣深く、子規研究にはげまされ、更に筑前琵琶の本も残されていることは、岡部一雄氏に依って紹介された通りで、東大卒後大正9年秋本校に着任され、温厚な紳士で、国文学の權威藤村 作博士の愛弟子で、大正10年野球部長となるや、選手には終始温和な親しい態度で臨まれ、校庭で四六時中選手の行動から目を離さず、冬の寒い日など練習の終る時間になると、薪を拾い集め焚火をして選手に暖を取らせるといふ有難い部長さんで、本校野球部に不滅の光を掲げ、ご自身を無にされるまで、数多くの部員に何者にも増して大きな力を与えられたことは、蓋し偉大なる存在であったと申し上げたい。

〔昭和10年メンバー〕

- | | |
|-------|-------|
| ⑦ 岸 野 | ⑤ 島 田 |
| ④ 増 島 | ⑨ 山 崎 |
| ② 大 塚 | ③ 佐々木 |
| ① 朴 | ⑥ 浅 野 |
| ⑧ 会 川 | |

私の永い野球生活で、めったに遭遇しない、秀れた天分を持った名選手、菅野繁利君（昭和12年川中に入學）大宮市桜木町生れで一年生から正選手、闘志満々、その強打、強肩、俊足たるや群を抜き、

在校中は俊足、好打の松津修造君とバッテリーを組み、実に華々しい活躍をした。卒業後は立大野球部に進む筈だったが、好漢病魔に襲われ病床の身となったが夭逝す。今も尚、あの当時の目鼻立ちが、くっきりし、齒に衣着せない話ぶりは正に汚れを知らないしっかりした美少年で、時折臉に浮かぶ。

〔昭和14年メンバー〕

- | | |
|-------|-------|
| ⑥ 中 里 | ① 中 沢 |
| ④ 山 中 | ⑤ 小 島 |
| ② 牛 窪 | ⑦ 島 田 |
| ⑧ 菅 野 | ⑨ 渡 井 |
| ③ 山 崎 | |

《終りに》

昭和16年、第二次大戦に突入し、中等野球の全国大会は、この年から5年間空白の時を迎えるのである。これは主に生徒を居住地に足止めするという、政府の政策から取られた措置であった。

（山本三郎 記）

* * *

国全体が敗戦の痛手に打ちひしがれていた昭和20年の秋から冬にかけて、戦前北関東にその名を馳せた名門川中野球部の復活を目指して、野球を愛する仲間が二人、三人と集まり、再び野球部の活動がスタートすることになった。

戦災をまぬがれた川越地方、バットやグローブは押し入れの奥からさがし出したとしても、消耗品のボールは殆んど手に入らず、空腹をかかえての練習は、ただ野球へのたぎる情熱によって支えられていた時代である。

昭和21年夏、多くの困難を乗り越えて再開された全国大会の県予

選には、若手OBの徳田健吉監督の指揮の下に、左腕の関投手を擁し、名坂、増島、山川を中心とする陣容で臨んだ。結果は準々決勝で浦和中に敗れたが、伝統ある川中野球部の復活を、県下の野球ファンに強く印象づけることが出来たのは大きな収穫であった。

山本三郎監督に率いられた翌昭和22年夏の予選一回戦は、浦和商の校庭で行われ、玉川、古川、恩田、篠といった上級生が、大野、川中の下級生バッテリーを盛り立てて出場した。

試合は健闘空しく大宮工に敗れ去ったが、国鉄川越線で貨車が乗客を運んでいたような交通難の時代に、学生の応援団とは別に、多くのファンが川越から駆けつけ、地元での野球部への関心と期待の強さを窺わせた。

昭和22年秋の新チームは、旧制から新制への切り替えのはざ間にあって、下級生が中心となることを余儀なくされ、戦力的なダウンは否めなかったが、精神的な結束は一段と強いものになった。

戦前の黄金時代をその手で支えた家村相太郎先輩を監督に迎え、依然として続く物資の欠乏に耐えながら技術の練磨に明け暮れたが、結果にはなかなか結びつかなかった。

昭和23年の夏の大会を前に、学校内で合宿を行ったが、家中の米をかき集めて参加した部員もあったほどで、三度三度の献立を考える部長の白井先生を始めとする裏方の苦労も、また言語を絶するものがあった。

この年から川越高校と名前を変えて出場した大会では、前年に続いて大宮工に惜敗したが、上級生の田中、松本、相沢、大野、下級生の谷、小野、浅井、川合とほぼ全員が新チームに残り、敗戦の屈辱をバネに巻土重来を図ることになった。

再び山本三郎先輩を監督に迎えたチームが、名門復活の絶好の機会を迎えたのが、昭和24年の夏の大会であった。

初戦の相手優勝候補筆頭の熊谷高を破れば、待望の甲子園への道が開かれるはずであった。しかし、県下一の好投手萩原を擁した熊谷高から、序盤圧倒的なリードを奪いながら、後半じりじりと追い上げられて、延長十回遂に涙を吞んでしまった。この一戦は、当日グラウンド入りした山本監督に父上危篤の報せが入り、急遽横関夏夫先輩が指揮をとるという不運があったほか、試合中に行方不明になった一本のバットが、ゲームセット後熊高応援団から投げ返されるといふ不祥事件があったりして、後々迄語り継がれるものになっている。

苦戦の末勝利を得て波に乗った熊高が、南関東大会でも千葉県勢を倒して、大正十年以来初の埼玉代表として甲子園出場を果たしたことは、予選のいきさつから、当時のメンバーには極めて感慨深い出来事であった。秋のシーズンを迎え甲子園出場校を窮地に追い込んだ夏の大会の結果に自信を持った新チームは、谷、小野、浅井の三年生を中心に、二年生ながら経

験豊かな松崎、横田、それに大附、黒沼のバッテリーで甲子園を目指すこととなった。

明けて昭和25年、初めて春の合宿を平方中学で行い、冷たい風が吹きつける中、小石の混ったグラウンドを蹴って猛練習に励み、松崎が足首を骨折するという事故もあったが、精神の練磨と技術の向上に大きな成果があった。

しかし夏の県大会では、一年間夢にも忘れることがなかった熊谷高と再度対戦、勝利を意識しすぎるとあまり日頃の実力が発揮出来ず、後半大きく差をつけられて、前年の恨みを晴らすことは出来なかった。

昭和24年、25年と雌伏を続ける中、部の活動の周辺で特筆すべき動きがあった。夏の大会で不運な敗北を喫した後の昭和24年秋、川越市内で歯科医を開業する小杉太郎先生（川越中20回卒）を会長とする後援会が発足したことである。後援会には戦前の黄金時代を知る地元のファンが続々と集まり、力強い支援を開始したが、とりわけ小杉会長ご一家の、精神的、経済的なバックアップは、その後の野球部躍進の土台となったことはよく知られるところである。

またその頃、野球部のOBではなかったが、慶応大学在学中の森田暁先輩が、連日のようにユニフォーム姿で練習を手伝って下さったのは、部員の数が多かった当時、非常に有難い存在であったこととして思い出される。

（菅間 昭 記）

* * *

次いで昭和26年は、埼玉県の高校野球史上画期的な年となった。好投手服部を擁する熊谷高が、夏の全国大会で決勝戦に進出、平安高に敗れたとはいえ準優勝という輝かしい戦績を残したのである。更にこの年は川越高にとっても戦後初めて南関東大会への出場を果たした記念すべき年であった。

戦後の川越高野球部の歴史の中でも屈指の好選手であった故大附投手をはじめ個性に富んだメンバーを揃え、夏の甲子園大会初出場を狙ったが、銚子商のパワーの前に緒戦で敗れ去った。

翌昭和27年は素質のある三年生が多く期待された年であったが、今一步及ばず無念の涙をのむ試合が多かった。

然しながら、川越高野球部の黄金時代への大きなうねりが感じられ始めていた。

27年秋季県大会では、わずか11名～12名という部員数ではあったが、準決勝迄進出した。

昭和28年夏季大会では、故橋本（剛）・角田・田中のトリオがおり「強打の川越高」として注目されていたが、行田高との雨中の対戦で敗退してしまった。この試合の詳細については、年代記に記されており、重複は避けるが、大会運営の点で埼玉県高野連に反省を促すことになった一戦であった。余談ながら、この年の南関東大会（於大宮球場）で佐倉一高から出場した長島茂雄選手が、同球場のバックスクリーンに特大のホームランを打ち込んでいる。

この年（28年）の秋季県大会で

は、島野・鈴木の投手陣と角田・田中の強打がうまく噛み合い決勝戦へ進出した。だが、準決勝戦で角田・田中が相次いで負傷退場、打線の中軸を欠いた決勝戦では、熊谷高の豪球投手福島に押えられ準優勝に甘んじたのであった。

昭和29年夏、遂に昭和12年以来の県大会制覇を果たした。一昨年秋の準決勝進出、昨秋の決勝戦進出、そして今夏の優勝と確実に川越高野球部は復活しつつあった。

OB会・学校関係者、街のファンの声援と期待を背に勇躍して出場した南関東大会であったが準決勝で千葉商に敗れ、夏の甲子園出場の夢は実現出来ず、それは、後輩達に託すことになった。

昭和30年夏、この年も川越高は強かった。サウスポー宮寺が、大きく割れるカーブを武器に好投、レギュラーに二年生以下が6名もいるという若いチームながら、一気に大会を勝ち上った。そして昨夏に続いて決勝戦に進出、連覇を狙った。だが勝運に恵まれず鴻巣高に敗れ準優勝となった。次いで南関東大会、一回戦は千葉一高との対戦となった。宮寺、宮間両投手の好投で大接戦となったが、我校は終盤の同点機を逸し1対2で敗れたのであった。

昭和31年のレギュラーには、二年連続して夏季大会決勝戦進出の経験者が多く残っており「今年こそは」と期待されていた。その期待がプレッシャーとなったのか十分に実力を発揮出来ずに早々と姿を消してしまった。

この年（昭和31年）の秋季大会

で川越高はたくましく復活してくる。神田・柴崎のバッテリーを中心に新井・杉田・野口・石井等好守を誇る選手を揃え、昭和28年秋以来3年ぶりに秋季大会の決勝戦に進出、宿敵熊谷高と対戦したが0対2で敗れ関東大会出場は成らなかった。

翌32年夏の県大会では準々決勝戦で大宮高と対戦、あわやのところまで追い込みながら4対5で惜敗した。この大宮高が甲子園大会初出場を果たし、しかもベスト4まで勝ち抜いたのだから本当に惜しかった一戦であった。そして更に川越高野球部は強豪の名を高めるのである。32年の秋季県大会では、川辺、吉田の好投、北野・石井・鈴木等の強打で準決勝に進出、川越商に敗れたものの来るべき夏の大会での活躍を予感させたのであった。

昭和33年の夏、この年の川越高は近年希に見る好チームとして前評判が高かった。投手陣は川辺・吉田の二枚看板、打線は、北野・鈴木・古屋・石井・正木・故栗原等錚々たる顔ぶれであった。事実大会では前評判どおりの実力を発揮、準々決勝で大宮工と引き分け再試合と苦戦したものの順当に決勝戦へ進出した。この年は、第40回の記念大会のため、1県1校の代表制であり県大会制覇が即、甲子園への出場権を得ることにつながっていた。だが結果は0対6で大宮高に完敗。この10年来最強のチームと思われていたナインも遂に甲子園の土を踏むことが出来なかった。

昭和34年夏、川越高はとうとう宿願の甲子園出場を実現したのだった。前年秋、監督に就任された家村先輩の厳しく、かつ合理的なご指導により秋の新人戦では準決勝に進出、春季大会では、見事優勝を飾り関東大会に出場、甲府一高を破り、優勝した明治高に善戦して夏の大会への自信を深めたのであった。いよいよ始まった埼玉県予選では速球投手吉田が43回無失点を記録、「点をやらないチーム」の本領を発揮。昭和29年以来5年ぶりに優勝、更にこの年から埼玉代表と山梨代表が代表権を争うことになった西関東大会で、甲府工を2対1で破り、初の代表チームとなった。甲子園では熊本鎮西高に快勝、高知商には惜敗したものの、そのキビキビした試合ぶりは高校野球ファンの絶讃を浴びた。

この秋（昭和34年）新チームに切り替ってからも依然として高いレベルを保っていた。

昭和35年春季県大会で準々決勝に進出した。又、夏の大会を前にして、川越高は攻守にバランスのとれた好チームとの世評が高く有力チームの一角と見られていた。実際に一・二・三回戦と順調に勝ち進んできたが準々決勝で所沢高に不覚の1敗を喫し二年連続しての甲子園出場への夢を絶たれた。次いで秋の県大会では、森田〜相沢のバッテリーを中心によく守って準決勝へ進出、慶応志木高に熱戦の末、1対2で敗れている。

昭和36年夏の県大会では昨秋の準決勝進出の余勢をかって大健闘、Aブロックの準決勝で熊谷商工と

対戦、接戦の結果1対4で口惜しい敗けとなっている。熊谷商工はブロック決勝で飯能高に勝ち西関東大会に出場している。

昭和37年には、前年秋の県大会、そして春季県大会と不調のうちに終り巻土重来を期して夏の全国大会の県予選に臨んだ。一回戦豊岡実・二回戦不動岡高と連破したものの三回戦で優勝候補の筆頭であった上尾高と当たり、0対4で敗退を余儀なくされている。

昭和38年になると秋季大会はやや不振であったが春季県大会では平田投手がよく投げてベスト8に残った。夏の県大会では更に進境著しい平田投手が相沢捕手の好リードによって見事なピッチングを見せた。熊谷商工・深谷商・岩槻実と連破4年ぶりに準決勝に進出、第45回記念大会の代表まであと2勝とせまったが、大宮商に1対3と無念の敗戦を喫したのであった。

(鈴木 勇 記)

* * *

昭和39年の東京オリンピックは、国民のスポーツへの関心を高め、また42年の埼玉国体開催は、本県スポーツの振興が大いに図られた。本校野球部も、以後今日までを通して最も勢いがあり、実績を残した年度でもあった。すなわち、39年は前夏準決勝まで進出した選手が平田・相沢正のバッテリーをはじめ多数のこり、投攻守バランスのとれたスケールの大きいチームであった。初の甲子園出場を果たした熊谷商に、本校二度目の夢が断たれ、好機を逸した。

42年夏は、2年生投手皆木の連

日の力投により、国体強化校・深谷商を引分け再試合で再度延長戦の末破った。あの輝やかなしい闘魂は、特筆に値するものである。

一方、戦後のベビーブーム世代が高校へ移行してきて、高校入試の激化が社会問題になってきた時期である。中学球児の入学難及び入部者減少により、伝統校・進学校の多くが低迷衰退していった。

更に、45年は高校紛争の最も激化した年であり、学園の自由化とともに全般的に部活動離れが生じ、部員確保が厳しくなった。

しかし、このような状況の中で入部してきた選手たちは、学生スポーツの本義を理解し、本校の伝統を誇りとして、心身練磨に励んだ。在学3ケ年の精進は、正に「心の甲子園」に値し、等しく称賛できるものである。

39年から41年にかけての矢幅氏、43年から46年までの相沢正氏両OBの継続したコーチとしての協力は、困難な時代であっただけに誠にありがたかった。深く感謝している次第である。

また、戦前からのファンである方々が多い後援会にも大変な御後援を賜わってきた。慈愛に満ちた故小杉太郎先生(会長)、部員の健康にお気遣いいただいた故坂口徳因様、会員連絡の労をとられた小峯忠吉様、故遠藤亀司様、種々道具を製作してくださった田中兼吉様には特にお世話になったことを記しておきたい。

50年代に入り、全県的には加盟校の増加と少年野球等からの有力選手の一部高校への集中がみ

られ、学校格差が顕著になってきた。その中で本校は例年3~4回戦まで駒をすすめてきている。

本校野球部OB会(川高倶楽部)は、永年母校野球部への物心援助、会報発行、会員親睦行事等を実施してきた。全国的にも例の少ない活動をしてきている組織であろう。岩崎前会長、山本現会長の組織充実に尽された御労苦と他の役員・会員の協力によるものである。

今日、県高野連加盟校は161校と著しい発展をとげ、全国でも有数の激戦地区となった。57年度の熊谷高、63年度の市立浦和高と身近なチームの甲子園出場、そして立派な活躍は大きな励みである。両校に学び、再度母校の出場を念願するものである。

(宮根七郎 記)

* * *

昭和57年の大宮、58年の大宮東(準優勝)、61年の大宮工(準優勝)、62年の大宮工と、大宮勢に阻まれたことが多く、何やら昔からの因縁を思い起こされる。その間、市立川口、春日部工業など、シード校との対戦に於ても善戦健闘するのだが、勝ちきれないということも事実であった。そのうちでも、60、61、62年は強く印象に残る好ゲームであった。

60年代に入り、私立勢が台頭、3年連続で代表の座についている。時世の流れに呼応するかのよう、本校に於ても、入学難、スポーツの多様化、大学入試などの中で、入部してくる選手たちが、様々な葛藤の中で3年間を終えた時に、誰もが異口同音に「川高で野球をや

ってよかった」ということばを残し、貴重な体験と人生の友を得て卒業してゆく。最近の若者像として、厳しくつらい事、精神論では動かない世代といわれるが、その反面、理論的に明確な目標を与え、納得すればついてくる。うまくなりたい、勝ちたいという気持ちは、いつの時代も同じである。

川高野球、不変の「正々堂々」「フェアプレー」の精神を礎に、平成という新しい時代での飛躍を期して、さらに精進してゆきたい。

(鈴木和彦 記)

創世の時代～平成期

大正5年度

秋は来りぬ。野辺には色とりどりの草生い茂り、美しき萩、高き女郎花、さてゆかりの色の濃紫に匂う桔梗、紅葉をこき交せて、さながら名工の画の具こぼしたらん如く、秋光の彩を粧ひつ、袖吹く風も靡々と、肌に冷やかにこぼれ散る露も、消え残る蟲の音も、何となく哀れさそう秋は来りぬ。前学期末の大会後、流石に暑期は盛ならざりし本部も秋立つと共に部員は練習に余念も無く、10月7日、ここにフォールタムに於ける練習マッチ開きぬ。

此の日秋空高く澄み渡りて吹く風肌に快く、実に絶好の運動日和なりき。競技者一同熱心なる練習に花を咲かせつつ用意備って、いよいよ第一回戦の火蓋はきられぬ。

船津軍	1	1	0	5	2	9
大塚軍	0	0	6	0	2	8

	First At Bat	Second At Bat
投手	船津	大塚
捕手	大澤久	椎名
1塁手	内野	内田
2塁手	宇野	高橋
3塁手	鹿島	大澤
遊撃手	田中	長島
左翼手	正木	細川
中堅手	武藤	秋葉
右翼手	細井	矢部

碧瑠璃なす大空高く、武蔵野の空にも芙蓉の峯を懸けて、野に歓楽あり、巷に長愁あり、時や秋まさに老いぬ。校内の立木も紅葉を風にまかしつつ何時しか骨あらはになりぬ。

11月3日、立大子礼を行わせらるるにあたり記念の野球部にて此の1日大会を催せり。

各選手の腕はなりぬ。熱球は碧空を破り、白シャツの雄姿は今日とは！との意気ごみに練習を続けた。観客席には5、6の補佐の先生も見え、同僚の意気をはげます可く各級生徒の応援も多し、熱球は飛び。北尋常小学校の生徒は引卒されて来り応援につとめ、非常なる盛会なりき。

船津軍	0	1	2	0	1	4
矢部軍	2	1	3	1	0	7

ゲームは5回にて黄昏初めし頃止み、音高く手をうちて日出度き此のマッチは終れり。メンバー下記の如し。4対7にて矢部軍の勝となれり。

	First At Bat	Second At Bat
投手	船津	矢部
捕手	大澤	椎名
一塁手	内野	内田
2塁手	高橋	宇野
3塁手	長谷部	正木
遊撃手	長島	細川五
左翼手	大塚	白田中
中堅手	加島	田井
右翼手	細川	細井

大正6年度

大正6年度秋季大会は11対5にて矢部軍の勝利。

秋は今や全く老い、木々の梢の紅葉して降る日は肌も又寒し。11月23日。秋季野球大会は行われぬ。此の一戦たるや、田中軍に取りては春季大会の涙の復讐戦にして、矢部軍に取りては勝利の歴史を汚

さざらむとする慎重なる努力戦也。しかれども田中軍終始優勢に陣を進め、結局19対8で遂に会稽の恥を注げり。

田中軍	0	2	3	10	4	19
矢部軍	1	3	0	3	1	8

	First At Bat	Second At Bat
投手	田中	矢部
捕手	長島	大澤
1塁手	前田	内田
2塁手	大澤秀	新井
3塁手	福田	正大
遊撃手	細井	大塚
左翼手	山下	秋葉
中堅手	細川	武藤
右翼手	名坂	大河原

大正7年度

深緑の木々も全く色あせて秋も梢く深くなりぬ。何の樹殊に色づき何の葉殊に落ち初めしと言うにはあらざれど校内の立木も日々透明ならんとする9月30日吾が野球部は秋季大会を行う。

この日や雨降らんとする模様ありたれどゲーム開始時には全く晴れて絶好の野球日和となりぬ。

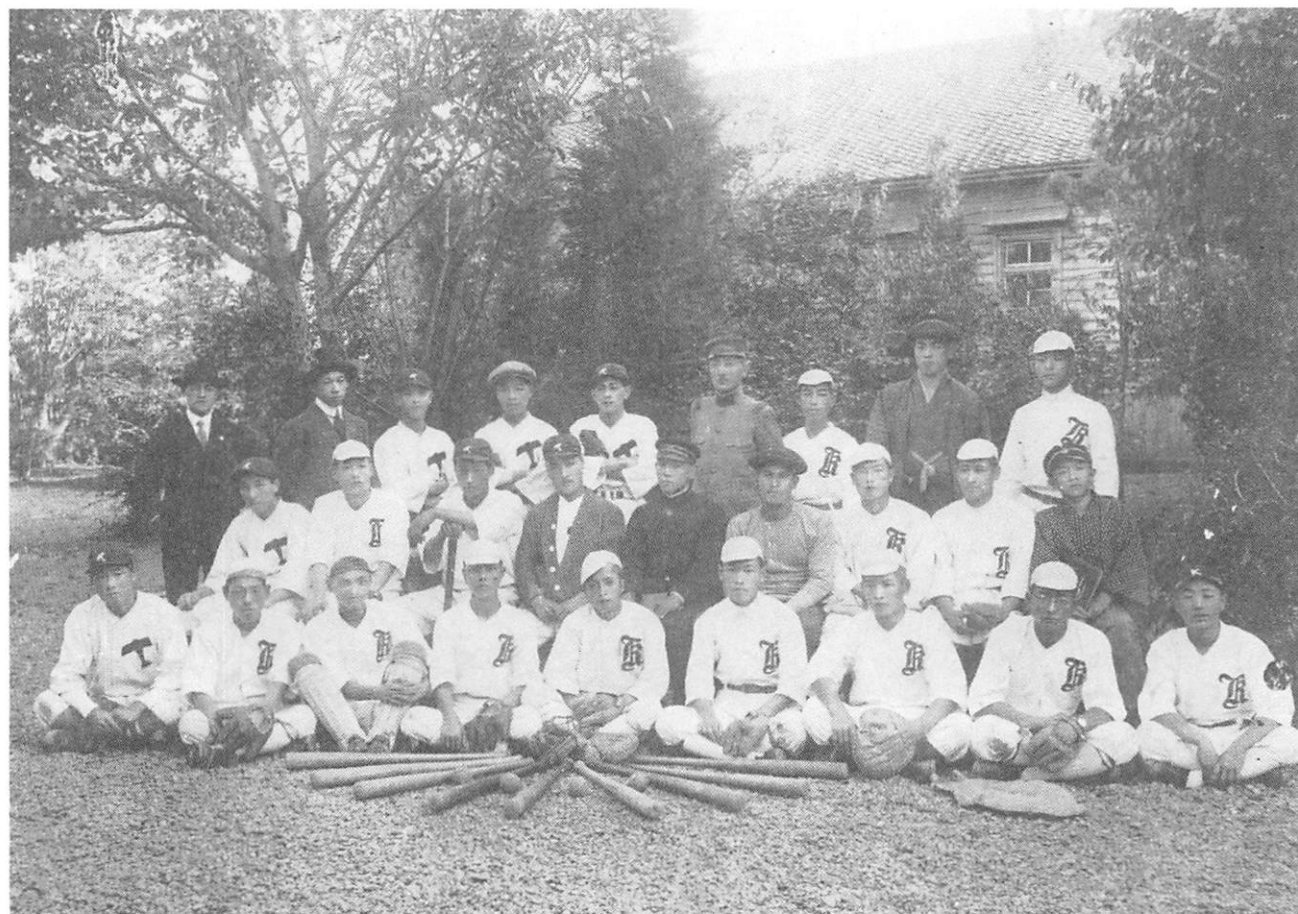
田中軍	0	1	2	2	4	3	1	13
福田軍	1	0	3	4	0	0	2	10

	First At Bat	Second At Bat
投手	田中	福田
捕手	大澤	長島
1塁手	内田	正木
2塁手	岩沼	名坂
3塁手	武藤	鯉沼
遊撃手	細川	細井
左翼手	杉田	小熊
中堅手	久保信	羽島
右翼手	大河原	小山

ゲームは7回にて終り13対10で田中軍の勝となりたり。

ゲームは部員の熱心さで非常に興味を増し近来稀に見る盛会なりき。

大正9年卒業 (旧18回卒)



大正8年10月1日 於川中グラウンド 所沢航空隊とのゲーム記念写真

三列目左より ———— 田中 中島 原
 二列目左より — 不明 ——— 不明 — 宇野 大塚 中島マネジャー
 一列目左より — 水村(潤) 桑島 不明 大河原 岩崎 大塚 本橋 不明

対外試合の第1号

— 所沢航空隊野球倶楽部 —

“この年の生徒会報には、野球、庭球、及び相撲の三部からはその記録の提出がなかった。尤も、右三部には本年中格別の事もなかったという。”断りの文章が掲載されていたが、調査の結果大正8年10月1日本校々庭で所沢航空隊野球倶楽部との試合での記念写真が発見されたので貴重なる資料として掲載し対外試合の第一号とする。

メンバー一覧

校 長	古賀 毅	投 手	大塚 秀仁	5 年
			小林 茂雄	5 年
部 長	西村 真	捕 手	中島半兵衛	5 年
			加島 仕郎	2 年
主 将	大塚 秀仁	一塁手	桑島 稔	2 年
			原 三郎	3 年
		二塁手	大河原雅雄	1 年
			宇野 精一	5 年
		三塁手	大塚 秀仁	5 年
			神崎 昂	4 年
		遊撃手	岩崎 清録	4 年
			本橋 九蔵	3 年
		左翼手		
		中堅手		
		右翼手		

大正10年卒業 (旧19回卒)



大河原(雅)補欠	増田 捕手	加島 投手	杉田 右翼手	田中 二塁手	笹田 三塁手
平川 遊撃手	古谷 左翼手	岩崎 一塁手	大友 部長	大河原(敬)中堅手	守屋 記録係

先に3選手を送り出し、川中野球部は、やや寂莫を感じしが、ここに新に馳参ぜし新進を加へ、4月29日を以て本年度メンバーを発表し又「猛練習開始」の五大文字を掲げて練習大に努む。第一学期は消極的なれども、挑戦に应ぜず、遠征せず、只チームの内容充実を図り技大いに進む。第二学期に入りてよりは各ベースボールチームの挑戦に应じ、六戦四勝二負の戦績を得て本年度の球史を閉づ。

校 長	岡 田 恒 輔	
部 長	友 金次郎	
コ ー チ	本 猶太郎	
主 将	村 崎 清 録	
選 手 氏 名	学 年	ポ ジ シ ョ ン
笹 田 泰 治	3	三 塁 手
平 川 竜 夫	3	遊 撃 手
増 田 信 千	4	左 翼 手
加 島 仕 郎	3	投 手
岩 崎 清 録	5	一 塁 手
本 橋 九 蔵	4	二 塁 手
宇 野 四 郎	3	中 堅 手
浜 野 清 吉	2	右 翼 手
桑 島 稔	3	捕 手
古 屋 重 延	5	遊 撃 手
田 中 敬 治	4	二 塁 手
大河原 雅 雄	3	中 堅 手
小 山 辰 吉	4	三 塁 手
杉 田 一 良	3	左 翼 手

第1戦対飯能実業団

選手3名に事故ありしたため、補欠3名を加へたれば戦績思はしからず、16A対14にて本校軍勝となる。

校内紅白試合

9/13 第1回 赤1、白2
第2回0対1、第3回2対1
第4回1対1、第5回3対0
7対5 赤組の勝に帰す。

第2戦対飯能実業団

9/19 鎧袖一触零敗を以て敗走せしむ。

チーム	1	2	3	4	5	計
飯 能	0	0	0	0	0	0
本 校	3	4	0	2	2	11

打安失三

飯 能 11 0 9 5

本 校 26 4 0 1

試合終了後選手茶話会を開き岩崎主将、飯能主将真野の挨拶あり、一同歓を尽す。

紅 倶 楽 部

9/23 紅クラブを本校庭に招きて開戦す。

チーム	1	2	3	4	5	6	計
本 校	1	3	0	0	6	5	15
紅 軍	1	0	0	1	0	1	3

15対3にて我軍に凱歌挙る。観衆約400を算せられたり。

	打順	打数	得点	三振
(6)	平 川	5	1	0
(7)	古 屋	5	1	1
(2)	増 田	4	2	0
(1)	加 島	4	1	0
(3)	岩 崎	4	2	0
(4)	田 中	4	2	1
(8)	大河原	4	3	1
(9)	小 山	4	3	0
(5)	笹 田	4	1	1
	計	38	16	4

10/3 対 埼 玉 師 範

天晴れ、気澄み、真に絶好の野球日和観衆 500、例により、自由打撃、シートノック、オールホーム、守備も目も覚むるばかりの技を示すに観衆ヤンヤの声喧噪を極め、埼師軍代って練習に移れば、応援隊ここを先途と声援す。両軍の技正にこれ伯仲。結局21A対7にて多年鹿島台上に覇をととなへし埼師軍をば粉碎し、部史あって以来の大勝を博せり。増田捕手、岩崎一塁、笹田三塁の守備は当日の白眉たるを失わず。

11/1 対所沢飛翔クラブ

必死となりて戦ひしが9対6てふ僅々の差にして惜しくも敗る。

11/14 対浦和中学

県下第一の称ある浦中をむかへて戦を交ふ。観衆約 400、殊に小学生の多数見物せしは野球の発達とも見るべく悦びの至りなり。

結果は13対7を以て敗る。

【本 校】 8回より古屋
加 島 (1) (6)、杉田(7)、大
増 田 (2) 河原(雅)(8)に代
(主)岩 崎 (3) る。
田 中 (4) ここに4勝2
笹 田 (5) 敗にて九年度球
平 川 (6) 史を閉ず。
古 屋 (7) (岩崎清録)
杉 田 (8)
大河原(敏) (9)



加島仕郎・岩崎清録・増田信干(初雁公園にて)

大正11年卒業（旧中学20回）



後列左から 伊藤遊撃手、羽島中堅手、本橋一塁手、飯田部長
平川投手、浜野左翼手、小山三塁手
前列左から 長又選手（補欠）、増田捕手、水村右翼手（投補欠）
田中二塁手、吉沢選手（補欠）

寂寞のなか新チーム！

先に古屋左翼手、岩崎一塁手、大河原中堅手の三君を送り、又加島正投手、笹田三塁手も辞せしより我が野球部は聊か寂寞の感ありしも、三月の休暇を機会に、青山学院高等部野球部選手、平川芳夫氏、コーチの下に猛練習の甲斐ありて、各選手の技大いに進む。

投手	平川
捕手	増田
一塁手	本橋
二塁手	田中
三塁手	小山
遊撃手	伊藤
左翼手	浜野
中堅手	羽島
右翼手	水村
補欠	吉沢
〃	長又

・5月中旬 所沢に遠征して所沢航空隊野球部倶楽部と対戦、16-0（5回コールド）にて勝つ。

・6月6日 所沢A倶楽部を本校に迎えて対戦。14-4で大勝する。

県下の覇者熊中を迎う

・10月30日 県下球界の覇者たる熊中軍を迎え戦う。我軍利あらず、打撃振わず且試合慣れざるため、しばしば好機を逸す。

熊谷中	0 2 1 0 5 0 3 0 0	11
川越中	1 0 0 1 0 2 0 0 0	4

1回、川中小山四球を利し、連盗、本橋四球、小山逸球に生還。増田三振後平川二盗して刺さる。2回、熊中小池左翼手失に二塁に達し、高橋の安打に生還、小林投手牽制に刺さる。川中羽島遊撃失に出でも、二盗して刺さる。浜

野三振後、伊藤四球を利せども又二盗して刺さる。4回、川中本橋二飛後増田遊撃高投に二塁に達し、平川の犠打に送られ、逸球に生還1点を回復す。5回、熊中大谷遊撃失に出塁、1死後田島の左翼越本塁打に二者轡を並べて生還。小池単打、高橋、内田共に遊撃失に1死満塁となり、根岸の軟打に小池生還、高橋も小林の犠打に還り、内田又逸球に生還し一挙五点を挙ぐ。6回、川中1死後小山三塁線上安打に出で、二盗し、本橋1塁手失に2塁に達する間に、小山一挙本盗を企て成功す。本橋3盗またまた逸球に生還。

	〈川越中〉	〈熊谷中〉
投手	平川	田島
捕手	増田	大谷
一塁手	本橋	荒井
二塁手	田中	高橋
三塁手	小山	小林
遊撃手	伊藤	小池
左翼手	浜野	内田
中堅手	羽島	市川
右翼手	水村	根岸

浦中に遠征す

・11月13日 昨秋の復習を為すべく、彼地に遠征す。本校軍必死となりて戦いしが得点を先占せられしかば、周章気味にて凡失し、且敵投手栗田の球に封ぜられて、結局9-3にて再び負る。

浦和中	2 0 1 0 1 0 1 0 4	9
川越中	0 0 0 0 0 0 0 2 1	3

1回、浦中1死後須賀三匍失に生る。連盗し、栗田四球、保坂の軟打に須賀生還、横山の三匍に栗田本塁に憤死し、保坂逸捕に生還、

横山牽制球に二塁に死し、軽く2点を先占す。2回、川中平川遊飛後羽島軟匚二盗に成功し、捕手の高投に一挙本塁を衝いて左翼手の好投に奮死し、好機空し。4回、川中本橋、増田三振後、平川、羽島相ついで内野安打に出で、次打者浜野2飛失に生きるも、羽島走法を誤りて2塁に刺され、好機再び空し。5回、浦中栗田3匚失に生きるも、保坂の2匚に2塁に刺さる。保坂2盗、捕手逸球に3塁に達し、横山の犠打に生還、1点を加う。川中二死後、羽島3匚失に生きたるも、3盗して刺さる。8回、浦中3者凡退。川中二死後増田2匚失に生き、2盗に成功し、捕手逸球に3塁に達し、平川の三塁越安打に生還、次打者羽島の三遊間安打に平川生還し2点を回復する。9回、浦中1死後須賀投手低投に生き、栗田の左翼越2塁打

に生還、保坂3匚失に生き、横山の3塁越安打に栗田生還、川口の犠打に保坂生還、横山捕逸に又も生還一挙4点を加う。川中最後の攻撃に入り、伊藤3塁手の高投と捕手の二塁高投に1点を回復する。水村捕邪飛田中3塁手の暴投に一挙2塁に達し、本橋四球に有望なりしも、増田軟打して止む。

	〈川越中〉	〈熊谷中〉
投 手	平 川	栗 田
捕 手	増 田	須 賀
一塁手	本 橋	深 澤
二塁手	田 中	宮 崎
三塁手	小 山	川 口
遊撃手	伊 藤	澤 松
左翼手	浜野(長又)	保 坂
中堅手	羽 島	会 川
右翼手	水 村	横 山

秋季大会(11月26・27日)

川越実業団美好野倶楽部を招聘

加うるに校内寄宿舎チーム、及び3年級より成る二葉倶楽部の四チームで雄を競う。一回戦寄宿舎チーム対二葉倶楽部5回にて19対6(コールドゲーム)。にて寄宿舎チーム勝つ。

東倶楽部対美好野倶楽部。11対4にて東倶楽部勝ち。決勝戦は寄宿舎チーム対東倶楽部(先輩クラブ)。結果14対2で寄宿舎チーム優勝す。(記録係 守屋秀夫)

	東倶楽部	寄宿舎チーム
投 手	平 川	水 村
捕 手	本 橋	杉田一
一塁手	黒 田	杉田正
二塁手	中 西	代 田
三塁手	原 田	羽 島
遊撃手	増 田	田 中
左翼手	竹 内	内 田
中堅手	立 川	武 藤
右翼手	沖 田	久 下

野球創立当時の思い出 “敵状視察”

本橋 九蔵

大正15年関東大会の際にはO・Bとして恐らく初めてのことだったと思われませんが、強敵栃木中学の敵状視察を飯田部長から依頼されて、単身栃木に出向き周りのファンの中に交り、主として投手の状態(球質、長短所、性格)捕手のリード、肩の調子、内外手の連繫動作に加えて打撃の長短所を精しくメモして来ることが出来ました。尚、念の為に栃木中学のライバル校へ立寄り、監督・コーチの方々から私の見聞したことに対する御意見その他詳細に亘って貴重な資料をいただき、大変参考になり宿に帰り早速便箋10枚に刻明にした

ため報告材料として川越へ帰りました。ところがこの日川中は飯能へ遠征していたので、後を追いかけてベンチの飯田先生に報告書をお渡ししたところ精読されて大変喜んでいただいたことを覚えております。この大会には増田・小室と共に宇都宮へ応援に行き駅前通りの板屋旅館に先生・選手と同宿していたので、優勝候補随一の評判の高いそして大会一の名投手関口を11回3点を挙げて7対4で破るという大番狂わせを演じさせた本橋さんの貴重な敵状視察こそと選手一同喜び涙にくれた一幕もあった。翌朝の朝日新聞で球聖飛田穂

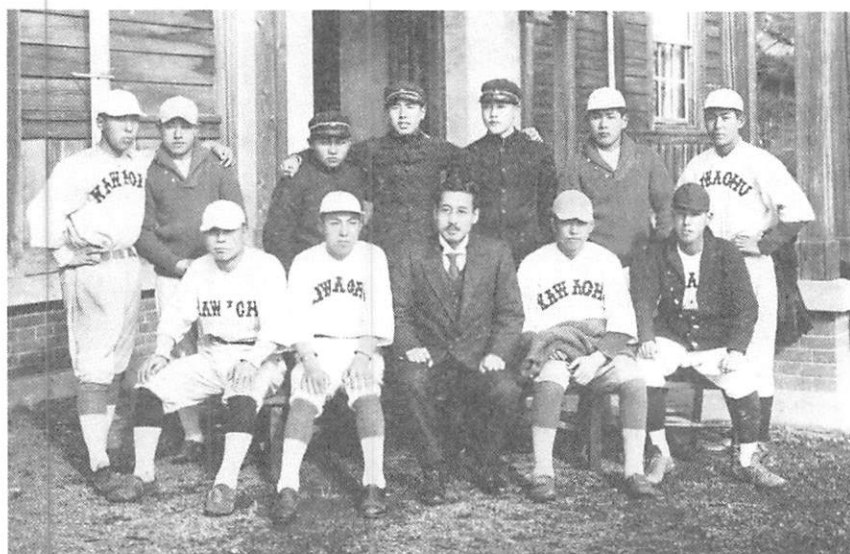
洲大先生から大変長い記事での称賛に弥が上にも川中の名声上り、続く宇都宮中学との準決勝でも堂々と互角に亘り合ったことから一躍にして関東の慧星と騒がれるに至った。

この年決勝は前中対宇中戦で前中辛くも勝ち甲子園に駒を進め、甲子園ではこの前橋中学が準々決勝で静岡中学と対し19回延長の末6対5で惜敗したのである。

この頃は昭和51年度「川高クラブだより」に寄せられた本橋九蔵氏の“野球部創立当時の思い出”より抜萃したものである。

(山本 記)

大正12年卒業（旧中学21回）



後列左から 伊藤遊撃手、船津一塁手、大河原中堅手、平川投手
加島投手、杉田捕手、浜野左翼手
前列左から 新井右翼手、水村三塁手、飯田部長、不 明、
田中二塁手

野 球 場 の 位 置

大正9年頃までの野球場の位置は、南北に細長い校庭のほぼ中央の東側に本塁がおかれていた。一塁を結ぶ右翼の線が、東に境を接している武徳殿（当時は日本専売公社川越工場として巻煙草を製造していた）の板塀と平行して北にのびていた。その後、本塁の位置を移して従前の一塁付近に定めた。従って、右翼線は90度回転して西方にのびたことになった。右翼手は、校舎と校庭を仕切っていた竹で編んだ塀を境にして、雨天体操場を背にすることになり、守備範囲が狭くなった。逆に、右翼線は校庭いっぱい南方にのびて、左翼手、中堅手の守備範囲が、非常に広がった。

野球事情——

美好野倶楽部と雄飛倶楽部

ともかくにも、野球部としてまとまったチームが結成された大正8年前後は、市内に2つある県立中等学校には野球部がなかった。

幸にも、市内の明文堂書店の岡田多四郎氏（愛称タードン）が中心になって結成された実業団の美好野倶楽部があった。また、少し離れていたが、所沢の陸軍飛行学校に雄飛倶楽部チーム（飛行学校所属の軟式飛行船の船名が雄飛号とあった）があった。

羽織、袴、白足袋で… 宮原校長の審判姿

所沢雄飛倶楽部チームが遠征して来た。我が校庭で練習試合を行

った。その時の審判は川越町立北尋常小学校の宮原校長にお願いして引き受けていただいた。

投手板の後ろに立たれて、ひとりで球審、塁審、線審をつとめられた。そのいでたちといえば、頭にはカンカン帽といって麦藁で編んだ一文字に四角張ったカタイ帽子をかぶり、白地の着物に黒の夏羽織をはおり、腰には夏袴をはかれ、白の夏足袋に、二枚歯の駒下駄をはかれていた。まさに夏の礼装で、颯爽としかも優然としてフィールドに立たれて審判された。実に惚れ惚れする姿であった。

和気藹々！ 初めての合宿生活

関東地区大会を目指し、第1学期終了後直ちに合宿に入る。ここで合宿風景について少しふれてみよう。合宿所は校庭近くにあった雨天体操場があてられた。その雨天体操場の南半分は柔道場である。その柔道場は畳が50枚ぐらい敷かれる広さがある。ここで選手一同は、地区大会出場までのわずか7日間、寝食を共にしたのである。夏のことであるし、夜間は蚊など虫にさされぬよう蚊帳を張った。蚊帳の四隅の吊手に長い紐を結んで三方の板壁にくくりつけた。柔道場が広いので、ピンと張れない。寝ていても手をあげれば触れるほどに蚊帳の天井がたれ下っていた。雨天体操場のすぐ東横に、竹の塀に沿うように井戸があって、洗面、水浴等に便利に使った。炊事については、上・下級生の別なく交替して当番に当たった。当番は毎朝毎

夕、紙屑をひねって燃しておこした炭火のコンロで炊事をした。親もとからの届けものもあり、また、小使室の人たちからもずいぶん世話になった。とにもかくにも、初めて経験する合宿生活である。和気藹々たるなかにも、凜とした規律が保たれ、一致協力、闘志満々、やる気十分に練習に打ち込んだ。ところが出場間近になって、寝冷えのためか、下痢患者が数名出た。ついに出発当日になって杉田選手は家族に引きとられ帰宅の止むなきに至り、出場不可能になった。

全国中等学校野球大会 関東地区大会に初出場

当時、前年度から県下で最強とうたわれていた熊谷中学と練習試合をするため、新年度になって早々、熊谷に遠征した。敵失に幸いされて、11-2のスコアで本年度の初戦を勝利で飾った。

しばらくしてから、野球部長の飯田先生は選手一同を集めて、全国中等学校野球大会関東地区大会への出場をつたえた。開催場所は当時関東一円の球界に令名をうたわれていた茨城県立竜ヶ崎中学校の校庭である。選手一同は大喜び。夏合宿も終え、十分に練習を積んだ我々は、選手11名と金子、飯田の両先生引率の下に出発した。

一回戦は不戦勝。二回戦は栃木県下に覇をとっていた太田原中学校と対戦した。折しも、野山校長から激励の電報を受取る。しかし失策が多く、やらずもがなの点を与え、16-2で7回コールドゲ

ームを喫して、早々と涙をのんだ。メンバーは次のものである。

コーチ	増田先輩	
投手	平	川
捕手	長	又
一塁手	船	津
二塁手	新	井
三塁手	田	中
遊撃手	伊	藤
左翼手	浜	野
中堅手	大	河
右翼手	田	代
投手	水	村
右翼手	平	野

浦和高等学校主催 県下中等学校野球大会

秋には浦和高等学校主催の県下中等学校野球大会に出場。浦和中学校と対戦したが、10-0で5回コールドゲームの大敗を喫した。

十二階段と柵のこと



十二階段でくつろぐ部員

練習の度毎に、運動用具収納庫から運び出して固定する移動式ネットを使用していた。このネットの直ぐ後ろと横に、体操用具としての「十二階段」と「柵」とがあった。日中はほど良い日蔭をつく

ってくれて、練習中の選手たちにしばしの憩いの場を提供してくれた。この「十二階段」の最上段に上ると、投手の投球動作はもちろんのこと、各野手の動きが、手に取るように見えたものである。

1年を振り返って！

回顧すれば、本年度の前後7回の試合は、2勝4敗1ドロンゲームの成績に終わった。

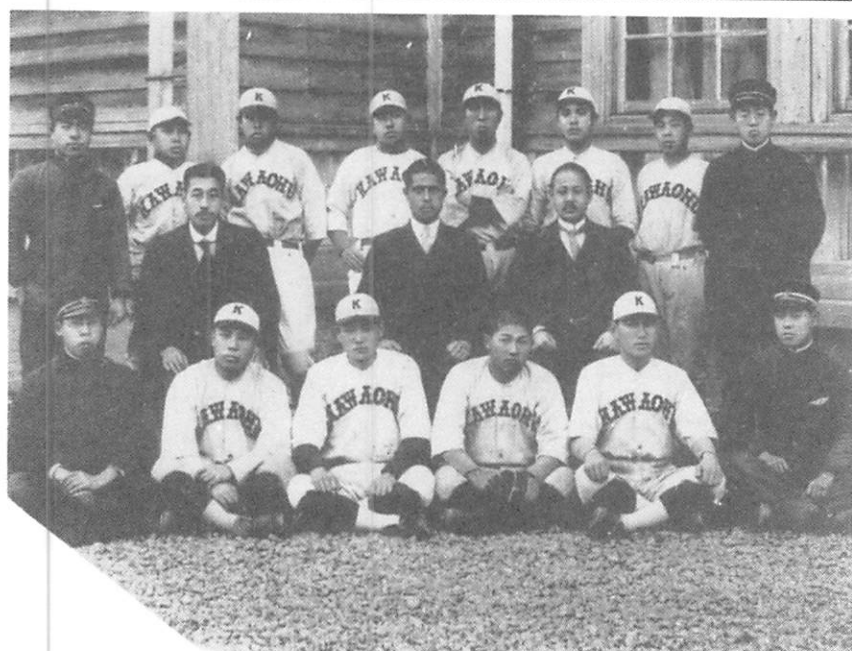
- ・〇月〇日 川中11-2 熊谷中学
- ・〇月〇日 川中0-8 埼玉学生誘役会 (ドロンゲーム)
- ・〇月〇日 川中14-5 飯能実業団 (7回コールド)
- ・〇月〇日 川中2-16 太田原中学
- ・〇月〇日 川中5-2 横浜高等工業
- ・〇月〇日 川中4-7 熊谷中学 (5回コールド)
- ・〇月〇日 川中0-10 浦和中学

技の未熟さをさらけ出し、芳しい成績ではなかったが、全国中等学校野球大会関東地区大会及び埼玉県中等学校野球大会の2大会に初めて出場して関東球界に進出したのは、本校野球部史に輝かしい1ページを飾ったのである。

本年度の陣容は次のとおり。

投手	平	川
捕手	長	又
一塁手	船	津
二塁手	田	中
三塁手	水	村
遊撃手	伊	藤
左翼手	浜	野
中堅手	大	河
右翼手	杉	田
投手	加	島
内野手	笹	田
外野手	田	代
外野手	新	井
内野手	岸	田

大正13年卒業 (旧中学22回)



新チームスタート

さきに平川投手、水村三塁手、田中二塁手を送って、我が野球部は大河原主将の下に新チームを組織し、猛練習をつみし結果選手の技倆大いに進み一大光明を点じたり。

投手	大河原・原 田
捕手	船 津
一塁手	石 田
二塁手	伊 藤
三塁手	内 田
遊撃手	岸 田
左翼手	浜 野
中堅手	杉 浦
右翼手	新 井
補 欠	栗 原・神 山

合宿夏季練習

8月17～30日夏季練習をなす。
遠方本校教室内に合宿す。

合宿の者は左の如し、大河原、内田、杉浦、船津、伊藤の5名。

新井選手は郷里北海道にありし為夏季練習に参加せざりしは遺憾なりき。選手炎熱も厭はずよく猛練習をなせり。24日には、東電選手、木下二塁手、平田三塁手、河野捕手を招聘し、細かき点に至る迄よくコーチを受け、為に技術大いに進歩し、他日名を揚ぐるの基を築けり。又マネージャー山崎麟三、島田勝郎、桂 雄鳳一日交代にてよく選手の世話をなせり。

練習試合

県下中等学校大会目指して

- ・ 4月22日 川中 3－3 航空倶楽部
- ・ 5月13日 川中 9－9 所沢実業団
- ・ 6月3日 川中 7－5 スター倶楽部
- ・ 9月30日 川中 11－10 所沢実業団

・ 10月14日

飯能実業団	0 1 0 0 0 0 0 0 1	2
川越中	0 0 0 0 0 0 0 0 0	0

県下実業野球団の覇者たる飯能実業団を迎え、浦高主催県下中等学校野球戦の準備として校庭にて戦う。選手よく奮闘せしも遂に利あらず敗れたり。

〈川越中〉

〈飯能実業団〉

6 岸 田	28打31	6 藤 田
4 伊 藤	0安5	2 渡 辺
1 大河原	16三6	7 間 野
2 船 津	1失2	8 関 口
7 杉 浦		1 入 子
8 内 田		5 大 矢
3 石 田		3 小 川
5 新 井		4 大 岩
9 原 田		9 小 峯

浦和高校主催

県下中等学校野球大会

浦高校庭は元気に満ちたる選手応援団にてうづめられたり。今年こそは吾れ優勝旗を得んものと選手の意気盛んなり。

・ 10月21日

深谷商	1 0 0 1 0 0 0	2
川越中	0 2 0 1 1 0 X	4

午後より試合開始。我が軍初めより優勢にして常に敵を圧迫し、遂に楽勝せり。

・ 10月28日 (第1次戦)

熊谷中	2 0 0 0 0 0 3	5
川越中	0 2 0 0 2 0 1	5

先年優勝し、先に不戦一勝し、今又浦中軍を11対4にて破りし熊中軍と決勝戦を行う。今度こそは、我が川中にと選手の意気はすさまじい。熊中の応援団は一塁側に陣取れば川中の応援団は三塁側に陣

取って盛んなる応援歌の中に熊中
先攻にて火蓋はきられたり。両軍
共に優勝せんと必死の戦。初め我
が軍常に優勢に出でし最後の五
分間にて5対5の同点となり日漸
く薄暮暗くなりたる為に審判ノー
ゲームを宣告せられたり。

〈川越中〉	〈熊谷中〉
5新井 28打30	6小池
4伊東 9安3	8山岸
9大河原 5三6	1井上
7浜野 5失8	2根岸
2船津	7宇野
6岸田	5橋本
1原田	3大塚
8杉浦	4清水
3石田	9大谷

《得点経過》

2回、川中船津右翼に安打を打
ちしもあまり出でしため二塁にて
刺され、岸田安打に出で、原田三
振後、杉浦一塁失にて出で、石田
の三塁の暴投のため岸田生還、新
井の安打にて杉浦また1点を占む、
伊藤の三塁竈にて刺さる。6回、
川中浜野の二塁打にて二者生還。
7回、川中軍必死となり伊藤中堅
安打に出で二塁失にて二塁を占め、
大河原安打に出でしも浜野三振、
船津左翼飛にて川中軍あやうく見
えしが岸田三塁線上の安打のため、
伊藤生還、大河原本塁にて刺さる。

・11月3日（第2次戦）

熊谷中	2 0 0 1 0 1 1 0 0	5
川越中	1 0 0 0 0 1 0 1 1	4

5対5にてノーゲームとなりし
熊中、川中は秋晴れの浦高校庭に
於て、この一戦にて、勝敗を決せ
んと、全校生徒の応援盛なりし。

結局は5対4にて敗れたりと雖も
最後までよく戦で川中魂を発揮せ
しことは選手の労を多とする所な
り。

〈川越中〉	〈熊谷中〉
5新井 27打30	6小池
1・9・3大河原 2安2	1井上
6岸田 8三8	5橋本
4伊藤 11失9	2根岸
7浜野	7宇野
2船津	4森川
9・1・9内田	3大塚
8杉浦	9大谷
3石田	8山岸
1原田	

《得点経過》

1回、川中新井三振、大河原遊
撃右の三塁打を打ち岸田の犠打に
て生還、伊藤の三塁にて止む。6
回、川中新井三塁後より次第に川
中軍活躍し、大河原遊失に出で得
意の盗塁をもって一挙三塁を取り、
岸田の遊失にて生還。伊藤の三振
にて止む。8回、このあたりより
川中軍必死となり、二死後またま
大河原遊失に出で、二盗、三盗
し三塁に至り、岸田の遊失にて導
き1点を占む。伊藤の三振にて止
む。9回、川中浜野右失に出で盗
塁し船津も二塁失に出で二死後原
田一塁越安打に出で浜野まず生還
し新井四球に出で満塁となり大河
原打者となるや、観衆熱狂し応援
団声をからしてつとめしが、大河
原の遊竈にて原田三塁に刺され、
惜いかな終る。

松山中対川中1・2年生

今年開校の松山中学を我が校庭

に迎え、一・二年生組と試合を行
う。松中は初めての試合。加うる
にルールを知らず、投手の如きは
しばしばボークせしため、結局12
対2にて川中大勝せり。

〈川越中〉	〈松山中〉
1原田 27打13	3小岩
9大久保 12得2	7新井
8須田 6三7	6長井
6岸田 3安1	2戸井田
2田中 4失9	4福田
3小沢	5根岸
4小高	8山口
7沢部	9関根
5石川	1高橋

《学年試合秋季野球大会》

- ・11月14日 1年 3－5 2年
- ・11月15日 2年 0－6 3年
- ・11月16日 3年 4－7 4年
- ・11月17日 4年 5－6 5年

小林晋介コーチのこと

11月22・23日前熊中専任コーチ
小林晋助氏が先に開催されたる浦
高野球戦に於て我が野球部の他に
優れたを見て、特に興味を持た
れ、又一は野球界発展の為、よき
チームを作らんと欲して出張せら
れ労力を厭はず親切にコーチせら
れたり。

- ・11月18日 川中3－10^{埼玉学芸} 埼玉学芸
- ・11月23日 川中5－11卒業生

1年を振り返って！

第1学期は一般に選手の技倆を
磨き、2学期の活舞台に乗出す準
備にそなえたり。また夏の合宿練
習効を奏し、関東球界に一大成績
をあげたり。これをもって本年度
の野球史を閉ず。

大正14年卒業 (旧中学23回)



新チームスタート 結束愈々固く…!

昨年の大会には、県下斯界の権威と自他共に許した熊中軍に肉薄して、一時彼の心胆を寒からしめた我が部は大河原、内田、杉浦、新井の四者を送り出したとは言え、船津を主将として結束愈々固く秘かに今年の秋を期待して戦備をさをさ怠りなかった。メンバー下記の通り決定した。

投手	原田
捕手	船津
一塁手	杉田
二塁手	伊藤
三塁手	浅見
遊撃手	岸田
左翼手	神山
中堅手	栗原
右翼手	北野

東電鳳凰倶楽部と木下コーチ

先に卒業生四名及び浜野、石田両君を失って戦略上多大の蹉跌を来した我がチームは今また投手原田君を失った為に新チームは根本的に改革され、選手部署に大異動を来した。それ故今迄積んで来たチームとしての練習は無になり前途は頗る多事多難となった。折から先輩水村君の斡旋で木下明氏のコーチを受ける事が出来た。氏は旁ら関係して居られる東電の鳳凰クラブを紹介。6月29日対戦。

東電	0 0 1 0 0 3 1 2 4	11
川越中	0 0 0 2 0 0 0 0 0	2

・5月15日

川越中学 7-14 K 倶 楽 部

・6月1日

川越中学 3-5 美好野倶楽部

第3回浦和高校主催 県下中等学校野球大会

9月23日、待ちに待った時は来た。腕を揮う時は来た。21日は雨に崇られたが今日は天高く気澄んで絶好の試合日和であった。

幸か不幸か、劈頭去年の接戦未だ記憶に新たなる熊中と対した。敵も味方も互に不安だ。実力上優勝戦とも見るべき今日の試合を見んとファン連は早くより詰めかける。勇み立った選手を中に熱誠なる応援の健児は1塁側に詰めた。やがて両軍の整備した応援裡に本校先攻にて開始。時正に午前九時。球審遊佐、塁審岸。

川越中	1 2 0 0 0 0 2	5
熊谷中	0 0 0 2 0 4 X	6

1回、川中、杉田捕失に出で盗塁後木村の安打に三塁に達し岸田のバントに生還。2回、川中神山中堅安打に出で栗原、船津三振後、杉田の二塁打に神山生還、木村の安打に杉田生還。4回、熊中大塚四球に出で、高橋の右翼越二塁打に三塁に達し、小林木村の犠打に生還。6回、熊中掛飛、大塚四球に出で高橋の中堅越二塁打に二者生還、小林遊撃捕に出で木村、清水の犠打に二者生還。7回、川中最後の攻撃、船津、杉田四球に出で木村三振岸田の犠打に三塁、二塁に走る。伊藤の投捕に投手暴投して二者生還。偶々伊藤二塁に刺され万事休す。

嗚呼無念の至りなる哉。又もや6A-5の接戦に敗る。最後まで頑張り2点を得。木下、平田両氏来場に感謝。

炎熱ノ夏季猛練習

8月16日より31日迄夏季練習を行った。炎熱を冒しての猛練習、かくて主将を中心にナインの心は一つとなり、以て他日の雄飛を期した。16・17両日木下、河野両氏の指導を受けた。合宿者は船津、伊藤、杉田、浅見、北野。

対東電鳳凰倶楽部

名捕手香取君顔色なしノ

9月10日、東電鳳凰倶楽部は再び遠征して来た。猛練習の結果面目を一新した我がチームは、潔く之を迎えて一戦した。我軍初回より優勢で常に敵を押し、快勝。

・9月10日

2年生 3-8 1年生

美好野クラブ主催

第1回県下少年野球大会

参加校 本校第二チーム、飯能、美成、桶川、旭、東金子、日東、中山、志木、高坂の各小学校。

・優勝戦 10月19日

飯能小	0	1	0	0	0	3	4
川中(第2)	2	4	0	0	1	X	7A

1回、川中遊撃失に出で、大久保四球に出で、二盗後捕手の失に栗原生還。中里三振、木村捕飛後鈴木木右翼安打に大久保生還。2回、川中平岡の二塁捕飛後三宅、北野四球に出でし後栗原の本塁打に一挙3点を得。大久保の捕飛後中里の垣越三塁打の後木村の三塁薙に中里生還。6回、川中平岡三塁暴投に出で二盗後捕手失に三塁に達し、三宅の特打に生還。栄えある優勝旗は木村主将の手に渡される。

〈川越中第2のメンバー〉

捕手	田中
投手	栗原(源)
一塁手	三宅
二塁手	中里
三塁手	鈴木
遊撃手	木村
左翼手	北野
中堅手	平岡
右翼手	大久保

・10月11日

川越中学 11-9 Kクラブ

・11月2日

川越中学 2-2 松山中学
雨のためにノーゲームとなる。

川越中学主催

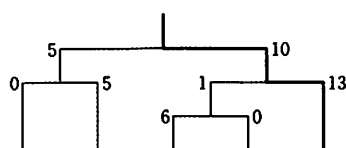
第1回市内野球大会

11月16・23日我が野球部の主催で、帝国電燈株式会社川越支社、明文堂、綾部運動具の後援にて市内野球大会を開く。この日帝電より優勝旗を寄贈せられたり。

参加チーム 本校第一チーム、本校第二チーム、美好野倶楽部、石川製絲倶楽部、スター倶楽部。

・優勝戦 11月23日

敵は1学期に5-3で破られた美好野、かくて我軍初めより優勢、10-5と大勝する。歓喜に満つる応援団に擁せられつつ優勝旗は我が主将の手に…。



本校第二チーム	美好野倶楽部	スター倶楽部	石川製絲倶楽部	本校第一チーム
---------	--------	--------	---------	---------

今年度の野球史

1年を振り返ってノ

かくして浦高の大会には再び惜敗したが、先に少年野球大会に今又市内野球大会に、優勝旗を獲て好成績を挙げることが出来た。

あ、一学期には前途甚だ暗澹たり我が野球部が僅か数ヶ月ならずして、斯の如き好成績を収め得たのは部長の御指導宜しきと、選手の一致協力の精神と、不撓不屈寒暑怠りない猛練習とによらずばなるまい。今年度の野球史こそ「精神一到何事か成らざらん」の金言を具体化して示したものと言うも過言ではあるまい。ここに本年度野球史を閉ず。

野 球 応 援 歌

(その一)

1. 初雁城址の春秋を
臥薪当胆技を練り
光栄かたく心に誓い
勇み立ちたるわが選手。
2. 勝敗わかるる暗の場所
熱球猛打も何のその
ナインの意気を示すは今ぞ
振れ野球の健男子。

(その二)

1. 猛球土をかねてとび
熱球高く雲に入る
行方追へども力なく
敵陣乱るるそのひまに
一塁二塁奪いつつ
進む味方の頼もしや。
2. 空蒼茫と夕されば
戦いつかをさまりて
記録入日にあざやかに
栄ある勝を語る時
紫匂う応援旗
かざす我等の心地よや。

(その三)

1. 大空高く気は澄みて
争覇の戦開かれぬ
血汐は胸にあふれつつ
壮なるかなわが選手。
2. 運命決する此の一挙
力の限りたたかいて
最後の勝利を手に収め
かちどきあげん諸共に。

大正15年卒業 (旧中学24回)



写真左より 平岡(恵)・田中(信)・大久保・田中(孝)・杉田
木村・船津・岸田・中西・北野・中里
大正15年2月15日撮影 (浅見欠席)

新鋭揃う!

新チームスタート

投手船津、遊撃手伊藤の中心選手が卒業した穴を如何に埋めるかが問題であったが、投手は田中孝作の新鋭を揚げ、杉田主将を軸にして一応の体制を整えることができました。

夏季練習

9月大会を目指して!

当時全国中学校野球大会は、等各県別代表ではなく、地区ブロック別で、埼玉県は、群馬、栃木、茨城の三県と共に、北関東大会に参加することになっていましたが、埼玉勢は、野球先進県の群馬、栃木等とは段違いでありましたので、同大会への出場は見合せて、毎年

9月に行なわれる浦和高等学校主催の県下中等学校野球大会を目標にして集中練習をすることとしました。

8月夏休みと同時に、寄宿舎の一室を借りまして夏季練習が開始されました。

この時、投手力増強のため、五年生船津準之助(前年度主将船津頼吉の弟)が新に加入することになりました。

夏季練習中に、当時東京電気会社(後の東芝)に勤めておられた第6回卒業生喜多義之さんの御斡旋による東京電気(マツダ)野球部選手、木下、平田の両氏がコーチに來れることになりました。両氏からは、技術だけでなく、ルールの研究等についても指導をして戴きました。

浦和高校主催

県下中等学校野球大会

当時浦和高等学校主催の県下中等学校野球大会は、県下の野球試合の華と言われたもので、参加校は少なかったが各校とも全校的な応援団を組織して最も力を入れた年中行事でした。熊谷中学などは熊谷から浦和までの特別臨時列車を仕立てて、旗、幟、太鼓をにかけて球場へ乗り込んで来る有様でした。

組合せ抽籤は9月21日行なわれ、当校は23日9時半より浦和中学と対戦することになりました。なお一回戦は7回ゲームときめられていました。

当日は秋晴れの野球日和で両校大応援団の応援歌と声援の飛びかう中で、川中先攻で開始されました。

戦績は下記のとおりで接戦の末6対5で敗れ第一回戦で敗退し涙をのみました。

なお、さきにスライディング練習で負傷した捕手杉田主将が欠場したことが攻撃面で大きなマイナスとなり敗戦の結果を見たとも言えましょう。

・当日のメンバー

〈川越中〉	打安点	(学年)
1 船津鴻之助	4 1 0	5年
2 北野 英男	4 0 1	2年
3 浅見 梅一	2 2 1	5年
4 大久保文衛	3 0 0	3年
5 木村 逸平	3 0 0	5年
6 岸田勝太郎	4 4 3	4年
7 田中 孝作	3 0 0	3年
8 中西 正武	1 0 0	5年
9 平岡忠次郎	2 1 0	2年

戦いのあと

●東京玉澤商会戦

4月19日市内南町の明文堂運道具店の紹介により、東京玉澤商会を迎えて、初試合を行いました。玉澤商会は当時屈指の強剛実業団で、指導して貰うかたちでした。結果は川中6-27玉澤でした。

- ・5月10日 川中18-5卒業生
- ・8月28日 川中20-2東倶楽部

●K倶楽部戦

K倶楽部は、増田信干、本橋九蔵、水村潤一の諸氏が中心となって結成した当校卒業生のクラブで、各々の大学等へ通学していた関係上、あまり全員で練習は出来ないのですが、なかなかまとまりがあって、後輩の指導に大いに役立ったと思われます。

- ・8月29日 川中16-2K倶楽部

●東京電気(後の東芝)戦

第6回卒業生喜多義之氏の御尽力により、東京品川区大井にある東京電気大井工場グラウンドに遠征して、大井工場チーム及び東京電気チームと対戦することとなりました。ダブルヘッダーで、大井工場チーム、東京電気チームの順に対戦することとなりました。

いづれも、当時在京の実業団チームとして強さを誇っていたのですから、戦績は次のとおりでした。

川中1-8東京電気大井工場

川中2-12東京電気(マツダ)

●成城中学戦

手塚兄弟の御好意により9月19日成城中学チームを迎えて、本校グラウンド試合。

川中3-9成城中

●東京歯科医専戦

第21回卒業生大塚久氏(当時東京歯科医専学生)の紹介により、同校チームを迎えて戦いました。

川中 安打5 得点1

東齒 安打5 得点6

対戦相手は専門学校チームで而も当時全盛時代の同チームを迎えて善戦と言えましょう。

特に投手船津の手もとでホップするシュートに手を焼いて、安打数は同数に喰いとめたことが印象的でした。

●浦高大会後の状況

浦高大会が終ると、年度の主なるスケジュールは終了したことになり、新チームのメンバーも確立しないままではあったが、11月末までの間に次の試合が行なわれました。

- ・11月8日 川中14-3松山中
- ・11月15日 川中30-4K倶楽部
- ・11月22日 川中4-8飯能実業団

私たちのメンバー

氏名	学年	ポジション
船津鴻之助	5年	投手
杉田 正治	5年	捕手
浅見 梅一	5年	一塁手
中西 正武	5年	二塁手
木村 逸平	5年	三塁手
岸田勝太郎	4年	遊撃手
田中 孝作	3年	左翼手
田中 信雄	3年	右翼手
大久保文衛	3年	中堅手
北野 英男	2年	(補)捕手
平岡忠次郎	2年	(補)二塁手
中里 治夫	2年	(補)三塁手
部長 飯田 亮		
監督 水村 潤一		

人・出来事・思い出

▼ターどんのこと

当時野球用具は、市内南町の明文堂運動具部を通じて購入していましたが、同店の番頭さんで岡田多郎君という人が、商売を離れて毎日のようにグラウンドにやって来て、ラインを引いたり水を運んだり、ファールボールを拾ったりしてくれまして、まことに重宝でした。お店でターどんと呼ばれていましたので、みんながターどん、ターどんと親しんでいた次第で、川中野球を支えた功労者の一人と言ってよいと思います。

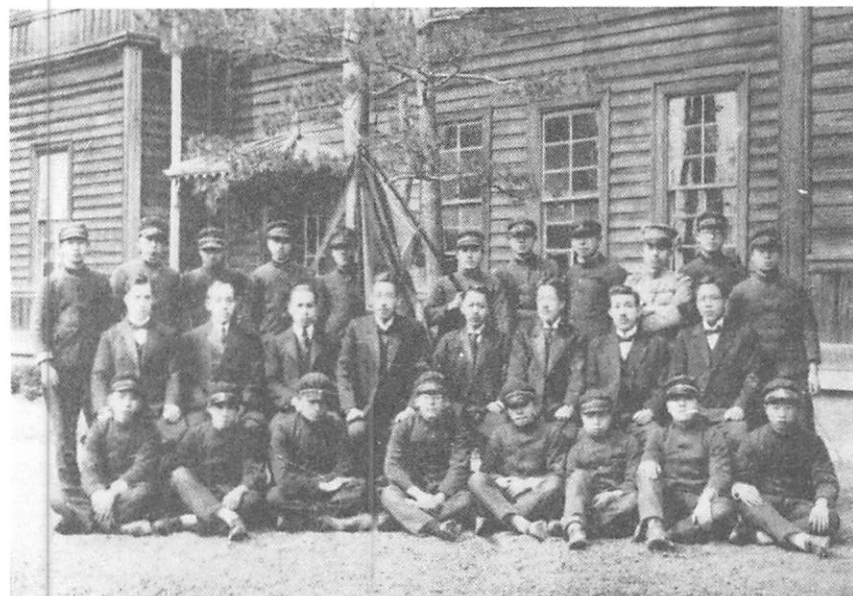
▼水村潤一さんのこと

水村潤一さんは、卒業後早稲田大学に入学し、川越の自宅から通学しておられましたが、格別の用事がないかぎり毎日大学の講義が終了後グラウンドに駆けつけて、コーチを兼ねて、いろいろ面倒を見て戴きまして、部員一同の崇敬のままとでした。川中野球部を支えた功労者の一人と言えましょう。

▼杉田主将の負傷

8月30日、スライディング練習中、杉田主将右足首捻挫のため負傷し、その後の快復がはかばかしくなく、チームの中心を欠いたことは、その後のすべての試合に大きな影響を及ぼし、念願の浦高大会優勝ができなかった原因となったのです。早速2年生の北野英男君が捕手となり、同君の機敏な捕手ぶりが、これを補うこととなったのです。

昭和2年卒業 (旧中学25回)



朝日新聞社主催 北 関 東 大 会

大正11年龍ヶ崎の大会以来絶へて出場しなかった本校は、本年再び遠大な希望を以て宇都宮に向う。

・2回戦(8月2日)

川越中	00000010303	7
栃木中	00130000000	4

栃中は優勝候補の随一に数えられ、殊に投手関口は当大会一流という前評判であり、当初全く手も足も出し得ず敗色濃厚であったが、7回中里の本大会初の大ホームランを放ちてより追々と当り出し、延長戦にてさしもの難敵栃中を7対4と降した。

・3回戦(8月3日)

宇都宮中	200010200	5
川越中	100000000	1

嘗て栃中にも破れた宇中何事かあらんと元気百倍して戦ったが如何とも前日の疲労は脱し切れず健斗及ばず遂に5対1にて涙を飲む。全関東に覇を称えんとする雄図、はかなくも消えて悄然と引上げた。言うも愚かな事ながらも一人投手があったならと思われた。有力な投手の控えがあるチームは底力がある。

《附 記》

本県の常勝熊中は第一回戦でもろくも敗れたが、新進埼商第三回戦まで残り高崎中学と善戦して本校と共に名声を挙げた。そして前橋中学が昨年に続いて優勝し、甲子園に於ても準々決勝戦で静岡中学と延長19回6対5の野球史上に残る健斗をしたのである。

明大岡田監督の コーチと練習試合

6月23日小室氏の尽力にて岡田監督の特別来校実現し、三日間に渉り、午前中は一般理論、ルールと大会出場心得等を微細にお話しになる。午後は共に運動場に出てピッチング、バッティングに或はフィールドイングに猛烈なコーチをしていただいた。大会出場を前に実際にも理論上にも大変力になったと思う。

- ・4月11日 川中11-10富士印刷
- ・5月2日 川中13-11K倶楽部
- ・5月29日 川中27-6埼玉師範
- ・6月3日 川中9-8飯能実業団
- ・6月10日 川中4-4飯能実業団
- ・6月13日 川中7-8三省堂
- ・6月20日 川中5-9三省堂
- ・6月27日 川中3-12浦和高校
- ・6月28日 川中15-10明治大学
- ・7月28日 川中3-11飯能実業団
- ・8月22日 川中3-13マツダランブ
- ・8月22日 川中8-7皐月倶楽部
- ・8月27日 川中5-7飯能実業団
- ・8月29日 川中7-6横浜商工
- ・8月30日 川中9-14神奈川一中
- ・9月5日 川中4-8大成中学
- ・9月11日 川中10-1松山中学
- ・9月12日 川中16-3成城中学
- ・9月12日 川中8-7大宮鉄道

川中主催市内実業団 野球大会(11月14・21日)

- ・東電川越8-3石川工場
 - ・川中職員(1)12-9鶴川座
 - ・東電川越19-9川中職員(2)
- 決勝戦
- ・川中職員(1)24-6東電川越

第5回浦和高校主催 県下中等学校野球大会

待ちに待った日が来た。

試合に勝つには試合馴れし所謂上らない事が大切な要件となつて居る。川中が数年来敗れたのも此の為ではなからうか？そこで本年は東に西に北に南に数多くの試合を行い、今大会の復讐に備へたのだ。その日が来たのだ。我等の血は躍った。決死の覚悟で出場した。

・第1回戦（9月21日）

川 越 中	7 0 10 4 2	23
埼玉師範	2 0 0 1 0	3

・第2回戦（9月24日）

埼玉商	0 1 0 0 0 1 0 0 0	2
川越中	0 0 0 0 4 1 0 0 X	5

埼玉商は数年来不動の選手許りで殊に左投手関口は県下第一と称せらるる剛の者、今年に入って熊中を2回も破って居り、その熊中の敗退せし後としてこの優勝候補同志の対戦は事実上の決勝と言われた。川中は一塁側に埼玉商は三塁側に陣取りその応援は耳を聳せん許り、戦の進むにつれて益々熱狂して行った。そして5回中里の大三塁打が直接の勝因となって遂にこの大敵を仕止めた。

選手の大半を五年に持つ為今年こそはの意気物凄かった埼玉商軍が応援団に慰さめられながらすごす

1年を顧みるに！

顧みれば本年の野球部も多事多難であった。新学期早々より試合の数を重ね、久し振りに関東大会に出場したとへ敗れたりとは言え万丈の気を吐き、永年の希望かな

ごとと退く様を見ては、去年迄の我が身の事が思い出されて感慨無量であった。一方もう優勝した様に喜んだ我々は応援団の歓呼の中雄姿颯爽と引上げた。この試合で大久保投手二安打に封じ込む快投であった。

・決勝戦（10月3日）

浦和中	0 0 0 0 0 2 5 2	9
川越中	1 6 0 0 0 1 2 0 X	10

此戦を前に明大の岡田監督が急しい中を一日コーチして下さった秋晴れの絶好の野球日和10月3日。愈々当日となった。復讐に燃え優勝を目指す選手は衝天の意気を持って静かに馬を進めた。川中は三塁側に浦中は一塁側に各応援旗を樹て、結束しての応援は益々猛烈に、観衆も外野に迄一杯に押詰り此一戦にと興奮の眼を注ぐ。

2回、島田三匍失石川四球に続き平岡の三匍は野選となりて無死満塁、北野巧に四球を選んで島田押出し中里の左前安打に石川も還り平岡本塁を欲張って刺されたが大久保のバントを投手暴投して北野、中里生還。岸田二匍後田中三塁左に二塁打して大久保を迎え安田の遊匍失に田中も還る。浦中の陣全く乱れ打順一周島田の投匍に終ったが一挙6点を奪取して勝敗既に決した形勢である。

7回、田中三匍安田遊匍失島田って浦高大会に初優勝し、県下中等学校の覇を握った我等の喜び之に越した事はない。最初に勝ち大会に勝ち最後に勝って37勝12敗1分の戦績であった。嗚呼華々しい哉！選手もよく戦ったがそれと共に忘れてはならないのは先輩水村

の遊匍に封殺されたが石川に代る田中(信)二遊間安打平岡遊匍失で二死満塁となるや浦中バッテリー急って牽制球高投し島田、田中(信)生還北野四球中里三振。ところが好事魔多し突然大久保投手コントロール全く乱れ如何ともしがたし。10対9にて危く勝つ。

この瞬間！！我が応援団の歓声はどっと揚り続いて「空蒼茫と……」の勝利の歌が初めて実感を伴って響いて来る。“御目出度う”の声は四方に聞える。選手は唯茫然としてこみ上げて来る快い勝利感に浸って居た。その中に我等が四年間血を流して争った紫紺の優勝旗が授与された。最高の日、大正15年10月3日！！我々は勝ったのだ優勝したのだ！！完全に復讐は遂げられたのだ！！この喜びが大きいだけに全校否全市の応援が一層有難くもあり尊くも感ぜられる。

〈川越中〉打安点	〈浦和中〉打安点
2北 野 2 2 3	9金 子 5 1 0
5中 里 5 2 1	7小 谷 野 4 0 2
131大久保 5 0 1	6小 高 2 1 2
6岸 田 5 1 0	2高 橋 4 1 2
313田中孝 5 1 1	3柿 山 3 0 2
7安 田 5 0 0	1笹 口 3 0 1
4島 田 5 0 2	5山 崎 4 2 0
9石 川 2 0 1	4針ヶ谷 4 1 0
9田中信 1 1 1	8田 中 3 0 0
8平 岡 4 1 0	
計 39 8 10	計 32 6 9

(潤)氏の絶えざる努力である。母校を思い忙がしい学業の余暇をさいて熱心にコーチして下さった事は、この立派な成績に対して如何ばかり与って力があつたかと思うと……挙って御礼申し上げねばならない。

昭和3年卒業（旧中学26回）



校長 岩泉善太郎
部長 飯田 亮
顧問 保泉 海実
監督 水村 潤一

選手氏名	学年	ポジション
大久保文衛	5	投手
田中 信雄	5	〃
北野 英男	4	捕手
田中 孝作	5	一塁手
都築 末雄	3	二塁手
小高総一郎	5	三塁手
山本 三郎	2	遊撃手
小沢 賢治	4	左翼手
平岡忠次郎	4	中堅手
武田 迪男	5	右翼手

県下初制覇—大久保投手を語る

旧制27回 平岡 忠次郎

旧制浦高主催の県下中等野球大会は、大正15年(1925年)、この年も出場校8校丁々発止の末勝残った浦和中学と気鋭の川越中学である。川中はこの夏朝日の北関東大会での大奮戦の余勢を駆って、虎視眈眈、この敵を打倒せずんば止まじの意気に燃える。巧緻を秘めた充実の気鋭である。

この戦は結局10対9の大接戦で好投手大久保文衛を擁する川中の制する所となった。紫紺の大優勝旗を手中に収め得たのである。燦然たる勝利、それはそれとして、体得の一大教訓は、超軟投の頭脳のフェイント投法が、強力なチームを喰う武器となり得たという、大久保による揺ぎなき実証である。

大久保文衛は、県西に於ける実業団のメッカとも言うべき飯能市（旧飯能町高麗横丁）に、1910年

に生れた。平岡は一年後に隣村で生まれ、彼との交友は地縁的にも繁き部類に属する。飯能実業団主催の少年野球大会に小学5年生で投手として出場し、一勝を挙げたことを覚えているが、飯能小学校の当時のチームに大久保の名は無かったと思う。

大久保文衛は川越中学4年で真価を完全に発揮した遅咲きの名花である。男性で名花とは少しくそぐわないが、彼の名の音読がフミエだから、よしとして頂こう。しかも彼は男性的豪球投手とは程遠い、時速140キロ＝秒速40メートル、投手・捕手のプレート間を2分の1秒程で突走るのであるが、大久保の球速の遅さ加減は、腰だめに推測すれば、優に8倍はかかったであろうから4秒程度、この超スローボールを基軸ボールと

して、カーブの併用、時としては逆モーションの投法等で敵打者を心理的にはぐらかすことが彼の絶妙な投法。速球と軟球との相互コンビネーションというが如き真つような代物でなく、超軟球と超軟球の時間差フェイント投法が、前人未踏とも言うべき彼のもつ特技であった。ゴルフで言えば、はやる打棒の待ちチョロを、意識的に造り出す心理学的攻勢だ。遅い球を自在に操った頭脳の投手、これが大久保文衛である。

この稿の結びは、川越中の名応援歌「空蒼茫と夕されば……」たるべきだと思う。筆者等川越野球史上のオールドボーイズが、今をさる63年前、埼玉県下初制覇の宵に歌った勝利の歌を声高らかに唄おうではないが！今は無き大久保文衛投手へ捧げる讃歌として。

県下の覇を握った日——大正15年10月 3 日

大正15年10月3日—どうして此の日が忘れようか、その日こそ我等が栄ある県下の覇を握った日ではないか。涙に濡れた一昨年迄の戦績をしのびこの優勝を思う時に、言わずと知れた固い決心が各選手の胸中に湧いたのである。

- ・ 4月4日（4回終了雨でノーゲーム）

川越中学 5—8 目白中学

大正天皇百日祭も4月3日を以て終りこの日華々しく試合の蓋明けをしたが我が軍8対5に押したるまま、雨の為無勝負となる。

四番打者中里が、己むを得ざる事情で残念にも脱部となり、陣容全く乱れてどうなるか分からなくなってしまった。

- ・ 5月29日

川越中学 3—6 大宮鉄道工場

- ・ 6月4日

川越中学 7—11 松山中学

- ・ 6月19日（時間切れ）

川越中学 8—12 安藤運動具店

- ・ 6月19日

川越中学 4—17 早大常盤倶楽部

本校先輩杉田氏のチームと戦う。実力の差は如何ともなし難く毎回得点を許し大敗す。

かく敗戦のみを重ねているのは、一に陣容の整わない為である。そこで平岡選手の復活せるを加え、明大野球部六大学随一の名投手中村(峯)コーチの来校を期として新に陣容を立て直ししっかりした練習に精進することとした。

明大中村(峰)選手のコーチ

6月23日～25日良きコーチを頼んでやらねばならないと又先輩小室氏に依頼し中村(峰)選手を得て、バッティングの注意や猛烈なノックに我等の基本的技術を練磨され、或は一般理論・ルールの研究に立入って得る所が多かった。皆して停車場までお送りした。

- ・ 7月2日

川越中学 1—11 東京歯科医学専門

明大銭村選手のコーチ

7月3日～6日今度は主に細い所のコーチを受け、殊に走塁（スライディング）には得る所多大であった。厚く謝したのであった。

夏季練習(前期)

中村、銭村両氏より二回のコーチを受けて、元気のなかった各選手は再び元気を盛り返へし、関東大会を前に火の出る様な練習を重ね、試験終了後直ちに夏季練習に入る。合宿せるもの田中(孝)、大久保、田中(信)、北野、平岡の五名。練習は益々猛烈になる。今年は関東大会は浦高球場に於て行われる事となったので、場所馴れ、（実際浦高球場は場所に馴れる事が必要だ）の為、22—23の両日浦高に出向いて練習する。焼くが如

き炎熱を物ともせず奮斗する選手の姿は、何とも形容し難いものであった。

朝日新聞社主催北関東大会

埼玉、群馬、栃木三県下の覇を決定すべき北関東大会は、七月28日より一週間の予定で、浦高球場に開かれる事となった。

昨年久し振りで宇都宮での大会に出場して、優勝候補栃中を7—4のスコアで破り、次いで準々決勝には宇中と5—1のゲームを演じてファンの目を驚ろかし、「大会の慧星」と迄呼ばれた本校は、今年こそはの意気物凄く再び出場する事となった。

- ・ 7月28日（一回戦）

川越中学 14—1 不動岡中学

（5回コールドゲーム）

- ・ 7月30日（二回戦）

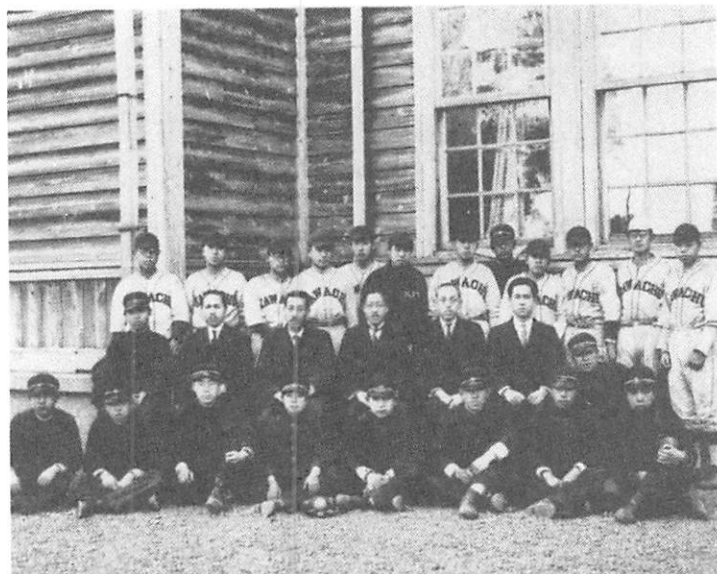
川越中学 2—10 前橋中学

川越中	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2
前橋中	4	2	0	2	0	1	0	1	X	10

この試合で大久保投手腕くも崩れ12本の安打を許して敗退す。

北関東大会終了後の記録全然無く、四方八方に手を廻せども何等の手掛りも無いため止むを得ず秋季恒例の浦高主催県下中等野球大会決勝戦で球敵熊中を、5対4で遂に昨年に続き2回目の優勝を遂げた。——この年の銭村コーチの来校でスライディングパンツ（簡単なもの）を着用し、果敢なスライディングで相手チームを圧倒した。

昭和4年卒業 (旧中学27回)



後列左より 水村・都築・中里・北野・熊谷・平岡・小沢・横山・
谷口・高橋・内田・山本

中列左より 栗原・保泉・飯田・松岡・高野・川田・竹沢

前列左より 久米原・綿貫・森山・本橋・(不明)・山畠・奥富・山崎

打続く1点の負癖を勝癖に変じて、既に一昨年、昨年と2年間浦高に於て連勝の栄を獲得した後を受け、田中(孝)、大久保、田中(信)、小高を送って優勝の直後に組織した今年度チームは、益々元気に寒風身を切る中にもグラウンドのよい時は欠かさず練習を続け、腕前はぐんぐんと伸びる一方、更に新進の進境殊に目覚しく、試験休みに入るや早々猛練習を開始す。

- ・4月15日 川中10-8 所沢飛行場
- ・4月29日 川中14-5 埼玉商業
- ・5月6日 川中17-7 全川越
- ・5月26日 川中14-1 松山中学
- ・5月28日 川中4-7 常盤倶楽部

川越体育協会主催選抜野球

- ・6月3日 川中1-7 桐生中学

市内の好球家小林氏等の新に組織せる体育後援会主催にて、北関東の覇者桐中を招待して、選抜野球戦を行う。

- ・6月9日 川中9-0 埼玉師範
- ・6月10日 川中7-9 飯能実業団(1)
- ・6月13日 川中2-3 立教倶楽部

明大中村(峰)選手のコーチ

6月15日~21日昨年に引続き中村選手をコーチとして迎へ、一週間の間雨天の日が多かったにも拘らず毎日グラウンドに出てバッティング、ノックと厳しい指導を受け、さてはサイン等に至る迄懇切なコーチを受けた。

- ・6月24日 川中8-5 熊谷中学
- ・7月1日 川中4-3 大島倶楽部
- ・7月8日 川中18-1 国際通運

- ・7月10日 川中0-11 立教予科
東長崎立大グラウンドにて対戦予科チームといっても殆ど本選手。

明大小林選手のコーチ

7月13日~21日大会も迫った事として主に細かい技術のコーチを受けた。懇切丁寧で誠に有益であった。その上対早実戦にはベンチコーチ迄して下さった。

- ・7月19日 川中1-3 早稲田実業
中里の左翼越えの本塁打の一点のみ。

- ・7月22日 川中3-2 飯能実業団(2)

校長 岩泉 善太郎

部長 飯田 亮

選手氏名	学年	ポジション
高橋 寛	2	投手
熊谷 幸夫	2	〃
北野 英男	5	捕手
水村 圭介	4	一塁手
都築 末雄	4	二塁手
中里 治夫	5	三塁手
山本 三郎	3	遊撃手
小沢 賢治	5	左翼手
平岡忠次郎	5	中堅手
竹内	2	右翼手

朝日新聞社主催 北関東野球大会

7月26日より前橋中学グラウンドで開催。住吉旅館に投宿す。

- ・7月26日 川中12-7 栃木中学
- ・7月29日 川中1-3 高崎中学

明大の小林選手がわざわざ松本より来て、ベンチコーチャーとして秘謀を尽され、最初の3点を取返し得ず無念の涙を呑む。

9回2点をリードされて最後の攻撃に入る。竹内二匁後北野中前安打、中里第二球目を見事に左翼越えの三塁打し、北野勇躍本塁に入り中里は三塁に進む。然るに小森球審は実地調査もせずに高中側の言い分のみを容れて急にファールボールを主張して譲らず。私はここに断言します。中里の打った球は確かに線内に落ちました。然し既に試合終ってからの事故、何んともなりません。私は権威あるべき審判小森氏のあの不公平な宣告を惜しまず憎みます。あの場合直ちに棄権すべきであったかも知れません。が我々は唯大会の光輝名譽の為に、最後まで試合を進めたのである。

昭和3年7月29日午後、前中グラウンドは怒号につつまれ、大混乱した。当時、川中の遊撃手だった山本さんは今もこの試合の光景を昨日のここのように思い出す。

当時のグラウンドはフェンス、左右両翼のボールもなく、外野に引いた白線をダイレクトで越えたと三塁打という取り決めでした。走者二塁にいて打者は強打者の四番中里治夫さん(故人)。打球はグン

グン伸び、外野の白線を越えた。「やった！三塁打だ」。ベンチも応援団も一斉に飛び上ったとたん、球審がファールの宣告。みんな殺気立ち、応援団がグラウンドになだれ込み、球審をボールの落ちたところまで引っぱってゆき大騒ぎになった。実はこの審判、一回戦でもミスジャッジをしたと山本さんという。

走者を1・2塁間ではさみ、私がゴツンと頭にタッチしたのにセーフ。タッチされた走者が「痛えッ」といったのが今も耳にこびりついています。

(50.6.11 朝日新聞“審判神聖”掲載)

- ・8月26日 川中7-1 飯能実業団
- ・8月28日 川中12-5 K倶楽部
- ・8月31日 川中22-3 東電川越

桐生野球後援会主催 北関東選抜大会

9月2日桐中固定ネット改築記念として開催。宇都宮商業・高崎商業・富岡中学・前橋商業招待される。

- ・9月2日 川中10-9 前橋商業
- ・9月9日 川中3-7 飯能実業団(4)

浦高主催 県下中等野球大会

- ・9月6日 川中9-15熊谷中学
- ・9月30日 川中7-8三省堂
- ・10月27日 川中 〃 常盤倶楽部(2)
- ・11月2日 川中2-3大成中学

立大冬期練習に選手派遣

奈良での立教大学冬期練習に岸田先輩の御世話で、休暇になると

直ぐ水村、山本、高橋、熊谷の四選手を奈良に派遣して、コーチを受けさせ効果頗る大であった。年内にて引上げた。

- ・1月20日 川中7-8 西武鉄道
- ・2月11日 川中10-9 飯能実業団(5)
- ・2月17日 川中6-9 浦和実業団
- ・3月3日 川中17-3 博文館
- ・3月7日 川中31-1 全川越新チーム結成以来9戦4勝4敗1分の成績であった。
- ・3月17日 川中1-13飯能実業団(6)
- ・3月21日 川中11-8 山崎鉄工所

川越中学校 体育後援会主催 関東選抜野球大会

6月中旬より本校卒業生、7月に入って川越中学校体育協会後援会を組織し、その事業の一環として運動場拡張を挙ぐ。これまでは道場の東に便所あり、その先に垣根があって、右翼手はあって無きが如く。8月7日起工便所、垣根を撤去し、更に道場を西に3間押して完成。記念大会を催す。

《早実6対1で優勝す》

- ・川越中学2-3 早稲田実業
- ・桐生中学1-6 早稲田実業
- ・11月14日 川中5-7 所沢飛行学校
- ・11月23日 川中4-13立大本科1年
- ・12月2日 川中17-4 三省堂
- ・12月9日 川中14-0 埼玉商業

昭和5年卒業 (旧中学28回)



立教大学冬期合宿に4名参加

華やかな幕明けをした、大正15年の北関東大会での健闘振り、秋の県大会での初優勝、この川中野球部として、昭和4年県大会で三回目の栄ある優勝を遂げたのに、何故かこの年度だけ資料皆無とは、誠に残念で残念で堪りません。

半年間、四方八方手を尽くし、各新聞社・図書館は勿論、同級生を総当りいたしましたが見当らず、その上、この年度の選手全員が既に他界されたため、己を得ず、一年後輩の山本が60年前の僅かな記憶を辿りながら、当時の思いでを綴らせていただきます。

この春、北野主将、強打の中里治夫三塁手、俊敏好守の小沢賢治左翼手、好守好打の平岡忠次郎中

堅手が去り、いささか寂寥を感じましたが、辛うじてチームの再編成が出来て、猛練習に次ぐ猛練習で、一応優勝を狙うに足る部らしく成長いたしました。

昭和3年暮、たまたま立教大学野球部の招きで、来年度に備えて、古都奈良での、冬季合宿練習に参加出来るようになり、勇躍12月24日出発しました。その時の話ですが、参加者、水村圭介(4年)・山本三郎(3年)・熊谷幸夫(2年)・高橋寛(2年)の4名が、初旅とは思えぬ程張り切って出掛けました。

春日大社の麓の公園グラウンドで1月7日までの予定でしたが、さて、その練習たるや決して考えていたとは大違いで、正に大学選手

並みの朝から夕方まで、休みと言えば昼飯の時だけで、息つく暇もなく、正に呵責ない猛ノックの連続という、生れて初めての特訓だっただけに、先ず、音を挙げたのが坊っちゃん育ちの熊谷で、二・三日でもう家へ帰ろうと、へこたれ始めたらしい。人の良い水村さんから、この話を聞いたのが、僕が最後で、やる気を喪失してしまったこの状態ではと、私も諦め、29日夜取敢えず、岸田先輩への置き手紙を残し、夜逃げならぬ朝の早立ちという寸法でしたが、駅の待合室で、一抹の不安で、しょんぼりしていたところへ、寝巻姿の先輩が追いかけて来て、一喝!、諄々とその非を悟されましたが、如何せん熊谷の様子を見て、万止むなしと、説得を断念し、“気をつけて帰れよ”との一言で、先輩の

見送りで、ホームで別れました。

飯田先生・浅海弥吉後援会長の肝入りで、勇躍奈良まで行ったのに、この体たらく、正に落伍者のような寂しさでしたが、汽車の中では駅弁を喰べながら、昨日までの辛かったことなぞ、“ケロッ”と忘れて、猿沢池のほとりの“ぜんざい”が美味しかったとか、誠にたわいの無い無邪気なやりとり、やっぱり子供らしさ一杯の風景がありました。

今日考えると、岸田先輩の立場は、さぞかしお辛いことだったろうと申訳なく思っております。

この奈良での冬季練習に、今にして思えば、昭和6年秋、東京六大学リーグ戦で初優勝の原動力とも言うべき、強打者山城健三（一塁手・広陵中）・名投手菊谷正一（徳山中）・百瀬和夫（捕手・松本商業）も、5年生でこの練習に参加していて、我々同様或はそれ以上の特訓でフラフラになっていた姿を思い出します。

完膚なきまでに鍛えられ、苦しみ耐え抜かなくては決して、何事も大成するものではないということつくづくと思いましたが、これがせめてもの冬季練習の大収穫であったと思います。

先輩たちの思い出

都築末雄先輩は、強靱な体格の持主で、真面目一方の人、二塁を守り、主将を務め、常に攻守の中心でありましたが、満州事変で戦死されました。

水村圭介先輩は、市内喜多町のガラス店の一人息子で、北野英男捕手の後釜として、立派にこの座を死守し、ミートのうまい強打者でありましたが、卒業後埼玉新聞川越支社勤務中病死されました。

内田政太郎先輩は、稀に見る秀才で長身、癖のあるバッティングで、打球は殆ど右方向へ飛ばし、効果的な打法でチームに貢献されました。唯一つ強いて難を言えば、我侪で短気、気に入らぬと、立て続けに30分以上もフリーバッティングを打ち続けるといった具合で、これが災してか、後輩からはそっぽを向かれ始め、遂にチームワークを自ら乱していたようでした。

選手は勿論、学校当局、ファンからの期待は全然無く、混迷・沈滞の部となりましたが、大会間近になり、飯田先生から言われたのだろうか、時折己れの非を悟るよ

うになり、その態度が急変したのにはびっくりしました。

飯田先生の穏やかな懇切な御注意が効を奏したとしか考えられませんでした。

昭和8年春、横浜高工卒業後、群馬県太田市の太田雄飛工場で航空技師として、戦争中大活躍しましたが、その後の消息は杳として判りません。

水村実先輩は部の大先輩水村潤一さんの令弟で、兄譲りの温和な性格で、良く選手の世話をやいて貰いましたが最近病死されました。

因に、この年のメンバーは

投手	熊谷・高橋(寛)
捕手	水村
一塁手	内田
二塁手	都築(主)
三塁手	竹沢
遊撃手	山本
左翼手	谷口
中堅手	横山
右翼手	高橋(寛)・熊谷
マネージャー	水村実

第15回全国中等学校野球大会

北関東大会

(於宇都宮中学グラウンド)

・1回戦

川越中学11-0 宇都宮農学校

・2回戦

宇都宮工	0	2	1	0	0	2	0	2	3	10
川越中	0	0	0	1	0	0	1	0	0	2

(川) 熊谷-高橋-水村

(宇) 水島-山中

打安犠振球盗失

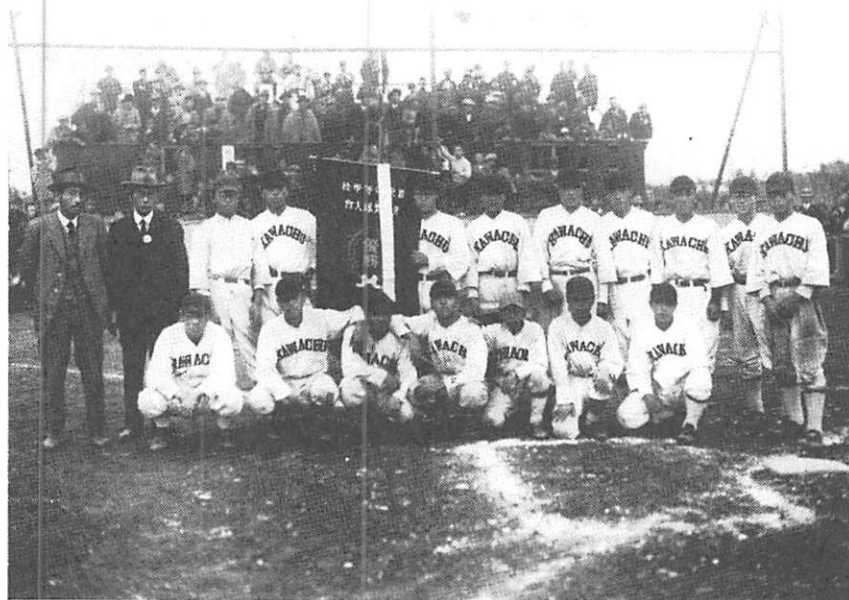
川越中 36 4 0 7 2 1 6

宇都宮工 44 11 5 8 5 2 4

秋の県大会

熊谷・高橋両投手の好投と味方打線大いに振い、三度目の優勝。

昭和6年卒業 (旧中学29回)



後列左より 飯田部長・浅海後援会長・伊藤・斉藤・山本・竹沢・宮崎・熊谷・山畑・森山・野本
前列左より 久米原・綿貫・斉藤(栄)・釋・横関・双木・奥富

野球は遊戯にあらず

我が野球部は雄図空しく一年を過してしまった。我等は協力一致、目前の一大難事たるチームワークに全力を挙げて日々努力したのである。即ち例令小なりと雖も団体競技に於いて、その団結力(チームワーク)なるものが欠けて居たならば、個人として立派な技倆を持っていたとしても結局は負けてしまうのである。野球は遊戯にあらず。一步進んで芸術的なものであり、又宗教的なものであると常々部長から話されていた。遊戯としては余りに熱を、全魂を入れ過ぎる。この熱を、全魂を入れる所に野球として尊いものがあるのではなからうか。我等が放課後から日の西に沈む頃まで汗と塵にまみれて馳せ廻る、そこに自ら精神修養が得

られる。寒暑に打ち克ち、飢渴に堪え、而して精神上の岐路に立つて明らかな判断を下し得るだけの人格が養われる。更に又、協同一致、責任感念、犠牲的精神等数へ来れば、我等のベースボールの目的は偉大なる人格の養成にあるのである。

さて我等は新学期早々断然部内の改革を図り、数次編成を変え遂に始めて意気投合し、母校愛に燃ゆる元気な選手を以て新チームが組織され、飯田先生を部長に、山本を主将に、部員10名を以て産声を挙げたのである。

自分は或人に斯う問われた。「このチームで勝てるかい。」と。随分失礼な言い方だ。自分は即座に「このチームでもう一週間も練習したら、県下のチームを総舐めにして見せる。」と。それ程新チームには

覇気が漲っていた。

捕手には宮崎を、一塁には若冠綿貫、左翼に森山を配し猛練習を開始した。花は咲き鳥は囀る長閑な只でさえ心身が溶けるような4月、放課後から日の暮れる迄、「試合に笑って練習に泣け。」と言って或る選手などは進んで夕闇の中でノックを受けていた。

- ・ 4月13日 川中8-0 豊岡実業
- ・ 4月23日 川中19-3 熊谷中
- ・ 4月23日 川中7-3 錦倶楽部
- ・ 5月3日 川中25-5 大宮鉄道
- ・ 5月4日 川中18-3 川越商業
- ・ 5月11日 川中11-4 埼玉商業
- ・ 5月18日 川中9-1 三省堂
- ・ 5月18日 川中8-3 川越商業
- ・ 5月25日 川中11-2 栃木中
- ・ 6月8日 川中12-2 駿明倶楽部
- ・ 6月8日 川中8-3 明大商学部
- ・ 6月14日 川中6-4 暁星中学
- ・ 6月15日 川中28-7 所沢実業団
- ・ 6月15日 川中7-6 昭和倶楽部

当初6-3と終始リードされ通しだったが、最終回熊谷四球、宮崎の遊撃左を襲う打球は内野安打となり、奥富の犠飛で二、三進し、野本四球で一死満塁のチャンスを迎え山島の二塁で熊谷生還、続く久米原死球を得て二死満塁となり、打順はこの日当り屋の三番山本となる。彼の一打こそ栄辱の分れ目である。果せる哉！(期待通り)二球目の外角直球を鋭く打てば、物凄い当りで右翼道場にノーバウンドで達し一挙にして走者一掃し、正に劇的シーンで幕を閉じた。

- ・ 6月21日 川中28-0 早稲田ナイン
- ・ 6月25日 川中4-7 早稲田実業

北 関 東 大 会 準 決 勝 で 敗 る

愈々我等の試練場北関東大会に臨む。7月25日、全国中等野球大会北関東予選大会本日より炎熱燃ゆるが如き遥沙ヶ原原頭に栃木、群馬、埼玉の三県38チーム互に一歩も譲らじと意気込んで馬首を進めた。今春以来戦うこと20有余回熊中、深商を大破し、連戦連勝破竹の勢もて栃木、群馬の強豪チームを薙ぎ倒さんと頑張る川中ありて弥が上にも今大会の興味をそそる。

- ・7月27日 川中8-2佐野中学
- ・7月28日 川中7-6下野中学

東京中等野球連盟 招待試合(7月15日)

この日熊谷投手調子悪く7回して安打10本を許し、点差11点余すところ僅かに8・9回のみ。果して狂瀾の既倒に巡らし得るや。気の緩みか8回突然新妻投手乱れ四球に次ぐ四球で、一挙11点の得点で同点となり満場騒然となる。

最終攻撃に入り、勝たずんば帰らずと一同元気に立つ、先づ奥富四球森山の四球、山畠の死球で無死満塁となり、ピンチヒッター久米原2-2後の球を一、二塁間に安打しゲームセットになる。あの神宮球場のサイレンの音今も忘れ得ない。

この試合で如何に劣勢でも最後の最後までゲームを捨ててはいけないという尊い体験を得たことは素晴らしい。

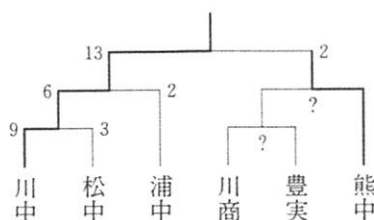
慶 応	0	5	0	0	1	2	0	4	0	12
川 中	1	0	0	0	0	0	1	1	1	13

- ・7月6日 川中2-2早稲田中

打 得 安 犠 三 四 盗 失

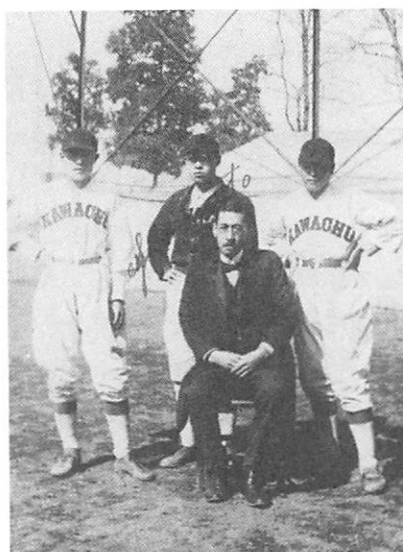
6 竹 沢	6	1	1	0	0	0	0	1
3 綿 貫	3	1	1	1	0	1	0	0
2 山 本	6	1	4	0	0	0	0	0
1 熊 谷	4	0	1	0	0	1	1	0
7 森 山	5	0	0	0	0	0	0	0
9 宮 崎	3	0	0	0	0	0	0	1
久米原	1	1	1	0	0	1	0	0
4 野 本	5	0	1	0	1	0	0	0
5 奥 富	5	1	2	0	0	0	0	2
8 山 畠	4	0	0	0	0	1	0	0
計	42	5	11	1	1	4	1	4
三塁打	山本2、奥富	二塁打	熊谷					

浦和実業団主催 第2回中等野球大会



桐生野球協会主催北関東大会

- ・8月29日 川中1-8前橋中⑤



左より 宮崎・山本・飯田亮先生・竹沢

川中	0	0	2	0	0	0	0	4	0	1	7
下中	0	0	0	0	1	0	2	0	3	0	6

- ・7月31日 川中11-3埼玉商業

8月3日雨にはばまれること2日、天候漸く回復して準決勝戦は3日に行われた。果然ゲームは第1回より白熱し、意気と意気との相撃つところ火花を散らし、真に命がけの大試合となってしまった。大観衆は声をのんで見守る。嗚呼然るに天運遂に恵まれず、最後に潰滅して尽きぬ恨を呑んだのである。

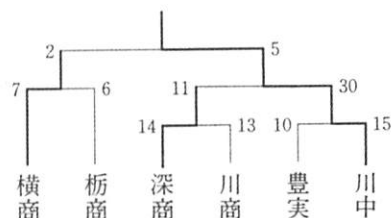
高崎商	0	1	1	0	0	0	3	0	4	9
川 中	0	0	0	0	3	0	0	3	0	6

宇都宮高等農林主催北関東大会

- ・9月13日 川中16-5宇都宮商業
- ・9月14日 川中4-2宇都宮中

決勝戦は終始打撃戦を演じ、両軍の好守好走に満場の大観衆をして手に汗を握らしめたが4対2にて優勝す。

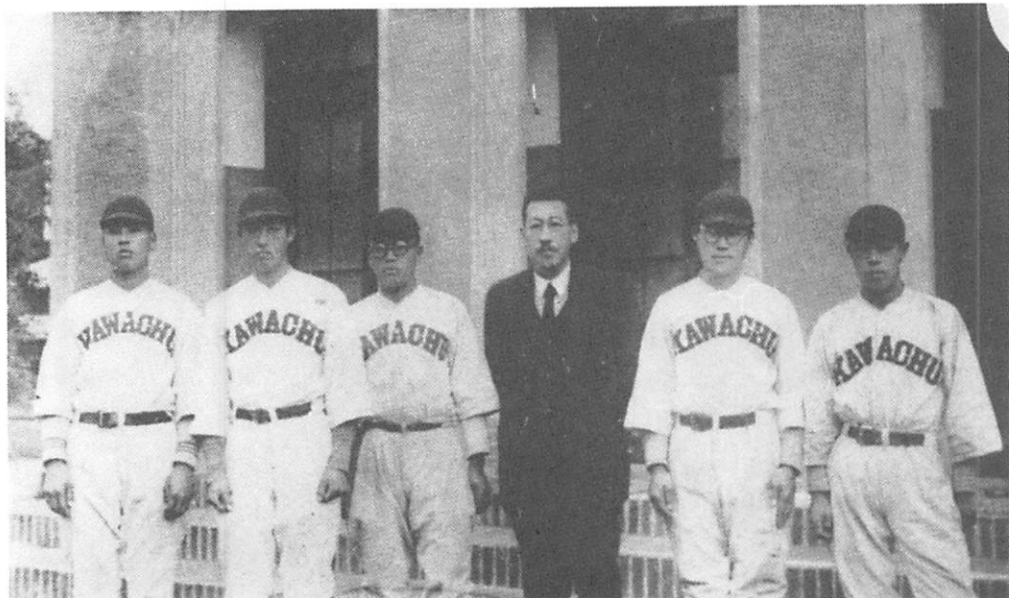
第1回全関東選抜野球大会



史上最高の戦績42勝5敗1分

本年度の野球部はその編成4月初めに成り、豊岡実業を皮切りに戦うこと実に42勝5敗1分の成績を得たのである。川中史上最高の戦績を残し得たことは、飯田部長の熱心なる御指導と岸田先輩を始め諸先輩の母校愛に燃ゆる尊い至誠とに依る所大なりと信じております。

昭和7年卒業 (旧中学30回)



第8回 全国選抜中等 学校野球大会 に初出場

野本主将選手宣誓

甲子園出場の決定は昭和6年2月14日だった。登校してびっくりした。時の野球部長飯田先生から新チーム結成以来の戦績等資料を提出してあるとは聞いていたがまさかそれが実現するとは夢にも思っていなかった。当時は気候風土の関係もあって西高東低の状況が続いていて関東、東北は野球不振が続いていたのです。川中がその尖端を切って選抜の栄誉をになったので一番遠距離からの参加校であるとの意味を含めて4月1日第8回全国選抜中等学校野球大会の宣誓の大任を野本主将が負わされたのです。初めての甲子園出場に川越市は湧きに湧き学校も歓喜の

明るさに包まれたが練習にはかなりのマイナス面もあった。出発前に雪が3回も降り、その度に全校生徒を動員して雪かき、続く霜どけ。武道場でキャッチボール、バット振り、スライディング、フリーバッティングの練習。毎日学校の余暇を見て母校の為にコーチして下さる立教大学選手岸田氏の熱心な指導の下に3時半から5時半頃まで大会を目指し猛練習をした。なお当時の早大主将森、多勢投手、元の大毎の捕手林(旧姓井川)の三氏のコーチを受けた。そして午後5時から講堂で東日の橋戸頑鉄多勢両氏の甲子園出場の心得、技術指導のアドバイスを受けたが今

思えば基礎訓練が充分でき上らない内に出発したという状況だったが最後の猛練習を球界の元老飛田穂洲氏より寒風砂塵の中に受けた。其の間の日には木村、安田、北野、平岡、小澤等の諸先輩が来校して激励して下さった。

対中京商業戦

初出場の中京商業と同じ初出場の川中との対戦に籤運によって憧れの甲子園で相交える事になった。川中は三塁側に陣取り策戦を練り、上らない様に監督にも注意されて正午ここに戦いの幕は切って落されたのです(球審川久保氏墨審原、生駒両氏)

●1回戦(川) 森山劈頭打気に出てカーンと許り飛ばせば右翼手の正面を衝き退く、続く奥富一匁、綿貫投匁。(中) 大鹿中堅手の美技に

恒川 3 塁手の好守に村上 2 飛に退く ● 2 回 (川) 熊谷投匁、久米原三振、山畠投匁に終る。(中) 鈴木 2 匁、桜井 2 塁大飛球で生き 2 塁盗塁して吉田の幸運なイレギュラー安打で桜井 3 進、吉岡の中飛機打で最初の 1 点を挙げる後藤 1 匁。

● 3 回 (川) 粕谷 2 匁、双木 1 匁、野本 2 匁。(中) 杉浦右飛、大鹿遊撃失で出て盗塁に危く生き次の 3 飛失に大鹿 3 進、村上の 3 匁に大鹿生還、鈴木中堅越の 3 塁打を放ち恒川を還したが桜井の 2 飛で残塁。

● 4 回 (川) 森山 2 匁、奥富遊匁、綿貫最初の遊撃内野安打に出て気を吐いたが熊谷遊飛。(中) 吉田遊匁、吉岡四球、後藤左前安打杉浦の中前安打に吉岡一挙生還、後藤 3 進し杉浦も中堅手が球をはじいている間に 2 進、投手の暴投に後藤還り大鹿の遊匁に杉浦も生還、恒川遊飛。

● 5 回 (川) 久米原四球、山畠レフト前にクリーンヒットを放ち左翼手の 2 塁送球の暴投に久米原 3 進せんとして右翼手

のファインプレーで噴死す。山畠此の間に 2 進したが絶好のチャンスを選した粕谷三振、双木 1 匁。(中) 村上左飛、鈴木投匁、桜井遊撃左を抜くも吉田左飛。 ● 6 回 (川) 野本四球、森山三振、奥富の投匁で走者を 2 塁に封殺せんとして投手暴投に両者生き、綿貫遊飛、熊谷四球で川中初めて 3 塁を踏む。続く久米原の 1 打が得点のチャンスであったが惜しいかな三振に終る。(中) 吉岡右中間 2 塁打に出て後藤の遊匁で 3 進、杉浦 3 匁失で生き吉岡生還、大鹿四球に出て巧妙な重盗に成功したが恒川左前小飛球、村上 2 匁。 ● 7 回 (川) 山畠 2 匁、粕谷遊匁、双木四球に出て野本の 1 匁に残塁。(中) 鈴木 1 匁、桜井 1 飛、吉川左翼越 3 塁打に出て吉岡遊匁失に生還、吉岡盗塁に成功し後藤四球、杉浦の左前安打で吉岡本塁に一瞬の差で生還、然し後藤は 3 進せんとして捕手よりの送球に 3 塁手に刺された。 ● 8 回 (川) 森山 1 匁、奥富死球、綿貫

四球に出て好打順を迎えて有望に見えたが続く 2 者三振。(中) 大鹿左前安打失に一挙 2 進恒川の 3 振目の球を捕手落球し 1 塁に暴投したのに乗じ大鹿生還、恒川は 2 進、村上 1 飛、鈴木 2 本目の中堅越 3 塁打に恒川生還、桜井の 3 匁に鈴木自重して本塁を衝かず吉田の 2 匁で漸く終る。 ● 9 回 (川) 川中最後の攻撃なので一段の勇を奮い立たせて中京の陣に突進したが好守好防に遂に中京に名をなさしめた山畠三振、粕谷初球を叩けば球はグングン伸びたが真正面を衝き左翼手の美技にはばまれた。双木のピンチヒッター斉藤ボックスの露と消える。この甲子園での反省と収獲を来る北関東の予選に練磨して第 2 回目の甲子園出場を目指して努力を重ねれば今敗れても悔はないのであります。何しろ今回の遠征は川中野球部史上に一段と光輝を放し今後発展の基礎となり県下諸学校もこれが契機となり心身の鍛練と発展に貢献して関西の諸学校と対等の地位を占めるようになるのではないかと信じるものです。

[川中]		打順	打安得四機盗三
(左)	森山	4	0 0 0 0 0 1
(遊)	奥富	3	0 0 1 0 0 0
(一)	綿貫	2	1 0 1 0 0 0
(投)	熊谷	3	0 0 1 0 0 1
(捕)	久米原	3	0 0 1 0 0 3
(中)	山畠	4	1 0 0 0 0 1
(二)	粕谷	4	0 0 0 0 0 1
(右)	双木	2	0 0 1 0 0 0
(PH)	斉藤	1	0 0 0 0 0 1
(三)	野本	2	0 0 1 0 0 0
計		29	2 0 6 0 0 8



[中京]	打順	打安得四犠盗三
(左)	大 鹿	4 1 2 1 0 2 0
(二)	恒 川	5 0 2 0 0 0 1
(中)	村 上	5 0 0 0 0 0 0
(右)	鈴 木	5 2 0 0 0 0 0
(捕)	桜 井	5 2 1 0 0 1 0
(投)	吉 田	5 2 1 0 0 0 0
(三)	吉 岡	2 1 3 1 1 1 0
(一)	後 藤	3 1 1 1 0 0 0
(遊)	杉 浦	4 2 1 0 0 1 0
	計	38 11 11 3 1 5 1
	三塁打	鈴木(2)、吉田
	二塁打	吉岡

	1 2 3 4 5 6 7 8 9	計
川 中	0 0 0 0 0 0 0 0 0	0
中 京	0 1 2 3 0 1 2 2 X	11

其の日直ちに9時35分の東京行



北 関 東 予 選 大 会

北関東予選大会の開催地前橋市敷島球場に母校と郷土の期待を双肩に荷い私達は今は廃線となった久保町駅を出発し前橋に投宿した。群馬では昨年の覇者桐中優勝候補の呼び声高い高崎商業伝統的強みを持つ前中と富岡中学栃木では宇中鳥山中学埼玉では豊岡実業と川中の8校で甲子園出場を賭けて戦う事になった。

・8月3日対高崎商業

高 商	0 2 0 0 0 2 2 0 0	6
川 中	0 0 0 0 2 5 0 0 X	7

・8月4日対桐生中学(準決勝)

前日、高崎商戦で7-6で勝ち

の急行で森島の青年団諸氏の丁寧なお世話に厚くお礼を述べて翌朝午前11時24分に一同遠路恙なく帰川して故郷の土を踏む第一歩は11日ぶりなので何となく非常に懐しく感じた。諸先生後援会の方々の出迎えを受け学校に引き上げ遠征の労を稿らわれ1同昼食を共にした上、それぞれ自宅に帰った。今度の甲子園出場にあたり親しく監督された岸田先輩のお骨折、御世話になった後援会の皆さん、ならびに先輩の方々等に厚く心からお礼を申し上げます。

進んで来た川中は幾度か甲子園の土を踏んだ経験のある桐中と栄ある甲子園出場を賭けて此の血戦にのぞんだのは北関東予選大会の開催地前橋市敷島球場だった。午後2時桐中先攻で開始された(球審侯野、塁審小笠原)8回までに川中5点をリードしたまま最終回に入る此の回誰があの波乱を予想したであろうか。投手の肩の乱れを知った桐中は慎重な待機主義に出てバットを振ることオンリイ2回8つの四死球に一つの野選で6点を入れ1点を勝ち越される川中最後の攻撃も空しく万事休した。

桐 中	2 0 0 0 0 1 0 0 6	9
川 中	2 2 2 0 0 0 2 0 0	8

昭 和 6 年 戦 績

- ・10月8日 川中2-2日大二中
- ・10月11日 川中12-3豊岡実業
- ・10月12日 川中17-4淀橋専売
- ・10月19日 川中6-10千住倶楽部
- ・10月26日 川中12-7全川越
- ・11月23日 川中6-4慶応普通部
- ・11月26日 川中4-7東京中学連
- ・11月30日 川中2-2早大常盤俱
- ・12月7日 川中12-7全川越
- ・3月8日 川中9-4全川越
- ・3月13日 川中11-8全川越
- ・3月15日 川中4-18東京鉄道局
- ・3月26日 川中4-2静岡中
- ・4月3日 川中0-11中京商業
- ・4月12日 川中8-13全川越
- ・4月18日 川中6-7田端鉄道局
- ・4月19日 川中10-10慶応商工
- ・4月26日 川中27-6全品川
- ・5月3日 川中13-6日大三中
- ・5月6日 川中14-2大宮鉄道
- ・5月10日 川中2-7静岡中学
- ・5月17日 川中23-3明治錦俱
- ・5月24日 川中7-9諏訪蚕糸
- ・5月24日 川中47-2東京双葉俱
- ・5月29日 川中6-13仙台鉄道局
- ・6月7日 川中1-3栃木中学
- ・6月7日 川中15-7三省堂書店
- ・6月14日 川中3-10銚子商業
- ・6月14日 川中6-3青梅実業団
- ・6月21日 川中8-11桐生中学
- ・6月27日 川中5-2慶応商工
- ・6月28日 川中19-0千葉中学
- ・7月1日 川中7-3豊岡実業
- ・7月5日 川中11-2早稲田中
- ・7月5日 川中13-5昭和クラブ

県 下 予 選 大 会

本年から、北関東予選大会の制

度が変わり、地元の県からは4校
他県から2校の計8校を出して覇
を争うことになった。今年は、群
馬県前橋市が主催地で、埼玉2校
栃木2校となった。

- ・7月25日 川中15—0松山中
7回コールド
- ・7月26日 川中13—10浦和中
- ・7月27日 川中14—0熊谷中
7回コールド
- ・7月28日 川中9—2豊岡実業

北関東予選大会

- ・8月3日 川中7—6高崎商業
- ・8月4日 川中8—9桐生中学

第2回北関東選抜野球大会

- ・8月27日 川中10—2豊岡実業
- ・8月28日 川中9—3栃木中学
2年間続けて優勝旗を獲得し意
気揚々と帰川した。
- ・9月13日 川中7—11松本商業

近県中等学校選抜野球大会

- ・10月17日 川中5—3水海道中
- ・10月18日 川中6—1水海道中
- ・10月18日 川中8—9水戸商業
(準決勝戦)
- ・昭和5年(山本三郎主将の時)
42戦37勝5敗1引分
得点計439 失点計168
- ・昭和6年(野本定主将の時)
46戦30勝13敗3引分
得点計413 失点計242

5年に比して失点が多く敗戦が
多いが6年は対戦相手に実業団チ
ームの強剛あるいは関東甲信越の
超一流チームと戦い大量得点を許
している事です参考のため失点多
く負けた試合は次の通りです。

東京鉄道局18—4中京商業11—0
仙台鉄道局16—3銚子商業10—3

松本商業11—7桐生中11—8(関
東選抜) 桐生中9—8(北関東)
栃木中9—3(関東選抜)

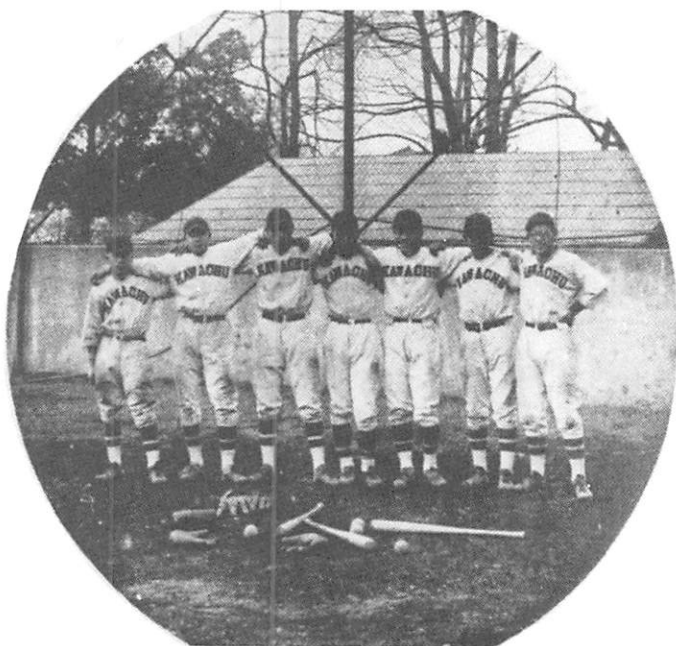
以上ですが何と言っても印象に残
るのは中京商業と北関東準決勝の
桐生中学との対戦です。

前橋の帰りに

昭和6年8月4日は忘れようと
しても忘れられない運命の日であ
った。前日優勝候補高商を撃破し
て勢に乗り桐中を蹴散らさんと8
回迄8対3で押しに押ししていたの
ですが、9回の場面に勝敗は一転
して敗者の悲しみとなった。勿論、
私共は甲子園への月桂冠は手にし
たと信じて疑わなかったが今は敗
れて帰る身となった。私達は、此
の敗戦に自動車に乗るや否や張り
つめた気が一気にゆるみ男泣きに
泣かない者は一人も居なかった。
これが私共の花を飾る最後の試合
だったのか、これが1年間に猛練
習にあけくれた賜だったのか、そ
して此の学窓を去るのかとの苦い
思いに浸っていた。それから数刻
後に車中の人となって郷土へと向
った暗涙にむせんだ顔も一広陽気
になったが、5年生一同万感胸に
迫って一言も言葉はなかった。上越
国境に連なる浅間連山宵暗の中に
白く光って見える利根川、私達は
過去を思い浮べた。桜花散って若
葉が匂う日も炎天下の頃も猛練習
に次ぐ猛練習をしたのは半年余り
になるのだ。その半年は矢の如く
流れて大会を迎えた日にこの泣く
に泣けない惜敗を見ようとは信じ
られない事だった。此の頃20余名
西武電車に乗り激しく揺れながら

川越へと向って行った。当時は何
処と言う所も知らないが、今は北
足立郡三橋村大字並木の賀茂川か
ら1町余りで急勾配の下り坂を降
り切った処の二家屋の前10時半頃
珍らしく満員の夜、勢よく坂にか
かった惰力によって猛烈なスピー
ドになり乗っていても出しすぎて
いるな危いなど感じていた処2回
3回と車体がバウンドしたと思っ
たら突然ガタガタと外れたか
と思った瞬間、脱線だあと人々の
叫び、あっと思う内からドシガラ
ガラと倒れた一時は気を失った
が直ぐ気が着くと立ち上り直接窓
より飛び出す下から2、3人のう
めき声がするのでそれと許り皆で
イチニのサンと声を合せ電車を持
ち上げ下敷になった山畠を大宮の
須田病院へ、斉藤を大宮病院へと
急報によってかけつけてくれた自
動車で運んだ。山畠は下敷のとき
背骨を折ったとの事で大手術の功
なく7日の午後9時5分大往生で
黄泉への旅に立ったのです。斉藤
は2ヶ月位で全快した。山畠は無
口で温和な青年で川中唯一の左き
き選手で強肩俊足猛打と三拍子そ
ろった未来の発展を期待された選
手で野球部に尽した功績は大であ
り、実に惜しい選手であった。葬
儀は9日午後3時より南町養寿院
で行われたが、川中野球部史初め
ての痛い犠牲者でもあり、各方
面からの同情もあって近来稀に見
る盛大な葬儀であった。山畠さん
の他界に心から冥福を祈って止め
ません。

昭和8年卒業 (旧中学31回)



覇権を目ざし 新チームがスタート

昨年夏北関東野球大会第二次予選準決勝に於て宿敵桐生中学に最終回にて敗れ、然も其の帰途電車顛覆事故の一大不幸事に際会した我等の先輩が意図を受けついで我等は今年こそ亡き山畠さんや、恩師飯田先生の為に、石にかじりついても優勝せんと意気に燃えて厳冬寒国裡にも、盛夏炎天下にも身心を鍛練しつつ、只管技倆を磨いたのである。

旧チーム解散の翌日8月5日直ちに、新チームが組織され、飯田先生御病気の為に部長に大橋先生を、主将・綿貫を推し、一路覇権を目指して昭和7年度の野球部のスタートは切られた。

練習試合

- ・9月27日 川中14-6 日本橋
 - ・10月3日 川中18-5 所沢飛校
 - ・10月25日 対諏訪蚕糸
- | | | | | | | | | | | |
|----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 川中 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 2 |
| 諏訪 | 0 | 0 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | X | 5 |
- ・11月3日 川中24-8 金星
 - ・11月8日 川中5-13 千葉中
 - ・11月15日 川中5-3 豊岡実業
 - ・11月25日 川中5-6 東京リーグ
 - ・12月5日 川中7-13 全川越
 - ・3月9日 川中14-11 熊谷中
 - ・4月29日 川中43-0 粕壁中
 - ・5月1日 川中1-18 高崎商業
 - ・5月4日 川中6-12 立大新人
 - ・5月8日 川中4-5 豊岡実業
 - ・5月15日 川中14-3 熊谷中
 - ・5月22日 川中17-8 熊谷中
 - ・5月29日 川中15-2 埼玉商業

- ・5月29日 川中10-3 本庄中
- ・6月12日 川中5-7 浦和中
- ・6月19日 川中7-2 豊岡実業
- 川中13-10 所沢実業
- ・6月26日 川中1-11 立大新人
- ・7月9日 川中7-3 慶応商工

川中後援会主催 第3回関東選抜野球大会

高崎商業、千葉中学、横浜商工実習、及び本校の4チームにて行われる。第1回戦の相手校は千葉中である。

千葉中	1	0	1	0	0	0	0	1	0	3
川越中	0	1	4	0	0	0	0	0	X	5

初回千葉中に1点先取されるも2回粕谷、朴の二安打ですかさず1点を返し同点とするも3回1点を奪われ再びリードを許す。その裏我らは無死満塁の絶好の好機を迎え綿貫の左翼頭上をはるかに越す大三塁打により走者一掃更に1点を加え計4点試合を大きくリードした。その後8回に1点を与えしものの5対3にて快勝し次の優勝戦に駒を進めることになった。

横浜商	0	1	0	0	0	0	0	1	0	2
川越中	0	0	4	0	0	0	0	0	X	4

優勝戦の相手は前日高崎商業を破りし横浜商工実習である。2回表早くも1点先取されるも3回我軍先づ金子遊前内野安打、双木の投前バンドを野手一塁へ暴投し走者2・3塁、斉藤三振のあと久米原遊失で2者生還。綿貫中堅左を抜く3塁打にて久米原一挙生還、続く伊藤の遊歩にて綿貫生還し4点を奪取し志気大いに上る。後半8回に1点を返されるものの前日に引続き快勝し優勝旗を獲得した。

全国中等学校野球大会

(予選記録)

第1次予選

埼玉大会

○1回戦(7月26日)

川越中	8	0	0	7	4	1	3	23
松山中	1	0	0	1	0	0	0	2

○2回戦(7月27日)

浦和中	0	0	0	0	0	0	0	0	0
川越中	0	2	0	0	0	0	0	2	X

○準決勝戦(7月28日)

川越中	0	0	0	0	0	0	3	2	0	5
熊谷中	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

○決勝戦(7月29日)

埼玉商	0	0	0	3	0	0	0	0	0	3
川越中	0	0	0	0	2	1	1	0	X	4

7月29日北関東大会に轡をならべて出場することに決定した我が川中と埼玉商業とが最後の雌雄を決すべき一戦は午後2時より挙行。

4回埼玉商は二死満塁の好機を迎え続く四球安打等で計3点を先取する。5回埼玉商無為の後川中は一死二・三塁のチャンスに双木の犠飛久米原の安打などで2点を返し1点差と迫る。6回川中二死二・三塁と再びチャンスに朴の安打で同点となり試合は愈々白熱する。

7回埼玉商三者凡退、その裏川中は二死ながら二・三塁の好機に伊藤の二失で三塁走者粕谷還り貴重な1点を得、形勢逆転1点をリード。再度本県の覇権を収めた。

[埼玉商]	打安三四	[川越中]	打安三四
3内 田	5 2 0 0	6粕 谷	4 1 0 1
9斉 藤	5 0 0 1	7双 木	2 0 0 1
6間々田	5 0 1 0	8久米原	4 2 0 0
2小野田	2 0 0 3	9綿 貫	3 0 0 1
1柴 崎	4 0 0 1	1伊 藤	4 0 0 0
7川 崎	4 0 1 0	2増 島	4 2 1 0
8堀 口	3 1 0 1	5斉 藤	3 0 0 1
4黒 潮	4 2 0 0	4平 岡	3 0 0 1
5福 島	3 0 0 1	3 朴	3 2 0 0
計	35 5 2 7	計	30 7 1 5

第2次予選

北関東大会

8月2日待たれた此の日全国中等学校野球大会北関東予選大会は宇都宮常設球場で挙行された。

○1回戦(8月2日)

川越中	0	0	0	3	0	0	0	0	0	3
栃木師	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1

4回久米原三ゴロ失、綿貫四球伊藤の投ゴロ失で久米原生還、増島の三ゴロで綿貫、伊藤重殺され好機去りしと思われたが斉藤の右前安打を右翼手後逸し増島生還、平岡の中前安打で3点を先取する。

6回栃師吉沢の左中間二塁打などで1点を返されるも伊藤が好投して2安打1点に押え3対1にて我軍に凱歌あがる。

[川越中]	打安三四	[栃木師]	打安三四
6粕 谷	5 0 0 0	6佐 藤	4 0 0 0
7双 木	4 0 0 1	5広 瀬	3 0 0 1
8久米原	4 0 0 1	2吉 澤	4 1 0 0
9綿 貫	3 1 0 2	3玉 生	4 0 0 0
1伊 藤	4 0 0 0	9斉 藤	3 1 0 0
2増 島	3 1 0 1	1高 橋	3 0 0 0
5斉 藤	2 1 0 1	4野 沢	3 0 1 0
4平 岡	4 2 0 0	8高 橋	3 0 0 0
4横 関	0 0 0 0	7稲 田	3 0 0 0
3 朴	4 1 0 0		
計	33 6 0 6	計	30 2 1 1

○準決勝戦(8月3日)

川越中	2	0	0	0	2	0	0	0	0	4
高崎商	0	0	0	4	0	0	0	1	X	5

8月3日午後1時試合開始。

川中は初回双木の捕前ゴロを捕手が一塁へ悪投し双木一挙三進の後久米原四球直ちに二盗、綿貫の安打で双木、久米原の二者が生還2点を先取す。

高商は4回4安打と根岸の三塁打などで4点を奪い遂に逆転する。

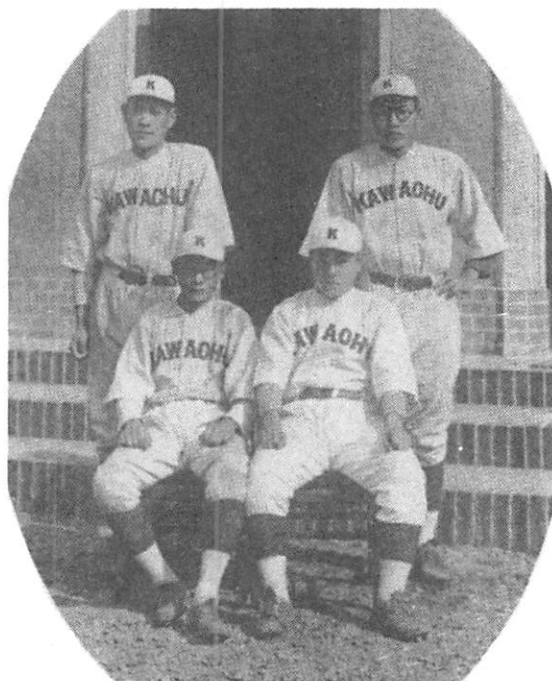
5回川中は平岡が四球で出て二盗、朴の安打で平岡三進、朴二盗し粕谷の中前安打で平岡生還。その後双木の一ゴロなどで1点を加え計2点。遂に4対4の同点となり、試合は白熱化する。

8回高商清水四球後バンド盗塁にて三塁に達し、井上の三ゴロを野手一塁に低投し、清水生還遂に1点をリードする。

9回川中愈々最後の攻撃を迎え増島、斉藤よく四球を選び平岡の代打横関の投前バンド走者二・三塁と絶好の反撃チャンスに増島三塁を出過ぎて捕手よりの好送球に刺され絶好のチャンスを逸し次打者朴の中飛にて万事休した。

[川越中]	打安三四	[高崎商]	打安三四
6粕 谷	4 1 0 0	4滝 沢	4 1 0 1
7双 木	3 1 0 0	8須 田	4 0 0 0
8久米原	3 0 1 1	1松 本	4 0 1 0
9綿 貫	4 3 0 0	2根 岸	4 1 1 0
1伊 藤	3 0 1 0	7松 島	4 2 0 0
2増 島	3 0 2 1	9清 水	2 1 0 2
5斉 藤	3 0 0 1	5酒 井	1 1 0 1
4平 岡	2 0 1 1	6田 村	4 1 0 0
P横 関	0 0 0 0	3井 上	4 3 0 0
3 朴	4 2 0 0		
計	29 7 5 4	計	31 10 2 4

昭和9年卒業 (旧中学32回)



私たちのメンバー

部長	飯田先生	
コーチ	伊丹安廣	
主将	横関	5年
	増島(兄)	5年
	田中	5年
	山本	5年
	斉藤	4年
	平岡	4年
	三上	4年
	小峰	4年
	木村	4年
	朴	3年
	大塚	3年
	浅野	3年
	増島(弟)	2年
	新藤	2年
	谷沢	2年
	以上15名	

全国中等学校野球大会

(予選記録)

第1次予選

埼玉大会

新装成れる大宮球場で県下13校による第1次予選が7月25日より開始された。

○1回戦 対埼玉商業

川越中	0 3 3 6 0 2 0	14
埼玉商	0 0 0 0 0 3 0	3

横関主将により優勝旗返還後直ちに昨年度決勝戦で対戦した埼玉商業と1回戦での顔合せとなった。

先発全員安打の猛攻によって7回コールドゲームとなり、力強い試合に甲子園の期待が膨らむ。

○2回戦 対粕壁中学

川越中	0 5 5 6 0 3 0	19
粕壁中	1 1 0 0 0 1 0	3

○準決勝戦 対熊谷中学

熊谷中	0 0 0 0 0 0 0 0 0	0
川越中	0 0 0 0 2 5 0 0 X	7

本年度1勝1敗同士の対戦となるが、選手は余裕をもってゲームを開始する。

熊中先攻4回まで両軍得点なし、5回熊中三者凡退の裏平岡、横関連続四球、斉藤の遊撃内野安打で満塁の好機を逃さず2点先取、続く6回には平岡、横関、斉藤、朴、田中、大塚、山本と連続7本の安

打を集中し、一挙5点を挙げ、守っては朴、三上両投手の好投で完封した。

○決勝戦 対浦和中学

川越中	2 0 1 2 0 2 0 2 5	14
浦和中	0 0 1 0 0 0 2 0 0	3

前日降雨のため延期され、当日グランドコンディションが悪かったので補修の上試合開始する。

川中先攻、平岡四球、横関に送られ斉藤中前、朴三遊間を破り先取点、田中一壘で2点目と先制攻撃をかけ優位に試合を進め、3回は山本の適宜打に1点、4回は斉藤の中前安打で2点、6回連続4四球と田中の一・二塁間を破る安

打で2点と着々加点し、8回朴の二塁打で2点、9回は二死から敵失田中の右中間を抜く三塁打等で大量5点と試合を決し三年連続県下の優勝を飾った。

〔川 越 中〕				〔浦 和 中〕			
4	平 岡	37打33	6	山 口			
6	横 関	12安6	3	杉 崎			
8	斉 藤	2犠0	7	藤 井			
1	朴	3三4	4	竹 内			
7	田 中	12四12	1	磯 貝			
2	大 塚	7盗2	2	秋 山			
5	山 本	1失4	9	篠 原			
3	木 村		5	足 利			
9	小 峰		8	諫 山			

第2次予選 北関東大会

本県下大会準決勝に勝残った4チームと群馬県より昨年の優勝校高崎商と桐生中、栃木県は栃木中と栃木商の8チームによって大宮球場で優勝を争うこととなった。

抽せんの結果一回戦は昨年準決勝で敗れた宿敵高崎商業との対戦となった。

高崎商	3	0	0	0	0	0	0	2	0	5
川越中	1	0	0	0	0	0	0	1	0	2

8月2日。

先攻高崎商は一回二死後根岸中前安打して出塁、デレイトスチールの際木村一塁手遊撃に暴投、球が転々とする間に生還するという意外なプレーに動揺され、その後連続安打に再び一塁手失で3点を先取される。その裏斉藤左前安打、朴の右越二塁打で1点を還すも高崎商の好守で朴三塁に刺され、この明暗がこの試合を象徴する形と

なり、8回も同様高崎商二死から連打の後の三壘一塁失で一挙2点とだめをおされ、その裏木村、小峰の連打で1点を還すのみ。遂に昨年の仇を報ずる事が出来ずに敗れたことは実に残念であった。

高崎商に優る11本の安打を放ちながら初回の3失点があせりと圧力となって後手に廻り惜敗した。

〔高 崎 商〕				〔川 越 中〕			
7	綱 島	35打34	4	平 岡			
3	井 上	8安11	6	横 関			
2	根 岸	0犠2	8	斉 藤			
8	松 島	4三3	1	朴			
5・1	高 山	0四4	7	田 中			
1・5	吉 井	1盗0	2	大 塚			
9	土 屋	1失3	5	山 本			
4	川 島		3	木 村			
6	田 村		9	小 峰			

練 習 試 合

4月29日 対千葉中学

南関東の強豪として知られる千葉中学を、本校に迎え第一戦を行えも奮斗空しく9対0にて敗る。

4月30日 対埼玉商業

昨年県下の決勝戦に対戦した埼玉商業戦を本校々庭にて行う。

本年度よりユニホームを改め、マークを海老茶色とし、帽子は白にKのマークをつけたものを初めて着用し試合す。

心機一転大いに打ちまくり、攻守に圧倒32対2にて大勝す。

5月21日 対銚子商業

南関東の雄銚子商業を浦和高校校庭に迎えて対戦する。ラッキーセブンを生かし逆転6対5で辛勝。

6月10日 対柏壁中学

柏壁に遠征し、10対4で勝つ。

6月11日 対桐生中学

群馬県の古強者、北関東大会での優勝候補である桐生中学を本年度大会の桧舞台となる大宮球場に迎えて27対1にて敗れる。

6月11日 対熊谷中学

午後より本校々庭にて熊中と対戦、打撃戦の末19対6で勝つ。

6月18日 対熊谷中学

熊谷に遠征再び打撃戦となるも12対9で敗れた。

皇太子殿下 行啓記念優勝盃 関東中等学校 野球大会

8月22日より明治神宮球場にて今年より開催されるこの大会の埼玉県代表に川越中、浦和中が選ばれ出場した。

抽せんの結果相手チームは今春選抜初出場した桐生中で3日目第一試合と決まった。

桐生中	2	1	1	0	1	0	1	0	2	8
川越中	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1

〔桐 生 中〕

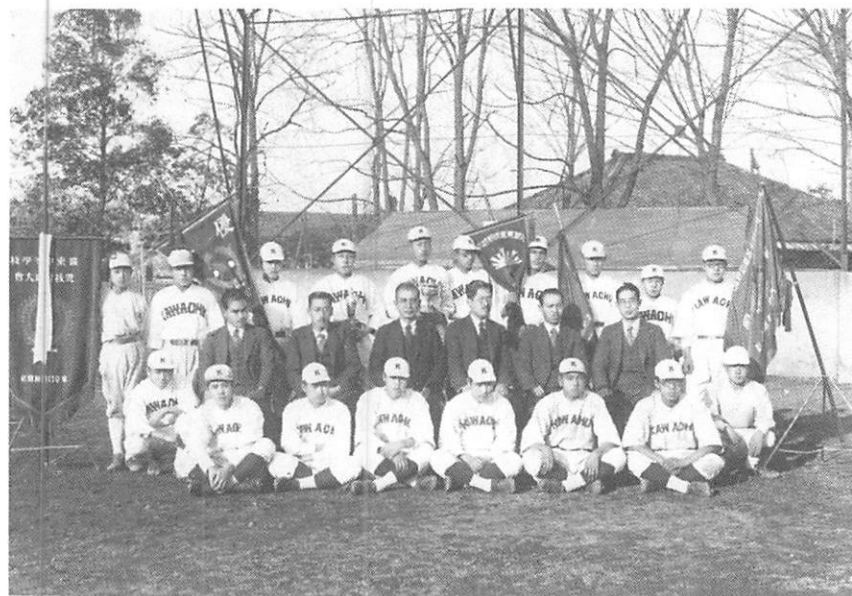
〔川 越 中〕

8	高 瀬	39打31	4	平 岡			
2	津久井	11安4	6	横 関			
6	小 林	1犠1	8	斉 藤			
3	岩 崎	1三4	1	朴			
1	伊 藤	5盗0	7	田 中			
9	鈴 木	2失5	2	増 島			
2	青 木		3	木 村			
4	高 野		5	山 本			
5	小 島		9	小 峰			
5・4	塚 越						

昭和10年卒業 (旧中学33回)

チーム雑感

伝統に輝く川越中学野球部。昨年の大会終了直後編成されたこのチームは厳冬一日の休みもなく文字通り汗みどろの猛練習。飯田部長と伊丹コーチに磨かれたナインの明朗純真なアンビションは、大会日ぞし高く捧げられている。



三列目左より 伊藤・岸野・浅野・会川・朴・佐々木・島田・大塚・清水・増島
二列目左より 平野先生・飯田部長・大谷校長・松岡教頭・保泉先生・大橋先生
一列目左より 山崎・小峯・木村・平岡・斉藤主将・三上・高橋・新藤

投手	朴 相憲	4年
捕手	大塚 敬三	4年
一塁手	木村 和夫	5年
二塁手	平岡敬一郎	5年
三塁手	岸野 利雄	3年
遊撃手	増島 隆三	3年
左翼手	小峯 敏夫	5年
中堅手	斉藤 栄	5年
右翼手	高橋 正己	5年

全国中等学校野球大会

(予選記録)

第1次予選

埼玉大会

待ちに待った大会が来た。我が野球部の慈父飯田部長、並に、以前早稲田大学野球部主将であられた伊丹安廣氏の御指導の下に、又諸先輩の御援助を受けて、過去1年間血と涙で鍛え上げた腕を、試練すべき時が来たのだ。処は緑に充ちた大宮球場に、今や県下十有余校は、あくまでスポーツ精神に則り正々堂々と戦わんとす。7月24日午前8時30分、入場式並に優勝旗返還が行われ、かくて9時15分、飯沼知事の始球式によって大

会の幕は切って落された。

川中は抽選の結果第3日目に、本庄中学対埼玉中学の勝者と顔を合わす事になったのである。

○2回戦(7月26日)

川越中	6	3	1	0	0	2	3	0	24
本庄中	0	0	0	0	0	0	0	0	0

○準決勝戦(7月28日)

川越中	0	0	1	0	0	0	0	2	0	1	4
浦和中	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	3

○決勝戦(7月29日)

川越中	3	1	1	8	0	3	5	0	2	23
豊岡実	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1

2時5分、坪井(球)磯野・戸田・

島田(壘)四氏審判の下に川中先攻に開始す。第1回(川)岸野投捕・小峰三捕、二死後斉藤三塁線上強襲安打に出で、続く朴は右翼線深く二塁打し、平岡四球を得。此の時斉藤は本盗を試み、成功して先づ1点、大塚は左翼に安打し朴・平岡生還、木村は二遊間に安打して出たが、増島の三捕に刺さる。(豊)小島(武)捕邪飛小島(三)右飛渡井中飛。第4回(川)岸野以下6安打、三つの四球敵失で一挙8点を加う。(豊)渡井の中堅後方の大飛球は斉藤顛倒して掴み向山の三捕は暴投となり二進したが、橋本二捕田中二飛。第8回(川)一死後、増島に代る三上右前安打、高橋四球と続いたが、

得点に至らず。(豊)(川中遊撃は浅野となる)小島(三)三塁線を盗いて出で、渡井四球、向山の遊脩は渡井を二塁に封殺し、小島(三)三進、雨宮の遊脩で初めて生還。雨宮は一塁失に生き向山その間三塁をついて刺され竹内三振、第9回(川)朴・大塚の安打ありて更に2点を加う。(豊)最後の攻撃も、栗原三振・代打高江野投脩・江袋遊飛で空し。

試合後直ちに輝く優勝旗は四度川中に授与され、埼玉県下大会の幕を閉じたのである。尚前橋市に於ける、北関東大会には、我が川中と豊岡実業とが埼玉の代表校として選抜されたのである。

〔豊岡実業〕			〔川 越 中〕		
5	小島(武)	33打44	5	岸 野	
3・1・3・1	小島(三)	6安23	7	小 峰	
2・3	渡 井	0犠0	8	斉 藤	
6	向 山	6三1	1	朴	
1・3・1	橋 本	3四11	4	平 岡	
2	雨 宮	4失2	2	大 塚	
9	田 中	0盗14	3	木 村	
9	竹 内		6	増 島	
8	栗 原		P・H	三 上	
4	藤 田		6	浅 野	
9	江 袋		9	高 橋	

第2次予選

北関東大会

運命の皮肉。今年も亦仇敵高崎商業と顔が合ったのである。8月2日午前8時5分より入場式。後直ちに、川中対高商戦が行われた。試合開始8時45分。審判は安芸(球)氷室・佐々木・島津(豊)四氏。

川越中	0	2	0	0	3	0	0	0	1	6
高崎商	0	0	0	1	1	4	1	0	X	7

川中先攻。第1回(川)三者凡退(高一死後相原左前安打に出たが、平井の遊脩で併殺。第2回(川)朴中前に安打し、平岡も右翼間に安打して朴三進、大塚の一脩トンネルで朴先す還る。木村四球で満塁となり、増島のバントで平岡還り、高橋右飛、岸野三脩。(高)吉井の四球のみ。第3回(川)三者凡退。(高)横川の四球のみ。第4回(川)二死後木村二塁前内野安打に出たが後援続かず。(高)一死後平井遊脩一塁低投で一挙三進し、吉井の遊撃越安打で還る。吉井二盗ならず、綱島二飛、第5回(川)高橋の四球、岸野バント送られ、小峰の二越安打斉藤の四球で一死満塁となる。朴の一打は三塁左を抜いて、高橋・小峰還り、平岡三振後大塚の三脩は内野安打となり斉藤を還す。尚満塁となったが、点とならず。(高)一死後横川・小川・宮崎四球を得て満塁となり吉川の遊脩で宮崎が封殺される間に横川生還。吉川二盗ならず。第6回(川)高橋岸野四球に続いたが、小峰三振岸野は捕手の制球に倒れ、後援なし。(高)相原四球平井左越二塁打に相原生還(川)朴一塁となり三上投手・木村退く)吉井綱島も四球で満塁となり、小池死球で平井を押し出す。(川中再び朴投手となり三上一塁に退く)小川の二脩で吉井、ボークで綱島も還り形勢逆転高商1点を勝ち越す。第7回(川)平岡四球大塚の三脩で二進したが、三上三振、平岡三盗に刺さる。(高)一死後平井左翼越二塁打を放ち、吉井四球綱島の三脩を二塁に悪送して、此の間に平井還る。第8回(川)増島の右前安打のみ。(高)無為。

第9回(川)最後の攻撃に移る。斉藤遊脩失に生き、朴の遊直で併殺され万事休したかと思われたが、平岡良く選り、大塚の遊脩は内野安打となり、走者二三進。三上の三脩は一塁への低投となり平岡生還。大塚を三塁に置き増島の一打に期待したが、遊脩して空し。時11時12分。

		打得安犠盗四失三									
岸 野	3	0	0	1	0	1	1	1	1		
小 峰	5	1	1	0	1	0	0	1			
斉 藤	4	1	0	0	1	1	0	0			
朴	5	1	2	0	0	0	0	0			
平 岡	3	2	1	0	1	2	1	1			
大 塚	5	0	2	0	2	0	0	0			
木 村	2	0	2	0	0	1	0	0			
三 上	2	0	0	0	0	0	0	1			
増 島	4	0	1	1	0	0	2	0			
高 橋	1	1	0	0	2	3	0	0			

練習試合

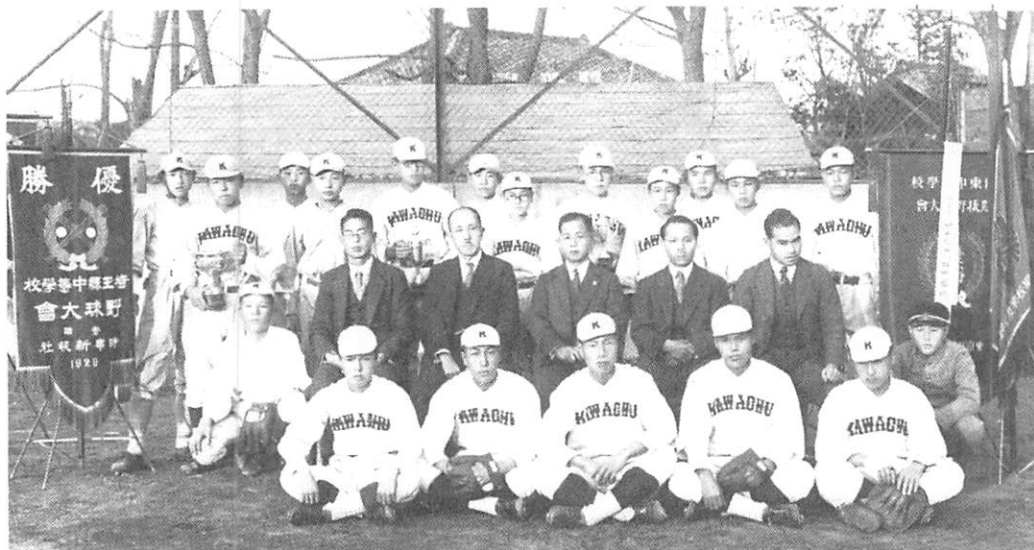
- ・11月19日 川中15－7 慶応商工
- ・11月23日 川中6－8 粕 壁 中
- ・11月23日 川中7－6 埼 玉 商
- ・11月26日 川中25－13 豊岡実業

時事新報社主催埼玉県下大会

新装成れる大宮球場に、時事新報社主催の下に、5月上旬県下大会が行われた。不幸、川中は、第1回戦に、豊岡実業と戦い、実力を発揮出来ず、遂に5－1で敗れ8月明治神宮球場で行われる全関東中等学校野球大会に参加する資格を失ったのである。

- ・6月9日 川中11－1 熊 谷 中
- ・6月10日 川中11－3 銚 子 商
- ・6月24日 川中6－5 慶応商工
- ・7月7日 川中37－1 大宮農商

昭和11年卒業 (旧中学34回)



中列左より 大橋先生・岡田先生・木原先生・小泉先生・平野先生
前列左より 浅野・会川・朴・島田・大塚 (他は在校生)

勝利の栄冠何れへ晴の大会幕開く

焼けつくような真夏の陽光の下、鉄腕を揮って大宮球場に展開される熱と意気との争覇戦、朝日新聞主催全国中等学校優勝野球大会の第一次予選県下大会は、中等学校体育連盟後援の下斉藤知事の投ずる処女球をキャッチャーミットに収める松山中学対埼玉商業の第1戦をトップに参加13校、6日間に亘る熱戦の幕が切って落され、忍苦1年、完璧に近いまでに練り上げられた新興古豪各チーム、甲子園原頭に緑の優勝旗を譲す決意から汗みどろの白熱戦を展開するであろう。北関東に送られる栄えの県代表二校はいづれか、全県ファンの人気高潮、敗るるまでも最後の一打に精魂を尽しての努力の試合を戦いぬく中等学校チームの飽

くまで真剣な態度に心から同情と敬意を払って期待と関心をこの一戦にかけ午前8時入場、前年の覇者川越中学を先頭に9校ナインが意気高らかに校旗を掲げて歩武堂々入場、ダイヤモンド一周してホームプレート正面に整列、浦中バンドの君が代吹奏各主将によってセンターポール高く国旗を掲揚ついで川中朴主将から輝く優勝旗の返還、斉藤知事の訓辞に対し川中朴主将選手一同を代表して宣誓をなし式を終って退場。午前8時55分斉藤知事によって始球式が行われ神城に反響するサイレンを合図に第一戦松中对埼玉商の試合開始となる。

参加13校中、準決勝に残った4チームによるリーグ戦が行われた。

結果は次のとおり。

浦和中	3 4 1 1 0 0 0 0 0	9
川越中	4 0 2 1 0 0 0 4 X	11
川越商	0 0 0 0 0 0 0 0 3	3
川越中	1 0 2 0 5 0 0 0 X	8

2投手を擁す豊実、遂に川中を退く。最後を飾る好試合。昨日対浦中戦に勝ち、川中は北関東出場権を獲得し、今日は県最終ゲームの優勝戦である。27日快晴午後3時より(球)磯野、(塁)津田、山科、斉藤の4氏。

川越中	1 0 0 1 0 0 0 0 0	2
豊岡実	1 0 0 0 1 1 0 0 X	3

北関東大会 準決勝で敗退

青木、朴両投手の風格ある投手戦川越中学対桐生中学の試合は3日午前10時10分より宇都宮常設球場で審判鈴木(球)稲垣、久保、3君川中先攻に開始2対1で桐生中勝閉戦0時15分。

第1回▲川中岸野、増島に連安打、大塚バンド捕飛後、朴四球で1死満塁、会川三振で2死後岸野本盗成る、島田四球で又満塁山崎右飛▲桐生中1死後皆川遊匍暴投に2進、塚越の右翼2塁打で生還、塚越は捕手牽制に刺され青木2飛、

第2回▲川中3者凡退▲桐生石田3塁線へ2塁打福間の2匍と投手牽制悪投で生還、2死後更に敵失四球で2・3塁を占めたが高橋投匍

第3回▲川中走者なし▲桐中(川中増島3塁、坂口2塁となる)1死後塚越投越安打青木2匍失3盗したが青木2盗ならず石田中飛。

第4回▲川中封ぜられて振わず。▲桐中福間2匍失2盗、2死後佐々木の投匍で3塁に刺され稲川2飛。

第5回▲川中2死後岸野2越安打2盗、増島中飛▲桐中3者凡退。

第6回▲川中大塚以下3者片づく▲桐中青木3匍失、石田の遊側安打中堅失で無死2・3進、福間遊匍清水投匍、佐々木三振で入らず。

第7回▲川中、坂口遊匍悪投で2進したが捕手牽制球に刺さる、2死後佐々木遊越安打、浅野中飛▲桐中3者凡退。

第8回▲川中好打順であったが岸野3匍、増島捕邪飛、大塚左飛▲桐中1死後青木四球2盗成らず石田三振。

第9回▲川中最後の攻撃に奮起朴三遊間安打直ぐ2盗、会川の3匍で3進、1死3塁に満場沸騰、PH清水の時スクイズ失して朴3本間に刺され清水一匍で終り2対1で桐中勝つ。

北関東大会を終わって

北関東の各チームに就いては全体的にシャープなスイングをする打者は見当らず、内野手の守備が拙い力が入ったプレーヤーでなく技巧一点張りの小さく整ってはい

るが豪快さに乏しい。八校を中心にしてピックアップすれば栃中の阿部、浦中山崎、伊工の菊池、前中の栗原を採り、捕手には桐中の短軀ながら元気な塚越と強肩な川中大塚を、一塁手には前中の伊藤を据え、二塁手は桐生中の高野か川中の平岡の中打力の強い高野を

据え三塁手は前中中島、宇実大島の中から守備力の強い大島を抜き、遊撃手は老巧、確実なスローを持つ桐中小林をもってくるとして、外野は左翼に高商の相原、中堅に桐中津久井、右翼に前中の布施を配する

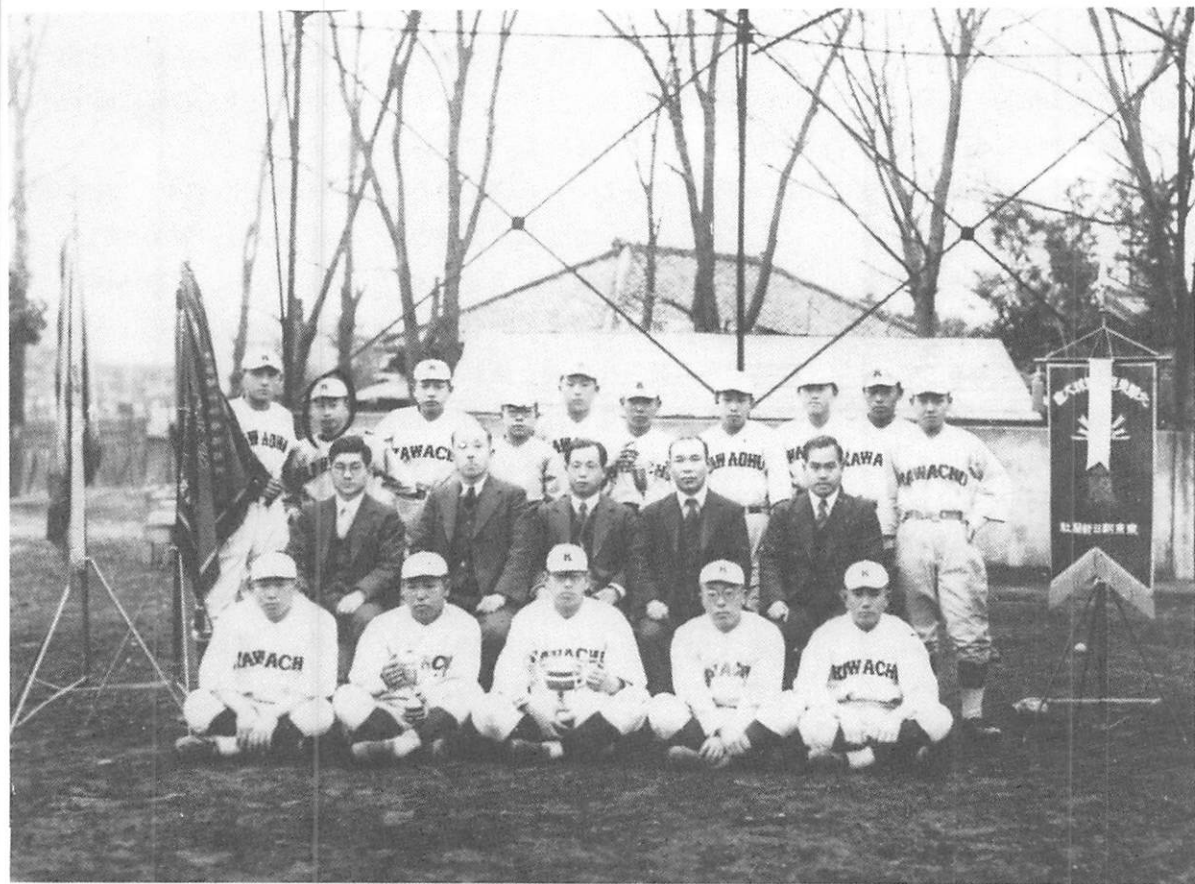
●(投)栗原(前中)、阿部(栃中)、山崎(浦中)、菊池(伊工)、●(捕)大塚(川中)、塚越(桐中)、●(一)伊藤(前中)、●(二)高野(桐中)、●(三)大島(宇実)、●(遊)小林(桐中)、●(左)相原(高商)、●(中)津久井(桐中)、●(右)布施(前中)
※(アサヒスポーツより)

昭和6年初めて甲子園の出場に選抜された為か1年生の野球部入部者が急増した。然し水汲み、球拾い、或いは先輩のスパイク磨き、バット磨きに嫌気がさしたのか退部者が続出し、遂に最後まで残った者は家村(朴相憲)君と私の2名になってしまった。この年から昭和9年まで4年連続優勝し埼玉県を制覇、10年には準優勝、11年には再び優勝、その後昭和29年に優勝、更に昭和34年に漸く西関東を制覇して甲子園の出場を決めた。

昭和9年当時埼玉県予選の出場校は13校、準決勝に残った4校でリーグ戦を行い決勝に残った2校が北関東第2次予選(群馬、栃木、埼玉)に出場8校によるトーナメント方式で甲子園出場をかけて争われた。群馬には桐生中学、高崎商業、栃木には栃木中学、宇都宮実業等強豪が犇めいており、これ等を突破する壁が厚かった。埼玉

県の強豪と言えば、浦和中学、熊谷中学、豊岡実業そして川越中学で毎年ベスト4に残る学校であった。特に川中、浦中の対決は県下の早慶戦と言われファンの血を湧かせた。優勝した昭和9年後援会の肝入りで市民による応援団が結成され、市内蓮馨寺で夜おそくまで応援の練習が行われた。試合当日は川越、大宮間のチンチン電車は鈴成り、乗れない連中は銀輪部隊を組んで大宮球場へ、約15kmの道が自転車の列で続いたという。何んとしても悔まれるのが川越球界の慈父と言われた飯田部長の死であった。部員を我が子の様に可愛いがり報給の総べてを野球部に注がれたと聞いている。先生の存命中に甲子園へ出場出来なかったことが残念である。

(旧中学35回)



で二進したが、橋本左飛、渡井遊
館。(川)山崎以下三者凡退(両軍0)

◇四回(豊)小島以下三者凡退
(川)岸野四球、佐々木三直後岸野
二盗、大熊四球、小島、山崎三振
(両軍0)

◇五回(豊)藤田二飛、吉野四球、
柳沢の遊館に吉野封殺、柳沢二盗、
橋本四球、渡井投飛失で二死満塁
となったが小島の三館に止む
(川)清水三館、山崎一飛、坂口四
球、増島三館悪投で走者一・二塁
を占めたが岸野左飛(両軍0)

◇六回(豊)三者凡退 (川)佐々木
右中間に三塁打を放ち大熊の遊館
で遊撃手三塁走者を刺そうとした
が間に合わずセーフ、大熊二進後、
小島三振、山崎(万)のスクイズー
飛となり大熊を二塁に重殺、チャ
ンスを逸す

◇七回(豊)三者凡退 (川)山崎三
館、坂口左中間二塁打、増島四球
岸野投館で坂口三塁に封殺(両軍
0)

◇八回(豊)渡井中飛、小島遊館失
江袋左飛、小島二盗ならず (川)
三者凡退

◇九回(豊)境野三振、斉藤三振、
藤田右前安打に出たが吉野遊館で
万事休す

熱斗六日間、終に優勝旗を奪還
した。翌27日は静養をし翌日より
再び練習を開始した。

(本大会1回戦、豊実72-0松中
の世界記録の一戦あり)

南 関 東 大 会

8月2日我校は組合せの結果、
神奈川県雄、横浜商業と対戦の
結果、奮戦空しく2-1で惜敗し

征覇の夢は破れた。我等は遂に故
飯田先生の御遺志を果すことも出
来ず、又諸君の期待を裏切った事
が残念でならない。

摂政賜盃関東大会

南関東大会に横浜商業に名をな
さしめた我部は、摂政賜盃に必勝
を期して神宮に向った21の組合せ
の結果、相手は名にし負う群馬代
表の桐生中学、我々は猛烈な闘志
に燃え24日午前11時50分試合を開
始した。

スコアと経過は次の通り。

桐生中	0	0	0	1	0	0	0	3	4
川越中	0	0	0	0	0	0	0	0	0

◇一回(桐)皆川捕前ゴロ、稲川遊
越安打、塚越中前テキサスに稲川
を刺し次で塚越の二盗を封じ、青
木を四球に出し、小林を遊館に喰
止む (川)山崎三振、坂口四球、
増島一館に坂口、増島併殺

◇二回(桐)三者凡退 (川)岸野投
手強襲安打に出塁、佐々木中飛、
山崎二館、坂口二飛

◇三回(桐)皆川二館以下三振
(川)山崎(万)投館、清水二遊間を
抜く安打に出たが、後援続かず
(この回まで両軍0)

◇四回(桐)二死後河内、皆川の安
打と盗塁を加えて河内を生還せし
め一点を先取され危機を脱す
(川)岸野左前安打に出た後、佐々
木三振、大熊二館失に走者一・二
塁になったが小島遊館に好機を逸
す

◇五回(桐)幾分あせり気味となり
二死後冒険して小林本塁に殺到し
たが川中小島右翼手の好投に見事
本塁に刺し、川中意気盛ん、五回

から八回まで両軍無得点)
◇九回(桐)此の回に入って強打を
浴びせ、安打2本、佐々木の二塁
打、塚越の三塁打に無念再び三点
を得させ漸く喰い止めたが川中軍
落胆せず最後まで健闘を続けた。

然し戦い利あらず無念の涙をの
んだ。

打倒桐生を目ざして最後の努力
をはらったが栄冠を桐生中学に譲
った事は残念でならない。然し乍
ら強豪桐生に対して善闘したことは
川中の意気を何分でも表示し得
たと思っている。

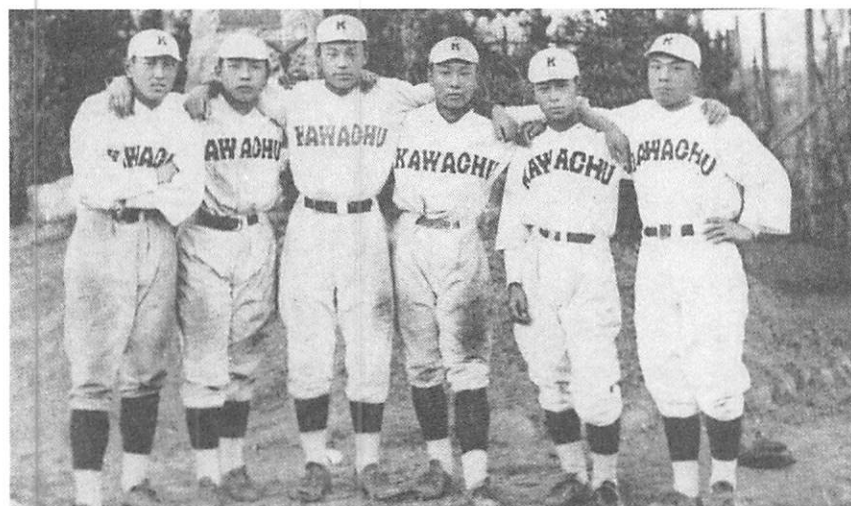
オープン戦あれこれ

- ・10月6日 川中3-6豊岡実業
 - ・10月13日 川中0-0浦和商业
 - ・11月10日 川中3-10慶応商工
- 昭和11年4月、新学期に入ると
共に、故飯田先生の後を受けられ
野球部長になられた大橋先生の松
中への御転任は我等を落胆させた
が、そのお別れの御言葉を守り、
征覇に邁進すべく、部長に梅沢先
生並びに平野先生、三上先生を戴
き、勇気づけられ猛練習を開始し
た。

新学期に入って部は、野村、橋
本、浅野、横関、中里の前途有為
の新人の入部をみて、大いに勇躍
した。

- ・4月20日 川中25-0川越商業
- ・4月26日 川中10-6熊谷中学
- ・5月10日 川中9-13浦和中学
- ・5月18日 川中43-0大宮農商
- ・6月7日 川中16-15早実
- ・6月14日 川中13-12慶応
- ・6月18日 川中11-4大宮工業

昭和13年卒業 (旧中学36回)



写真左より 大熊・山崎・島田・坂口・金子・伊藤

練習試合

①	対大宮工業	10-9
②	対豊岡実業	3-10
③	対浦和商业	0-2
④	対浦和中学	2-17
⑤	対先輩	4-6
⑥	対熊谷中学	16-7
⑦	対川越商業	11-3
⑧	川川越商業	4-6
⑨	対粕壁中学	20-3
⑩	対東京府立化学工業	3-9
⑪	対関東中学	2-2
⑫	対慶応商工	0-4
⑬	対不動岡中学	1-11
⑭	対大宮工業	3-10
⑮	対京王商業	4-13

雑感

私たちのチーム

昭和12年は日中関係が、益々きびしくなりつつある時期でしたが、幸い野球への直接の影響は無く、練習試合にも数百人の観衆が集まり、伝統ある川中野球部に応援してくれました。ただ時節を反映してか、剣道部、柔道部等で活躍する者が多く、野球部は人員の確保に苦労致していました。

前年までは向う所敵なく、川中の黄金時代でしたが、昭和12年はずいに南関東大会に出場できず、誠に残念でしたが、部長及び諸先輩方の御協力により、当時のチームなりの戦績を残せたことを感謝しております。

選手一覽

校長 木原 先生

監督 家村相太郎

部長 梅沢 先生

顧問他 平野 先生

主将 大熊喜代松

管野 2 外3名

選手氏名	学年	ポジション	寸評
坂口	5	投手	球速は不足ながら頭腦的投球
牛窪	3	捕手	3年生でも強肩
島田	5	一塁手	沈着地味な打撃で、いぶし銀の味
伊藤	5	二塁手	バッティングのセンスは抜群
清水	4	三塁手	小兵ながら華麗な守備をほこる
山崎	5	遊撃手	ひょうひょうとして、チームの励まし役
金子	5	左翼手	内に秘めたる闘志は強烈
大熊	5	中堅手	主将兼4番打者として、チームのリーダー
会川	4	左翼手	控え投手として、制球力豊か
大野	4	補欠	がんちゃん愛称で人気
松崎	4	〃	転校生のため残念乍ら、今年はお場できず
野村	4	〃	
内田	3	〃	
中里	3	〃	
山崎	3	〃	

全国中等学校野球大会 第一次選 埼玉県大会

◀対大宮工業▶

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
大宮工	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
川越中	0	0	0	1	0	6	1	1	X	9

待望の大会の日が来た。第一戦は皮肉にも大会前の練習試合で1勝1敗であった大宮工業、今度が決勝戦という形になった。戦前の予想は6分・4分で大宮工業が有利となっていたが、我々は落着いて試合に望む。

戦は開始された。2回川中が美事な併殺のあと、大宮工業は3本の連続ヒットを放ち、1点を先取したが、4回本校も2つの四球と山崎の左前安打で、同点とし、試合は白熱化したが、6回本校は、坂口・島田四球、山崎は2飛に倒れたが、牛窪の遊失で一死満塁とし、会川の代打中里の四球で坂口を押し出し、金子の遊失に島田も還り、なお満塁の時、清水の左翼を襲ったライナーは、野手目測を誤り、決定的な三塁打となり、続く伊藤の安打に清水も還り、この回一挙6点をあげ勝利を決定した。

◀対浦和商业▶

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
浦和商	2	2	0	0	0	2	0	0	0	6
川越中	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2

第2戦は対浦商戦、昨日の余勢をかって一挙にこれを敗らんものと我等川中奮起して戦う。しかし浦商は1回3本のヒットで2点をあげ更に2回2本の単打と1本の3塁打により、更に2点をあげ先制された。これに対して我等も3回敵失と2つの四球及び金子の中前安打で1点を返したが、その後氣勢あがらず、勢にのった敵は6回更に4本の安打を集中して、又も2点を加えた。然し我等も最後まで試合をすてず、9回の攻撃に牛窪三振の後、会川の代打中里遊撃内野安打、金子2飛の後清水3塁ベースより2塁打して中里還り、あわや逆転するかと思われたが、伊藤の左翼を襲った大飛球を逆シングルでキャッチされる美技にあい、遂に雄図は挫折した。

○ 川越中 メンバー

	氏名	打数	得点	安打	四球	三振
⑥	清水	4	1	1	1	0
④	伊藤	4	0	2	1	1
⑧	大熊	5	1	1	0	1
①	坂口	3	1	2	2	0
③	島田	3	2	0	2	1
⑤	山崎	5	0	3	0	0
②	牛窪	5	2	1	0	0
⑨	会川	2	1	0	2	1
⑦	金子	4	1	1	0	1
	合計	35	11	8	5	4

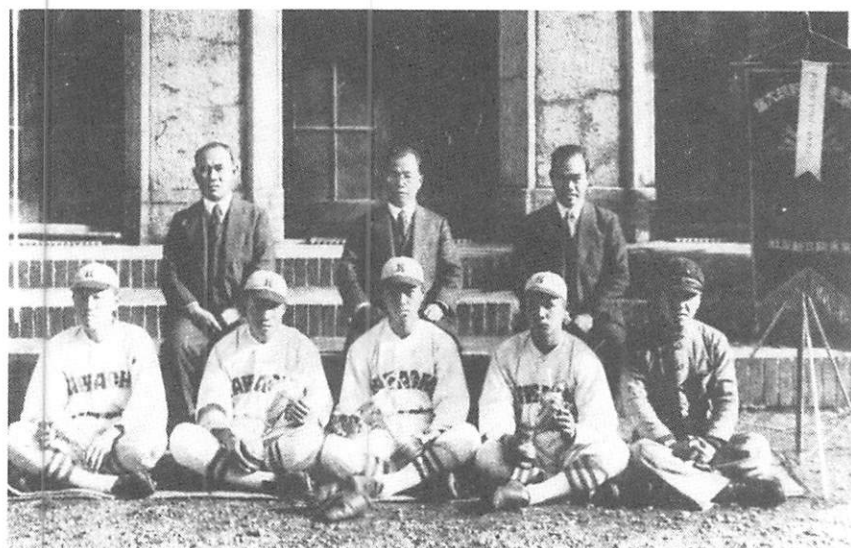
○ 川越中 メンバー

	氏名	打数	得点	安打	四球	三振
⑥	清水	5	0	1	0	0
④	伊藤	5	0	1	0	0
⑧	大熊	4	0	1	0	0
①	坂口	1	0	0	3	0
③	島田	4	0	0	0	1
⑤	山崎	4	0	1	0	0
②	牛窪	3	0	0	1	1
⑨	会川	3	2	1	1	0
⑦	金子	2	0	1	2	0
	合計	31	2	6	7	2

○ 大宮工業 34 1 5 2 2

○ 浦和商业 39 6 10 3 3

昭和14年卒業 (旧中学37回)



後列左より 梅沢先生・木原校長・平野先生
前列左より 会川投手・清水三塁手(物故)・
大原遊撃手(旧姓松崎)・大野中堅手
伊原マネージャー(物故)

県下 中等学校野球大会

・第1回戦

浦和中	0 0 3 0 4 0 0 0	7
川越中	0 0 1 0 5 0 2 X	8

(日没により8回コールド)

二塁打 川村、野上(浦中)

三塁打 菅野(川中)

試合経過

我等待望久しき大会は、愈々昭和13年7月22日緑深き大宮球場で、初日第4試合に宿敵浦中と対戦、試合開始午後5時55分、先攻の浦中は毎回ランナーを出し、3回には2つの四球と2安打、3敵失に3点を挙げ、更に5回3安打で、4点を加えて、合計7点をあげれば、之に反し川中は1回、2回得

点なく3回ようやく1点をかえしたのみであったが、俄然5回に至りその猛攻の火蓋を切った。この回トップ清水まず四球に出、中里投匍失、松崎四球、牛窪、菅野又四球で、清水、中里還り、会川遊匍失に、松崎還り大野、渡井四球に菅野、会川も還りこの回5点を加え7対6とその差1点にせまり、7回菅野の三塁打の後会川左飛にやんだが続く大野四球に出、投手けん制球暴投に菅野、大野生還し、逆転1点勝越した。この時既に時間は午後7時、場内はマッチの火がみえる程の暗やみとなり、暗黒の空からは今にも降り出しそう。遂に試合続行不可能となり、8回にてコールドゲームで勝った。

チーム編成メンバー

選手氏名	学年	守備位置	打順
清水正一◎	5	三塁手	1
会川正良	5	投手	6
松崎 肇	5	遊撃手	3
大野賢吾	5	中堅手	7
牛窪栄吉	4	捕手	4
中里光男	3	二塁手	2
山崎 清	3	一塁手	9
渡井民雄◎	3	右翼手	8
菅野繁利◎	2	左翼手	5

(◎印は物故者)

・第2回戦(準々決勝)

大宮工	0 0 0 0 0 0 0 0 2	2
川越中	4 5 0 0 0 0 0 0 X	9

二塁打 内田、小島、出口(大工)

大野(川中)

三塁打 出口(大工)

試合経過

第2戦は、大宮工業、戦前の予想は七分三分、大宮工業絶対的優勢南関東でも優勝候補に挙げられている程であった。ところが劈頭より猛攻を重ね、安打12本、四死球14を以て9点を獲得し、守っては会川投手の緩急を織り交ぜた投球に加え、水ももらさぬ鉄壁の守備で、9安打の散発2点におさえ戦前の予想を美事に、くつがえし、9対2で大勝した。

・第3回戦（準決勝）

浦和商	00000312004	10
川越中	00100320000	6
二塁打	会川、清水(川中)	
三塁打	大野(川中)	

試合経過

愈々明くれば7月24日、今日こそ昨年うらみ浦商しかも準決勝勝だ。我等は今日の日を待って居たのだ。試合開始午後零時5分浦商の先攻で試合の幕は切っておとされた。5回まで浦商得点なし。これに反し川中3回に早くも1点を挙げた。6回浦商会川投手の疲れに乗じて3点をあげれば、その裏川中大野の三塁打、清水の二塁打、会川の単打で3点かえして依然リード、7回浦商更に1点を加えて同点とすれば、川中も2点をかえして2点のリード。8回更に浦商2点を加えて同点となり9回を終る。延長戦に入り、11回浦商会川投手の乱れに乗じ4点を加えて勝敗を決し、その裏川中の追撃も空しく遂に10対6で敗れた。かくして昭和13年度の野球史は終了しました。終りにこの一年間練習に試合にご援助ご指導を頂きました諸先輩の方々に感謝いたします。

埼玉球児の森大宮球場完成

—神宮球場をモデルに—

県内初の本格的球場として「県営大宮球場」が、昭和7年春に産声を上げた。それまで浦和中（現浦和高）のグラウンドなどで、フェンス代わりにひもを張りめぐらせた“にわか球場”で代表決定戦を行っていた時代であったため、新球場の出現に、胸おどらせた当時の球児の感想が、読売新聞（昭和55年7月11日）に掲載されているので紹介します。

・第18回全国中等学校野球県予選に参加したのは13校。この中でもずば抜けた実力を持っていたのは、前年の春、県勢として初めて甲子園の土を踏んだ川越中（川越高）だった。1回戦で松山中を23－2といっしゅう、猛打でその後も順調に勝ち進み、決勝で埼玉商（深谷商）を4－3でくだった。しかし、北関東大会では高崎商に敗れ、惜しくも甲子園へは行けなかったが、当時5年生で外野手だった斉藤富吉さん（故人・毛呂山町）は「埼玉にもいいグラウンドができたと大喜びでした。新しいスタンドをパンカラ応援団が埋め、大声を張り上げて声援してくれたのを覚えています。また、当時は三振するのは恥という考えが強く、当てる打法がはばをきかせ、一発ねらってやろうという気持

ちはなかった。だから球場が狭いと感じたことはなかったですね」と話す。新球場の恩恵を一番受けたのが内野手だった。川越中の遊撃手だった指圧師横関夏夫さん（川越市）は「何しろそれまでは、みんなでグラウンドの石拾いした後。試合に臨んだ。それでもイレギュラーバウンドはあとをたたず、苦労しました。大宮の整備されたグラウンドを見て『これで安心してプレーできる』とホッとしたもんです」と当時を振り返る。川越中は翌年も県予選で優勝、この時、横関さんは主将として選手宣誓をした。

昭和15年卒業

(旧中学38回)



一列目左より 平野先生・牛窪・梅沢先生
二列目左より 松津・山中・浅井・平岡・土屋
三列目左より 小島・内田・中沢・島田・菅野・野村・中里・島村・山崎

チーム編成メンバー

牛窪	栄吉	5年	捕手
中里	光男	4年	遊撃手
山崎	清	4年	投手
中沢	駒衛	4年	〃
野村	昌次	4年	一塁手
島田	省三	4年	三塁手
小島	了	4年	二塁手
渡井	民雄	4年	外野手
内田	永	4年	内野手
菅野	繁利	3年	中堅手
松津	修造	3年	内野手控
平岡	金三郎	3年	〃
土屋	亮晃	2年	〃
山中	俊弘	2年	〃

昭和14年度の最初の試合は4月25日、大宮球場に於いて、大宮工業と行われ3対1で快勝した。

川越中	0 0 0 0 0 0 0 3 0	3
大宮工	0 1 0 0 0 0 0 0 0	1

4月30日、県北の雄不動岡中を本校グラウンドに迎えて対戦し、11対3で敗れる。(不動岡中投手は先年亡くなられた上尾高校監督野本嘉一郎君)

5月7日、我等が球師故飯田先生並びに森山先輩の慰霊祭及び追悼試合を先輩チームと行い、12対7で敗れる。(先輩チームは、山本三郎氏外、綿貫、久米原、斉藤

(栄)、斉藤(富)、家村、大塚、佐々木氏と錚々たるメンバーであったと記憶す)

5月14日、春雨煙る豊岡実業グラウンドに於いて、千葉県が強豪千葉商業と対戦し、13対2で敗れる。

〔川越中〕

⑥ 中里	31打37
⑦ 渡井	2得13
② 牛窪	4安5
⑧ 菅野	6四12
⑨ 山崎	6三4
③ 内田	
⑤ 島田	
① 中沢	
④ 山中	
二塁打	牛窪(川)

〔千葉商〕

⑥ 佐藤	
⑦ 中島	
⑤ 鈴木	
⑧ 内山	
① 小川	
⑨ 浜口	
④ 白井	
② 秋葉	
④ 高山	

(千葉商投手は後に明大へ進学、プロ野球国鉄スワローズで活躍した小川善二氏)

5月21日、大宮球場に於いて、大宮農商と対戦し、12対7で敗れる。

5月28日、大宮球場に於いて浦中と対戦、8対4で敗れる。

5月28日、午後豊実と対戦、川中投手不調、6対1で敗れる。

6月1日、川商グラウンドに於いて、川商と対戦し、猛打爆発し、16対0で大勝す。

6月11日、前日の余勢をかって、宿敵浦商と対戦し、一昨年から久

しぶりに9対7で雪辱す。

〔川越中〕

- ⑥ 中 里 33打43
- ④ 山 中 9得7
- ② 牛 窪 7安8
- ⑧ 菅 野 10四14
- ③ 山 崎 8三4
- ① 中 沢
- ⑤ 小 島
- ⑦ 島 田
- ⑨ 渡 井
- 三塁打 菅野(2)
- 二塁打 牛窪

〔浦和商〕

- ⑥ 森 田
- ① 新 井
- ⑤ 戸 田
- ⑧ 野 口
- ④ 永 田
- ⑦ 阿 部
- ⑨ 国 松
- ③ 相 川
- ② 加 藤

7月20日、帝都の雄、京王商を本校グラウンドに迎えて対戦し、川

中健闘及ばず5対1で敗れる。



第27回全国大会予選降雨のためノーゲーム再試合で敗れる

昭和14年7月22日、緑濃き神域県営大宮球場に於いて開催される。我が川越中の対戦相手は、県北の雄、熊谷中学で試合は午前10時30分熊中先攻で開催され、熊中1・2回何れも無得点に終る。

これに引換え、川中は1回早くも1安打5四球で5点を挙げ、氣勢大いに上がり、続く2回も1安打4四球で3点を挙げ圧倒していたが、3回表熊中攻撃中降雨激しくなり、試合続行不可能のため、遂にノーゲームとなる。翌23日も終日雨のため延期され、翌24日再試合となる。前々日の余勢をかって、勝利を期して試合前の練習をしていた私達に突然不幸な知らせが届いた。それは、われわれが柱と頼む主戦投手(左腕)山崎の投球不能の知らせであった。主戦投手の故障は全員の士気に影響しない筈はなく、止むを得ず、中沢の

右腕に託する以外になかった。

しかし突然のアクシデントにより急拠登板した中沢投手も不調で前半7点を先取され、後半必死の追撃も及ばず、8対4で敗れ、我等の雄図は遂に初戦で碎かれた訳です。

熊谷中	3	1	1	3	0	0	0	0	1	8
川越中	0	0	0	0	0	0	2	0	2	4

〔熊谷中〕

- ⑥ 坂 田 35打32
- ⑧ 山 崎 8得4
- ① 大沢(兄) 6安7
- ③ 奥野(主) 14四14
- ② 荒 岡 4三6
- ⑤ 鎌 田 3盗3
- ⑨ 清 水 2失3
- ⑦ 金 子
- ④ 大沢(弟)
- ⑥ 中 里
- ⑤ 山 中
- ② 牛窪(主)
- ⑧ 菅 野
- ⑦ 山 崎
- ① 中 沢
- ④ 小 島
- ③ 野 村
- ⑨ 渡 井
- 二塁打 荒岡(熊)、渡井(川)

今にして思うに、約半世紀前の私達の世代は、野球部に入る事は

甲子園に行くんだ、と言う宿命(十字架)を背負わされていた感同します。当時を考えると指導して下さった先輩は常に、歴史と伝統と言う言葉を使われたと覚えております。野球部の歴史と言っても、昭和6年春選抜で甲子園に出場したくらいでした。私はこの紙面を借りて一言申し上げたい。後輩諸君に望むことは、学校教育の一環として、3年間の学生生活に於けるクラブ活動として諸君は野球を選ばれたことと思います。野球と言うスポーツを通じて、心身を鍛練し、勿論技術の向上を上回る事も結構だが、只技術の向上と勝利のみにこだわらず、立派な人間に育って頂きたい。そして日頃の訓練の結果が勝利に結びつければよいのであって、クラブ活動を通じて、高校生活が満喫出来たら最高の幸せと思います。(牛窪記)

昭和16年卒業

(旧中学39回)



県予選は7月20日から、県営大宮球場で行われました。結果は、1回戦で浦和商业に4-0で敗れました。

何しろ48年も昔のことですし、昭和18年から20年まで兵役、その後は戦後の厳しい生活など、強烈な経験があったので、なかなか当時のことが思い出せません。

たまたま1月25日、川越在住の山崎清君(投手)に会って記憶をたどったのですが、何としても第1回戦で敗けた後遺症が邪魔をして、思うような事実ができませんでした。

ただ、5月に浦和へ日帰り遠征

して、二試合勝ってきたこと、また6月には千葉へ一泊遠征して、千葉商(小川投手後に明大、大映で活躍、がいて、甲子園出場)と接戦で負け、関東中(二次予選千葉代表)には楽に勝った、ことを思い出しました。それで県予選へは相当の自信を持って望んだわけです。

当時の監督は山本三郎先輩で、厳しい指導でしたが、今思い返してみると、随分合理的に考えた練習方法で、特訓に次ぐ特訓というようなことはありませんでした。今日でも十分通用する練習だったと思っています。(中里記)

チーム編成メンバー

校長 木原元三
部長 平野久
監督 山本三郎

氏名	学年	ポジション
山崎 清	5	投手
中里 光男	5	捕手
小島 了	5	一塁手
渡井 民雄		二塁手
管野 繁利	4	三塁手
松津 修造	4	遊撃手
野村 昌次	5	左翼手
島田 省三	5	中堅手
中沢 駒衛	5	右翼手

第 8 回（昭和 6 年）選 拔 大 会 — 県 下 初 の 甲 子 園 出 場 —

昭和 6 年、県下で初めて夢の甲子園に出場した川越中学。全国大会の初舞台を踏んだ当時は、西日本勢に強豪がひしめき、関東東北は野球不振の時代であったが、そんななかで選抜の栄誉に浴すこととなった。開会式では、参加 19 校のうち、一番遠距離からの出場校ということで、計らずも選手宣誓を行う大任にも選ばれた。そこで毎日新聞社発行の“選抜高校野球大会 30 年史”から、昭和 6 年の第 8 回大会の記事を抜粋しました。

日進月歩、いよいよ実力と純情がおり重って快心のプレー呼ぶセンバツ野球はこの大会からまた一つの転機を迎えた。それは新進チームのすさまじき台頭であり、新鋭の迫力に満ちた戦いぶりは蒼空高き甲子園にひときわの新鮮味を盛った。出場チームは 19 校、4 月 1 日から開幕されたが伝統の第一神港、広島商、松山商、和歌山中に中京商、八尾中の新進の活躍は連日スタンドをわかし、ついに最後の一戦は広島商一中京商で争うことになった。またこの大会は清らかなリズムが連日の激戦を柔かい感触でつつんだ。まず“大会の歌”がつくられたのがそれであり、さらに出場 19 校の校歌がレコードに吹きこまれ、当該チームの試合の合い間に吹奏されて若人にひときわの感動をうえつけたが、大会の歌はいまなお愛唱されるセンバツ大会歌の陽

は舞い上る甲子園……”と表裏裏一体をなすもので、作詞は当時新進作家として麗筆をふるい、しかも林不忘、谷譲次、牧逸馬と 1 人 3 つの名を使い、時代ものの、現代ものの、探偵ものを書きわけた長谷川海太郎氏が若きスポーツマンの意気をたたえたもので

蒼空高き甲子園

桜に香う風裂きて 熱球砂
を噛むところ

みよや^ま光^あ榮^はの陽は踊る

う大会 う大毎 ラララ…
と若人の情熱をうたいこんでいる。

かくして大会は第 1 日 6 万の観衆を集めて熱戦の火ぶたを切った。古豪があくまで伝統に生きぬいて依然王座をねらいつづけ、新鋭が張り切れるばかりの闘志で体当たりする激戦はいよいよ日を追って白熱した。

まず、広島商は第 2 日坂出商との試合で灰山（慶応一広島）の快腕冴え、ノーヒット・ノーランに押え貫録をみせ、また鶴岡（法政一南海）の美技はマンモス球場をゆるがせた。ついで松山商を 3－0 で降し、準決勝で八尾と一進一退の乱戦を演じたがよく 10－8 で破った。

一方新進の中京は神港、和歌山中の名門をなで切り、惑星の魅力を攻守に発散させた。中京が対神港戦にみせた試合ぶりは好球必打、第 1 ストライクから

積極的に出て、また無死でもすきあるとみれば盗塁し、さらに意表のセーフティバンドでかく乱するなど足と打を生かした立体戦法は早くも中京旋風をまき起し、準決勝の対和中戦でも強打、好走、あざやかに先制攻撃の妙を発揮して快勝した。

かくて優勝戦は古豪広島商、新進中京商の争いとなった。その前夜栄冠とアメリカ見学をかけた両チームにあいつぐ激励電報が寄せられたが、なかでも、広島商には“勝て、渡米せよ、歓迎せん……桑港広島県人会”中京商には“負けるな渡米を待つ……桑港愛知会”

と海の向うの声援ぶりが注目を引いた。広島商 2－0 で新進中京商を破る。中京商はあえなく初優勝の夢が破れたが、のびる新鋭の芽は本大会を機にグッと根を張り、やがて中京商の黄金時代を迎えるのである。

本大会でまた新機軸が生まれた。背番号の採用がそれだ。これは日本球界の新生面を切り開いたもの……と当時好評を博したが、背番号の生みの親はセンバツから……というところ。優勝校はどこかの懸賞募集で投票数が三十万を突破したのも新記録、そして正解者は 5 万 8 千余に上り、抽選の結果 1085 名に賞を贈った。野球熱の盛んなること、この懸賞に現われるということろだ。

昭和17年卒業 (旧中学40回)



松 津 菅 野 平 岡
平野先生 岡田先生

宣誓ノ輝く皇紀二千六百一年 この意義ある大会に……

この年の5年生は、主将の菅野繁利と平岡金三郎それに私（松津修造）の3名でした。このうち私は3年生の秋、平岡は4年になってからの入部（当時は戦時色を反映し各クラブは〇〇班と称していたが）で、この年のチームは、菅野のワンマンチームであったといっているでしょう。彼は1年生がらレギュラーとして夏の大会にも出場し、2年生では既にクリーンナップを打ったスラッガーで、練習でも軽く剣道場の屋根や階段教室を軽く直撃していました。春になってからピッチャーをやっていた山中君（3年）が退学したため、守備位置の大移動が行なわれ、菅野がセンターからピッチャーに、私がショートからキャッチャーに回り、急造のバッテリーを組んで

大会に臨むことになりました。

最上級生としてのこの年は色々と思い出もありますが、特に夏の大会前、山本さん（監督）の計らいでコーチに來られた立教大学の現役選手の中に、後にプロ野球阪急・近鉄の監督をされ今年野球殿堂入りを果たされた西本幸雄さん（一塁手）が居られ、親しくご指導を受けたことが、後々自慢の種にも楽しい思い出にもなりました。

夏の大会は8月2日から4日間県営大宮球場で行なわれました。戦中野球の一端を偲ぶさすがにこの大会での宣誓文を紹介しておきます。「輝く皇紀二千六百一年この意義ある本年度の大会に参加するを得たるは我等の感銘何ものかこれに過ぎん。我等は皇国民錬成の本旨に則り飽くまで純正且堂々

第27回埼玉大会(戦績表)

●1回戦

不動岡中4－5川越商
大宮農商5－4埼玉中
熊谷中6－2本庄中
浦和商11－0川口工
大宮工2－0浦和中

●2回戦

川越中9－4川越商
豊岡実4－7大宮農
熊谷中0－13浦和商
粕壁中1－15大宮工

●準決勝戦

川越中1－0大宮農
浦和商0－4大宮工

●決勝戦

川越中3－4大宮工

の陣を伸べものと銃後青年学徒たるの本領を発揮せんとす。右宣誓す。」

この大会の出場13校と総合結果は上記のとおりでした。

○二回戦(対川越商業)

川越中	1	4	0	1	0	0	0	0	3	9
川越商	0	0	1	2	0	0	0	0	1	4

初戦の対戦相手は前年度の優勝校でしたが、よく練習試合もしていましたので比較的楽な気持ちで試合に臨めました。しかしこの試合の菅野は、新聞評では頭腦的ピッチングと書かれていましたが、珍らしくコントロールが悪く、ひやひやする場面も少なくありませんでした。この試合を決めた二回と九回の攻撃の模様を紹介します。

二回、山下四球、捕逸で二進平岡の左前安打で山下生還、松津二越二塁打して平岡還り、島村四球菅野三遊間安打で満塁、土屋(義)三遊間安打で松津還り、徳田打者

九回、栗原無死で四球、山下の遊ゴロで二封されたが平岡も四球、ボークで二・三進、松津も四球で満塁となり島村の一ゴロは山下を還し、菅野三遊間安打を放って平岡、松津一挙生還。

[illegible]

中等学校の試合にはいつもこの
熱と意気が望まれる。」

評にもあるようにチャンスがありながら点の取れない試合でした。4回は一死満塁、8回には無死満塁というチャンスがありましたが得点ができず9回裏を迎えました。この回平岡三飛、一死後松津左中間安打に出、島村三振の時二盗に成功、続く菅野敬遠の四球、このチャンスに四番土屋(義)第一球三遊間を抜く安打を放ち松津二塁から長駆本塁を突き貴重な一点を上げた。このサヨナラのホームインは私の中学時代の最高の思い出となりました。



○ 決勝戦 (対大宮工業)

大宮工	0	0	0	0	0	3	1	0	0	4
川越中	2	1	0	0	0	0	0	0	0	3

二回 大工三者凡退▼川中山下四
球に出て平岡の犠打と松津の遊ゴ
ロで三進、捕逸で一点を加う。

三回から大工は投手相倉となる。

六回、大工長塚死球小松の犠打に二進、柏倉遊ゴロ失で長塚三進柏倉は直ちに二盗、本田三前スクイズ野選で長塚生還走者一三塁、本田二盗、続く村松の一前スクイズは内野安打となり柏倉生還、出口左前安田で本田還り同点、続く小島四球で満塁となったが遊佐投ゴロで村松本封石川は中飛

七回、長塚二直失、捕逸と小松の
犠打で三進、柏倉の遊ゴロ失で生
還一点を勝越す、本田三ゴロで柏
倉二封村松の左前安打と出口の三
ゴロ失で満塁となったが小島三ゴ
ロ▼川中栗原三越安打に出たが投
手牽制に刺され山下、平岡凡退
九回、大工三者凡退▼川中徳田右
中間二塁打、土屋(晃)遊飛栗原四
球で走者一二塁の好機を迎えたが
山下三ゴロで徳田三封、平岡の三
ゴロで栗原三封で万事休した。

この大会が行なわれる前、優勝候補と目されていた大宮工と練習

試合を行いました、この時監督のアドバイスで菅野は得意とするカーブを一球も投げませんでした。決勝戦では先取点とこのカーブでかわす好投で前半はチャンスらしいチャンスも与えず、勝ちムードで後半を迎えました。大宮工は途中投手を交替させましたが、当方は菅野に替る投手は居りません。さすがの菅野もダブルヘッダー後半ともなるとカーブの切れがやや鈍ってきました。それにも増して私を初め内野が皆で彼の足を引っぱる結果となり遂に逆転を許してしまいました。九回も最後まで再逆転を計りましたが果せず、優勝の夢は実現できませんでした。

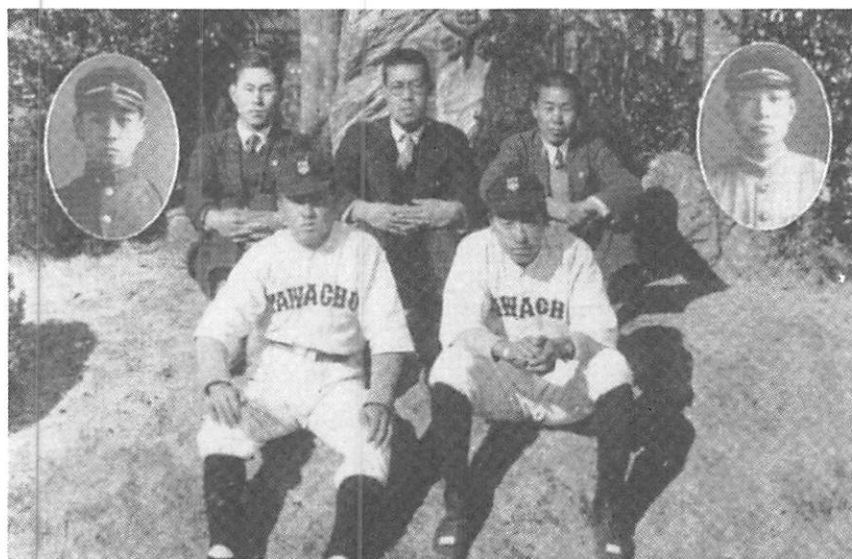
しかも5年ぶりに出場権を獲得した南関東大会及び甲子園大会は戦争に邁進する政府の政策によりこの県大会終了後、残念ながら中止されることに決定されました。そしてこの年の12月8日大東亜戦争に突入し、全国大会は終戦まで5年間中断されることになりました。

最後になりましたがこの大会の総評でも最も秀れた投手として激賞され、今のような時代であれば、六大学あるいはプロ野球で大活躍したであろう菅野繁利が、終戦直後病に倒れて早逝され、以後その勇姿に接することができませんでした。これが楽しかった野球生活の中で、ただ一つ悲しい思い出として残っております。

[illegible]

昭和18年卒業

(旧中学41回)



平野先生 鈴木先生 岡田先生
榊 詢 徳田 健吉 土屋 亮晃 嶋村茂吉

記念誌の趣旨に添わないだろうが、学校の図書館にも昭和14年から生徒会報は保存されてないようだし、私の微かな記憶によれば、(後述のとおり) 私たち年代で戦前の中高等学校野球は終止符を打ったことを考えると、どうしても背景となった歴史の流れをも述べねばならない。

私たちは、昭和13年(1938)4月憧れの川越中学校に入学した。

その年は春が遅かったのだろう。通用門の老桜は爛漫として咲き、私たちの前途を祝福してくれるかのように思われた。

授業とは言えば、田舎の小学校では聞いた事のない名口調の講義に、いつしかうつら。しかし、鐘つき堂の昼を知らせる音に不思議にぱっちり覚めた。そして、きまって校門付近を眺めるのだった。

それは、若い奥様が、和服姿でお弁当を紫の風呂敷に入れ、いそいそと門に入るのを待つためであり、そこで先生は授業を終りにしてくれたからだった。

のどかで、平安な毎日だった。

しかし、昭和12年(1937)に始まった日中戦争は、ますます拡大し、わが国は急激に戦争への道を進んで行った。

昭和15年(1940)は、皇紀2600年、正に国民仰望の年とされた。たまたま私の保存する学友会報36号(昭和16年発行、37号まで発刊され、それ以後は、報国団報(?)となったと思うが)では「悠久2600年国史の展開止む所を知らず、我が大和民族は歓喜に浸った。」と述べている。しかし、当時の名校長木原元三氏は、年頭の辞(同会報)で「本年は愈々多難を覚悟すべき

である。且又国際関係に於ては独伊と結盟成って、帝国の進むべき道が明らかとなったが、(昭和15年3月防共協定締結)其の結果対米関係の緊迫を来とし、対蘇関係必ずしも楽観は出来ず。」(ちなみに、昭和13年5月ノモンハン事件、ヨーロッパは9月には第二次世界大戦に突入)と述べ、早くも昭和16年12月8日米開戦、そして、あの悲惨極まりない太平洋戦争を予知されていたのだろうか。(要点の一部記載上文()内は筆者補筆)

国民は、国の報ずる戦果に歓喜したが、日々増す物資の不足は目に見えて多くなっていった。

こうした戦争の影響は、当然のことスポーツ界にも及んだ。このことは前年度の方が書かれたと思うので簡略に記すれば、甲子園球場での全国大会は、昭和16年7月中旬の文部次官通達によって、突然禁止されるに至り、球児の熱意と関係者の努力によって、漸く県大会と関東大会のみという形となり、ここに、中等球児の甲子園への夢は全く断たれたのである。

さて、前文が長過ぎてしまったが、私に課せられた昭和17年度(1942)の経過や変革などのことに移らせていただく。

この年度は、前述のように確かに中学校野球終焉の年だっただけにさまざまなことが起った。

太平洋戦争も2年目を迎え、ますます資材は不足、誰が考えたのか未だに不明だし、どれ程の節約

になったか判らないが、ボールが従来より一回り小さいいわゆる中等新球に変わった。(何か私の記憶では、前年からではなかったかと思うが埼玉県高校野球史ではこう記録している。)

このボールには小さくなったのだから割合早く慣れた。しかし、入手もむずかしいので守備練習には古いものを使った。もっともあちこちが破れた、いわゆるプロペラボールと言われるものだったが。勿論、芯を巻く糸が悪いせいか飛距離も短かった。

改変の第二はスパイクの禁止だった。したがって運動靴の使用となったが、練習には白黒別々のものを履いている者もいるという笑えない事実もあった。

とにかく、スパイクと違って運動靴は、俊敏・果敢を要する屋外スポーツには不向だった。守備や走塁でも珍プレーの続出も止むを得なかった。たとえ甲子園はなくとも、どんな困難があろうとも、選手は懸命に練習に励んだ。先輩からあびるノックに倒れ水をかけられれば再び立ち上った。

これらを余所に物資の不足は食料にも及び、未だ校庭は畑にされなかったが、荒川沿いを開拓し、さつま芋造りが始まり帰途はグラウンド用の砂を袋一杯持ち帰った。

それでも荒川は清らかに悠悠として流れ、あたりは桜草で一杯だったし、夏の夕顔も美しかった。

さて、思い出すままに当時のメンバーと戦果に移る。

前年、菅野、松津、平岡先輩を擁し、私が入学以来初の決勝戦ま

で進んだのだが、新チーム結成にあたり思わぬ苦難に突き当たった。それはある事情による島村、榊、中里君の退部だった。それに卒業生が名手だったことにもあり、再編成は早くも暗礁に乗り上げた船同然だった。苦慮の末にも幸いにして徳田君の明朗で強い精神力と、後輩ながら智将土屋義夫君の力によって組まれたのが次のメンバーである。

部長 平野久先生

投 金子高析、捕 栗原秀夫

一 伊橋 昭、二 黒 濟

三 山下昌一、遊 土屋義夫

左 徳田健一、中 土屋亮晃

右 菊岡 関、名坂 等

戦果としては、練習試合等はほとんど記録になく県大会のみ記す。

埼玉県大会 7月23日より、

〔1回戦〕 於大宮球場

川 中	0 2 4 0 0 0 0 0 3	9
熊 中	0 0 0 0 0 0 0 0 0	0

〔2回戦〕

川 中	0 0 0 0 0 5 0 0 0	5
浦 商	3 0 0 0 0 0 0 0 0	3

1回3点を先取されたが、以後金子の好投と、金子・伊橋・栗原の長打で6回逆転した試合

〔準決勝〕

川 中	0 0 0 0 0 0 0 0 0	0
大 工	0 1 0 0 0 0 1 0 X	2

2回大工は、満塁犠打で1点、本校も6回柏倉投手に連打を浴びせたが、大工の好守に阻まれ、逆に7回致命的な1点を失ないまたしても大宮工業の前に屈した。

次いで多くの球友たちのことに触れたいが紙数も少なくなったので、若くして散った2人の球友の

ことを、どうしても述べたい。

同僚、中里弘君のこと。彼は先輩光男氏の弟である。立派な御家庭に育ったせいか、何事も応揚で温厚な性格だった。それでいて妙に人を引きつけた。性格的には私とは反対な面が多かったが親友とはそんなものだと思う。戦争は私たちの仲をも引裂いた。19才徴兵の犠牲となり中国へ向った彼は、1年足らずして終戦となり、遥か長安(?)よりの帰途倒れ不帰の客となったと聞く。君の身は滅びても私の心には、今なお生きている。

土屋義夫君のこと。同学年ではないが、彼の事はあまりにも多くの思い出があり、どうしてもここで述べておきたい。

彼は、2年から遊撃手として活躍した当代切っての名選手だった事は、誰もが承知のことと思う。

私が敢えて述べたいのはその事ではない。

前述のとおり、私たちのチーム編成は容易ないもので、解散寸前まで追いこまれた。こうした時、彼は、陸上部より(私も駅伝選手)金子君(現新日鉄釜石で活躍)や伊橋君を勧誘、外にも他部に働きかける一方栗原君を捕手に、黒濟君を二塁に登用の計画を実現させてくれチームは俄かに活気だった。

私が智将と書いたのもそれによる。その彼も薬大卒業後、製薬会社勤務数年にして世を去った。

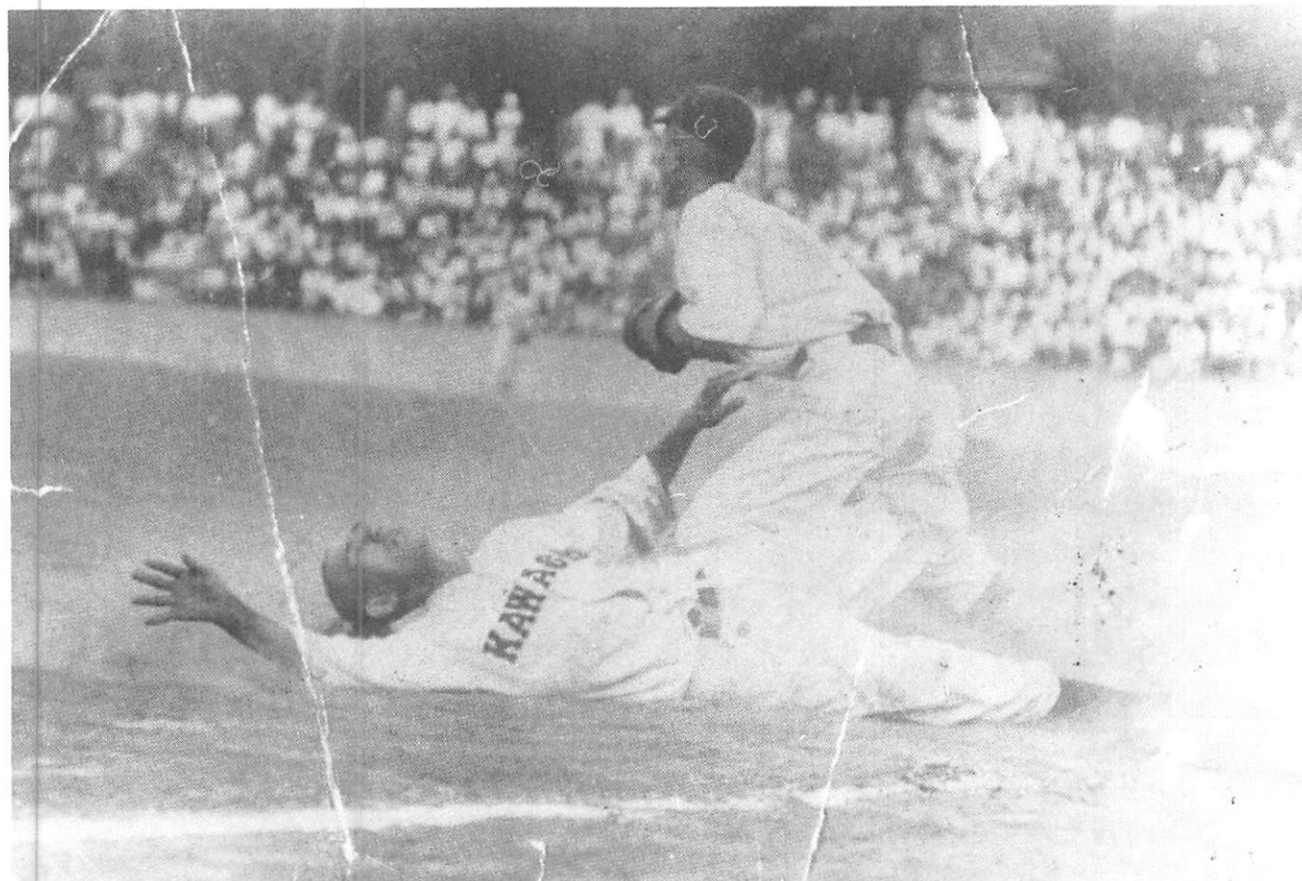
まこと痛恨限りない。

終りに拙文の陳謝と指導を得た諸先輩に感謝し報告を終りとする。

(土屋記)

昭和19年卒業

(旧中学42回)



昭和17年8月、戦前最後の埼玉県大会準々決勝対浦和商业戦、3回左前安打、直ちに二盗、欲張って三盗噴死。浦和商业の投手は、戦後中央大学のエースになった富田選手であった。(於大宮球場)

〔旧中学42回卒の当時の編成メンバー〕

校長 栗岡 亀治
部長 鈴木 睦雄
監督 山本 三郎
主将 土屋 義夫

氏名	学年	ポジション	寸評
金子 高祈	5	投手	豊岡物産、富士製鉄釜石のエースとして社会人野球で活躍。
栗原 秀夫	5	捕手	前静岡県高野連理事長、現日本高野連常任理事、選抜大会選考委員
伊橋 明	5	一塁手	放送作家として活躍。
土屋 義夫	5	遊撃手	全川越の選手として活躍、後山之内製薬に入社したが若くして亡くなる。

「あと10年早くか遅く生まれればよかったなあ。

思い切って野球が出来たのに。」 栗原 秀夫

私が川中野球部に入部したのは昭和15年秋2年生の時でした。実は中学入学と同時に野球部へ入りたかったのですが、小学校教員をやっていた父が当時の世相が日中戦争が泥沼化し軍国主義が擡頭し、米國を白眼視しそのスポーツである野球をやることは許してくれなかった。当時巾を利かしていた剣道部に入ったが、気が乗らず毎日の部活が面白くありませんでした。そんな時小学校6年間一緒に野球部にいた仲好しの土屋義夫（故人）にすすめられ、親には内緒でこっそり入部しました。

然し既に軍国主義は進み、野球をやるには本当に大へんな時代でした。然し野球少年達は乏しい食糧、用具の中で毎日暗くなるまで練習に汗を流しました。勿論今の野球少年と同じく甲子園を目ざして頑張りました。世相の不安を感じながらも伝統ある野球部の先輩達はよく後輩の面倒を見てくれました。毎日指導していただいた山本監督、軍服姿の綿貫さん、山本弟さんを始め多くの方々が母校を訪れて激励していただきました。又立教大学出身の山本監督は立大選手をコーチに招いてくれました。そんな中で伊藤治夫さん（享栄商）・古島誠治さん（高崎商）は印象が深く甲子園を沸かした名選手であり、その技術の素晴らしさには眼を見張りました。伊藤さんは捕手で強肩で捕手を目ざしていた私にとっては印象に残る方でした。高校野球に関係していたので50年ぶりに名古屋の熱田球場でお会いし感無量でした。

今回の記念史に思い出を書いていただきました。古島さんは甲子園大会の名投手にあげられその活躍は歴史に残っておりますが惜しくも学徒出陣で戦死されました。昭和17年の明治神宮大会の対専修戦のマウンドを踏んだ姿が私の見た古島さんの最後の姿でした。昭和16年の甲子園大会予選は決勝戦迄進出し本来ならば南関東大会出場であったのだが戦争激化は遂に全国大会中止の命令を軍、文部省から出されました。その無念さはいまだに忘れなくこんな悲しい思いは野球の好きな少年達には絶対させてはならないという執念が37年間も高校野球に私を縛り付けました。

私が4年になった昭和17年は米國との戦争も開始され野球少年は敵國アメリカのスポーツにうつつを抜かず非國民ということで軍國少年におびえ乍ら小さくなり野球をグラウンドの隅で続けました。私達と同じ立場にあった英語の先生の激励は本当に嬉しかった。その頃は川商と練習試合を行う位で殆んど対外試合も無くなったが戦前最後の公式戦は文部省主催による大会が大宮球場で行なわれたが準決勝で前年同様大宮工業に敗れました。秋になり最上級生になったが既に野球を続けられる状態ではなかったのです。豊岡実業との練習試合、OB戦を最後に野球部は戦争のため長い廃部に入りました。この年になっても思います。「あと10年早くか遅く生れればよかったなあ。思い切って野球が出来たのに」。

昭和20年卒業

(旧中学43回)



⇐後列左より

不明・家村・山本・不明・校長
牛窪・教頭・不明・不明・平岡
松津・不明・土屋・徳田・白井
先生・不明

前列左より

土屋・金子・伊橋・菊岡・栗原
山下・鈴木・和久津・大川

S17年末、対先輩戦を最後に野球部が廃止となる。写真は、その時の記念写真である。

野球部の思い出

山下 昌一

(1) 43期野球部の同期の桜は、新井直三郎(千葉市・東京外語)池田兼夫(入間市・日大)菊岡秀寿(寄居町・カルホルニヤ大)小峰昭二(板橋区・税務講習所)鈴木幹雄(所沢市・早大)藤原裕哉(飯能市・日大歯科)矢島武美(墨田区・自営)山下昌一(川越市・東大)和久津秀雄(故人・高師)の9名である。

43期野球部の概況を一口で言えば、日中戦争の真最中のS15年に入学・入部。然し、翌年のS16年12月・軍国主義者の従輩が、米・英に戦争を布告して大東亜戦争に突入。緒戦は、我が国に有利に展開、部活も許されたが、やがて、戦況は悪化する一方で、遂に、S17年末には、廃部となった。従って、残念乍ら、最終学年である5年生時代の野球部の歴史を書く事が出来ず、単に、わずか3年間の下級生時代の部活に関する「思い出」程度の事で、御容赦願いたい。

(2) 1年生時代(S15年)

日中戦争の真最中の時だった。新入部員は、私と鈴木君の2名だった。我々の世代は、天孫降臨から始まる皇国軍事教育を受け、今日の様な“民主”“自由”“平和”等々の言葉とは、全く無関係な世代で、“何故、戦争がおこり”“どんな方向に進むのか”

“野球部はどうなるのか”等々考える力もなく、単に、一つの目的に向って、自己を没却して、練習するダイナミックな野球選手に対する単純な少年の憧憬が、私の入部動機で、甲子園の事など考えた事はなかった。やがて、夏の大会も終り、神野主将(故人)を中心に新チームが結成されたが、4年生が3名、3年生が4名、2年生が1名、我々が2名、トータル10名の小チームだったと思う。私には、先輩の古グラブとセカンドの仮ポジションが与えられ、鈴木君は外野だったが、部員数が少ないので、二人共、苦しいバッティング捕手をやらされた。練習は猛練習の連続だったが、進学校生でありながら、反撥心はおきなかった。

又、山本三郎・伊藤慶一外の諸先輩が頻繁に来校され、熱心な御指導を受けた。

(3) 2年生時代(S16年)

神野(投手)松津(捕手)平岡(外野)の最上級生の下、諸先輩の指導を得て、猛練習を重ねた御蔭で、県大会では、決勝戦迄進み、結局、大宮工業に敗れた。私は、三塁手として出場したが、相手の左腕投手のカーブが打てず、無念だった事を憶えている。

尚、この年から、戦争を口実に甲子園大会が中止となり、代りに、神宮球場で関東大会が開かれ、各県から優勝・準優勝校が参加して行われた。我々は、

第1回戦で水戸商業に大敗し、出場記念に、全員、球場の土を持ち帰り、母校グラウンドに撒布した。

尚、先方には、後半、早稲田大学の監督になった石井一壘手がおり、体力・打力共に超非凡で、別世界の人間を見た様な記憶が残っている。

(4) 3年生時代 (S17年)

土屋主将・徳田副主将が中心でした。関東大会後、最上級生3名が引退し、残存部員だけでは、チームが結成出来ないの、新部員の加入に努力され、結局、櫛(41期)栗原・大久保・伊橋・金子(42期)、同期では、新井・池田・菊岡・小峰・藤原・矢島・和久津君が入部。大型チームに変身した。

一方、S16年12月に開始された大東亜戦争も、緒戦は、はなばなしい戦果を挙げ、一般国民は、その戦果に酔っており、又、母校にも、大正デモクラシーの教育をうけた多くのリベラルな教師が残存されており、温室の様な暖さを感じつつ、学業・部活に専念する事が出来たが、この頃から、物資が不足し始め、例えば、部には古ボールが数個、古バットが数本しかなく、道具面からも十分な練習も出来ず、

諸先輩も、指導に来られる事が出来なくなった。

然し、夏には、県大会は開かれた。何故か私には、この大会に関する思い出がありません。同期の菊岡君の記憶では、初戦は熊谷中学で、9回に、彼が逆転2壘打を打って3：1で勝利、2回戦は大宮工業で1：0で惜敗。しかも、同点のチャンスのあった9回の最後の打者が彼で、三振で無念だった事を今でも憶えている。

県大会前、立教大学の監督になられた砂押投手の指導を受け、大学野球のレベルの高さを知った。

然し、県大会後のS17年10月、ガナルカダルに米軍が逆上陸してからは、戦争は悪化する一方で、遂に、国策として、野球部の解散が決定されました。諸般の社会事情から、廃部に対し、抵抗感はありませんでした。尚、解散時2年生に大川・川島君、一年生に関君の3名の後輩がおりました。

(5) 4・5年時代

野球部の空白時代であり、勉強面でも空しい時代であった。

スに乘れなくなったので、部が解散する直前に退部せざるを得なかった。結局、下積み部員生活で終ったが、ホロ苦く、懐しい青春の1頁であった。

■外野手 菊岡 秀寿

私の思い出の一つに、17年夏期大会前の川越商業との練習試合がある。その日、山本三郎監督に率いられ、やっと揃えた新ユニホームに身を包み、試合に臨んだが、4：0と完敗。その時、諸先輩から、「男なら石に齧りついても勝て」等々。交替でハッパをかけられ、それから、球が見えなくなる迄、5時間連続で鍛えられ、腕は痺れ、足は腫れ上がり、声も出ない程でした。それでも、練習は終らず、8時過ぎて、部長先生の制止で、やっと解放された時には、

新ユニホームは、汗と泥と涙でぐしゃぐしゃでした。

■外野手 鈴木 幹雄 のだった。

(1) 1年生時代

なにしろ新入部員は、山下君と私。当時、チビだった私の身長は150cm前後。今なら、とても野球部員になれなかったろう。然し、当時は、部員が少ない為、私の役目は主に、フリーバッティング捕手だった。毎日毎日、グラウンドに出て、重いプロテクターを身につけ、見上げる様な大男の先輩の投げる球を捕っていた。

(2) 2年生時代

2年生になっても、私の主な仕事は、バッティング捕手だった。この頃になると、道具がなくなり、例えば、ひびの入ったバットは、細かい釘を打って再使用し、ボールは糸で継ぎ目をぬって使ったも

(3) 3年生時代

私の球歴と言うと、所謂“ライパチ”で、県大会大宮球場で1度出場しただけである。

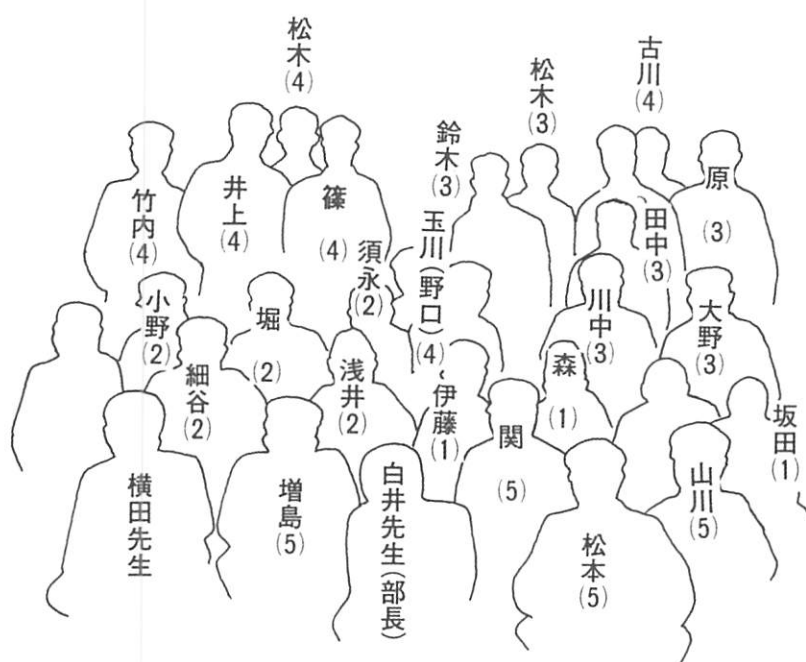
■内野手 藤原 豁哉

三年生の春だった。豊岡(現入間市)から新井(直)・池田と三人揃って入部した。練習はハードだった。特訓と言えば、個人ノックと共に、至近距離から、上級生が並んで投げる恐怖のキャッチボールがあり、アンコのない古グローブの為、手の掌が腫れ上っていた。対抗試合も、少なくなり、川越商業戦で、ピンチヒッターに出て三振した記憶がある。

戦争も烈しくなり、帰宅バスの回数が激減し、練習すると最終バ

昭和21・22年卒業

(旧中45・46回)



旧中45回卒業時の野球部員

軟式ボールで始まった練習 戦後野球部の出発！

昭和20年8月15日終戦と共に勤労動員が終り9月1日より通学が始った。何しろあのいまわしい戦争が終ったというだけでほっとしただけでなく、はじめのうちはだれしもぼうっとしておりました。しかし秋も深まるにつれ誰とはなしに野球でもやろうかという事になり私達飯能方面に昔の三角ベースボールの仲間が4人居り増島、山川憲男、加藤、大宮の関、川越の名坂の諸君が最上級生でもあり中心になって1年下の井上、古川、玉川、篠君達をさそって戦後野球部の誕生となったわけです。

当時は、軟式野球で健康ボールというのが学校に配給でありそれで練習をしたわけですが、ほとんどあそび半分です。翌21年には大会がありそうということになり、練習にも熱が入ってきました。実際には5月頃だったと思いますが埼玉県全体の大会としておこなわれたのが戦後の第一回大会（於現県営球場）でした。母校の戦績は一回戦が与野農商を9対0で破りこの試合で関投手は三振19個をとり（この間四球1、セカンドゴロ1）これが7回戦の軟式の野球としては大会記録ではないかというのが関君自慢のたね、第2回戦は深谷商戦で投手戦の結果これも2対0で勝ち準決勝戦の熊中戦にのぞんだわけですが3対1で破れてしまいました。この熊中戦は対深谷商戦後休みなしで行われ、しか

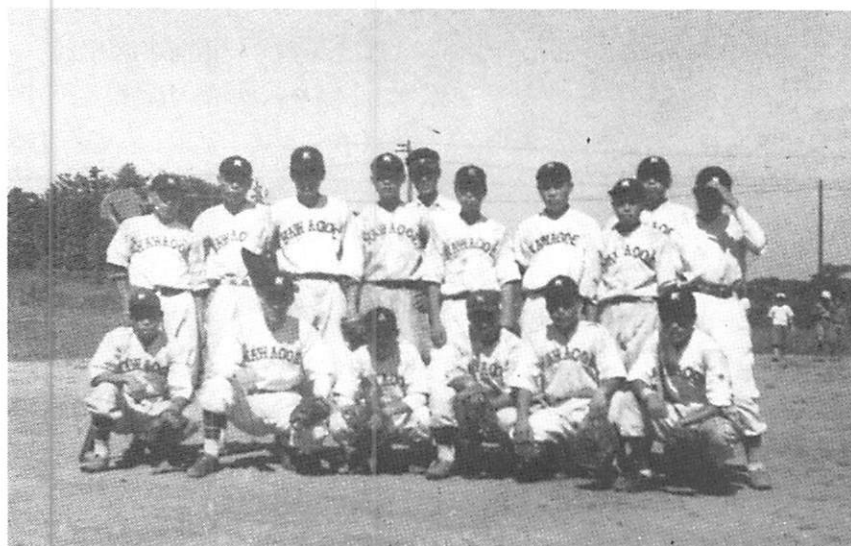
もたった1本の軟式用のバットが折れて硬式用の重いバットで振りまわせず、疲労がかさなったのが敗因、今の人達にはそれと信じられないでしょうがバット2本と地下足袋はいて大会参加です。この大会の決勝戦は同日ただちに行われ（熊中対本庄中）本庄中が優勝、この時の本庄中学の投手は石原氏でかなり速球を投げており、のちに早大に進み、センターを守っていた中田君も早大に進みセンターを守っていたように思います。8月になり朝日新聞社主催の夏の大会が夏休みを利用して行われ（この大会より硬式）母校は1回戦で埼玉中学と対戦12対2、7回終了のコールドゲームで第1戦をものにし、第2回戦は浦和中と対戦し下馬評では有利だったが関君肩痛のため12対4で敗れてしまった。時の監督は徳田先輩、この大会も本庄中が優勝し、他県では千葉が成田中学、神奈川は横浜のY校で現県営大宮球場でこの二校が対戦し千葉の成田中学が三県の代表となった。（当時は南関東大会）

夏の甲子園では成田中学は一回戦で京都二中と対戦し1対0で敗れている。この時の成田中学の投手は石原氏で翌年立大へ入り、卒後はプロ入り東映フライヤーズ、（現日本ハムファイターズ）のサードを守っていた小柄な人だったように思う。この夏の甲子園大会では決勝で前記京都二中と浪商が

対戦し2対0で浪商が全国優勝した。この時の浪商の優勝投手平古場で後に慶応で活躍した。負け惜しみになるかもしれないが全国レベルでは我々より年長者（2才位）がおったり、県レベルでは穀倉地帯が強かったように思う。とても信じてはもらえないかもしれないが私なんか体重が卒業まで40kgを越えたことがなかったといえおわかりいただけると思う。だから練習でバッティングピッチャーがいない、無理してやらせれば翌日は退部というような情けない時代できた。したがって道具もない米軍のおふるをわけてもらってきたもののグローブなんかは重くて持っているだけで疲れてしまう。バットは重くて振れない、ボールはボコボコで打っても金属音とは程遠い、マシンなんてやつは夢にも出てこない、キャッチャーの井上君なんか布のプロテクター、レガースは無しというスタイル、本当に情けない時代だった。そういったわれわれのシーズンは21年の5月と8月だけで終りでした。

最後に戦後の野球部創部で大変お世話になった先生は初代部長の横田先生（飯能在住）2代目白井先生（所沢在住）でお二人とも元気です。資料も写真もなく記憶だけがたよりなものですから増島、関の両君に相談して書いてみました。

昭和25年卒業 (高2回)



後列左より 横田(1) 川合(2) 小野(2) 柴田(2) 菅間(2)
松崎(1) 相沢(3) 平手(1) 黒沼(1) 大附(1)
前列左より 相沢(1) 大野(3) 浅井(2) 松本(3) 田中(3)
谷 (2)

私たちの野球生活 旧制から新制へ

我々昭和25年卒業組は、旧制の中学校から新制高校にまたがる戦中戦後に在学し、特殊な学校生活を過し、しかも23年、24年の両年を最高学年で野球部生活を送ったので、少しくその事情を説明しておきます。

当時は野球部は廃止され、剣道部と柔道部だけがありました。

昭和21年学制改革があり、現在の制度になったのですが、旧制のまま中学校4年卒業、5年卒業と高校3年卒業という同学年生でも3つのコースができ、優秀な者は旧制のまま大学予科や旧制高校に入った者も多数ありました。

そして、高校1年高校2年高校3年を、当時は第10学年11学年12学年と称しておりました。我々1学年上級も同じで、現川高校長渋谷健先生は、教育大学の前身東京高師に5年で合格され、高師の最後の卒業となられたのであります。

そんな事情で我々は昭和19年に川中に入學し、昭和25年に川高を卒業したということになり、都合6年間在学しました。

1級上の部員の人達は4年5年で卒業したり高校3年に残った人達も部を止め、22年の夏の大会が最後になりました。従って22年の秋から我々1年が最上級の部員になりました。

当時は戦後のこととて世相は荒れ、多少は回復しつつあったとはいえ、物資は欠乏し将に食糧難に

喘いでいる状態で、いつも空腹をかかえていました。

本題に入りますが3年の夏の大会に負けて悔しさの余り、短慮にも(田中)スコア・ブックを全部焼却してしまい、おぼろに残る記憶をたどるより外無く、まことに残念の極みであります。

昭和24年 夏季大会

熊谷高	1 0 0 0 1 1 1 1 1 4	10
川越高	3 2 1 0 0 0 0 0 0 0	6

〈メンバー〉

- | | | |
|------|----|------------|
| (1)左 | 松本 | 大宮球場の第一戦 |
| (2)二 | 浅井 | に、優勝候補の筆頭 |
| (3)投 | 相沢 | 熊谷と対戦したが、 |
| (4)中 | 大野 | 日頃猛練習を積んだ |
| (5)一 | 小野 | 自信から、少しも臆 |
| (6)捕 | 田中 | することなく、県下 |
| (7)左 | 谷 | 屈指の好投手萩原 |
| (8)遊 | 松崎 | (後大洋ホエールズ) |
| (9)三 | 横田 | を攻めたて前半6点 |
- をあげたが、後半じりじり追い上げられ、延長10回遂に力尽き涙をのんだ。その熊谷は、その後も勝ち進み、千葉勢も破って埼玉県としてはじめて、夏の大会で甲子園に出場したのであります。

しかし、これには不運なできごとと、不正な事件が、絡んでおりました。

不運なできごととは、勇躍大宮球場に着くや、監督の山本さんの御父君の重体が伝えられたのです。

山本さんは思いを残して川越に帰られ、観戦に来られたOBの横関さんがベンチに入られたのですが、チームの様子、選手それぞれをよくは御存知なく、常

識的なゲーム運びを選ぶより外なく、熊谷の追撃を許す結果となっていました。又、熊谷は前述の如く優勝候補であり、是が非でも甲子園へという気運があたりにはあり、^{ひがめ}僻目でなく球審の判定にも納得しがたいものがあり、1試合使用球は、新球2個ときめられていたが（ボール不足のため）、熊谷は白いボールを荻原が投げていたが、川越は初回こそ相沢もニューボールを使ったが、あとは前の試合で使ったと思われる古いボールで、特に後半など、歪^{いびつ}になったものを渡され、球審に申し出ても拒否されてしまいました。川越が勝ってしまったのは甲子園は無理、是が非でも熊谷を勝たせなければならぬという空気があったようです。

不正な事件とは、全国的に知られるところとなった「バット事件」というものです。4、5回目から全員が使っているバットが忽然として無くなってしまったのです。

あとは所謂マスコットバットともいべき櫂の重い曲ったバットだけです。1本しかないタモのバットを極端に短かく持って、荻原の速球をセンターに鋭く打ち返す荻原用の打法も、重い櫂のバットでは振り遅れ、荻原も投法を変えてきたこともあって、以後は無得点に終り、長蛇を逸つたのであります。ところで、その消えたバットは、試合終了後、熊谷応援団席から投げ返されてきました。

高野連の理事で、豊実の部長をされていたOBの粕谷先生の勧めで連盟へ提訴しましたが、その間に熊谷は次々に勝ち進み、遂に優

勝してしまったのです。この事件は朝日紙上に載ったが、熊谷が謝罪するという形で、うやむやのうちに終わってしまいました。現在なら大問題になったに違いありません。

以上が我々の戦績で、まことに貧しいものですが、緩んでいた野球部の体質・練習なども伝統ある野球部の姿に戻し、甲子園を目指すものにしようという、全員一丸の意志は、猛練習に耐え、はるか彼方にあった甲子園も、現実には甲子園行の切符を手にしかけたところまでやってきたのです。

部費は年間僅か2万円。他校の噂では20万円とか、どこそこは40万円とか耳に入り、羨望の念を持ちました。ユニホームをはじめ用具、遠征費一切自弁でした。夏の大会前に、はじめて合宿をし米を持ち寄りましたが、米は貴重品で、各自調達するのに四苦八苦のことでした。山口先生と前年迄の白井先生は、部の運営には非常に苦労され、部の存続すらあやういこともありました。

3年の時、高等商船の教授だった木島平次郎先生が来られたが、悪童にも敬愛されていたその先生が、「校庭が校舎と並んであるのには意味がある。校庭で技術の習得をし、鍛練にはげむのも、教室で学業を学び知識をひろめるのも、同じだからです。」という意味のことを話されました。そんなことを真剣に考え、野球の練習に意味づけ、納得したような気になった覚えがあります。

《昭和22年秋》

監督山本三郎氏、部長白井正先生。当時は秋の大会といえるものではなく、西部地区の試合があり、出場校も10校に満たず、大会といえる程のものではなかったように思います。新聞にも何も載らず、記録ありません。

飯田先生追悼試合



昭和23年秋飯田亮先生13回忌法要と対OB戦が行なわれました。

秋から監督になられた山本さんの肝入りで、同10年に亡くなられた飯田先生の追悼試合が行なわれ戦前の川中野球部後援会長の柿田さん、熱烈なファンの村松さんも来られ、当時豊岡物産の監督1塁手の綿貫さんの豪打、俊足好打の横関さんには度肝を抜かれました。

《昭和23年》

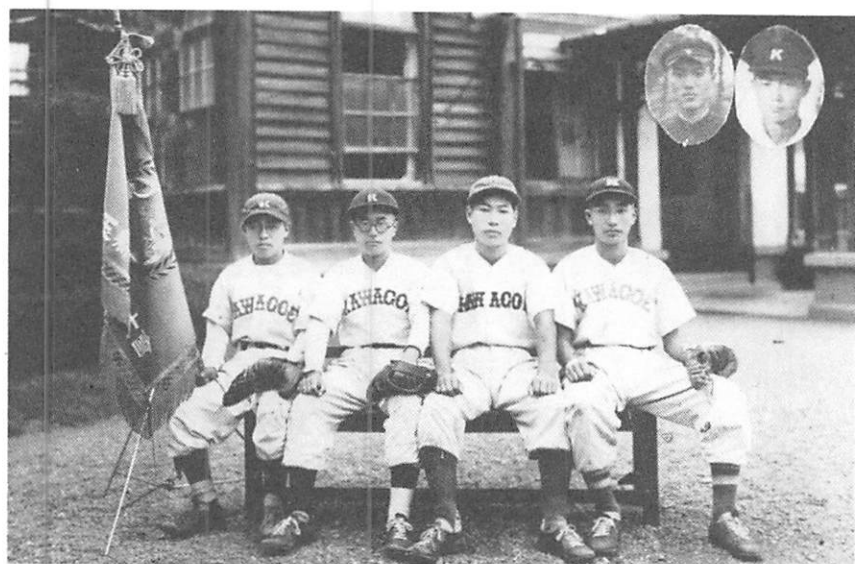
4月14日 松山0-6川高
5月1日 浦和商8-4川高
7月22日 大宮工3-1川高

昭和24年 春季大会

川越	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
浦商	0	1	0	0	0	0	0	0	1	2

西部地区では敵無しではあったが、宿敵浦商に又もや敗れた。

昭和26年卒業 (高3回)



写真左より 浅井 谷 相沢 小野 菅間 柴田

我々、高校生の頃は未だ食糧事情が悪く毎日の練習にもひもじい思いをしたものです。野球用具も不足しており、バット、ボール、クラブ等も今のような立派なものではありません。バットは釘でわれ目をふさぎ、半分折れた個所をテープで補強したもので満足なバットは一本も無かったように思います。そんな用具不足の野球部を、私生活を犠牲にして、御指導して下さいました。山本三郎、家村相太郎、他諸先輩の方々に、あらためて厚く御礼申し上げます。

私などは、本格的に技能の訓練を受けた事が無い故に、先輩方の技術の高さに驚嘆したものであります。特に印象に残っているのは家村先輩のカーブ打ちの巧みさで、当時の私にとっては神がかり的なものに見え、その技術を盗みとろうと真剣に練習に取り組んだ事を

鮮明におぼえています。一方、山本先輩のノックの巧みさにも泣かされたものです。必死に差し出すグラブの僅か先を抜けて行くボールを、ヘトヘトになりながら追いかけたものです。お蔭様でその後、私自身もノックが大変上達したようです。

私達の代は、投手の人材を欠き、高二の時は、上級生の大野、相沢さん、高三の時は後輩の大附君に頼るといふ具合だったのがなんとしても残念であった。

さて肝心の野球部の事でありますが、最大の目標は打倒熊谷高であり、前年本当に惜しい処まで追い込んで敗れた熊谷高になんとしても勝ちたいの一心で精進を重ねました。しかし前述したように、私達の学年はエース不在で結局、大会三回戦で熊谷高に敗れ甲子園への道がついてしまった。数年

後に後輩達が夏の甲子園で一勝を上げ高らかにセンターポールに校旗が上り、校歌が流れる画面を喰いいる様に見つめた感激は忘れられません。夏が来る度に高校野球の結果に注目していますが、夢はもう一度の願いを持っているのは私一人ではないのではないかと思っています。(浅井)

再度熊高に敗北

第2次大戦終了直前の昭和20年4月旧制の川越中学に入学し、昭和26年3月に川越高校を卒業する迄6年間、想像を絶する物資欠乏の時代に、野球に取りつかれた仲間たちが、苦楽を共にしながら硬球を追いつけた年代です。

主将を勤めた谷をはじめ、小野、浅井、川合、柴田、マネージャーの菅間と、少数ながら異色の人材が揃っていました。

戦績の方は特筆すべきものはなく、最終学年の昭和25年夏、前年部の歴史に残る敗北を喫した熊谷高に、再度中央への道を阻まれてしまいました。

●昭和25年夏季大会

- 1回戦 川越高10-8 所沢高
- 2回戦 川越高12-0 熊谷農
- 3回戦 川越高3-12 熊谷高

職業野球

昭和23年の秋も深まった頃に戦後復活した職業野球(まだプロ野球といわなかった)のオープン戦が初雁球場で開かれる事になった。同時に先輩を主力とする地元チームの全川越とも親善試合があった。その折に戦前セネターズで同僚と

して活躍した私達の家村監督が、当時のスター白木投手大下ホームラン王を母校のグラウンドに招き、コーチを依頼してくれたのだった。野球協定の厳しい現在では絶対に考えられないが、まだクラブチームと対戦したり、学生チームをコーチする事になにも抵抗の無い時代であった。

中学三年生だった私は一塁手六番打者でどうやら選手らしくなった頃である。まぶしい思いで見上げるスター選手の背番号ユニフォーム（当時は職業野球のみ）姿を隣りにしてキャッチボールもうわの空だった。そのうち投手をコーチしていた白木投手はマウンドに上り自からカーブを投げてみせた。偶然打席に入るチャンスを与えられた私はそのカーブが当たると思い、危ない！と、よけようとしたボールが、すべるように曲りミットの真中に入るのにびっくり。本当のカーブとはこれだと、ただただ感激したのだった。その後、いろいろな機会に何百回と打者になったが、この速く鋭いカーブの印象ほど強く残ったものはない。今にして思えば旧友が監督として率いるチームだけに、プロの一流選手が、名もない学生にも一応の相手をしてたのであろう。又全川越の先輩達やプロ選手も、やっと平和が戻り軍服をユニフォームに着替えて白球を握る喜びを噛みしめていた頃ではなかったか。私達も同じで、あらゆる物が不足している中で、野球にかける青春の喜びが、何よりも優る時代だった事をはっきりと記憶している。(川合)

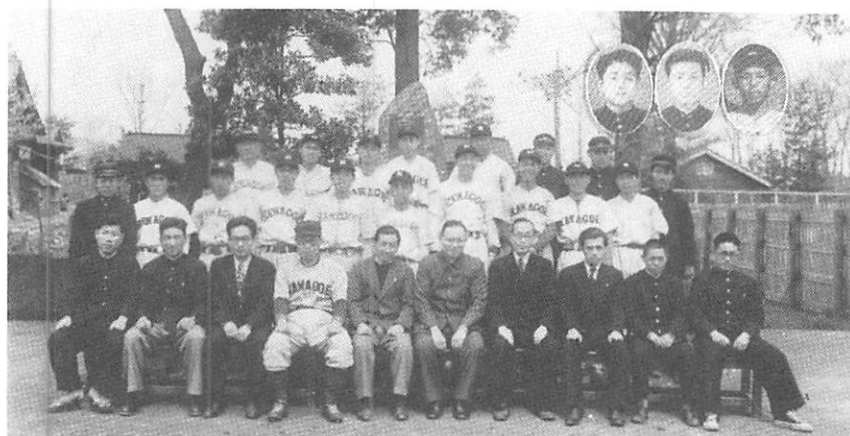
マネイジャー

「おいマネイジャー水を頼む。マメがつぶれたから絆創膏をみつけてきてくれ」等々気軽に言われるように、私が野球部に籍を置いた昭和23～24年当時マネイジャーの地位はそれ程高いものではなかった。試合の折衝や部費の管理といった様な事は顧問の先生が手がけられるので、仕事は専ら絶えず発生する雑用の処理であった。毎日授業が終るや否や校庭へ飛び出して、選手と一緒に用具や飲料水の運搬、ダイヤモンドの土ならし等をして練習に備える、練習では部員数が多くなかったその頃、マネイジャーも結構重要な役割を果たした。シャツの袖をまくり上げてキャッチボールの相手もすれば、バッティングが始まると、投手へのボールの供給を一手に引き受ける。守備の手が足りなければグラブ片手に走って行くし、極端な場合は、マスクをかぶりキャッチャーまで務めるのだから、今では到底想像も出来ないであろう。夏の大会に備えて合宿に入る頃、忙しさは最高潮に達する。猛練習に疲れた選手達がまだ夢の中にいる早朝に起き出し、必要な量の米を計って用務員の小母さんに渡す仕事から一日が始まる。その米が厳しい配給制度の下にあった当時は大変な貴重品で、家中の米をかき集めて合宿に参加した部員が、私以外にも何人かいた事と記憶している。乏しい予算の中で、三度三度の献立を考えるのは苦労の多い仕事であった。安くて栄養のある物

をと、闇市で買って来た鯉の生節のせいで全員がじんま疹に掛り、練習に差し支えた苦い思い出もある。肉屋で買ってくるコロケが一ケ五円、ジャガ芋の中にひき肉が2、3粒あるような代物であったが、かなり贅沢な副食であり、レギュラーは2個、その他は1個半という、みみっちい節約をしたものだった。

試合の当日は、選手を送り出した後、家族の協力を得て作った沢山のにぎり飯を、幾つもの重箱に詰めこんで球場まで運んで行く。街のどこにも、アイスクャンデーのたぐい以外食べる物は殆んど売られていない。「腹が減っては戦は出来ぬ」と言う事で、甲子園大会に出場する選手達でも、全員リュックサックに米を入れて背負って行った時代であった。試合が始まると、鉛筆を握りしめてスコアブックに向う本来の仕事が待っている。記録者として最も印象に残っている試合は、24年夏、熊谷高に惜しくも敗れた一戦である。3回まで6対1、優勝候補筆頭の相手を追いつめる快心の記録がスコアブックに並ぶ。後半じりじりと追い上げられ、9回表2死を取りながら5番打者に痛打され、遂に6対6、延長にて惜敗。試合終了後、相手の応援席から投げ返された一本のバットをめぐって発生した大きなトラブル。その時の無念の思いも、今では懐しい思い出として語り継がれている。(菅間)

昭和27年卒業 (高4回)



鹿島・泉名・篠沢・大沼・橋本・森田・内田・日高
竹沢・大附・広沢・斉藤・黒沼・北野・森田・松崎・横田・益子
河合・小野・大川先生・山本監督・小杉先生・荒井校長・本橋教頭・森田先生・浅井・谷
平手 本柳 矢川

昭和27年度

川越高等学校校長 荒井 実
教 頭 本橋信治
野球部長 山口利道
生徒総数 850名

私達のチーム

学制改革によって、川越中学校から川越高等学校になって5年間共に甲子園を夢みて練習をしてまいりました先輩を送り出して、山本監督のもとで、松崎日郎主将、横田副将を中心に新チームを結成致しました。

監督 山本三郎氏

マネージャー 竹沢恒治

投手 大附清久 斉藤弘 栗原孝

捕手 新井英夫 本柳務

一塁手 広沢孝志 鹿島泰二郎

二塁手 北野敦也 矢川 勇

三塁手 横田昌明 日高和美

遊撃手 松崎日朗 益子公平

外野手 黒沼甫夫 篠沢稔夫

外野手 奥富洋吉 森田守重

内田勇吉

秋季大会、冬期合宿練習、春季大会後山本三郎監督が一身上の都合で引退されました。新監督として田中幸夫氏がなりました。春季大会後に退部者が出たり、新監督の指導によりまして、レギュラーも入れ替りがありまして夏の大会に望みました。

思 い 出

上尾市大平中学校での冬期合宿練習は、早朝マラソン、基本を中心とした初歩的技術のくり返し、食糧不足で空腹に耐え苦しみながら先輩からの鉄拳の見舞と、時間を、疲労を忘れさせられました。苦しさの連続でありまして、何度か挫折しそうになりました。

当時女子競輪選手の安野様から明大野球部の島岡吉郎監督は明大野球部は「野球技術養成機関ではない。世の中へ出て役に立つ男を

育てあげる場所だ」と野球の練習と一緒に人間教育に力を入れておられ、苦しい練習を克服出来た時に何事にもプロフェッショナルになれる人間が生まれるのだ。よけて通る事はわずかのピンチにも志気阻害してすぐに挫けてしまう人間になってしまう。今日の困難や苦勞を堪える事こそ甲子園出場が出来るのだとはげまされました。

冬期合宿の苦難、苦勞は私達を鍛えあげる為の尊い修練の機会であつたと一生忘れられない貴重な経験でありました。

記 録

〔昭和25年秋季大会〕

準決勝 9月24日 於大宮球場

川越高	0	0	2	0	0	1	0	0	0	3
熊谷高	1	2	0	0	0	0	1	0	0	4

大附投手が肩痛のために斉藤投手が投げました。

熊谷高 酒巻一新井

川越高 斉藤一新井

秋季大会優勝校 熊谷高校

〔昭和26年春季大会〕

2回戦 4月21日 於大宮球場

川越高	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
熊谷高	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1

大附投手の好投で延長10回、熊谷高橋がイレギュラー安打で出塁し、田岡の犠打で三進のとき、此の回から代ったばかりの川越高の日高が投げずものかの三塁返球を行いこれが悪投とな、あっけなく勝敗を決しました。熊谷高は前半における再三の拙走が苦戦の原因だが、一方川越高は7回を除いてはチャンスらしいチャンスはなく

て所謂勝目はありませんでした。
〔昭和26年 4月22日埼玉新聞評〕

熊谷高 服部一新井
川越高 大附一新井

〔昭和26年夏季大会〕

準決勝	7月24日	於大宮球場
川越高	1 0 0 0 0 0 2 0	3
鴻巣高	0 2 0 1 0 0 2 0 X	5

此の試合両軍ナインは攻防の妙を展開、高校野球にふさわしい一戦だった。鴻巣は不調の大附投手をよく打ち2回連続4安打で2点。さらに4回2安打で1点。7回には2死後栗原の2塁打をきっかけに相次ぐ3安打で2点をうばい、試合を決定的なものにした。一方川越は栗原投手の軟球を打ち込めず、1回に1点、8回に2点を返しその差2点と迫ったがそのまま押し切られた。鴻巣の勝因は軟球投手栗原が長打力にものをいわせる川越に起用したことであろう。
〔昭和26年 7月25日 毎日新聞評〕

準決勝に残った熊谷高校、鴻巣高校、浦和商业、川越高校4校で南関東大会に出場し千葉勢と戦った。

南 関 東 大 会 組 合

・ 8月1日
於県営大宮球場

9時	11時	1時	3時
鴻巣高	浦和商业	佐原高校	川越高校
千葉高	一商高	一高	熊谷高
成田高	成田高	成田高	成田高
川越高	0 0 1 0 0 2 0 0 0	3	
銚子高	4 1 0 0 1 0 2 2 X	10	

銚子、猛打ぶり発揮

銚子は1回決め球に威力を欠く大附投手の直球、ドロップをねらい打ちして安打5、10人の打者を繰り出して4点をあげ、2回には岩井の左前打、さらに5回佐久間が右翼席中段にホームランを放つなど猛打を発揮して試合を楽に進めた。これに対して、川越は3回に1点を物にしたが銚子の古田投手のチェンジオブペースの好投に封じられ、わずかに6回横田、北野、松崎の3安打と2個の四球に無死2点をあげながら後続つづかず結局7回銚子は2死満塁から四球、暴投で2点をあげ、8回は小林の中堅頭上を抜く3塁打で2点をあげ大勝しました。川越の敗因は投手の不出来と共に打撃においても銚子におよばなかったものによる。

この試合両軍に併殺6つを数え川越の鈍足も目立っていた。
〔昭和26年 8月2日 埼玉新聞評〕
此の年甲子園出場は熊谷高校。

出 場 メ ン バ ー

川越高校	打安	銚子高校	打安
⑤ 横田昌明	4 1	⑥ 川 口	5 3
⑧ 北野敦也	4 2	⑤ 高 浜	5 2
④ 松崎日朗	4 1	① 古 田	4 1
① 大附清久	3 0	⑧ 佐久間	3 2
② 黒沼甫夫	4 1	② 岩 井	3 2
⑦ 篠沢稔夫	3 0	③ 小 林	2 1
⑨ 奥富洋吉	4 0	⑨ 野 中	2 0
⑥ 益子公平	4 1	⑦ 根 本	3 2
③ 広沢孝志	2 0	④ 小 磯	4 1
	326		3114
	7回より右翼手日高和美になる。		

一川高野球部と小杉太郎先生一
学校は人間の土台作りをする場所でもあります。土台を固める時にはしっかりと固めておかねばなりません。ちょっとした風。少しの雨でも崩れたり倒れたりしてしまいます。特に高等学校教育は大事な年頃であります。同時に部活動は心身鍛練の場であるから進んで参加しなさいとすすめられました。そして若い内に苦労しろ、人の喜びは共に喜び、人の悲しみは共に悲しめるような人とならさい。人の働きを大切にすると、他人から協力が得られる人となれど、食糧難の折でしたが空腹をかかえている私達を夕食に招いて下され、共に食事をしながら卓話をされたり、お茶を飲みながら説教をして下さいました。
野球の試合に勝った時には控えの選手の行動をほめたたえ、労をねぎらってくださいました。負けた時には非常にくやしがりながらも良かった点を見つけてなぐさめてくださいました。先生は川高野球部の甲子園出場を夢見ながら我々に社会人としての土台作りをしてくださいました。12回卒業生が甲子園出場して先生の夢の一部が実現出来ましたが、今日私達が社会人として、川高野球部卒業生として胸を張って生活出来るのも小杉先生と先生御一家の御指導と暖かい御協力の賜と深く感謝申し上げます。川高野球部の70年史の編集内容にはあわないかも知れませんが、我々の高校生活時代に一番の教育者であった先生を紹介させていただきました。

昭和28年卒業 (高5回)



内田	斉藤	鹿島	新井	篠沢	泉名
森田守	益子	栗原	北野	日高	森田武

我チームの思い出

篠沢 稔夫

平方合宿のこと

昭和25年3月、入学が決定し入部も決心した数人の入部予定者が入学前、平方の小学校での合宿参加を命ぜられ入宿した。

参加初日、合宿所へ到着するやいなや、「すぐ着替えて、グラウンド10周ッ!!」の号令。

当時中学校は新制中学校と言って、教育制度が変わって一年目で校舎そのものが無く、間借りで勉強していた。勿論グラウンドもなかった。この平方小学校のグラウンド

がとてつもなく広く感じたものでした。新制中学での野球部活動は遊びのようなもので、その分高校での猛練習は本当にこたえたものでした。

合宿中の食事時、OB、先輩を上座にコの字に着席、上座よりお茶をつぎ、何気なくヤカンを置くと「クチをどっちに向けてんだッ口を上座に向けて置くんぞ。」と一喝され、ビビッたりしたものでした。

そんな或る夜のことで、OBのMさんがトイレで用をたしている、

同輩のSとKが無意識に、Mさんをはさんで両側のトイレに入った。そしてどちらからともなく、

「オイッ!!練習がきつくて参ったナー」「とても体がもたねえから逃げるか」「よし!!それじゃあ今夜決行しようぜ」との会話。

ウンのつきと言うか、ウンが悪いと言うか、真ん中のMさん息をこらして、二人の会話を全部聞き2人が出て行くと、早速OB、先輩に通報、皆寝静まった頃、狸寝入りの諸先輩、前出のSとK荷物をまとめて、窓をあけ足を掛け身を外に乗りだした、とたん「コラッ!!」と御用。又1年先輩のOさん、マラソンで逃げ出しあと一息で川越市内の所で自転車使用の追跡者に御用…などなど、つらい練習の中にも今思えば愉快的なエピソードも沢山ありました。

南関東大会出場のこと

昭和25年4月入学以来、物資のない時代だったのでボールを持帰り修理したり、うすい革だけのグラブを手入しながら練習に練習を重ね2年生の夏ベスト4に残り、埼玉県から4校、千葉県から4校（これを南関東大会と言う）で大宮球場で戦った。

本校は強豪銚子商業と対戦、私も2年生ながらレフトで出場、前半は善戦し3回か4回に、ノーアウト満塁、バッターレフト篠沢、あがっていたのか「バントしましょうか」とバッター「バカッ!!打って来い」と浅井先輩に気合を入れられ夢中で打ったらなんとセカンドフライ絶好のチャンス逃し

た。又守ってはショートへ猛烈なゴロ、ショート益子(故人)片足を上げてトンネル、レフトまで来て球足はかなりのもの、益子いわく「あんな猛烈なゴロ、あぶなくて取れねえや」結局馬力の差で初戦で敗退、甲子園への夢も破れた。

3年生の夏は前評判は良かったが、準々決勝で浦和商业と対戦、敗れ、又々甲子園への夢も消え青春の一コマも終わりました。

寄稿するにあたり、まだいろいろな事が走馬灯のごとく、昨日の出来事のように思い出され、光陰矢の如しの感を一層深くしております。

人生の折返し点を大分すぎた今日此の頃、かつての球友達とも旧交を暖めながら楽しく生きて行こうと思います。

高校生の時から国語は不得手上数拾年も筆を持った事がないので拙文のほどはお許し願います。

私 たち の メ ン バ ー

投 手	栗 原 孝
捕 手	新 井 秀 夫
一 塁 手	鹿 島 米 次 郎
二 塁 手	北 野 敦 也
三 塁 手	益 子 公 平
遊 撃 手	日 高 和 美
左 翼 手	篠 沢 稔 夫
中 堅 手	森 田 守 重
右 翼 手	内 田 勇 吉
補 欠	泉 名 保 夫
補 欠	斉 藤 弘

私 の 野 球 部 生 活

鹿 島 泰 次 郎

私たちは戦後の学制改革による新制中学校の1回目の卒業生であった。

昭和25年4月に川越高校に入学し、同時に伝統の野球部に入部。

川中・川高野球部OB会名簿の同期欄を開いてみると、篠沢、北野、内田、新井、栗原、日高、鹿島、森田(守)、斉藤、星野、奥富、北田、山田(恒)とある。いまや益子、泉名、森(武)を失っている。

往時、昭和25年頃は日本が戦後の混乱期をようやく脱したとされる頃であるが、物質は少なく、国民の大半は貧しかった。「六三制野球ばかりが巧くなり」と揶揄されながらも私たちの野球熱は燃え立っていた。

川越高校へ入学した時の新入部員は、実に40余名を数えた記憶している。想えば金子、細田(忠)、小谷野、加藤、池島、島田、島田(桂)、長谷部たちの懐かしい顔が浮んで来る。監督は山本三郎氏、部長は山口利道先生、主将は谷巖先輩であった。川越、入間郡、比企郡などから集った野球部新人郡も、桜が散り、梅雨が明け、猛暑がグラウンドにみなぎる頃になると、悩みを抱えて野球部を去る者の数も増すなかで、猛練習は一段と厳しくなっていた。

さて、私たち同期生の果した実績は、野球部OB、校友の皆様には誇れるものではありません。私たち2年生の夏でした。松崎日朗先輩が主将を務める“わが川高野球

部”は埼玉大会を勝ち進み、南関東大会に出場。大宮球場で千葉代表銚子商業と対戦、惜しくも敗れた。この大会には同期の中から篠沢、北野、益子がレギュラーとして出場し、活躍した。期待の大きかった3年生の夏には埼玉大会準々決勝で強豪浦和商业に敗退し、屈辱と涙の夏でした。

苦しかった練磨の毎日、球友との楽しかった日々、同じ釜の飯を食うという経験は五十路を越えた現在までも続いており、更に堅固なものとなっている。63年の正月4日、所沢市で久しぶりに同期の新年会を催し、旧交をあたためた。会社の社長、教育者、公務員、中小企業の役員、自営業のおやじさん……。仕事は違ってもそれぞれがこれまでの生きざまの年輪を顔に刻み込んで現われたのでした。酒を飲み、応援歌を声高く歌い、陶然とした中でふとあの野球部室のカビと汗の入りまじった臭気、個人ノックのあとであえぎながらのぞき込んだ飲料水の桶、その中に写った自分の顔、ひときわカン高い谷先輩の声……。そんなものが時間と空間を越えて突然にやって来たのでした。

「野球部70年誌に寄稿するぞ！」酔った勢いで言ってしまったのが運のつき、自分は包丁は握れるが筆は握れない。主将篠沢に見事に乗せられた恰好であった。彼は、昔からツーストライクまで待っていて、それから勝負するくせがあった。それは今も変わらない。

A black and white photograph of the 1946 Hawaiian Baseball League team. Four players stand in the back row wearing white uniforms with "HAWAIIAN" and "K" on them. Three men in suits sit in the front row.

昭和27年秋、丁度学校では校舎の改築の最中でした。校庭には建設資材が並べられ練習場は狭ばめられました。そのようなとき前監督の田中先輩から同じく先輩の伊藤先生へとバトンが渡されました。ところが私達の学年は1年生のときに40人を超えていた部員がこのときにはわずか3人になっていたのです。その頃、学校は5日制で土曜日にも休みでしたし、夏季はサマータイムが実施され日没が8時近くでした。ですから市内の私でも家に帰えるのは9時半ごろでした。そんなわけで練習量は豊富でしたが反面、勉強ができないで退部した部員も多かったようです。そのため3人で所沢や狭山へ1年生を勧誘に行ったこともありました。したがって島野、角田、田中など後輩達に負うところが大きか

さて、翌年春までの冬季トレーニングは今考えるときわめて原始

川越 8
浦和商 2
春日部 0
秩父 1
浦和 3
飯能 1
深谷商 3
川越商 1
岩槻実 3
川口 2
熊谷 7

1
7
4
7
6
2
2
0
1
2

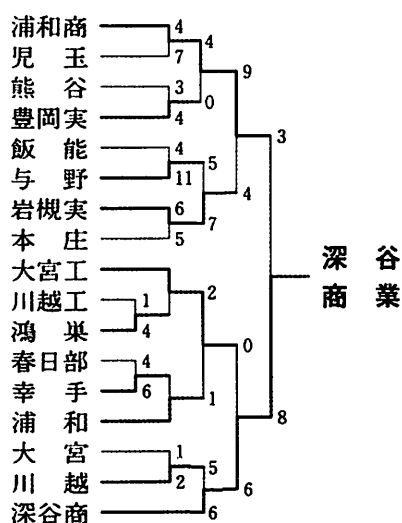
浦和高

川越高 1—7 浦和高

92 川越高校野球部百年史

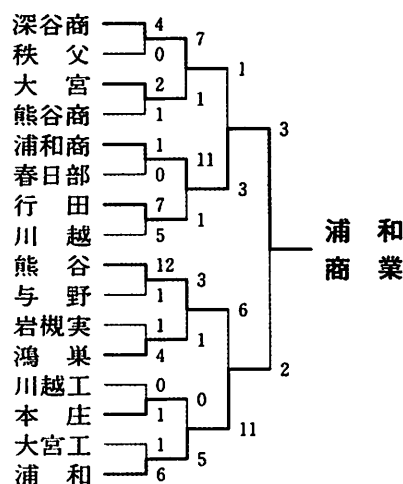
なり俄然川高に元気が出てきました。大沼がすぐに盗塁して2、3塁となった後、なんと米山が三塁前にセーフティバントを敢行しました。三塁手は不意をつかれて米山は一塁セーフ、その間に島野はもちろんホームイン、大沼も三塁を蹴って本塁に突入しました。一塁手はあわてて本塁に送球しましたがそのボールが低くそれ大沼も本塁を踏んで逆転さよならでした。

【昭和28年春】準々決勝で優勝校の深谷商業に惜敗



【昭和28年夏】3回戦で雨と涙のコール、川越の抗議で大揉め

3回戦以後



・2回戦

川越高 2-1 大宮高

・準々決勝

川越高 5-6 深谷商

さて昭和28年の春を迎えました。校舎の改築も終了しモルタル2階建ての新校舎に移転しました。また、監督が伊藤先生から土屋先生にかわったのもこのときでした。そして土屋監督のもと並木、武藤など優秀な1年生にも恵まれ徐々に力を伸ばしていきました。しかし春季大会は西部地区予選を突破して県大会へ出場しましたが2回戦で当時上昇著しい大宮との対戦でした。試合は8回を終って1対0で川越のリードでしたが大宮は長短打7本、川越は無安打でした。そして9回表大宮は2死満塁から

島野、角田のバッテリーの隙を突いて本盗をきめ同点となりました。しかしその裏大宮の投手が突然制球を乱し川越は3連続四球で無死満塁とし角田がこの試合唯一の安打を中堅前に放ってさよなら勝ちしました。この試合は再三再四の満塁を併殺に切り抜けた内野陣の好守が光った試合でした。続く準々決勝は大宮戦とはうって変わって打撃戦となり、川越は深谷商のエース町田をよく打ちましたが1点差で涙をのみました。この大会のため3年生は修学旅行に行けませんでした。より大きな思い出を得て満足でした。そしてその後の春の西部地区大会では、前述のように逆転劇を演じて勢いに乗り優勝をはたしました。

・2回戦

川越	0	0	1	0	3	1	1	0	1	7
川商	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1

・3回戦（日没引分）

行田	2	0	0	5	0	0	0	0	7
川越	0	0	0	2	0	3	0	2	7

・3回戦再試合（降雨コールド）

川越	0	0	0	0	5	5
行田	0	0	1	0	6	7

メンバー（打撃順）

6 5 2 7 3 9 8 4 1 補補補
大 米 橋 角 田 長 鈴 並 島 鈴 忍 武
沼 山 本 田 中 尾 木 木 野 木 成 藤

いよいよ夏の大会を迎えました。当時は2回戦までは期末考査の前におこない3回戦からは考査後大

宮球場を使用しておこなわれました。野球部は小杉会長さんのお宅をお借りして合宿にはいていました。ところが3回戦は前日までの快晴から一転して梅雨空となり試合は延期に次ぐ延期となりました。それでも雨模様の中であやうく始まった行田戦も第4試合だったため日没引き分けとなり、会場を大宮高等学校に移して翌日おこなわれました。しかし雨の中で開始された試合は回を追うごとに雨が激しくなり、6回にはいろいろとしたところで突然球審が試合終了を宣したのです。そのため川越側から不満の声があがり夜まで大揉めに揉めてしまいました。乱戦で2点差、しかも後に4イニングも残してただけに泣けました。それに翌日から夏空が戻ったのです。

昭和30年卒業 (高7回)



後列左より 長尾選手・米山選手・島野選手・渋谷先生・忍成選手
前列左より 角田選手・鈴木マネージャー・田中選手・伊藤元監督

戦後初、18年ぶりの県大会優勝成る！

昭和28年夏の大会で、行田高に悪夢のような敗戦を喫した翌日から我々の甲子園への再挑戦が始まった。真夏の厳しい基礎練習からスタートした新チームは、部員数が少ないながらも順調な成績を残すことが出来た。

秋の埼玉県大会では、島野投手の好投で、大宮高、熊谷商、浦和商を連破して決勝戦へ進出した。然し主砲の角田・田中を負傷で欠いた打線は熊谷高のエース福島投手(後に東映フライヤーズで活躍)の剛速球を打てず、戦後初の県下制覇は実現出来なかった。

冬季練習は荒川の土手迄の長距離走を主体に専ら走れ走れであっ

た。昭和29年春の埼玉県大会で川越高は優勝候補の一角であった。ところが一回戦で乱戦の末に本庄高に4-6で敗れ去ったのである。当時、野球部は春季大会の日程上、4月に行なわれる修学旅行には参加出来なかった。が幸か不幸かこの敗戦によって修学旅行へ行けることになった。先輩諸兄からは、「お前ら、修学旅行に行きたくて負けたのでは!？」と部室でお説教をくったのも思い出の一つである。その後も早実・立教高を招待しての強化試合等甲子園を目指しての懸命な努力を続けた。

そして、いよいよ夏の大会に臨んだのであった。7月7日の第一

回戦で川越農に10-0で快勝してから春日部高、不動岡高、熊谷高、浦和商と撃破、遂に昭和12年以来18年ぶりの優勝を飾ったのである。特に準決勝では、福島投手を擁する熊谷高を2-0で破り昨秋の雪辱を果すと同時に戦後初めて公式戦で熊谷高に勝ったのである。又決勝戦では、レギュラーの大半が前夜からの発熱、下痢に苦しみながらも気力をふりしぼって戦い抜き浦和商に2-1で競り勝ち、優勝旗を川越に持ち帰ったのだった。だが優勝の喜びに浸っている時間も無く、各選手の体調の回復を計りながら守備面、攻撃面での徹底的なチェックを行なって南関東大会に備えたのである。7月31日、千葉県営球場にて国府台高と対戦変化球主体の白石投手に3本のタイムリー2塁打を浴びせ、島野投手の好投と相まって3-0のシャットアウト勝ちをおさめた。次いで準決勝は8月2日、千葉代表4校中実力No.1と見られていた千葉商と対戦した。「これに勝てれば」との気持ちはどの選手の胸の中にもあり、練習の成果の総てを出して戦った。試合は島野・林両投手の投げ合いとなり1点を先行された我々はすぐ同点に追いついた。然しながら遂に勝ち越し点を奪えず1-4で涙を飲んだのであった。念願の甲子園出場は叶わなかったが我々第7回生一同は、学校当局生徒会、川越市、町のファン、そして後援会の小杉会長とご家族、OB会の皆さん等々、あらゆる方面からのバックアップに心から感謝して筆を置く次第である。

戦 績

昭和28年秋季県大会

川 越 高 8-1 大 宮 高
川 越 高 1-0 熊 谷 商
川 越 高 2-1 浦 和 商

〈決勝戦〉

川越	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
熊谷	0	1	3	0	0	2	1	0	X	7

(川越) 島野一・米山

(熊谷) 福島一・藤野

昭和29年春季県大会

川 越 高 4-6 本 庄 高

昭和29年全国高校野球

埼玉県大会

川 越 高 10-0 川 越 農
川 越 高 15-1 春日部高
川 越 高 2-0 不動岡高
川 越 高 2-0 熊 谷 高

〈決勝戦〉

浦商	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
川越	0	0	0	1	0	1	0	0	X	2

(浦商) 鈴木一・秋池

(川越) 島野一・米山

南関東大会

〈1 回 戦〉

川 越	0	0	1	0	1	0	1	0	0	3
国府台	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

〈準決勝戦〉

川 越	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
千葉商	1	0	0	0	1	0	1	1	X	4

(川 越) 島野一・米山

(千葉商) 林 一・戸村

伏兵のもたらした 優 勝 旗

記録で見ると準々決勝後の3試合で意外にも角田が3安打無得点、田中ノーヒットなのに比べ、長尾、並木(2年)、米山・山田(1年)と伏兵が殊勲打を放っている。俊足、強肩の米山は熊高の福島の高球を中前に決勝打。決勝は前夜の集団中毒でフラフラだったが武藤(2年)が3本のヒットを打ち山田の2本のテキサスで辛勝した。

一チームカラーと3・4番の関係一

角田、田中の3・4番は長打力があり特に角田は攻守走一流で上に行ってもやれる素材、田中も腰の安定した打撃で2年からクリーンナップを打った。川高野球は上品でおとなしいと評されたがその典型がこの2人で、人がよくオットリ型だった。5番の長尾は気の強い処があり試合に強かったがゴロ恐怖症。良い時は連続で左中間に糸を引く様な長打を放ったが、負ける時はチーム同様あっさり凡退した。

一鬼の目に涙、忍成初ホームー

バットもボールも良くない頃だから、この夏の大会の本塁打は僅か2本。その第一号を打ったのが「ライトで8番」で「忍成初ホームー」が翌日の新聞の見出しを飾った。忍成は大柄だが不器用で豪快な空振りが多く、守備でもミスをしては監督や先輩に怒られていた。叱られても試合に出られなくても少しもめげない忍成は、兄事してる角田と「バカダナ、オメエ」「だってショウガアンメエ」とい

うやりとりでチームを明るくしていた。忍成が豪快に左中間に叩きこんだ時、鬼の谷監督の目にはうつすら光るものがあった。

一快心のピッチングで熊高戦初勝利一

今の野球でこそいかにボールになる球を打たせるかがポイントだが、島野は大小のカーブと二種類のシュートでいわゆるボール球勝負のピッチングをした。特にゆるく沈むシュートは引っ張ると殆どサードゴロになる球で思う様にゴロを打たせる自信があった。準決勝の熊高戦は絶妙のコントロールで完封、戦後初めての公式戦勝利となった。鈴木も2年の春森田の川越工を完封する小気味良いスピードの左腕投手だったが、人望があり生徒会長に推されてマネージャーに転向、裏方でチームを支えて呉れた。

一野球が強くなるために一

この頃小杉先生始め後援会の皆さんが毎日練習を見に来ていた。校長、渋谷部長を筆頭に野球部に目をかけてくれる先生方もいた。直接指導に当たっていた田中、土屋、伊藤、谷の歴代監督と諸先輩、そういう関係者の熱い想いが川高野球を少しづつ強くして行った。特に故大附先輩は心底野球好きで良く我々の面倒を見て呉れた。ここに心からの感謝の意を表すると共に謹んで御冥福を祈りたい。

〔県大会個人賞〕

- ・最優秀選手賞 島 野 昌 甫
- ・打 撃 賞 武 藤 温 美
- ・本 塁 打 賞 忍 成 精 一
- ・敢 闘 賞 米 山 志 郎
- 山 田 英 雄

昭和31年卒業 (高8回)



後列左より 並木・武藤・石坂
前列左より 宮寺・土屋先生・仲

連続優勝を逸す

昭和30年県大会

前年18年振りの県下優勝という輝かしい戦績を残して7名もの卒業生を送り出した痛手は大きくスケールは「グット」小さくなり、ちょっと淋しい気がしたが、名門川高の名を恥しめぬ様にと前年の優勝という成績を追って、炎天下のグラウンドに泥まみれになって練習、武藤主将を中心に良くまとまりチームワークは前年を凌いでいるが、秋の県大会は初戦負、しかし春の西部地区大会は宮寺投手に制球がつきスピードに威力が加わり優勝、しかし県大会は深谷商業と対戦し1対0で宮寺君の力投も空しく敗退、この敗戦は我々選手にとっては非常に「ショック」で自信喪

失したが、自信を取り戻すには練習しかないとそれ以来連日のように「ノック」「ノック」300本の個人ノックで「相手に点をやるな」を相言葉に、激しい練習で次第に闘志を取り戻し練習試合にも熊高をはじめ川越工、日大二高と連勝し、試合経験と多くの技術を体得できた事は、大きなプラスとなった。それに春の選抜全国大会に出場した立教高校と対戦し「2対1」で勝ったことは一段と自信を付けた。我々はこのような多くの経験と技術と自信とを持って夏の大会に出場した。春日部、大宮工と勝ち続け、前年と同じ決勝戦へと進出し、武藤君、宮寺君、石坂君、

校長 渡辺 正紀 生徒数 950
監督 土屋 亮晃 部員数 35
部長 渋谷 建

【戦績】

- ・昭和29年 秋期大会
川越高校2-8 所沢高校
- ・昭和30年 春期西部地区
川越高校2-0 所沢高校
川越高校3-1 川越商業
(優勝)川越高校2-1 川越工業
- ・春期県大会
川越高校0-1 深谷商業
- ・昭和30年 夏期県大会
川越高校4-1 春日部商
 〃 1-0 大宮工業
 〃 7-0 川口工業
 〃 3-0 川口高校

決勝戦

川越高校1-4 鴻巣高校

仲君、並木と3年生5名出せる力を出し切って戦ったが勝利の女神は我々の頭上には微笑んではくれなかった。連続優勝は逸してもまだ南関東大会がと十分な休養をとり千葉一高と戦ったが1対2で破れてしまった。今思い出してみると大変残念なことではあるが、大好きな野球を名門川高ですることが出来、大勢の友人が卒業して30余年たつ現在でもいるということは、私にとってかけがえのない青春であった。尚各先輩の絶大なる御指導に対し深く感謝すると共に、今は亡き大附先輩の御冥福を、お祈り申し上げます。

最後になりましたが、常に寒暑の別なく我々を指導して下さいた土屋先生に衷心より感謝する次第です。

夏季大会決勝戦

鴻 巣	0 1 0 0 0 0 0 0 3	4
川 高	0 1 0 0 0 0 0 0 0	1

鴻巣 加藤一鈴木

川越 宮寺一戸口

〔戦評〕緒戦から連投の川高宮寺はこの日も好投、8回まで5安打の散発におさえた。2回仲良く両軍1点ずつを取りそのまま試合はこう着状態、9回を迎えた。好投の宮寺もここで疲れが出たのか四・死球と安打で2死満塁と攻められ再び死球を与え押出しの1点、続く打者に初球を右前に流され決定的な2点を与え無念の涙をのんだ。

(埼玉県高野連30年誌より)

〔川高〕 打得安四失

(6) 武 藤	4 0 0 0 0
(5) 山 田	4 0 3 0 2
(2) 戸 口	3 0 0 1 0
(3) 阿 部	4 1 2 0 0
(1) 宮 寺	3 0 一 0 0
(9) 国 谷	1 0 0 0 1
7 石 坂	1 0 0 0 0
(8) 菅 間	3 0 0 0 0
(7・9) 鎌 田	3 0 1 0 0
(4) 並 木	3 0 1 0 0

29 1 7 1 3

〔鴻巣〕 打得安四失

(9) 島 崎	5 0 1 0 0
(5) 白 石	4 0 0 0 0
(1) 加藤昭	3 0 0 0 0
(2) 鈴 木	3 0 1 0 0
(7) 加藤幸	4 0 3 0 0
(3) 橋 本	2 0 0 0 0
3 黒 沼	2 0 0 0 0
(8) 須 黒	3 0 0 0 0
(6) 木 村	3 0 1 0 0
(4) 勝 田	3 0 1 0 0

32 0 7 0 0

▽▽▽
三二併
墨墨殺
打打川
||川
阿加2
部藤・
(川鴻
1)

南 関 東 大 会

川 越	0 1 0 0 0 0 0 0 0	1
千葉一	0 0 0 2 0 0 0 0 X	2

〔川〕 宮寺一戸口 (千) 宮間一岡

〔川高〕 打得安四失

(6) 武 藤	3 0 0 0 1
(5) 山 田	4 0 0 0 0
(2) 戸 口	4 0 0 0 1
(3) 阿 部	4 0 1 0 0
(1) 宮 寺	3 1 2 1 0
(8) 菅 間	3 0 0 0 0
(9・7) 鎌 田	3 0 1 1 0
(7) 石 坂	1 0 0 0 0
9 鈴 木	1 0 0 0 0
(4) 並 木	2 0 0 1 0

28 1 4 3 2

▽▽▽
三二併
墨墨殺
打打川
||川
宮宮2
寺間・
(川千
1)



左より 武藤・並木・宮寺

2年生の活躍に深く感謝

昭和30年夏の大会には、3年生が5名、ベンチ入りが20名、何んとも淋しい上級生であったことか！入学時には20余名いた部員も練習の激しさと学業の遅れ？とで夏の大会前には5人、前年18年振りの優勝の翌年としては腐甲斐無い限りでした。が、しかし2年生の協力には深く感謝しております。

菅間君をはじめ、戸口君、阿部君、山田君、鎌田君、国谷君、増田君、鈴木君、それにマネージャーの矢部君本当に有難う。君達無かりせば2年連続の決勝進出はなかったと思います。

当時を思い返すと、今の選手と比較して、技術的、物質的、体力的に相当劣ると思われるが、精神的又野球が好きであったと言う点では現在の高校生に一步も「ひけ」をとらないと自負している。

特に当時としては珍しい事でレギュラーになれなかったら辞める人の多かった中で3年間補欠で一生懸命練習し、試合でもコーチーとして助力してくれ、一度入部したら、卒業迄と継続する事に意義を感じていた友人に敬意を表し、君の力の大きかった事を紹介します。

竹バットが懐しい

卒業から32年。なんと昔のことだろう。入学当時の1年生部員はかなりいたと思うが卒業時には5人になっていた。こうなれば当然レギュラーと思われるだろうが、これが補欠であったのだから情けない次第である。しかし今でも硬式ボールを眺めると握ってみたいと思う。そして投げてみたい。

竹バットが妙になつかしく思い出されます。

(仲 敏夫)

昭和32年卒業 (高校9回)

成 績

- 30年秋季県大会
川高3 - 6 熊谷
- 31年春季地区予選
川高2 - 2 川越商(引分)
川高2 - 1 川越商
- 31年春季県大会
川高4 - 3 熊谷
川高2 - 17 大宮工
- 第38回全国高校野球選手権埼玉大会
川高3 - 4 川越商



後列左から 池田(2)・野口(2)・柴崎(2)・神田(2)・田中(2)・横田(2)
中列左から 戸口・増田・国谷・鈴木・不明
前列左から 山田・菅間・阿部・鎌田・佐々木先生

思 い 出

卒業して30余年の月日がたつと当時グラウンドで力いっぱい青春のエネルギーを野球にうちこんだ、高校時代もはるか歴史の彼方へと遠ざかってしまった感がする。

我々が入学した昭和29年は、川高野球部が18年振りに全国高等学校野球大会埼玉県大会に於て輝く優勝をとげた年でありました。翌昭和30年は武藤主将、並木、宮寺先輩を軸に1年生からレギュラーで活躍した戸口、山田をはじめ菅間、阿部、鎌田、鈴木、国谷の2年生パワーを加えたチームで夏の県大会では決勝戦で惜敗はしたが準優勝を飾ることが出来ました。

県大会に於ける優勝、準優勝の輝かしい経験をした翌昭和31年は最

上級生として菅間主将のもと野口、新井、柴崎、神田の2年生をレギュラーに加え、先輩方の築いた輝かしい伝統を守らんと懸命に努力したにもかかわらず、西部地区大会では優勝したものの肝心の夏の大会では駒を進めることが出来ず無念の涙をのんだが、結果はともあれ3年間伝統ある川高野球部員として若き青春の血を燃やすことができたのは生涯忘れることがないであろう。

秩父風の
吹きすさぶ

中での冬期練習、真夏のギラギラ輝く太陽の下でのノック、汗と土で真黒になったユニフォームで白球を追いつづけた姿、あの苦しかった練習に耐えた事が精神力を養い、野球を通して学んだ数々の教訓がどれ程現在の自分に役立っているかはかりしれないものがある。



写真左から
鈴木・鎌田・菅間・国谷・阿部・山田・増田・戸口

一回戦で敗退した夏

「番狂わせ、川越高校敗退」これが翌7月19日の朝日新聞の見出しであった。昭和31年7月18日、我々は土屋亮晃監督指揮の下、道路一つ隔ててあった川越商業高校と初雁球場に対戦した。隣組の学校という関係で、夏の大会迄に3回程練習試合で戦っており、2勝1敗の相手だった。お互に実力を知っているということは、かえってやりにくいということがあり、いやな相手とぶつかったという感じはあったが、まさか負け試合になろうとは、夏の高校野球の恐ろしさをいやという程味わされた一夏であった。スコアは4対3という接戦であった。投手には鈴木、神田(2年生)の夫々変化球及び速球を持ち味とする2人を揃え、捕手には1年生からの正捕手の戸口、三塁にはこれ又1年生からホットコーナーを守り抜いた山田が居た。外野の守備はA級と朝日新聞に紹介された、鎌田、菅間、国谷の外野手の他に、2年生からクリーン

アップを打った阿部が1塁、武田が2塁と、兎角ショート野口の野口を除いて、全て3年生で布陣を組めるチームであったが故に、30年経った今も悔いが強く残る。大会前の朝日の球児という記事の中で、「去年に劣らないものになって来ているが、打撃に今一段の努力が欲しい。素質のある1、2年生を如何に育てて行くかにも今後の課題がある……」という岩崎清録大先輩の談話が載せられたが、正にこれが的中した格好で、貧打が敗因の一戦であった。

従って、我々ナインには、かうじて西部地区大会で優勝という記録はあるものの、70年誌の一頁を飾るにふさわしい戦績がない。然しながら、ここに書き残しておきたいことが一つあって、それは練習試合ながら、早稲田実業を堂々と打ち負かしたことである。この時の早実には投手に1年生の王、3年生の河原田、捕手に醍醐、3塁に徳武等々後にプロで大活躍し

た錚々たる選手がいて、春の甲子園の準優勝校であった。当時のスコアブックが残っていないので、残念ながらスコアは定かでないが、長野県からの遠征帰りの翌日ということで早実は主戦投手の王に替って河原田が投げて来たのを見事に打ち込んだ快挙であった。戦った場所は早実のグラウンドで、この時打者として出て来た王選手にセンターの頭上を深々と打たれ、追えども追いつかなかったという鮮明な記憶がある。

我々の夏はこのようにして終わったが、毎年春と夏の甲子園がめぐってくる度に、秩父おろしをついて伊佐沼をかけめぐり、喜多院の階段をかけ昇った冬期練習、ユニフォームの汗を絞りつつ受けた真夏の千本ノックの光景が去来する。眼前に繰り広げられる熱戦、信じられないような暴投、エラー、感激の涙くやし涙全てが我々の青春を2重写しにしてくれる。敗れはしたものの、我々の最後の夏はこのように毎年舞い戻ってくる。大変有り難いことである。菅間五郎

ブルペン優勝投手

鈴木 和雄

私が1年生の夏でした。たしか29年夏だったと記憶しています。川高対熊高の決勝戦でした。島野エース先輩が前日よりの腹痛を訴えており、もしだめなら、お前が投げる事もあると監督から言われておりました。気力で投げる島野先輩が9回を投げ切る迄私もブルペンで投げつづけていた。川高18年ぶりの優勝をブルペンで味う事

が出来ました。いつかこの大宮のマウンドで優勝を、この手で、と誓いました。

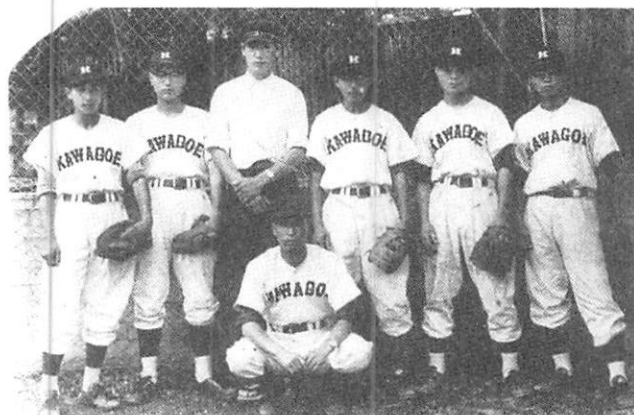
何年か後にある企業の投手として実業団準硬式と軟式の県優勝を大宮球場で4回経験する事が出来ました。

川高(かわこう)と言うよりは川高(かわたか)野球の再度黄金時代が来る事を念じております。



川高のバックネット前で
昭和31年10月

昭和33年卒業 (高10回)



(左から)
横 田
新 井
中 川
土屋監督
野 口
柴 崎
田 中

下 級 生 時 代

我々昭和33年卒業メンバーは7名です。入学時は34名ぐらいでスタートしましたが、その間諸般の事情で退部者が多く出、我々7名はよく最後まで続けられたと思います。

さて、憧れの川越高に入学していざ入部してみますと、それぞれ中学時代実績のある者が多く、県大会で活躍、東上沿線大会で優勝と秀れた選手が入部していたのを思い出します。しかし、川越高で先輩のプレーに接すると何やら不安感が先に立ち、レベルが高く、硬球の乾いたカーンという音やプレーする先輩一人一人が偉大に見えたものでしたが、とにかく「ゼロから出発し、猛練習に耐え、何としてもKAWAGOEのユニフォームを着て甲子園に行くんだ」と誰もが考えたに違いありません。先輩の思い出もたくさんあります。武藤先輩の華麗な守備、好投手宮寺先輩、阿部、戸口先輩の豪快な打撃、100本ノックでぶっ倒れ

るまでやらされていた並木先輩、ほんとうに昨日の様に思えます。又、合宿で風呂帰りラーメン屋に寄って見つかり説教、合宿に家からバターなど持ってきて「皆と同じものを食べ」と叱られたり、練習をサボったのがバレ、昼休み、部室の机の上で正座、腹筋5分。暴力はなかったけど説教はたびたびありました。いずれも良い思い出になっています。

●齊藤マネジャーの思い出

「当時の思い出で特に印象に残っているのは、合宿の事と、夏の大会が終ると土屋先生の家へ遊びに行った事かな。合宿での思い出は、菅間昭先輩が勉強を教えに来てくれた。出題傾向を考え、“ヤマ”をはらしてくれたっけ。それから、夏合宿は、谷さん宅でメシを用意してくれてリヤカーで取りに行ったり、おかずは納豆とコロケを部費で買い、好調な選手には矢部先輩と相談して時々玉子をつけてやったと思う。土屋先生の家には、夏の大会が終ると先生が呼んでくれて野球の話をしたり、魚つりを

して遊ばせてくれた。その夜は本堂に泊めてもらったし、ほんとに色々思い出はあるね。」……談



齊 藤
マネジャー
(土屋
先生宅本
堂にて)

●秋季県大会 準優勝

色々な事があった下級生時代が終り、いよいよ夢にまでみたKAWAGOEのユニフォームを着ての初めての公式戦、秋季県大会ではあれよあれよと勝ち進み、終ってみれば関東大会あと一步のところでした。

●準々決勝 川高 8-1 浦高
●準 決 勝

羽 実	0 0 0 1 0 0 0 0 0	1
川 高	0 0 3 0 0 0 0 0 X	3

(羽) 横 山-長谷川

(川) 神 田-柴 崎

●決 勝

熊 高	0 1 0 0 1 0 0 0 0	2
川 高	0 0 0 0 0 0 0 0 0	0

二塁打 森(熊) 杉田(川)

〔川高〕 打 安

⑥ 新 井	4 0	この試合を最後
⑤ 杉 田	4 1	に好投手神田君
① 神 田	3 0	がお兄さんを事
⑨ 中 川	4 0	故で亡くし、退
⑦ 鈴 木	2 1	部の己む無きに
③ 岩 田	0 0	至った事、誠に
③ 古 屋	2 0	残念でした。彼
② 柴 崎	3 0	のお陰で我々7
④ 野 口	3 0	名はよい思い出
⑧ 石 井	2 0	がつくれました。
計	27 2	

熊 高 28 5 本当に有難う。

●夏季県大会 甲子園大会予選

春季県大会は3回戦で大宮高に大敗、翌日より猛練習が始まりました。その間、地区大会優勝、対外試合でも好チームを相手に健闘、手ごたえをつかんで夏の大会にのぞみました。

大会前の予想では新聞にこう書かれました。「川越高は川辺投手がメキメキと腕を上げて来て好調、練習試合に強豪帝京高を4対3で破った。春の大会大宮高に大差で破れたのは主戦投手に次々と故障が起きたためだった。横田捕手の好リードと内野守備がよくなり、ことに野口、新井の二遊間がかたい。打線は3番鈴木、4番柴崎は長打も期待出来る。「川高今年是不振」との一般予想以上活躍出来そうだ。

土屋監督談

気力を充実して

“品がよすぎて”といわれるので気力を充実してぶつかる。前半引き締めてこちらのペースに乗せ、後半一気に勝負。

(以上 朝日)

抽選会では第8シードになり、実力が認められたのか？ですけれど、結果的には当然に思える戦いぶりでした。

◇1回戦 県内屈指の左腕永井投手(国鉄スワローズ入団)を擁する与野高。前半リードを許しましたが、中盤同点に追いつき、結局8回に決勝点を挙げ6対5で初戦をものにしました。

◇2回戦 秩父高と対戦しましたが、4対0と快勝。特筆すべきは

バント作戦で試合慣れのしない秩父高をカキ回したベンチの作戦勝ちといえます。



◇準々決勝(南関出場決定戦)

相手は候補大宮高です。打撃のチームで、我が川越高は投手力にやや不安がありましたが「気力を充実、川高ペースに引きづり込み後半勝負」という監督の戦前の考え通りの展開になりました。次の様に当時の新聞に書かれています。

「戦評 2、3回戦はゴールドゲームで勝ち続けた大宮高にとって実に苦しい試合だった。予想では大宮高の楽勝。事実大宮は1回得意の速攻で2四球から岸の三ゴロ失で2点、さらに渡辺が2点ホームを放ち早くも4点をあげ順当に先行した。しかし川越はよく攻め、3回横田の左前安打、敵失からチャンスをつかみ北野、新井と続けてスクイズで2点を返した。大宮は5回1点を追加、川越もその裏2塁打の北野を柴崎が中前に叩いてかえし、8回にも当り屋柴崎が2塁打を放ったが続く石井の中前打でホームをついたが寸前で憤死。2死後正木が2塁打を放ち1点を追加して1点差と迫っただけにこの憤死は惜しまれる。そして9回裏、川越は横田の敵失から2死2、3塁と一打逆転のチャン

スをつかみ柴崎をむかえたが大宮は勝負に出、やっと右飛に打ち取った。大宮高は全くの辛勝で、むしろ川越の捨身の闘志が賞賛されよう。又大会後の講評で、「健闘した川越高」とあり、準々決勝で最後まで大宮高を苦しめた川越高の健闘が特筆大書されよう。ナイン一丸となって強敵にぶつかって行った試合ぶりは本大会最高の華であり、南関に出したいチームだった。」(以上 朝日)

〔川高〕	打	得	安	結局	甲子園	出場
④野口	4	1	1	は	な	り
⑦北野	5	1	1	し	た	が、
⑥新井	5	0	1	宮	高	に
⑤柴崎	4	0	3	打	ち、	堅
⑧石井	4	1	2	手	を	盛
③古屋	3	0	0	立	派	に
⑨正木	3	0	1	つ	た	戦
①川辺	2	0	0	い	で	あ
①吉田	2	0	0	と	自	負
②横田	4	1	2	り	ま	す。
計	36	4	11			

最後になりますが、当時兄貴のような存在で、家庭を犠牲にして我々のためにご指導下さいました土屋先生、渋谷、梅沢両先生、本当に心暖まるご指導ありがとうございました。御礼申し上げます。又川高野球部の益々の活躍を期待します。鈴木監督頑張れ!



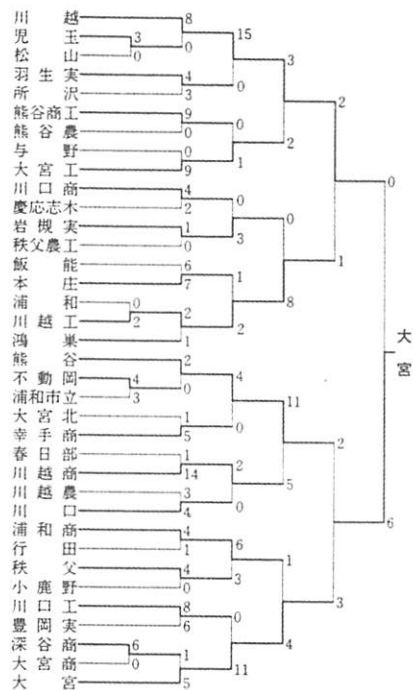
昭和34年卒業 (高11回)



三列目左より 北野・稲生・梅沢先生・渋谷先生
二列目左より 矢部・古屋・高橋・杉田・石井
一列目左より 栗原・川辺・正木・鈴木

第40回 全国高校野球選手権埼玉大会

期 日 7月20日～8月1日
会 場 県営大宮、熊谷、川越球場
参加校 36校



甲子園の夢は消えて 40回記念大会

我々は、昭和31年4月伝統ある川高野球部に入部致しました。当初は30数名の新入部員で、各々個性に富み有能な者が多く、土屋先生を始め、川高倶楽部の諸先輩の熱烈な期待の基にご指導を賜りました。

昭和33年夏の大会は、40回目の記念大会として一県一校出場という幸運に恵まれ一段と力が込められました。春季の西部地区大会で優勝し、目標の夏の大会に向って、意気軒高に毎日の猛練習に励みました。これまでご指導頂いた土屋先生が転任され監督は島野先輩にバトンタッチされました。島野新監督は在学中（一橋大）でしたが、入学以来毎日の様に来校され投手陣への助言等大変なご指導をして下さり、良き先輩良き兄貴分として気心も知れており、ナインに異和感はなかったと思います。同時に監督と同様常に面倒を見てくれた、田中（貞）、並木両先輩をコーチとして迎え、現在で言うトロイカ方式の体制で臨むことになりました。

都内を始め近県の有名実力高校との練習試合では、超高校生、王（元巨人軍監督）選手中心の早実、大羽（元広島）投手率いる日大一高等にも打ち勝つ好成績を納め、自信と実力も更にアップし、夏の大会に突入したわけです。

下馬評では、大宮高、熊谷高に次ぐ第三シード校にランク

されました。特に三割を越すチーム打率と外野の堅守は高い評価を受け、投手力と内野のダッシュ力にやや難点有りとの評でした。この年は雨で延期が続き組合せでは7月21日の予定が7月27日に初登場となり対戦相手は児玉高でした。試合は2年生エース吉田の好投（19奪三振＝新記録）と打線が奮い8X-0で快勝しました。

7月28日の3回戦は羽生実相手に評判の強力打線が爆発し、毎回得点の15点を取り、15-0の5回コールド勝ちで楽勝しました。そして7月29日の準々決勝対大宮工戦へ駒を進めました。この試合相手の投手、滝沢の軟投に終始攻撃の歯車が狂い、又ベンチの作戦ミスも重なり、倍以上の10安打10四球を奪い乍ら再三の好機も実らず、延長15回4時間半余りの激闘も決着つかず、規定により翌日再試合となりました。再試合の一戦は、3回2点の先取点を許し苦戦となったが、必死に追撃し4回1点、8回1点を奪いタイとし、延長戦に持ち込み、11回裏一死満塁から主将石井選手の安打で勝ち越し、3-2で二日間に亘る死闘にケリをつけました。26回一人で投げ抜いた相手滝沢投手に拍手を送ると同時にこの試合も15安打を放ちながら、苦戦したのは、作戦ミスと攻撃面でのチグハグさが目立ちました。

大宮高	0	0	2	0	0	1	3	0	0	6
川越高	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

☐ 中堅手 石井 功

あれから30年が過ぎ去った。私にとってこの30年間の出来事よりも鮮明に残っているのが青春時代の思い出——それは川越高校野球部での2年有余の生活です。練習の苦しさ、試合に負けたときの悔しさ、合宿生活の楽しさetc…。

甲子園出場の夢は果せなかったが、この時代ほど一つのことに集中、熱中したことがなかった。

今は、息子がその時代を迎えている。先輩として、また、父親として静かに見守っている心境です。

☐ 三塁手 杉田 昇

3年になり、進路について悩んでいた。なんとなく気持の整理がつかないままグラウンドに出かけ、フリーバッティングの打球を鼻に受けダウン、即病院に入院し手術を受けた。お陰で今はスッキリした形になっている。幸にその後もボールを怖がることなく野球を続けてきた。その当時の話しになると打者であった石井は今でもドキッとするようだ。

☐ マネージャー 矢部 博

私達のチームは、3年生が11名もあり、各自個性が強く一匹狼的な者が多数おりチームワークの維持には石井主将も大変苦労したと思います。春季大会以後は、良くまとまり、チーム力もグリーンと上昇したと思います。マネージャーとして一番嬉しかったのは、後援会の方が大変ご援助下さり、特に合宿の際等は炊事や買物等全部やって頂き、食事バラエティに富み、選手の健康維持に大いに貢献して頂きました。心から感謝申し上げます。

野球部長の梅沢先生には種々の面で大変お世話になりました。

☐ 一塁手 古屋 栄三

学生時代はごく平均的な過し方でした。野球部では冬期練習の校外マラソンが特に苦手で早く春になればいつも思っていたものです。楽しみは練習後近所の店の大盛やキソバ、コッペパン等食べて帰路につくことしばしばで、市駅方面に向う連中とダベりながらも楽しみなものでした。

☐ 遊撃手 北野 昭也

今一步のところで甲子園への夢は潰えた。

不思議と涙は出て来なかったことを覚えている。

なぜだったのだろうか？といま考えてみると、目標を失った者に良くある一種の虚脱状態にあったのだろうと思う。

その日、鈴木と今は亡き栗原が小生の田舎に泊った。「家に帰るのがいやだ」という。

三人でいろいろ語った。止め処なく涙が出て来たことを昨日のように思い出す。

多感で夢多き高校生活は、決勝での敗戦で終止符を打ったが、新たな目標へ向ってスタートしたことも確かであった。

☐ 捕手 正木 忠良

田舎の中学を卒業して、野球の大好きな私が川高のグラウンドに立って先輩や同級生の勇姿を見た時、自分も出来るだろうかと不安でした。甲子園を目標に練習に明け暮れた毎日の中で、喜多院での腹筋運動、田んぼ道のマラソン、廊下での柔軟体操、又初雁球場に早実を迎えての練習試合で、王選手がバッターボックスに入り一言二言、次の瞬間大ホームランを打たれた事も楽しかった思い出です。夏の大会の決勝戦は精神力、気力で戦ったのですが大宮高に6対0の惨敗です。ゲームセットのサイレンが鳴った時、敗れた残念さと一生懸命頑張った満足感と一緒に涙が流れました。川高野球部で青春を過したことが私にとって貴重な財産と思い大事にしています。

7月31日、準決勝対川越工戦は、互いに熟知の間柄であり、反面やりにくい相手であったが、実力で勝利2X-1で順当勝ちした。8月1日決勝対戦相手は、宿敵大宮高である。ナインは打倒大宮高の意気に燃え、一丸となり挑戦したが、炎天下6日間の連戦の疲れからか、闘志も空転の感あり、相手渡辺投手の投打の活躍の前に、0-6の完封負けを喫し甲子園出場のチャンスを逃しました。大会を振り返ると、当初懸念された投手力も吉田投手の成長と川辺投手の巧投、又、内野守備の乱れも目立つものがなく評判の打線は決勝戦を除くと実力通り発揮されたと思います。

これで、我々の高校野球も念願達成ならず幕を下ろしたわけですが、入部以来ご指導頂いた土屋、島野両監督を始め、多くの先輩の方々、更に小杉後援会長を中心に連日寸暇を利用して我々の練習を見守り、叱咤激励下された多数の後援会の皆様により御礼申し上げます。

翌年後輩が、吉田投手を中心に夢であった甲子園出場を実現し、良く健闘高評価を得ましたが、現在でも我々のチームが川高野球部史最高の打線（機動力も含む）であったと自負しています。

昭和35年卒業 (高12回)



第41回全国高等学校野球選手権大会

【上左から】家村監督、山崎公(1・2年外野手、3年マネージャー)
 【中左から】横田芳明(主将・サード)、近藤育三良(ショート)、丹代富保(旧姓吉田・ピッチャー)、
 高正保(2年)、渡辺丈士(外野)、嶋本正雄(2年・ライト)、中島栄紀(2年)、田中誠治(2年)
 【下左から】杉田文男(センター)、飯島弘(ファースト・故人)、内沼稔(セカンド)宮根七郎(レフト)、
 高野栄作(キャッチャー)、高松康正(2年)

私達のチーム

前年の強打のチームとはうって
 変わり、好投貧打のチームでした。
 昭和33年秋、新チーム結成と同時に
 家村監督が就任し、技術、精神
 両面からエース吉田を軸とした守
 りに徹したチームに育てられまし
 した。「ミスをせず謹少差で勝つ。」
 チームでした。平均身長162cmと
 小粒ながら横田主将を中心に万全
 のチームワークを誇るピリッとし
 たチームでした。

ガッツな横田主将三塁手、二枚
 目エース吉田投手、黙って耐える
 高野捕手、オッチャンこと飯島一
 塁手(故人)、牛若丸内沼二塁手、
 野球の天才近藤遊撃手、沈着冷静
 宮根左翼手、イダ天杉田中堅手、
 唯一人の2年生レギュラー嶋本右
 翼手、紳士渡辺外野手、それに年
 令の関係で3年生の時はマネー
 ジャーだが強打者山崎選手、以上が
 我がチームの不動のメンバーであ
 りました。

春の県大会に優勝

私達のチームが頭角を表わし始
 めたのは、家村監督が就任して半
 年程経った春の県大会でした。

・昭和33年秋季大会10月

1回戦 川 越1-0 岩槻実
 2回戦 川 越6-0 浦市立
 準決勝 深谷商2-1 川 越

・昭和34年春季大会4月~5月

1回戦 川 越1-0 大宮商
 2回戦 川 越2-0 熊谷農

●準決勝

大宮工	00000200000	2
川越	00000002001	3

(延長11回サヨナラ)

(大) 館田一見留

(川) 吉田一高野

●決勝戦〈吉田左前サヨナラ打〉

大宮	00000000000	0
川越	00000000001	1

(延長10回サヨナラ)

(大) 大塚一阿久沢

(川) 吉田一高野

春の関東大会へ出場

二日間の雨とはうって変わった好
 天気にも恵まれた5月10日、甲府市
 県営総合球場で春季関東高校野球
 大会が開幕、川越高は大会第一試
 合で地元代表甲府一高と対戦。

川越	1200010001	5
甲一	000002000	2

(川) 吉田一高野

(甲) 乙黒、山岸一永井

三塁打＝乙黒、二塁打＝杉田、
 横田、嶋本、永井、松野

〈優勝校、明治高に惜敗〉

この後、準々決勝で東京代表、
 明治高と対戦、善戦するも1－0
 で惜敗。この大会で明治高はY高
 を4－1で破り優勝している。

〈昭和34年夏〉

川越10－0春日部(7回)

大宮工0－2川越〔吉田投手ノ
 ーヒットノーラン達成〕

川越商0－2川越

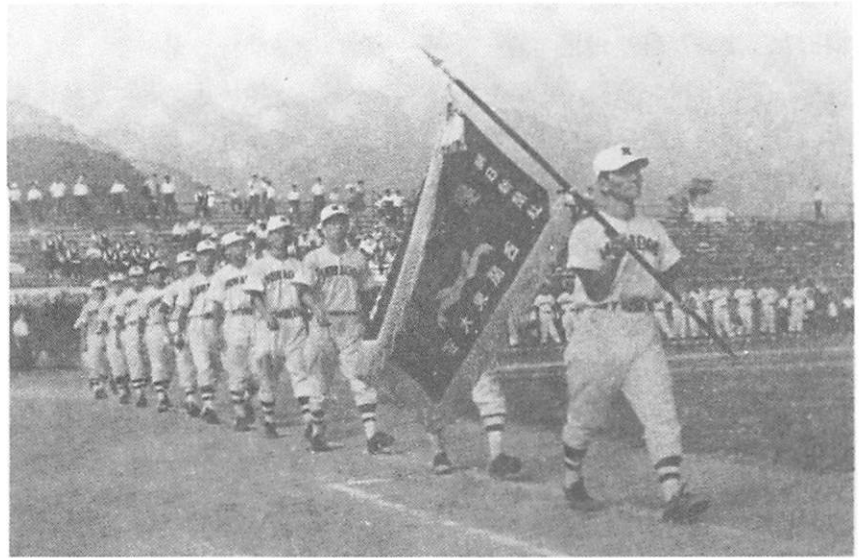
●準決勝

川越工	0000000000	0
川越	100010000X	2

(川工) 櫛笥・豊島一佐々原

(川高) 吉田一高野二塁打＝飯島

念願の甲子園へ



〈吉田5試合完封、5年ぶり優勝〉

●決勝戦

鴻巣	0000000000	0
川越	010000000X	1

〔鴻巣〕 打安失 〔川越〕 打安失

⑦ 鴨田 410 ④ 内沼 410

④ 土井 300 ⑥ 近藤 301

⑤ 小川 422 ⑧ 杉田 410

⑧ 浅村 400 ⑨ 嶋本 400

③ 金田 400 ① 吉田 420

① 島崎 300 ③ 飯島 410

⑨ 宮沢 300 ② 高野 210

⑥ 橋本 310 ⑦ 宮根 210

② 平井 200 ⑤ 横田 311

PH 林 100 計 3082

② 奥村 000 (三振) 鴻12川1

計 2742 (四球) 鴻0川1

〔評〕 吉田投手は5試合に完投、
 連続43イニング無失点、奪三振46
 個の大会新記録をつくった。第一
 シード校とはいえ攻撃力にやや欠
 けており、これを補ったのは確実
 な守備とチーム・ワークの良さ、
 それと吉田の力投が優勝への原動
 力であったといえよう。

〈西関東大会、甲府工と決戦、 横田、腰痛おして逆転打〉

甲府工	0010000000	1
川越	000001100X	2

(甲) 上田一矢崎 (川) 吉田一高野
 野 二塁打＝横田 (川)

〔川越〕 打得安振四犠盗失

④ 内沼 40100011

⑥ 近藤 40010002

⑧ 杉田 41100000

⑨ 嶋本 40200000

① 吉田 30100100

③ 飯島 30100000

⑦ 宮根 31000000

⑤ 横田 30200000

② 高野 20100101

計 302910214

〔6回〕 近藤三ゴロ、杉田三遊間
 に深い内野安打、打者嶋本のとき
 捕手矢崎の捕逸で二進、嶋本の左
 翼線安打で杉田生還、この間に島
 本二塁をねらってタッチアウト・
 吉田の左中間飛を中堅手早川昭背
 走して好捕。〔7回〕 飯島遊越安

打、宮根送りバント失敗で二封、横田の左前安打を左翼手荻野後逸する間に一塁から宮根一塁生還、横田も二進、高野左飛、内沼三遊間安打で二死一・三塁、近藤中飛で二者残塁。

〈家村監督の話〉暑さもこたえたが前半固くなって先取点を許した。しかし全員が最後までファイトをもやしてがんばったのが第一の勝因だ。あせらずにボールを選んで打たせたのも成功した。吉田もがんばってくれたが、腰を痛めて県大会では振わなかった横田がよく打ってくれた。甲子園に行っても今までの相手と同じだと思ってがんばるだけです。

〈横田主将の話〉県大会では相手校を無得点に押えてきたのに、三回に1点を先取されてしまった。

しかし上田投手の球なら打ち込めるとファイトを燃やしてぶつかったので勝つことができました。念願の甲子園行きがかなってもうなんといっていいいか——。私は腰の具合がきょうはよかったし、みんなを元気づけてひっぱって行かなければと夢中でした。甲子園でもこのファイトでぶつかります。

喜びにわく川越高 創立六十周年に花

“甲子園出場決る”の知らせが川越高にあったのは午後三時半、留守居番の関根五郎治教頭をはじめ、この朗報を待ちわびていた先生、生徒たちはみんなこおどりで「よかった」「よくぞ勝った」と大喜びだった。卒業生や生徒・

町の野球ファンから問合せの電話がひっきりなしに鳴り、先生たちはこの応対にてんてこ舞。関根教頭は「よくやってくれました。ことしはちょうど学校の創立六十周年に当たっており、甲子園出場はこれに花を添えてくれたようなものです。」と語っていた。

感 激 の 行 進

あの大球場にマーチが鳴り響きいよいよ我々の行進が始まりました。あとにもさきにも、私はこの時ほど堅くなったことはありませんでした。毎年、甲子園の入場行進をテレビで見っていますが、そのたびにあの時自分達が雲の上を歩いているような感じで行進した感激が強烈に蘇り、目頭が熱くなるのをおぼえます。(内沼記)



第41回全国高等学校野球選手権大会

初戦、鎮西に快勝

・1回戦

川越高	2	0	0	0	0	1	0	0	3
鎮西高	0	0	0	0	1	0	0	0	1

〔川越〕 打得安点三四犠盗失残

④内 沼	4	1	2	0	0	0	1	0	0	1
⑥近 藤	4	1	1	1	0	1	0	0	0	1
⑧杉 田	3	0	0	1	1	1	1	0	0	1
⑤横 田	4	0	1	0	0	0	0	0	0	0
①吉 田	4	0	1	0	0	0	0	0	0	2
③飯 島	4	0	2	0	0	0	0	0	0	1
⑨島 本	4	0	0	0	0	0	0	0	0	1
②高 野	2	0	1	0	0	2	0	0	0	2
⑦宮 根	2	1	1	0	1	0	2	0	0	0

計 31392244009

〔鎮西〕 打得安点三四犠盗失残

④田 川	4	1	1	0	0	0	0	0	0	0
⑥野 口	4	0	1	0	0	0	0	0	1	1
⑧高 城	3	0	1	1	1	1	0	0	0	1
⑦布 田	4	0	1	0	0	0	0	0	0	1
③元 島	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0
⑨末 次	4	0	1	0	0	0	0	0	0	0
②田 上	3	0	1	0	0	0	0	0	0	1
①井 上	2	0	0	0	0	0	0	0	0	1
1本 永	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
⑤外 山	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5岩 野	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0

計 321611110015

▽三塁打内沼▽二塁打田川、近藤
▽審判鍛冶川、猿丸、山本、多田
沢▽試合時間1時間53分

〔1回〕内沼左中間三塁打、近藤四球後二盗、杉田1-0後のスクイズ失敗したが捕手の三塁悪投で内沼生還この間に近藤三進、杉田の3バントスクイズ成功して近藤生還、横田三遊間安打、吉田の遊

ゴロで横田二封、飯島二ゴロ。

〔7回〕宮根遊撃内野安打、内沼の犠牲バントで二進、近藤の左中間二塁打で生還、杉田三ゴロ、横田中飛。

○…この日の甲子園は朝から久しぶりにカラリとした青空。八時半開始というのに早くも一万以上の観衆がスタンドを埋めていた。

我校ナインは、チーム育ての親故飯田先生の写真をもって三塁側のダッグアウトに入った。そして写真に頭を下げたのち『さあ行こう』という横田主将のカケ声で一斉にグラウンドに散った。

○…この日の川越高は定評通りの見事な守備に加えるに、“打てないチーム”の汚名を返上、打撃を誇る鎮西に打ち勝つなど文句のない勝利だった。慎重すぎるほど慎重なプレーを続けたが、それにしても立ち上がりの内沼の一発はよくきいた。



初戦のヒーロー 丹代投手(左)
内沼二塁手(右)
(旧姓吉田)

吉田、1点に泣く

・2回戦

川越高	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
高知商	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1

〈ずるさ欠いた川越〉

(芥田武夫)

○…高知商は九回に強引な脚力で勝点を挙げた。この試合攻守両面において選手の動きは高知商選手がすぐれていた。そしてこの動きが勝負を決定した。川越は高知商山崎投手の剛球を打ちあぐんでほとんどチャンスが生まれてこなかった。一回、六回無死四球で走者をだしたが、高知商山崎の球に押されてバントも成功しないし、七回無死で横田が右翼線上に二塁打を打って三塁に進むか二塁にとまるかチョット判断に迷った。この僅かなためらいを高知商選手の機敏なリレーは許さなかった。横田は二・三塁間にはさまれてチャンスを逸した。

反対に高知商は九回一死二塁に谷、一塁に堀川をおき内田の二ゴロは堀川を封殺した。堀川はおそらく近藤遊撃手の進路をふさいで合法的な妨害をやったに違いない。内田は併殺をまぬがれた。一方遊撃手が走者の妨害でこれも一瞬とまどった。その間に谷は本塁をおとし入れた。恐るべき機敏さである。川越はそれがために敗れた。高知商は好投手吉田を打ちあぐんだが、脚力と試合のずるさという特殊な攻撃武器をもっていた。川越はまじめさはあるが試合のずるさはない。この弱点につけこまれたものである。

昭和36年卒業 (高13回)



前列左より 渋谷先生・大久原先生・家村監督

後列左より 中島栄紀・高 正保・嶋本正雄

成田 純・高松康正・矢幅宏至

甲子園への道を目指して

⑤練習日記より

主将 嶋本 正雄

攻撃力も上昇線を

〈三月〉冬の間、荒川の砂上で基礎体力を養った体操の成果が実って、新チーム編成当時とは見違えるほどたくましくなった。月末には合宿練習に入った。

〈四月〉春の大会では緒戦で大宮高に完敗してしまった。しかしこの敗戦でチームの欠点をハッキリ知ることが出来たこと、同時に大宮高の長所短所を知ったことは大きな収穫だった。

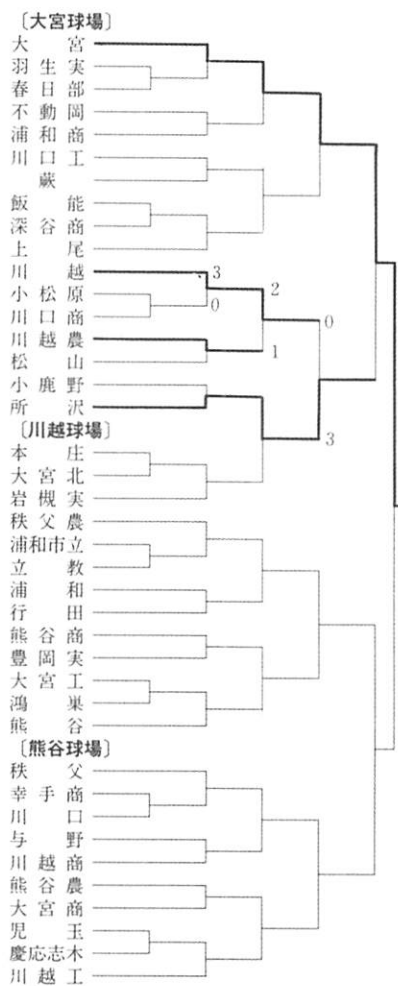
〈五月〉実戦的練習の意味で数多くの練習試合をやったが、成績はあまり芳しいものではなかった。投手は最少得点に押えるのだが、

打線の方が大事な時に一発が出ず惜敗する。

〈六月〉打線はようやくスランプを脱し、最近五試合ではずっと勝ちつづけている。主戦森田は球威と変化球にますます安定感を増し、本大会ではおそらく県下随一のピッチングを見せるだろう、と家村監督はいつている。リリーフの成田も非常にコントロールがよい。守備力は内外野ともこれといった穴はなく安定、攻撃力の上昇線と共に心強い。七月に入ると早大の吉田投手をはじめ多くの先輩が来てくれるから最後の総仕上げも一層充実するだろう。甲子園に行った先輩たちにまけてなるものか。

校長 西川 好明
部長 大久原 秀雄
監督 家村 相太郎

●優勝(西関東地区大会へ出場)



甲子園出場記念パレード

二年連続甲子園出場の夢ならず!!

小松原	0 0 0 0 0 0 0 0 0	0
川 越	0 2 0 1 0 0 0 0 X	3

主将 嶋本 正雄

多くの素晴らしい思い出と教訓
を刻んでくれたことに感謝しつつ
母校のますますの発展を心よりお
祈りいたします。

副主将 中島 栄紀

◆笑顔の思い出

内野手 高松 康正

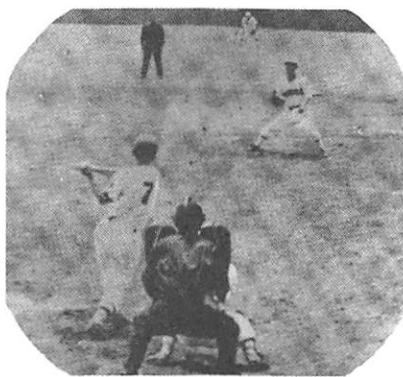
夏の暑い日、我々6人は非常に

川 越	0 1 0 1 0 0 0 0 0	2
川越農	0 0 0 0 0 0 0 0 1	1

◆野球に感謝の日々

捕手 高 正保

夏の大会を回想。一年生、記念大会県代表決定戦、対大宮高戦惜敗をスコアードボール係で応援。



二年生、生涯の思い出、甲子園出場、背番号11でベンチにて応援。三年生、県大会ベスト8に進むも0対3で無念の涙。社会人となって昭和45年常陸宮賜杯全日本準硬式大会、東京都代表となり監督兼選手として出場。野球を通じての良き人との出会いがこれ迄の私を支えてくれており、野球に感謝。

所 沢	0 0 0 0 3 0 0 0 0	3
川 越	0 0 0 0 0 0 0 0 0	0

外野手 成田 純

朝めし、昼に食べる予定の弁当（これは二時間目の休み時間には腹に入っていた）。昼には仕方なくパン、牛乳、練習が終わってから途中の店で焼ソバかラーメン、帰ってから夕食。よくもまァこんな生活が三年間も続いたものと自分でもあきれている。

◆走りぬいた三年間

総務兼外野手 矢幅 宏至

一年生の夏、災天下連日災によく走れたものだ。グラウンドを何周廻ったかは憶えていない。その期間に仲間が少しづつ減っていった。その冬、横田主将と共に正月を返上し上江橋へも走り続けた。高校野球、それは私が想像していたよりも遥かにスピード感、力感に溢れたものであった。精魂こめてやり通した三年間、晴れて甲子園出場にも役立つ事が出来、いつも夏が来るたびに感激が新である。

◆応援団からみた幸せな面々

諸先輩方の力で成し遂げた栄光
の甲子園、その伝統ある野球に在
籍して憧れの甲子園の土を踏んだ
幸せなメンバー。そして灼熱の太
陽の下グラウンドの外で一緒に汗と
涙を流した応援団。完全燃焼 //

桜花爛漫なる平澤屋にて懷しの
人々と…。 応援部 岡田 勲

昭和37年卒業 (高14回)



三列目左より 杉本七生・新井茂・相沢則夫
二列目左より 渋谷健先生・沼野正孝・浅沼勝・森田和義
中島俊朗先生
一列目左より 吉野国男・金子武光・影森茂昭・
大久原秀雄部長先生・横山定克・広沢尉正

私たちのチーム

夏の甲子園初出場、私達が一年生の時の事です。応援席ながら、全国大会の甲子園と言う素晴らしい経験はいまもって忘れる事が出来ません。私達の学年は最終的にも、レギュラー全員が3年生であったという他の学年にもあまり見られないチームワークの整った学年でした。新チームとしての秋の新人戦にはすぐベスト4に進出し、春、夏を頑張りました。結果的には夏の大会も準々決勝で敗れ、選手が揃っていただけに残念でした。家村監督が春から夏にかけ、体調を悪くされ、大久原部長先生のもと、冬の寒風の中で、そして真夏の炎天下で、大塚敬三先輩、田中

幸夫先輩、その他多くの諸先輩の指導を受けました。県内では大宮高校の全盛時代、又、全国的には、法政二高の柴田、浪商の尾崎投手等が活躍した年代でした。私達の甲子園出場は果せませんでした。しかし今でも卒業時の同輩11名は連絡一つで全員集合すると言う、仲の良いチームであり、その事が何物にもかえがたい財産として残っています。時々、皆が集まって昔話に花を咲かせる時、つらかった練習の事と共に、その経験が今の仕事のなかでも役に立っていると言う話になります。野球をやっていたよかった。3年間頑張り通して良かった。皆が言います。私もその内の一人です。

(中堅手 新井)

昭和35年 秋季大会

〈10月1日〜〉

・2回戦 10月9日 大宮球場	
浦和商	0 0 0 0 0 1 0 0 0 1
川 越	0 0 0 0 0 2 0 0 X 2
・準決勝 10月10日 大宮球場	
川 越	0 0 0 0 0 1 0 0 0 1
慶応志本	0 0 1 0 0 0 0 1 X 2

慶応は、8回裏、中 打安点
軸打者の連打で決勝 中新井 301
点を上げた。名門、遊 横山 410
川越に見事な番狂わ 左 広沢 400
せ勝ちだ。川越の森 一 沼野 310
田はカーブがよかつ 投 森田 300
たが、シュートにの 捕 相沢 300
びがなく、夏のよう 右 杉本 200
な威力がなかった。 右 吉野 100
(朝日新聞・戦評よ 二 影森 200
り) 三 浅沼 210

レギュラー全員が3年生という恵まれたチームの主将として、甲子園への出場が果せなかった事が悔やまれます。しかし、その当時一緒にグラウンドで泥まみれになって汗をかけたチームメイトと、その精神は私の心の中に残っています。(主将 二塁手 影森)

あの真夏の炎天下、これから練習と思うと気が重い。しかし、ユニホームに着がえりとなぜか汗が引いてしまう。グラウンド10周もきつかった。そんなつらい練習のさ中、ふと頬を冷たいものが、そよ風だ！その嬉しさはいまでも忘れない。一緒に苦労した仲間の顔を思い出せば、辛く苦しい事もきつと乗り切れると思う。あの時のそよ風のように、必ず楽しい事もあるのだから。(マネージャー 金子)

昭和36年 春季大会

〈4月6日〜〉

・1回戦 4月6日 大宮球場

浦和	000001000	1
川越	00000020X	2

・2回戦 4月7日 大宮球場

大宮	101100011	5
川越	000000000	0

4番打者として、最後まであまり活躍出来なかった事が悔まれます。思い出すのはただ苦しかった3年間であった事です。しかし、その3年間頑張り通した事と、今でもつき合える友達を得たと言う、言葉には表わせない無形の財産として心に残り、人生に於ける糧となっています。(一塁手 沼野)

2年生の春には足を骨折したり、たいした活躍も出来なかった私も、最後の夏の大会は今でも昨日のように憶えています。2年半の苦しい練習の総決算として、3本の三塁打を打つ事が出来ました。「俺にもやればやれるんだ」と思ったその時の気持。その夏から25年経った今でも心の支えになっています。(右翼手 杉本)

私にとって川高野球部の三年間は人生の半分に当る程、充実した時間でありました。真夏のアカに汚れたユニホーム。寒風の中での川越市内一周マラソン。その苦しい練習に耐え抜いた事が社会に出てどれ程、役に立ったかわかりません。三年間共に頑張った球友達の励ましも忘れられない思い出です。(三塁手 浅沼)

昭和36年 夏季大会

〈7月15日〜〉

(第43回全国高校野球選手権大会県予選大会)

・2回戦 7月18日 大宮球場

川口	000010000	1
川越	00500011X	7

・3回戦 7月19日 大宮球場

川越	010000100	2
羽生実	000000000	0

・準々決勝 7月23日 大宮球場

川越	000000100	1
熊谷商工	00003100X	4

川越はよいチーム 打安点
ワークで前半、互角 中新井 410
に戦ったが、第一シ 遊横山 300
ード、熊商の方が投 左広沢 400
打にまきっていた。一沼野 420
川越は3回表、四球 右杉本 410
と2本の安打で無死 投森田 200
満塁とチャンスをつ 投吉野 200
かんだが、2番、横 二影森 300
山のスクイズが投飛 捕相沢 200
となり、併殺。惜敗 三浅沼 310
した。(朝日新聞
戦評より)

この日まで一度も公式戦のマウンドに立った事のなかった私に、最後の出番が廻って来た。夏の大会、準々決勝、対熊商戦の6回裏、一死、一・二塁。今でもよく憶えています。捕手、相沢のミットもろくに見えない程、あがっていた自分も、結果は打者9人に対し、内野安打1、三振5、凡打3。三塁手、浅沼に投げた牽制球によって心も落ちつき、自分として最高の投球が出来ました。試合に敗れた悔しさとは逆に、私にはうれしかった思い出です。(投手 吉野)

夏の大会、肩の痛みはどうする事も出来ませんでした。途中でマウンドを譲った吉野が好投しただけに、チームメイトに対しても申し訳なく思い、二年生よりレギュラーとしてマウンドに上がりながら最後に残念な結果に終り、悔いの残った高校時代でした。

(投手 森田)

三年前、喉頭癌の摘出手術を受けました。命と交換に声帯、食道、気管を取りさる長時間の手術に勝てたのも、あの苦しかった3年間の高校時代を耐え抜いた精神力が支えだったと思います。甲子園には行けませんでした。今、病気に克つ事が出来ました。一緒に汗を流して涙した11人の仲間が頑張れと励ましてくれます。

「奮え友よ」と。(捕手 相沢)

家村監督より指導を受けた中で、特に、今でも人生の糧としている言葉があります。それは「死点」と言う言葉です。ノックの嵐の中で、ふらふらになりながら無意識に捕球して技術を会得する。これは、実社会に出て、仕事に壁にぶつかった時、いつも心の支えになって来ました。これからもこの「死点」を越えて、生き抜こうと考えています。(遊撃手 横山)

試合には負けてしまいました。甲子園出場もありませんでした。しかし、あまり悔やしくありませんでした。精一杯やった事と、あの苦しい練習からやっと解放されると言う事で、逆にホッとしたような嬉しさを憶えています。それ程、充実した3年間の野球部時代でした。(左翼手、広沢)

昭和38年卒業 (高15回)



後列左より 関口 征男・大石 勇夫・新井 基之
鎌北 修・椎橋 忠臣・鈴木 洋雄
前列左より 野口 先生・大久原先生・中島 先生

チーム紹介

学年は問わぬ 実力主義

川越高

大久原秀雄部
長の地味だが

ほがらかな性格を反映したように
チーム全体がのびのびとした感じ
負けてもけっしてメソメソしない
のは気持がよい。チーム編成は1
年生も3年生も区別しない実力尊
重主義。それだけに選手たちは練
習熱心だ。受験校のせいか目立っ
た選手はいないが、チームワーク
はよい。

①…投手の平田は1年生で右投げ
直球一本やりで夏までにもっとス
ピードをつけるのが念願という。

最低3点とって逃げ込もうという
のがこのチームの作戦だけに平田
への期待は大きい。打撃はもう一
息。それを補うように走塁と守備
の練習がくり返されていた。

打 撃 順

(中) 鎌北 修 (3年)
(左) 松倉 幸雄 (2年)
(右) 井花 幸夫 (2年)
(一) 大石 勇夫 (3年)
(遊) 新井 基之 (3年)
(投) 平田 博邦 (1年)
(三) 高松 賢治 (1年)
(捕) 山本 和人 (2年)
(二) 鈴木 洋雄 (3年)
〔S37. 6. 19 朝日新聞〕
マネージャー 椎橋 忠臣
ク 関口 征男

夏の大会戦績

・1回戦

川 越	2 0 0 1 0 0 1 0	4
豊岡実	0 0 0 0 0 0 0 0	0

(日没8回コールドゲーム)

・2回戦

川 越	0 0 0 0 0 3 0 0 0	3
不動岡	0 0 0 1 0 0 0 0 0	1

・3回戦

上 尾	3 0 0 1 0 0 0 0 0	4
川 越	0 0 0 0 0 0 0 0 0	0

ここを勝ち抜けばと全員闘志満
々で戦ったが、長島の再来と騒が
れた山崎擁する強敵上尾に惜敗す。

思 い 出 新井 基之

次打者4番大石の内野ゴロでセ
カンドベースにスライディングす
るも及ばず一“ア・ウ・ト”一
一瞬、滑り込んだままの姿勢で
握ったグラウンドの土は、すべてが
終わったことも知らずに熱く…、

思い出……何故か美しく……。

《昭和37年の夏、大宮球場3回戦》
対するは、野本監督の率いる上尾
高校、9回裏最後の攻撃。投手は、
好投手勅使河原に代わった山崎
(ロッテ→ライオンズ)、捕手は
主将山崎(兄)、初めての対戦にい
ろいろ話し掛けてくる。投打に滅
法強いリストを誇る投手山崎に対
し、極端なクロススタンスを取っ
た。組み易しと見た捕手が好きな
インコースを攻めてくることを期
待して……。

的中! ワインドアップでいつ

ものスクエアに戻す、案の定インコースのスピードボールが……一打球は、鋭く内野を抜けて……非力なチームをここまで支え、我々に素晴らしい高校生活の思い出を与えて下さった家村監督、大久原先生、諸先輩方3年間の御指導を改めてお礼申し上げます。

同期生6名、投手ほか下級生の混成チームも又楽しいものでした。

思えば初雁中学時代、片手間の三段跳びで県内2位になり、当時の松本先生のお誘いも頂き一度は入部した陸上部でしたが、練習中のトラックから見る野球の魅力に抗し切れず、入部も1ヶ月足らずに転部した結果でした。団体競技として、学生・社会人生活を通じた“つよい”川越ジャガーズのショートも楽しく思い出されます。

思 い 出

鎌北 修

小学校の頃から好きだった野球、中学3年生の時に、川高が甲子園大会に出場するのを見て、川高へ入学すれば甲子園に出場する事が出来るかと思い入部をした。

4月の頃の1年生の部員数は、25名程度はいたと思う。そして夏を過ぎる頃15名程度となり、我々が3年生になる時には、3年生部員は更に減り、6名になっていた。印象に残っているのは、試合、練習の厳しさは、もちろん、3年生最後の夏の大会、大宮球場のベンチの暑さである。ムーとするようなグラウンドからの熱風が強烈に記憶に残っている。結局、夏の大会

は1回戦は豊岡実高、2回戦では不動岡高を破り、3回戦で春の優勝チーム上尾高に4対0というスコアで敗れはしたが、自分達としては、精一杯やったという実感があった。我々の頃の県大会出場チーム数は42校であった。そして近い将来、我が川高野球部が甲子園に出場し応援に行く事を今だに願っている。卒業してから、25年という長い歳月が経ち、ここに創立70周年記念誌が刊行され、川高野球部、クラブの益々の発展を祈念し、このクラブを盛り立てて下さった皆様に感謝致します。

思 い 出

鈴木 洋雄

我々の野球部の頃は監督は家村さんで部長は大久原先生がやられていました。家村監督は野球の技術、知性にたけた方で我が野球部の先輩でもありました。

練習のとき、よく我々がくたくなるまでノックをして下さいました。そして、君達を疲れさせないと（人間は疲れてくると本能的に一番楽な捕球の形をする。その形が君達の一番良い形である）君達の良いフォームをつかめない。そしてそれを君達に教え込んで疲れてないときにそのフォームが自然に出てくるようになればしめたものだと、又バッティングについてもヘッドの使い方の例として1米位の紐の先端に重りをつけ目的の物にあてる（釣でいう投釣のように）、このように効率的に我々を鍛えて下さいました。又練習試合で失敗をすると、すごい剣幕で

おこられました、いざ夏の大会が始まると、どっしりとかまえて各人にやらせて下さいました。その大会で一つの思い出となっているのは、我々の高校時代の最後の試合となってしまった、対上尾高校のときの私の最終打席で2エンドで5球目で打ったボールが三遊間へ飛んだのが見えて一塁へ走ったが間一髪アウトになってしまいました。そのときの上尾の遊撃手が山崎（ロッチ・西武 現解説者）であったのがいまでも思い出されます。

思 い 出

大石 勇夫

私が川高に入学し野球部に入っただのは甲子園出場の翌年だった。練習もきびしく3年生の先輩が大変こわかったように覚えている。

入部した時は同期の部員も大勢いたが、3年になった時仲間は6人だった。そのうち関口と椎橋はマネージャーをしていたので3年の選手は4人。夏の大会は1、2年のバッテリーで臨んだのである。家村監督、大久原部長のもと新井主将以下チームワークよく1回戦2回戦と勝ち進んだ。3回戦は強敵上尾これを勝ち抜けばと戦ったが惜しくも敗れてしまった。しかし全員力を出し切って戦ったので負けても悔いはなかった。

高校時代の3年間、あせとどろにまみれてボールを追った川高のグラウンドには数限りない思い出がある。願わくば、現役選手の奮闘により甲子園出場成れば最高の喜びである。

昭和39年卒業 (高16回)



前列左より 井花・大久原先生・斉木
中島先生
後列左より 野口先生・横山・小林・大野・

第45回県大会予選

・2回戦

熊谷商工	0 0 0 0 0 0 0 0 0 0	0
川越高	0 0 0 0 2 0 0 2 X	4

・3回戦

深谷商	2 0 0 0 0 0 0 0 0 0	2
川越高	0 0 0 0 0 0 0 0 4 X	4

・準々決勝戦

川越高	0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 1	1
岩槻実	0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0	0

・準決勝

大宮商	0 0 0 1 0 0 2 0 0	3
川越高	0 0 1 0 0 0 0 0 0	1

20年生まれの少数世代

インコース高目、ボール気味の初球を叩いた4番井花の打球は、ライトフェンスを直撃する大飛球となり、8回表遂に逆転、対深谷商戦に勝利した。“これこそ川高野球部伝統の力なのだ”と大久原部長の試合後のミーティングでの言葉。大会直前の家村監督の病気により、この夏は大久原部長の指揮となりました。斉木マネジャーの目に見えぬ心遣いはあったものの、我々が抱いていた若干の不安感、この試合で払拭され、ベンチと選手のより強い一体感が得られたように思われました。

昭和20年生まれの少数世代。3年生部員で最後まで残ったのはたったの5人。しかもスタメンはほとんど2年生。主将の小林といえども2年の夏は控えにまわった時もあるチームであった。しかし甲子園出場の名残りが、汚れた部室にも、グラウンドの土にも充分見られ、日々の厳しい練習の中にも大きな励みとなっていた頃でもありました。冬期練習の中心は市内一周マラソン。いつも先頭に立っていた大野の後姿が思い出されますが、その頃の景色は住宅化の波にのまれて今はない。春先のホコリ

が舞うグラウンド。見えないボールに文句を言う横山の、ほとんど黒のユニフォームが緑がかった木々とコントラストを描いていた。

さて準々決勝。甲子園出場確実と予想された上尾高を、前日我々の目前で破った岩槻実が相手。延長12回井花のヒットを足がかりにバント戦法で勝ち準決勝へ。しかし肩痛に苦しむ大宮商投手を打ち込めず敗退。あの頃活躍し、プロ野球に進んだ何人かの埼玉球児も今は現役を退いた。しかし我々の心に生きるあの川高野球部という青春には、現役引退の時はない。

川越高、大宮商が準決勝へ

第四十五回全国高校野球選手権大会恩予達兼夏季甲種高校野球大会第七日は、さんさんと照りつける太陽の下、

日) 二十七日午時から準々決勝川越商—岩倉、大宮商—川越商の二試合を行なつた。第一試合は川越平田、岩倉新井両投手の投げ合
7 いで0—0のままで大宮一度目の延長にはいつたが、川越は土面表井花が右腕投げで生場を作り、一死一、三塁から捕逸があつて決
勝点をあげた。第二試合は大宮商が9安打で毎回一塁以上に走者を進めながら試合巧者らしく捕逸で四四一点をあげただけ。川越商
(第 必死の追慕も官沢の力投で勝ち、1—0で勝つた。

12回 捕逸で決勝点

平田川越、新井岩槻に投げ勝つ

きのうのスコア

0000000001	川越高	001第一試合(準々決勝)
01		

川越高 1-0 岩槻実
大宮商 1-0 川越商

【評】川越平田は本格派、岩実新井は技巧派とタイプこそ違つが、

[illegible]

た。相変わらず、外角低めにスト
ンと落ちるカーブに川越のバット
は合わなかった。

川越が無死で走者を送つたのは十二回を合わせてわずか三回。六回トップの高松が中前安打、続く橋本のバントが内野安打となつたが一塁をカバリーしたと見誤つた高松は三塁を駆けはつて倒れた。一死を数へて、細かい雲がでまぐさなつて傳馬場を過ぎた。延長十回一死栗小林の三ゴロ失、平田の中前安打でつかれた。二塁の好捕は打線が下位ではいした方なかつた。

ツとしたビッチングをしたことも

あるか、六、十回は毒のホシへ
ツドだった。

六回光頭の清水が右翼手の拙守、
(記録は三塁打)で三進しながら

古川の三ゴロでゆくり帰郷した

1	0	0
1	0	0
1	0	0
0	0	0
1	0	0
0	0	0
0	0	0
1	0	0
17	0	1

火▽二型
 家川5、
 家川0、

計	4
川木井倉沢中田井	4
4	4
5	4
5	5
4	5
5	4
4	4

(7) 已
 (8) 樓
 (1) 新
 (3) 白
 (6) 木
 (9) 門
 (2) 窗
 (5) 武

▽三星
 打本派
 岩6 ▽
 選1

昭和40年卒業 (高17回)



後列左より 橋本 長田 中島 甕 相沢 平田

矢島 高松 矢部 川村

前列左より 高 鈴木先生 宮根先生 大久原先生 野口先生 戸来

私たちのチーム 不動のレギュラー9人

私たちのチームは、総勢30余名の部員から成っていた。その中でレギュラー9人は不動のメンバーだった。それが意味ではこのチームの欠点だったと思われる。チーム内の競争が無いことが新チーム結成時優勝候補に上げられながら最後の夏もベスト8に終わってしまった一因であったろう。

一方この9人がかなり優れていたため、何としても甲子園という目標を常に持ち、具体的にどのようにすれば、それが成し得るのかの対策のもとに一丸となった練習が行われていたなら…と残念でならない。1年次から半数以上がレギュラーで甲子園を期待された優秀なチームであったと思う反面で、やり残したことのたくさんあるチームだったと思う (相沢記)

思い出のデビュー戦!

草木の息吹、生氣あふれる季節。伝統校川高野球部に入部した。「お山の大将」が野球を志した。幸運の訪れを待つ心に願いが通じたのか、初めて“竹バット”で硬球に対面した興奮、感動が掌から体の芯に響きわたる……。

デビュー戦の前日、家村監督からユニホームを渡されたのは5月10日。入部以来約1ヶ月が過ぎていた。対戦相手はジョンソン基地ハイスクールチーム。胸の高鳴りと共に2番バッターの打席に立つ、球速に戸惑い左打席から3塁側のダックアウトの上に打つのが精一杯。この間2打席を費やした。3打席目には、とにかく体の前でボールをさばく事の一念でバットを振る。ボールは二遊間を抜けるヒット。この時のしびれるような快感は、今なお忘れられない。(矢部記)

緊張、スクイズ成功!

忘れ得ぬ試合、場面は多い。1年生での夏、不動岡戦。1点リードされた6回表1死満塁・逆転につながるスクイズ成功。いまでもその打席での緊張感が強く思い出される。(高松記)



高 彰(マネージャー)



平田 博邦(投手)



相沢 正(捕手)



長田 和哉(一塁手)

第46回全国高校野球選手権大会
埼玉県大会

・7月18日（熊谷球場）

川越高	0	0	2	0	1	1	0	3	0	7
児玉高	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

川越平田投手は9回1死後、代打本間に右前安打されノーヒット、ノーランは成らなかったが、三振14個を奪い児玉に2塁を許さなかった。

・7月20日（川越初雁球場）

川越商	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
川越高	0	0	2	0	0	0	0	1	X	3

点差こそ開かなかったが、川高は終始余裕をもって試合を進め、3回裏2安打に敵失、暴投をまじえてあげた2点と8回の1点を平田の好投で守りぬく。

・7月22日（大宮球場）

大宮工	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
川越高	1	1	2	0	0	0	0	0	X	4

川越は立ち上り大宮工バッテリーがやや堅くなっていたのにつけ

こみ、速攻で勝負を決めた。1回裏、川越は先頭の橋本が四球を選び、犠打で二進したあと、大宮工に連続捕逸が出てなんとか1点を先行した。これに勢いを得た川越はその後のびのびと打ち、走者が出るとバント、ヒットエンドランなど多彩な攻撃を展開、更に2点を加え引離し、平田の好投で反撃を許さなかった。

・7月24日（大宮球場）

熊谷商工	0	2	1	0	4	2	0	0	0	9
川越高	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

川越平田投手と熊谷商工打線の勝負とみられていたが、底力を秘めた熊商工打線が完全に打ち勝った。熊商工の各打者は同投手が不調で速球に伸び欠き、それがまんな中に集まるところをねらい打った。一方、川越は3回裏の1死2、3塁の反撃機に主軸打者が凡退してからは熊商工田島投手の下手からの変化球に押えられ、食下がりのきっかけをつかめなかった。

聞かせる
応援バンド

応援といえば、最近は各校ともプラスバンドが中心になっていてとても楽しい。このプラスバンドが奏でる曲にもはやりすたりがあって、1去年はピンチにもチャンスにも、もっぱら“南国土佐を後にして”。去年はグラウンドが虚々実々の作戦ならバンドの方は“地上最大の作戦”の曲で氣勢をあげた。

ことは、とくに目立つ曲はないが、バンドと応援団員の“連携プレー”がなかなかお見事。大宮工―川越戦でも、川越側が「しあわせなら手をたたこう」の曲にチャッ、チュッと拍手の合の手を入れれば、大宮工側はマンボのリズムに合わせて応援団員が一斉に、「ア」とか「ウ」とかの声をあげ面白く聞かせていた。

（朝日新聞記事
昭和39年7月23日）



高松 賢治(三塁手)



矢島 光夫(内野手)



鵜 滋(左翼手)



橋本 武二(中堅手)



矢部 彰(右翼手)



戸来 伸之(外野手)

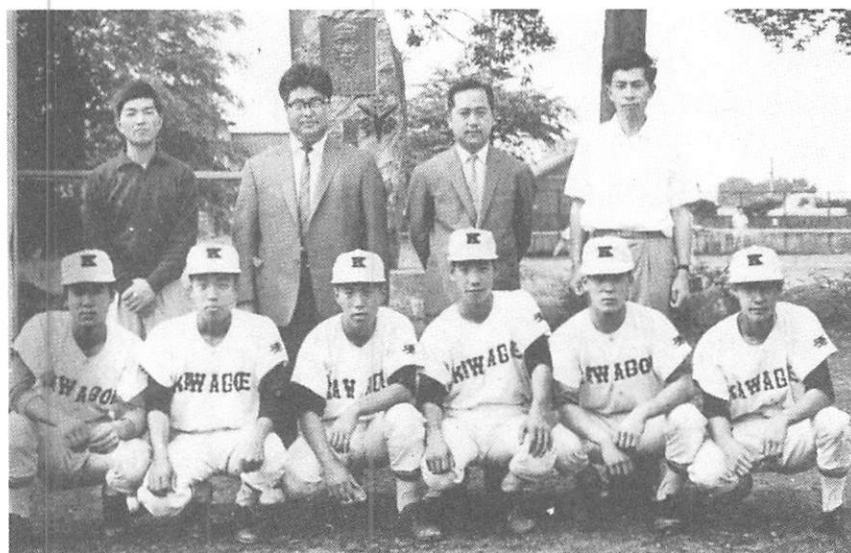


中島 憲治(外野手)



川村 光房(外野手)

昭和41年卒業 (高18回)



後列左より 宮根先生・鈴木先生・大久原先生・野口先生
前列左より 川口・伊藤・池端・岡田・大沢・増田

私たちのチーム

秋の公式戦は予想通り黒星のスタートであった。前年のチームと比較して、投手力は互角その他は比較にならないチームであった。ただ我々3年生が6人、2年生が13~14人であったのでチームワークの点ではまともやすいチームであった。冬がすぎ春になると幾分攻守のバランスがよくなり、練習試合を重ねるごと、ナイン1人1人に自信がみなぎってきた。春季西部地区大会に優勝、県大会でベスト8進出、この試合序盤上尾会田投手(元スワローズ)と大沢との投げ合いに、水をさされた出来事があった。主審フェアー3塁塁審はフェール。左翼手が塁審のジャッジを信じ、ボールを追わず

2走者が生還、気落した我校はコールド敗けをしてしまった。

この一戦は20数年経つ今でも忘れられない戦いである。

その後夏の大会までの練習試合は負け知らず、特に当時の名門、桐生高戦は2-0のシャットアウトで勝ち夏に強い伝統と確かな手ごたえを感じ、下馬評も上がり、第6シード校として夏の大会に臨むこととなった。初戦は辛勝であったが2戦は順当勝ち、準決勝で、大宮工戦となった。この試合は大宮工の1、2番バッターに2球でデットボールで初回で勝負は決まり、我々の夏は終わった。残念ではあったが、力量のないチームが、和の精神を貫き前年と同成績をあげられたことが社会人となった今、最高の思い出となった。

記 録

《昭和40年春季関東大会予選》

・1回戦

川 越	0 0 2 4 2 1 1	10
狭山工	0 0 0 0 1 1 0	2

(7回コールド)

・2回戦

深谷商	0 0 0 0 0 0 0 1	1
川 越	0 0 0 1 0 3 2 2	8

(8回コールド)

・3回戦

川 越	2 0 0 0 2 0 0 0 0 1	5
小鹿野	0 0 0 0 0 0 1 2 1 0 0	4

・準々決勝

川 越	0 0 0 0 0 0 0 0	0
上 尾	0 0 3 4 0 0 X	7

《春季西部地区大会》

・準決勝

川 越	0 0 0 1 0 2 0 0 2	5
川越商	0 0 0 0 0 0 0 0 0 0	0

・決 勝

川 越	2 0 0 0 0 0 0 0 1	3
松 山	0 0 0 0 0 0 0 0 0 0	0

《昭和40年夏季関東大会予選》

・2回戦

川 越	0 0 0 0 0 0 0 0 1	1
与 野	0 0 0 0 0 0 0 0 0 0	0

・3回戦

川 越	1 0 0 0 2 0 0 1 0	4
熊 谷	0 1 0 0 0 0 0 0 0 0	1

・準々決勝

川 越	0 0 1 0 0 0 0	1
大宮工	5 0 1 1 0 2 X	9

(7回コールド)

個人の思い出

●大沢 堯 (投手)

「名門、川越高校で野球ができる」私は、甲子園出場2回の伝統ある野球部に入部出来たことが、非常に嬉しかった。

中学校の卒業式を欠席し、川越市内に下宿、練習に参加した。

あれから自分の野球人生が始まり、今の自分があるように思う。後援会の人達には本当にお世話になったし、大学時代には、全日本選抜チームの一員にもなった。

「お前が途中でくじけたら、お前の村から今後野球選手は出ない」恩師、鈴木勲二先生の言葉を忘れることは出来ない。

●池端 忠夫 (外野手)

初雁城のほとりで過した野球部をふりかえてみると、苦しいことばかりである。

真夏の炎天下での個人ノック、足がふらつき、汗が目に入り、目の前が真暗やみになったことが、たびたびあった。又木枯し吹く、寒風の中、来る日も来る日もただ走りつづけた市内一周マラソン、階段登り等……。

20数年経った今、子供等と川越を訪ずれるたびに、なつかしく思い出される。

私個人としては、華やかな舞台に出ることなく下積み生活であったが、あの貴重な体験が、社会人生活に多いに、役立っており、野球部に入っていてよかったと思う。

●岡田 哲 (三塁手)

①帰り道に食べた大曽根の焦げた焼ソバ。

②現在金属バット。昔竹バット。

③家に持ち帰ってのボール縫い。

④合宿中の期末試験。

⑤競争でファウルボールを取りに行き行って飲む井戸水。

⑥私の際め付けは、床の壊れた汗臭い部屋。

●川口 正敏 (中堅手)

「夏バテ」

二年生の秋に痛めた膝の故障の為、冬期練習が思うにまかせず、春の大会迄は5割を維持した打率も暑くなるにつれ思う様にバットも振れない始末。

その揚げ句、夏の本大会には友に詫げる事も出来ない大失敗をしてしまったニガイ思い出。

この教訓を時折り思い出しながら、社会人としての有り方を学ぶ今日此頃……。

●増田 一 (右翼手)

「夏に燃えた」

昭和40年7月、夏の大会が幕を開ける。

ダークホースと言われ、ベスト8に進出したが、惜しくも強豪大宮工業に敗退、3年間の野球生活に終止符を打つ。

白球追い続けた日々は、私の胸の中に『青春の潔さ』として、今でも生き続けている。

●伊藤 弘 (遊撃手)

大沢 堯

眼と眼で合図し、セカンドランナーを何度となく殺した。大学生の時の度胸が高校の時に……。

岡田 哲

自分の守備範囲は、絶体にエラーをしなかった。春の大会の活躍は忘れられない。

川口 正敏

ピッチャーで入って来た時、いい球を投げてた。その後膝を悪くし悩んでいたあの頃、つらかったらうな？

増田 一

一年生の時から素直な球を受け、先輩達から可愛がれたお前、性格は今でも変わらず、がんばってると思う。

池端 忠夫

苦労人、池端、勉強は当学年ではNo.1。俺達のために最後まで縁の下での力持ちでやってくれて、ありがとう。

追記

1年先輩の皆さん。熊商戦のトンネル。今でも忘れません。20数年経ちますが、申し訳けなく思っています。最後に雨の日も風の日も我々を指導、応援して頂いた監督さん、後援会の皆様に御礼申し上げます。(伊藤記)

昭和42年卒業

(高19回)

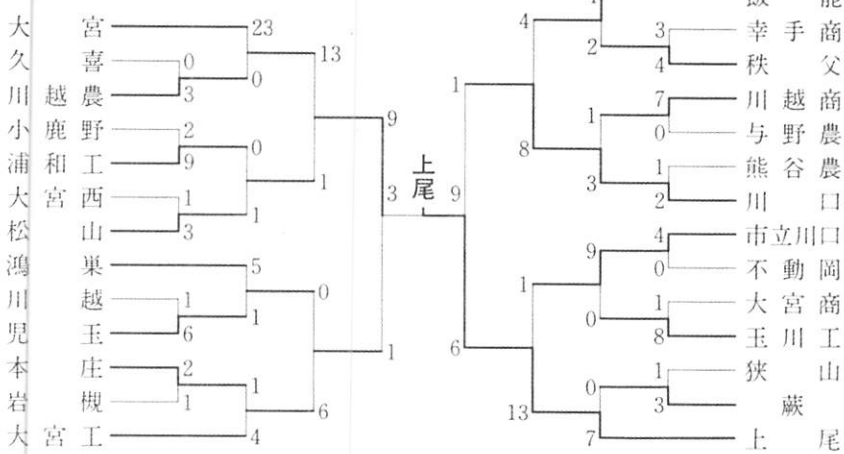


後列左から
大久原先生・鈴木先生・新井・野口先生・宮根監督・
前列左から
鯨井・今井・仁科・箕輪
田島・小嶋・岡田・森山・田中(旧姓大沢)

第48回全国高校野球選手権埼玉大会

期日 7月13～25日 会場 県営大宮球場他 参加校 54校

(Bブロック)



川越高5-7川越商高

戦績

●41年秋(西部地区予選)

川越高15-0川越農高
川越越3-1豊岡高

●42年春季県大会

川越高6-0所沢高
川越高1-6与野高

●第48回全国選手権埼玉大会

川越高1-6児玉高

40年夏の思い出

仁科 良一

昭和40年夏の全国高等学校野球選手権大会埼玉県予選の優勝候補の筆頭は高田投手を擁する大宮工業高校であったと記憶している。

さて我が川高野球部は高田投手に優るとも劣らない大沢投手のワンマンチームであったが、伊藤主将を中心にひそかに甲子園出場をもくろんでいた。当時私は幸運にも大沢投手の捕手としてこの大会に望んでいた。大宮工業・川高ともに順調に勝ち進み幸か不幸か我が川高は準々決勝で優勝候補のこの大宮工業と対戦することになった。試合当日は満員の観衆が大宮

球場をうめつくしこの名勝負に注目していた。

さて、いよいよ試合開始168 cmの小さな体を大きく使い大沢投手が第一球を投げたとたん「バカヤロウ！」という声で私は我にかえた。大沢投手の第一球は見事に大宮工業の一番バッターの二の腕に命中していた。デッドボールである。元気のいい一番打者は大きな声で大沢投手に向い「バカヤロウ！」と言って一塁ベースに走っていたのである。続く二番バッターに対してセットポジションから大沢投手第一球を投げました。しかし私のミットには球がない。又しても「バカヤロウ！」の声が聞こえ今度は右脇腹に命中連続デッドボールである。ここで私はタイムをとりショートの前で伊藤キャプテンもマウンドに集まって、大沢投手を激励したがその時の大沢先輩の顔は今でも忘れません。顔面蒼白で顔が引きつり何か魔物にとりつかれた様な顔をしていた。この試合は大敗で幕をとじた。結局この大会は大方の予想通り大宮工業が優勝しましたが大沢先輩さえ好調であったら川高にもチャンスがあった夏の大会でした。

思 い 出

今井 博

私の野球部の思い出の中で、一番に夏の大会の1回戦で児玉高校に負けた時を思い出します。思いがけなかった敗戦で、くやしくてしょうがないはずなのに、なぜかさっぱりとしたような、気分でした。涙も出ません。いっしょうけ

んめいやったのだからしょうがない。そう思い込もうとしたのだと思います。でも試合終了後、応援部が、炎天下、学生服で汗を拭こうともせず校歌を歌って

いるのを聞いた時ほんとにすまんという思いで下を向いたのを思い出します。宮根監督には、よく脇があまいといって、強力ゴムで両脇を内側にしばりバッティング練習をさせられました。そして合宿の食事の時も「ひじをはって、威張って食うんじゃない！」と叱られたことを思い出します。

今、私はプロゴルファーですが、時々右手に力が入り、ひじが浮く悪いくせが出ます。ゴルフはトップスイングから、ボールに対して最短距離を通るように打てと教えられるますが、野球も同じで宮根監督もその事を教えてくれたのだと思う現在です。

ファウルチップで気絶

岡田 博行

卒業してから22年も過ぎました。練習や試合のことはほとんど記憶にありません。そんな中で憶えていることは、3年の夏の大会が終り（1回戦で敗退）新しいチームが秋の大会に備えて練習試合を行いました。その試合で球審を務めていた私はファウルチップが首に当り気絶してしまいました。ボールが当たった瞬間は痛みもなくどう



ということもなかったのですが約15秒～20秒位後に目の前が真っ暗になり倒れてしまいました。気がついた時は医務室で寝ておりました。自分では何が何だかわからない内に医務室の先生に質問を受け答えており、これが脳振頭なのだと知らされました。後に知ったのですが球の当たった付近に急所があるそうです。

貴重な財産として

小嶋 昭

土にまみれ汗したあの頃、何を求め、期待し、成さんとしていた日々であったろう。野球を遠ざかり20年余りの歳月が過ぎてなお甲子園の季節を迎えるたびに、何やら充実感で体が満さされるのは不思議である。

長い年月がかって野球に勤しんだあの時の経験、結果などのもろもろを、昇華させ私自身をも繕ってくれているのであろう。

しかし、そんな漠たる思い出のような一時期であり、具体的なものとしての何ものがあるわけではないが、私にとって貴重な財産となりえていることだけは確かのようにである。

昭和43年卒業 (高20回)



鈴木 (後列右から4番目)
中村 (後列右から3番目) 他は2年生
島村 (後列右から2番目)

水のうまさ

鈴木 義雄

当時は練習中、水を飲まないのが良しとされ、真夏の練習においても一滴も取らなかった。

また取らされなかった。

どうしてもがまんできない場合は監督の目を盗み、水を飲み、このうまさを知った。長い練習が終り、干上った体に、のどに、水を飲む、世の中にこんなにうまいものがあるのかと、つくづく感じた。

今では水分を補給したほうが良しとされているが、当時はまったくだめであり、おかげで水のうまさを知った。

各クラブの勧誘の主将演説では、「水のうまさを知りたい者は野球部へ来い。」と言ったのを覚えている。

夏の大会の思い出

中村 均

その日は真夏の太陽がガンガンと照りつけ、無風状態であった。延々5時間、夏の大会第3回戦、県北の雄、深谷商業との延長18回の試合であった。

8回表までに5対0とリードを許し、ナインは消沈し、私も心の中ではここまでかと思った。

ベンチ内も静まり、応援席も静まり、ただプラスバンドの音だけが“奪え友よ”と鳴り響いていた。そして我が友は奮い立つ。

相手投手の乱れに乗り、8回ウラに3点を取り、9回ウラ私が5点目のホームをすべり、とうとう追いついた。

その後互いに譲らず、延長18回

球史に残る引き分け試合となった。

私たちは15人位が野球部に入部したが、文武両立のむずかしさがあり、1人また1人とやめ、残ったのは3人であった。

キャプテン鈴木を中心にまとまり、下級生を引っ張り、ともに和し、夏の大会に望んだ。

この大会では、各個人が力量以上の力を発揮し、1回戦2回戦と勝ち進み、深谷商業との延長18回翌日の再試合と勝ち、ブロック準決勝で、力つきたか惜しくも川越工業に敗れた。

悔いのない戦いであり、忘れることのできない人生の思い出のいちページであった。

昭和42年夏の大会

